漢語語彙のメタファーに関する研究

―中国語との対照を通して―

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

学生番号：D110449

氏　　名：李愛華

目　　次

第１章　序章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
1.1　研究の背景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
1.2　研究範囲と研究の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
1.3　本研究の構成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

第２章　先行研究の概観・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
2.1　メタファーに関する理論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
2.1.1　伝統的なメタファー理論・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
2.1.2　認知言語学におけるメタファー理論・・・・・・・・・・・・・ 11
2.1.3　伝統的なメタファー理論と認知メタファー理論の対比・・・・ 15
2.2　メタファーの形式・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
2.3　メタファーの同定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
2.4　本研究の実例分析に関わる先行研究・・・・・・・・・・・・・・20

第３章　データの収集と分析方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
3.1　データの収集と分析の手順・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
3.2　本研究におけるメタファーの使用概観・・・・・・・・・・・・・27
3.2.1　両言語における意味分類の分布傾向・・・・・・・・・・・・・27
3.2.2　両言語における語構成上の特色・・・・・・・・・・・・・・・32
3.2.3　両言語における意味拡張の傾向・・・・・・・・・・・・・・・33

第４章　モト領域を固定した事例研究(1)－人間にまつわる漢語語彙・・・39
4.1　問題の所在と本章の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
4.2　身体部位語彙をモト領域とするメタファーの類型及び分析・・・41

4.2.1　構造的位置づけの類似性に基づくメタファー・・・・・・・・・41
4.2.2　形状の類似性に基づくメタファー・・・・・・・・・・・・・・・44
4.2.3　機能の類似性に基づくメタファー・・・・・・・・・・・・・・・46
4.3　人間の身体経験に基づくメタファー・・・・・・・・・・・・・・・50
4.3.1　人間の姿勢や動作に基づくメタファー・・・・・・・・・・・・50
4.3.2　人間の生命や健康に基づくメタファー・・・・・・・・・・・・53
4.4　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57

第5章 モト領域を固定した事例研究(2)
——物質の状態変化を表す漢語語彙・・・・・・・・・・・・・・・・ 63
5.1　問題の所在と本章の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63
5.2　物質の状態変化をモト領域とするメタファーの典型用例・・・・65
5.2.1　拡張された意味用法が完全に一致するケース・・・・・・・・65
5.2.2　拡張された意味用法が部分的に一致するケース・・・・・・・76
5.3　「蒸発」に関する通時的分析・・・・・・・・・・・・・・・・・78
5.3.1　「蒸発」についての辞書記述・・・・・・・・・・・・・・・・79
5.3.2　年代別に見た「蒸発」の使用例・・・・・・・・・・・・・・・80
5.3.3　「蒸発」の意味別の用例数の変化・・・・・・・・・・・・・・81
5.4　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・84

第6章　モト領域を固定した事例研究(3)－住居を表す漢語語彙・・・・・87
6.1　問題の所在と本章の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・87
6.2　住居をモト領域とするメタファーの典型用例・・・・・・・・・・89
6.2.1　構造のメタファーに基づく表現・・・・・・・・・・・・・・・89
6.2.2　存在のメタファーに基づく表現・・・・・・・・・・・・・・・94
6.2.3　方向付けのメタファーに基づく表現・・・・・・・・・・・・・102
6.3　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・106

第７章　サキ領域を固定した事例研究ー「手段・方法」を表す表現・・・・110
7.1　問題の所在と本章の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・110
7.2　「手段・方法」を表すメタファーの日中対照・・・・・・・・・・112
7.2.1　手段・方法は「経路」である・・・・・・・・・・・・・・・・・113
7.2.2　手段・方法は「道具」である・・・・・・・・・・・・・・・・・116
7.2.3　手段・方法は「治療」や「医薬品」である・・・・・・・・・・120
7.2.4　手段・方法は「身体部位詞」である・・・・・・・・・・・・・123
7.2.5　手段・方法は「生命や財産を守る拠り所」である・・・・・・124
7.2.6　その他・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・126
7.3　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・128

第８章　モト領域とサキ領域を固定した事例研究
——ペアの形で構成される表現・・・・・・・・・・・・・・・・・・130
8.1　問題の所在と本章の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・130
8.2　自然現象をモト領域とする中性的感情表現・・・・・・・・・・・134
8.2.1　感情一般をサキ領域とするパターン・・・・・・・・・・・・・・134
8.2.2　欲望をサキ領域とするパターン・・・・・・・・・・・・・・・・136
8.3　自然現象をモト領域とする肯定的感情表現・・・・・・・・・・・139
8.3.1　喜悦をサキ領域とするパターン・・・・・・・・・・・・・・・・139
8.3.2　希望をサキ領域とするパターン・・・・・・・・・・・・・・・・142
8.4　自然現象をモト領域とする否定的感情表現・・・・・・・・・・・145
8.4.1　失望（絶望）をサキ領域とするパターン・・・・・・・・・・・145
8.4.2　恐怖をサキ領域とするパターン・・・・・・・・・・・・・・・・147
8.5　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 149

第９章　結論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 155

9.1　本研究のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・155
9.2　今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 163

参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・165

付録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・170
付録 1　抽出された日本語の漢語語彙・・・・・・・・・・・・・・・・・ 170
付録 2　抽出された中国語・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・173
付録 3　『分類語彙表』―中項目一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・177
付録 4　《现代汉语分类大词典》分類項目・・・・・・・・・・・・・・・179
付録 5　第 8 章に用いた主なデータ・・・・・・・・・・・・・・・・・・182

謝辞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・186

第１章　序章

本研究では、日中対照研究を基礎として、漢語語彙におけるメタファーの研究を扱っている。本章では、まず、本研究の背景について述べ、その後、本研究の目的、研究範囲と構成について述べる。

1.1　研究の背景

日本語は、和語・漢語・外来語から成り立っている。国立国語研究所の『現代雑誌九十種の用語用字』の調査（1962）によれば、1956 年の 1 年間に、雑誌 90 種で使用された異なり語数は約 3 万語で、語種分類すると、漢語が５割弱を占めるということである[1]。また、小学館の『新選国語辞典』第 8 版の収録語についてのウィキペディア(2002)の統計によると、和語は 33.8%、漢語は 49.1%と「辞書のほうが漢語の比率が高い」とコメントしている。国立国語研究所の調査とウィキペディアの統計では、約 40 年のひらきがあるが、その割合について言えば今や和語よりも漢語のほうが多くなっていることは否めない事実である。

外国語学習においては、母語の知識が活用できれば、何も分からない状態からの学習に比べて、外国語の習得が促進されることは言うまでもない。勿論、これは日本語学習においても同様である。中国人にとって、日本語を学習する時、最も取り組みやすいのは、日本語の漢字と漢語の学習ではないだろうか。『中国人のための漢字の読み方ハンドブック』に掲載されている漢字 2674 字（常用漢字 1945 字、人名漢字 123 字、常用漢字以外の漢字 606 字）のうち、1656 字が中国語とまったく同じ字形の漢字である。また、日本語の語彙構成には、漢語の延べ語数が全体の 41.3%を占め、とりわけ、二字熟語においては、日本語の国語辞典に掲載された語彙のうちでもおよそ 70%にものぼる(Yokosawa & Umeda, 1988)。現代中国語と対応のある漢字語 4,600 語のうち、同形同義語は 54.5%、同形類義語は 14.9%、同形異義語は 4.1%と、70%余りが日

[1] 山崎・小沼（2004）は、現代語の語彙・表記に関する基本的な統計情報は、長い間国立国語研究所の現代雑誌 90 種の調査の結果を引用するということが続いてきたため、その欠落を補う意味で、1994 年発行の月刊誌 70 種を調査対象に選定し、延べ語数、異なり語数でみた語種の構成を分析したところ、漢語がそれぞれ 48.1%、30.6%、和語が 37.2%、24.1%を占めると示す。

中両言語の間で表記の共通した同形語[2]であるという（陳，2002）。表記の違いを除けば、日本語で使用されている漢字の約 98.1%を既に知っているとの記述もある(菱沼,1983,1984)。日中両言語の間には量的に高い共有性があることが分かる。

目標言語と母語の間で共有された語彙情報が多ければ多いほど、母語の語彙知識を基盤に語の意味を的確に捉えて理解につなげることができると一般的に考えられるため、中国人日本語学習者が日本語の漢字・漢語を学習する上で、非漢字圏学習者よりも明らかに有利な点を持っていると言えよう。

ところが、日中両国語の漢字の意味は長い歴史の中で、ある程度異なったものになってしまっている。漢語を同じ漢字で表記し、その語の本来の基本的な意味、すなわち「第一義」は同じであるにも関わらず、拡張された[3]意味用法が常に同じだとは限らない。例えば、

（1a[4]）日本でも自治体やNGO、企業、教育機関が連携し、難民の暮らしを息長く見守り、一人ひとりの能力を<u>開花</u>させる「人づくり」の視点での支援態勢を築くべきだ。(9 月 24 日[5])

（1b）他表示，新中合作已<u>开花</u>结果，但仍有进一步发展的潜力（シンガポールと中国との両国間の協力は見事に<u>花が咲き</u>、実を結んだ。それに、発展の潜在的可能性も大きいと彼は表明した[6]）。（10 月 4 日）

（2）その結果、国会本来の役割である審議が空洞化し、与野党の交渉は<u>水面下</u>に潜り、政治のプロセスが有権者の目に見えにくくなった。(9 月 30 日)

（3）鳩山政権が発足して 4 カ月、普天間問題という太い刺はのどに刺さったままだが、日米関係の<u>歯車</u>がようやくかみ合いだした。(1 月 14 日)

---

[2] 日中同形語を認定するにあたっては、いわゆる字体の相違は考慮しないこととし、旧字体（康熙字典体）が共通である字をすべて同形とした。

[3] どのような言語においても、一つの語で複数の意味・概念を表す現象は見られる。これは、限られた語彙でなるべく多くの意味・概念を表そうとする、いわゆる「言語の経済性」と一般に呼ばれる原理によるものだと思われる。ある語の基本的な意味に基づいて、すなわち基本的な意味を変化させることによって、新たな意味が派生されることは「意味拡張」と呼ばれている。「メタファー」が意味拡張の代表的なものの一つとされている。

[4] 日中対照を見分けやすいように、ペアになっている日本語の例文を a、中国語の例文を b と記す。以下も同様とする。

[5] 本研究における例文は主に『2010 年度朝日新聞―社説』、《2010 年度人民日報―人民論壇》に基づいて収集したものである。そして、本研究は日本語と中国語の漢語の対照研究を行うことを目的とするため、例文を分析するに当たり、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』と《北京大学現代汉语语料库》（北京大学現代漢語コーパス）によって用例を追加した場合もある。《北京大学現代汉语语料库》は、現代中国語と古典中国語と合わせて 4 億 7700 万字と分量だけで言えば、かなり巨大なコーパスであり、中国語のコーパスとしては最大級であるため、中国語関係者の間で専ら使われている現代中国語コーパスの代表である。なお、本研究では、例文の後ろの数字は当該新聞の発行日付である。発行日付が付いていないものは『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ と略す)と《北京大学現代漢語コーパス》（CCL と略す）によって追加した用例である。

[6] 日本語訳は筆者による。以下も同じである。

（4）利用电子邮件、博客、微博等**渠道**，加强与人民群众的沟通（電子メール、ブログ、ツイッターなどルートを利用して、国民とのコミュニケーションを高める）。(3月11日)

（5）把短期调控与长期制度建设结合，既有利于房地产市场的长期**健康**发展，也有利于加快经济发展方式的转变（短期的な制御と長期的な制度構築を有機的に結合させることは、不動産市場の安定的かつ健全な発展を促進するだけではなく、経済発展方式の転換を加速させることもできる）。（9月14日）

（6a）断水が続き、お湯に**パンの耳**やご飯を混ぜた団子しか提供できなかった日もあった。(BCCWJ)

（6b）我国是**黒木耳**主要产地，产量和质量都居世界首位（我が国は黒キクラゲの主な産地であり、生産量、質とも世界をリードしている）。(CCL)

植物が種から芽を出し、花が咲き、実が成るという成長過程をたどるという知識を我々は普段持っていると思われている。例文（1a）では、難民の保護と能力強化を通じて個人の自立と持続可能な社会づくりをめざす支援策について述べている。難民一人ひとりの持つ豊かな可能性を実現させ、何かができること、自立させることを「開花させる」[7]と表現している。（1b）の場合は、両国間の関係の発展を表現するのに植物の「開花」、「結実」が使われている用例である。これは、＜何かを達成すること、成果を上げることを目的とした人間の営み＞の諸段階と＜植物の生長過程＞の諸段階との間に対応関係が存在すると考えられているからである。(2）の場合は、陸上に立っている人からは、水の中はよく見えないことから、表立って見えない部分のことを「水面下」と言われている。ここでは、＜外からは簡単には見えず、表面にはあらわれないところ＞を含む元の意味から、＜公には発表されないところで会ったり、いろいろ根回ししたり、つまり裏でこっそり秘密に動いていること＞に意義が拡張する。

機械は複数の部分・部品からなっており、それぞれの部分・部品は機械の構造上あるいは機能上決まった役割を果たす。(3）の「歯車」はある種の機械の「部品」である。一つひとつの歯車はギザギザで、あちこち欠けているが、歯

[7] 本研究で使用する記号の意味は以下の通りである。「　」（かぎ括弧）：日本語の表現、“　”（二重引用符）：中国語の表現、≪≫（二重山括弧）：概念、＜＞（山括弧）：当該の語の意味・用法。

車の欠けている部分に他の歯車の歯がガッチリと組み合わして、歯車はその本領を発揮するのである。「日米関係の歯車がかみ合う」というのは、両国の考え方や行動の調和がうまく取れて、物事が順調に進み、双方が納得できる解決策を見いだす兆しは見えてきそうにあることを表している。言い換えれば「歯車がかみ合う」とは＜二つ(以上)の行為などがうまく組み合わして良い結果が出る＞ということである。

（4）の“渠道”とは、＜灌漑用、排水用に掘った水路＞がその本来の意味である。ここでは、水が通るように掘った溝の経路作用に着目することによって、＜ルート＞に意義が拡張される。（5）の“健康”は、＜日常の社会生活や積極的な行動に堪え得る体の状態＞がその本来の意味である。ここでは、すこやかで調和の取れた良い状態に着目することによって、＜不動産市場全体の健全な発展＞に意義が拡張される。

（6）では、聴覚にとって重要な器官として広く認知されている「耳」は、日本語では＜人間の顔の端に位置する＞に焦点を当てる位置類似のメタファーによって「パンの耳[8]」に意味が拡張されているのに対して、中国語では形状類似のメタファーによって“木耳[9]（キクラゲ)”、“银耳（白キクラゲ)”に意味が拡張されている。中国人日本語学習者が「パンの耳」を理解できないのは、この「耳」を使用している語の意味の拡張されていく方向が異なるからである。

上述の例文を読めば分かるように、漢語語彙におけるメタファーには、「開花」のような日中両言語に共通するものもあれば、「水面下」、「歯車」、“渠道”、“健康”といったような日本語か中国語の一方にしか見られないものもある。それに、「耳」のような「基本的な意味」は同じであるにも関わらず、拡張された意味用法は必ずしも一致していないものもある。

中国人学習者が日本語を習得する時、辞書も引かずに、常に自分の持っている中国語の漢字知識に基づいて、日本語の漢語を理解し、使おうとする傾向が見られる[10]ため、中国人が日本語を学習する場合、拡張されている意味が全く同じ漢語を習得する際には負担が軽くなるわけであるが、異なる意味を持つ漢語を学習する際には、注意を払う必要がある。そこで、中国人日本語学習者の

[8] 日本語では「パンの耳」は食パンの焼かれて茶色く固く変質した周辺部分の俗称である。
[9] 木の平面に菌が萌え、その形が人間の耳に似ていることから「木耳」と呼ばれている。
[10] 詳細については阿久津（1991）を参照する。

ためには、同じ漢字、漢語を用いているという利点を生かしつつ、誤りやすい点と注意すべき点を明らかにする必要があると思われる。

1.2　研究範囲と研究の目的

日中対照言語学の研究は、近年、日本語研究者と中国語研究者の成長と増加によって大きな発展を見せている。日中語彙対照研究も日中文法対照研究に次いで、注目の研究分野となっている。

しかしながら、メタファーによる意味拡張の観点から行った日中対照研究のほとんどは、主に色彩語、イディオム、五感の形容詞といった個別語の対照研究に集中していて、語彙を意味によって分類し、体系的に日中メタファー表現の対照を行う研究はあまり見られないようである[11]。こうした状況に鑑み、本研究では前述の趣旨によって、2010 年度の『朝日新聞』と中国語の《人民日報》の社説から漢語語彙のメタファー用例を取り出し、漢語語彙におけるメタファーの日中対照研究を試みることを主な目的とし、認知メタファー理論への実践的貢献を目指した。

メタファーは個々の語彙の問題ではなく、体系をなすとされるが、両言語の漢語語彙において、メタファーに基づく意味拡張の範囲及び特徴はどうなっているか。漢語語彙の実際の用例に基づき、それぞれの表現の本来の意味のどのような特徴に注目し、どのようなメタファーに基づき、新たな意味に拡張しているかを検討することによって、漢語語彙におけるメタファーの実態を明確にしようとするのが本研究の目的である。

また一方で、文化が異なれば、我々を取りまく環境や使用する言語も変わってくる。谷口（2003）は、概念メタファー[12]が経験のゲシュタルトを介して得られるものであるとすれば、文化的な相違が当然ながら生じると指摘する[13]。「議論」という漢語語彙を戦略を駆使し勝ち負けを決める「戦争」に喩えたこ

---

[11] 90 年代に入り、中国でも認知メタファー理論が注目され、当該理論を紹介するものが多くみられるようになった（朱小安,1994）。ただこれらの中では単に理論の紹介にとどまるものが多く、英語のケースに基づいて確立された認知メタファー理論が中国語にも適用されるかどうかは不明であった。その後、蓝纯（2005）など中英対照の観点から中国語のメタファーを考察したものが数多くみられるものの、日中対照を主な考察対象としたメタファー研究はほとんど色彩語、イディオム、五感の形容詞といった個別語の対照研究に集中している。

[12] われわれの思考や行動が基づいている概念体系の多くの部分がメタファーによって成り立っていて、言語表現が、その概念体系を知るてがかりとなるというのが、Lakoff and Johnson（1980）の主張である。

[13] 例として≪ARGUMENT IS WAR≫（議論は戦争である）という概念メタファーを挙げた。日本語の場合は、武器と言えば「刀」であるという連想が働くため、言語表現のレベルでは「相手の意見を突く」、「相手の意見を一刀両断にする」のような刀に関する表現が多く生じる。(2003:28-30)。

のメタファーは、文化背景によっては成立しないという可能性も考えられる。言い換えれば、概念メタファーは人間自身の存在している物理的環境の文化と切っても切れない関わりがある[14]。

ここでは、同じ意味を表現する際に用いられるメタファー表現で、中国語によるメタファー表現と日本語によるメタファー表現によって形成されるペアのメタファー表現を具体例として提示して、そのペアの中国語によるメタファー表現と日本語によるメタファー表現の間に存在するところの、（1）表現上の異同、（2）それぞれのメタファー表現を支える意味構造上の差異、（3）それぞれの相違点が中国文化と日本文化の相違点によって影響を受けているかどうか、などの諸点に関して、比較研究する。

日中両言語における漢語語彙のメタファー的な転用を比較検討することは、言語だけの問題にとどまらず、中国文化と日本文化の世界に対する捉え方の共通点と相違点を明らかにすることにおいても意味のあるものであると考える。

1.3　本研究の構成

本研究は序章を含む全 9 章で構成される。具体的な内容は以下の通りである。

第 1 章の序章では本研究の背景と目的及び論文構成について述べる。

第 2 章では、メタファーに関する伝統的な理論と本研究が用いる認知言語学に関する理論を概観し、メタファーの形式と同定について述べた後、本研究の実例分析に関わる重要な先行研究について述べる。

第 3 章では、本研究で用いるデータと分析方法について論じる。分析に使用する主なデータは 2010 年度の『朝日新聞』と中国語版の《人民日報》の社説

[14] Kövecses（2005）も概念メタファーと文化の関係について触れ、文化という概念を“a set of shared understandings that characterize smaller or larger groups of people.”（小さい集団または大きい集団に属する人々を特徴付ける一組の共通認識）と捉え、概念メタファーと文化の繋がりについて詳細に考察した。それによると、概念メタファーと文化は主に次の６点において密接に関連している。第一に、世界に対する我々の共通認識の中には具体的な物事の認識のみならず抽象的な物事の認識もあり、抽象的な物事（議論、恋愛など）の認識においてはよく概念メタファー（《議論は戦争である（表現例：「議論の弱点を突く」)》、《恋愛は旅である（表現例：「結婚に至った」)》など）に反映されているメタファー的な思考が大きな役割を果たしている。第二に、概念メタファーは多くの場合、文化の重要な部分である言語によって表出されている。言語は概念メタファーの主な標識だと言える。第三に、概念メタファーは一般に、ある特定の文化において、強い物理的な存在様式を持ち、風習、行動、象徴、人工物などの社会文化的な実践を通して表出されることがある。第四に、概念メタファーはメタファー表現の形で談話の中で使われる際に、社会文化的な談話機能を果たすことがある。第五に、ある文化の慣習的なメタファーによって構築されたシステムは、その文化の安定性を保っている。なぜならば、文化の一部は世界に対するメタファー的な共通認識からなり、また、慣習的なメタファー表現やメタファー的に構築された物理的現実は、ある程度の時間的安定性があるためである。最後に、文化は一組の共通認識だとみなすことができるため、メタファー的な思考などにおける創造性は、文化に変化や新しい体験の機会をもたらす可能性が存在する（2005：259-264）。

である。漢語語彙のメタファー用例を取り出し、『分類語彙表』と《现代汉语分类大词典》の分類項目に従って意味分類したうえで、本研究におけるメタファーの使用を量的に概観する。モト領域[15]となりやすい領域とサキ領域となりやすい領域を挙げてリストを作る。さらに、特定の領域が特定の領域とペアの形でメタファーを構成するパターンを抽出して、両言語における意味拡張の傾向及び体系性を分析する。

第 4 章では、モト領域を固定した事例の研究として、頻出語数が最も多いメタファー表現の分析を行う。漢語語彙のメタファー用例を取り出し、『分類語彙表』の分類項目に従って意味分類をすれば、「自然物および現象」の下位項目に分けられている漢語語彙の頻出語数が最も多いことが明らかになる。「自然」、「物質」、「天地」、「生物」、「身体」、「生命」と細かく下位分類されているが、量的データの分析では、人間にまつわる「身体」と「生命」に分類されている語が最も多いことが分かる。本章では、身体語彙を表す漢語語彙がメタファーに基づき多様な意味に拡張された事例研究を行う。元々は人間の身体や生命にまつわる語彙は人間が一番反応しやすい心理的感情・精神・思考から、行為、さらに、社会・経済などの分野まで拡張し、大量に用いられていることを考察していく。

第 5 章では、モト領域を固定した事例の研究として、本来は「物質の状態変化」を表す「蒸発」、「沸騰」、「昇華」、「結晶」といった表現が、メタファーの理論に基づき、新たな意味に拡張する場合を主な考察対象とする。両言語において、拡張した意味はもともとの言葉の意味とはどのように関わっているのか、このような多様なメタファーの基盤はどのように考えればよいのかなどについては考察する。

第 6 章では、「生産物および用具」の下位項目に分けられている「住居」にかかわるメタファー表現の事例研究を行う。「壁」、「敷居」、「玄関」など住居についての知識が、「構造のメタファー」、「存在のメタファー」、「方向付けのメタファー」という 3 種類の概念メタファーに基づき、これまで指摘

[15] 認知言語学において、語の意味は単独で存在せず、関連した知識の総体の一部として存在すると考えられる。この知識の総体を領域と呼ぶ。そのうち、具象的で表現しやすく、経験豊かな物事をモト領域、抽象的で表現しにくく、身体的な表現があまりない事物をサキ領域と呼ぶ。「人生は旅である」を例に取れば、人生に関する知識構造がサキ領域で、旅に関する知識構造がモト領域となる。

されている以上に体系的に用いられているなどの諸点に対して比較研究する。

第 7 章では、メタファー的写像によって特徴づけられるのはサキ領域のある一側面にすぎないため、一つのサキ領域は通常複数のモト領域によって特徴づけられる事例の研究として「手段・方法」というサキ領域を固定し、それがどのようなモト領域から形成されているかを検討するという手法を用い、漢語語彙におけるメタファーの日中対照研究を行う。

第 8 章では、「自然現象」の領域に由来する語と「感情」の領域に由来する語がともに表現される慣習的メタファー表現に注目する。「感情一般」、「欲望」、「喜悦」、「希望」、「失望」、「恐怖」と代表的な感情を 6 種類抽出し、それぞれがどのような自然現象の観点から理解され、その写像にどのような構造的一貫性があるのか、また、類似する感情や反対関係にある感情を特徴づけるメタファー写像についても分析してみたい。

第 9 章の結論では、まず、第 8 章までの分析と考察を踏まえて、共通性と文化相対性の視座から日本語と中国語における漢語語彙のメタファーの実態をまとめる。最後に、この研究を通しての問題点などを踏まえ、今後の課題について考える。

第 2 章　先行研究の概観

メタファーは、旧来修辞学などの分野での研究対象であったが、認知言語学では、それはレトリックという特別なものではなく、極めて日常的な表現であるとされる。本章では、メタファーの伝統的な理論と本研究が用いる認知言語学に関する理論を概観し、メタファーの形式と同定について述べた後、本研究の実例分析に関わる重要な先行研究について述べる。

2.1　メタファーに関する理論

メタファーの伝統的な定義は、「類似性に基づく比喩」である。同じく類似性に基づく直喩とは異なり、「～のように」など、喩えであることを明示する語句を用いないものとされ、それゆえ「隠喩」、「暗喩」とも呼ばれる。以下の例では、(1a)は直喩、(1b)は典型的なメタファーである。

(1) a. 人生は旅のようなものである。

b. 人生は旅である。

瀬戸(1995a)は、「目玉焼き」や「メロンパン」の例を挙げて、「メタファーとは≪見たて≫と考えれば分かりやすい」と端的な言い方をしているが、ここでは、まずメタファーについての伝統的な見解について概観しておく。

2.1.1　伝統的なメタファー理論

アリストテレス以来のメタファー研究は、代替説、逸脱説、比較説、語用論説、相互作用説、カテゴリー包含説が主要な説である[16]。

代替説(substitution theory)では、メタファーとは字義どおりで表現を言い換えた(代替した）もので、その用途は主に文体的なものであるとされる。例えば、（2a）は、（2b）を代替したものであるという考え方である。

（2）a. Achilles is a lion.（アキレスはライオンである）

b. Achilles is brave.　（アキレスは勇敢である）

代替説では、メタファーを単に言葉のパラフレーズによる置き換えに基づいて考えており、メタファーを寄生的なものとして捉える。

[16] 詳細については谷口（2003：5-7)、瀬田（2009)、鍋島（2011：8-10）なども参照する。

逸脱説(anomaly theory)は、ビアズリー（Beardsley, 1962）が提唱した説などの総称で、メタファーは語の間に対立、逸脱が生じるため生まれるという理論である。例えば、（2）の例において、本来猛獣ではないアキレスが猛獣のように捉えられる時には、語と語の間に対立関係が生じ、これがメタファーの効果の源泉となる、という考え方である。

比較説(comparison theory）は、二つ或いはそれ以上の事物を比較し、それらの事物の間に類似性を見出すものである。（2）の例では、アキレスとライオンを比較し、その共通点として何らかの類似性が見出されるという考え方である。比較説は過去においてメタファーの主要な説であり、現在でも有力な説である。

語用論説(pragmatics theory）では、メタファーを言語の構造の問題ではなく、言語の使用の問題であり、語用論で取り扱うべき問題として捉える。哲学者のサールやディヴィッドソンがこの論者に含まれると考えられる。典型的には、意味論と語用論を二つのレベルとして分離し、次のような手順で意味の解釈がなされるとする。

1）発話の字義どおりの意味を産出せよ（意味論）

2）その字義どおりで意味が文脈と整合性があるか確認せよ

3）字義どおりの意味が意味をなせばそれを採用し、なさなければ代替として非字義的意味を探せ（語用論）

つまり、字義どおりの意味を計算し、これを文脈と突き合わせて意味をなすかどうか検討し、意味をなさなかった場合に非字義的な意味を探すという考えである。

相互作用説(interaction theory)とは、比喩的な意味と字義どおりの意味が相互作用することによって、メタファーの意味が決定されるという説である。相互作用説は主にブラック（Black,1979）が主張している。（2）の例で言えば、ライオンを「フィルター」として、アキレスを見ることによりアキレスの見方が変わるとともに、「お互いを照らして」ライオンの見方も変わる。

カテゴリー包含説(category inclusion theory)は、メタファーは単にカテゴリー化にすぎないという理論である。この説は主に Glucksberg and Keysar(1993)が主張している。この説の説明に使用される代表的な用例の一つは(3)である。

(3) My job is a jail.（私の仕事は牢獄だ）

(3)では、仕事を牢獄として見なしているが、これは単に「牢獄らしさ」（うっとうしい、息が詰まる、味気ないという要素）が、私の仕事に当てはまるのだという。つまり、牢獄のカテゴリーが場当たり的に拡張し、私の仕事がその一例になっていると主張する。

これらの説には、すでに破棄されていたり、メタファーの一側面のみしか捉えていないものも少なくない。まず、代替説に関しては、メタファーの意味を単純化した素朴すぎる理論として常に痛烈な批判を浴び、現在はこれを支持する研究者はほとんどいないと考えてよい。さらに、逸脱説、語用論説、相互作用説はメタファーのある側面を強調しており、その範囲で正しいが、メタファーの本質に関する議論になっていない。こういった点から見ると、メタファーは類似性に基づくとした比較説が依然として有力だと考えられる。カテゴリー包含説もカテゴリー包含の根拠が一種の類似性であることから、広い意味の比較説に含めることが可能である。では、本研究が用いる認知言語学におけるメタファー理論とはどのようなものなのかを概観してみよう。

2.1.2　認知言語学におけるメタファー理論

メタファーを認知という観点から捉えようとした先駆的な研究が Lakoff and Johnson（1980）[17]であり、後に「概念メタファー」として知られるようになったメタファーの導入などは、その後のメタファー研究の発展に大きく寄与した[18]。Grady（1997）は、Lakoff and Johnson（1980）から≪理論は建物である≫のメタファーを取り上げ、①写像の不完全性、②経験的基盤（動機づけ）の欠如、③他のメタファーとの重複、の 3 点にわたって問題点を提起している。

本節では、Lakoff and Johnson（1980）による概念メタファー理論と概念メタファーをより経験的な基盤のはっきりした根源的なメタファーの合成によるものだと主張している Grady（1997）のプライマリー・メタファー理論を概観する。

---

[17] 本研究では、Lakoff and Johnson（1980）と表示するところは、すべて邦訳引用（渡部昇一他訳）であり、原典引用ではない。以下も同じである。

[18] 90 年代に入り、中国でも認知メタファー理論が注目され、当該理論を紹介するものが多くみられるようになった（朱小安, 1994、蓝纯, 2005 などを参照）。

Lakoff and Johnson（1980）は、メタファーを、「ある概念を別の概念と関連付けることによって、一方を他方で理解する」という認知プロセスとして広く捉え直した。それによれば、メタファーは、喩えるものが存在する領域、すなわち起点領域（モト領域）から、喩えられるものが存在する領域、すなわち目標領域（サキ領域）への領域間の写像である。2.1 の例文(1)に見られるように、起点領域としての旅に関する概念要素である出発点や目的地、様々なハプニングは、目標領域としての人生に関する概念要素である誕生や死亡、また長い間にはいろいろあることなどに対応する。

Lakoff and Johnson（同書：4-5）は、メタファーは言葉遣いだけに限られているのではなく、思考や行動に至る日常生活のあらゆる部分に浸透している。言い換えれば、我々の日々の活動は、思考を支配している様々な概念によって規定されており、この我々が日常用いている概念体系の大部分が本質的にメタファーによって成り立っていると主張する。

彼らは、「メタファーの本質は、ある種の事柄を別の事柄を通して理解し、経験することである」（同書：6）と述べ、これについて説明するために下のような例を挙げている[19]。

（4） a. You're *wasting* my time.（君はぼくの時間を浪費している）

b. This gadget will *save* you hours.（この小さな装置を使えば何時間も節約できる）

c. He's living on *borrowed* time.（彼は借りてきた時間で生きている／思いがけなく長生きしている）

d. *Thank you for* your time.（時間を取ってくれてありがとう）

Lakoff and Johnson（同書：10-11）は、彼らの文化では時間は貴重なものであり、まるで「お金」であるかのように扱われる。つまり、≪TIME IS MONEY≫（時は金なり）というメタファーによって、「時間」を概念化していると説明する。すなわち、メタファーによって、「お金」という概念（一般に「モト領域[20]」と呼ばれる）に基づき、「時間」という概念（一般に「サキ領域」と呼ばれる）に構造を与え、理解しようとするメタファーが≪TIME IS MONEY

[19]（4）は Lakoff and Johnson（同書：9-10）より一部引用。

[20] 中国における従来のメタファー研究では、メタファーを分析する際に“本体”（喩えられるもの）、“喩体”（喩えるもの）という修辞学で用いられている用語を採用している。

≫なのである。彼らは、このようなメタファーを「構造のメタファー」と呼ぶ。

Lakoff and Johnson（1980）は 3 種類の概念メタファーを提唱している。「構造のメタファー」のほかに、「方向付けのメタファー」と「存在のメタファー」もある。「方向付けのメタファー」とは、下の（5）のような概念メタファーで、構造の場合とは異なり、概念同士が相互に関係し合って全体として一つの概念体系を組織するものを言う。（5）では、「楽しい」という概念に「上」という空間的方向性（spatial orientation）[21]が与えられている。なお、（5）から出てくる英語表現として、(6)が挙げられている。

（5）≪HAPPY IS UP；SAD IS DOWN≫（楽しきは上、悲しきは下）

（6） a. I'm feeling *up*.（気分は上々だ）

b. My spirits *sank*.（気分が沈んだ）

c. I'm feeling *down*.（落ち込んでいる）

それに、「方向付けのメタファー」としては、（5）以外にも(7)など多くのものが挙げられている。

（7）a. ≪HEALTH AND LIFE ARE UP; SICKNESS AND DEATH ARE DOWN≫（健康と生命は上、病気と死は下）

b. ≪MORE IS UP;LESS IS DOWN≫（より多きは上、より少なきは下）

c. ≪HIGH STATUS IS UP;LOW STATUS IS DOWN≫（高い位は上、低い位は下）

「方向付けのメタファー」は、ある概念に空間的方向性を与えるものであると考えられる。メタファーに見られる方向性は恣意的なものではなく、人間の肉体的経験と文化的経験に根差しているため、個々の経験や文化が異なれば、これらの方法付けは異なった意味合いを持つことも有り得る。

「存在のメタファー」は、人間の肉体のような物理的な物体に係る経験によって基盤が与えられるもので、出来事、活動、感情、考えなどを、存在物や実体として見なすメタファーであるとされる。例として下の(8)が挙げられ、(8)から出てくる英語表現[22]として、(9)が挙げられている。

---

[21] 空間的方向性には、「上 - 下」（up - down）のほかに「内 - 外」（in - out）、「前 - 後」（front - back）、「着 - 離」（on - off）、「深 - 浅」（deep - shallow）、「中心 - 周辺」（central - peripheral）が挙げられている。Lakoff and Johnson（同書：18-19）を参照。

[22] （7）は Lakoff and Johnson（1980:9-10）より一部引用。

（8）≪INFLATION IS AN ENTITY≫（インフレは一つの存在物である）

（9）a. *Inflation is lowering* our standard of living.（インフレが我々の生活水準を低下させている）

b. *Inflation is backing us* into a corner.（インフレは我々を窮地に追い込んでいる）

c. *Inflation makes me sick*.（インフレは私をむかむかさせる）

(9)の例文を読めば分かるように、インフレを一つの存在物と見なすことによって、インフレに言及し、数量化し、識別することができるのである。そして、「存在のメタファー」の中に、下の(10)のような「容器のメタファー」と呼ばれているものを挙げている[23]。

（10）a. Are you *in* the race on Sunday?（日曜日のレースに出場するの)。

b. How did Jerry get *out* of washing the windows?（ジェリーはどうやって窓洗いの仕事から逃れたの？)。

c. He fell *into* a depression.（彼は憂鬱状態に陥った）

（10a-b)は、行為や活動を「容器」と見なし、(10c）は、状態を「容器」と見なすメタファーに由来している。容器には、以下のような特徴がある。

・容器の境界線によって「内側」と「外側」という領域ができる。

・容器の外側から内側へ、或いは内側から外側へ、内容物を出し入れする。

・容器も内容物も、ともに「物体」である。

谷口（2003：26－27）

「構造のメタファー」、「方向付けのメタファー」、「存在のメタファー」のうち、「存在のメタファー」は、他の二種と比べて、あらゆる知の対象を≪もの≫化するという単純な性格のため、より基本的なメタファーであるとされている。

Lakoff and Johnson（1980）が概念メタファーを基に、個々のメタファーをカテゴリー化するというトップダウン指向をとっている。一方、瀬戸(1995)はボトムアップ指向でメタファーに接近している。つまりメタファーの素材を五感（視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚）を表す言葉におき、我々が日常意識せずに用いている多くの言葉はメタファーからできていることを、多くの例を用いて

[23] (9) は谷口(2003:27)より一部引用。

強調し、それらのメタファーの素材を言葉の発信者の立場から分類している。

Grady(1997)[24]は、これまで Lakoff and Johnson（1980）で扱われてきた≪THEORIES ARE BUILDINGS≫(理論は建物である)のメタファーを取り上げ、写像の理論的な課題や問題点を挙げて、それらを熟考し、解決法として「プライマリー・メタファー」による代案を示した。言い換えれば、≪THEORIES ARE BUILDINGS≫（理論は建物である）が、実際には以下の二つのプライマリー・メタファーから構成される、複合的なメタファーであると提案している。

a. ≪ORGANIZATION IS PHYSICAL STRUCTURE≫（組織は物理的構造である）

b. ≪VIABILITY IS ERECTNESS≫（正しく機能することは、まっすぐ立つことである）

「存続する組織」の一例が「理論」であり、「直立した物理的構造物」の一例が「建物」であるという形で≪理論は建物である≫のメタファーが成立するとされる。このプライマリー・メタファーの経験的基盤が経験的相関であると主張する。

2.1.3　伝統的なメタファー理論と認知メタファー理論の対比

上述の記述を見て分かるように、認知言語学におけるメタファー理論は、二つの点で、伝統的なメタファー理論を大きく覆した。構造性と身体性を導入したのである。

メタファーの構造については、Lakoff (1993 : 245)が認知意味論の観点から、以下の 8 項目を挙げている。

a. メタファーは、ある概念領域から別の概念領域への写像である。

b. そのような写像は非対称的で部分的である。

c. それぞれの写像は、起点領域の存在物と目標領域の存在物の間の存在論的対応関係の不変集合である。

d. それらの不変対応関係が活性化されると、写像は起点領域の推論パターンを目標領域の推論パターンに投影する。

[24] 詳細については鍋島(2002)、鍋島(2011)、小野寺美智子（2011）なども参照。

e. メタファー的写像は、「不変性の原則」――起点領域のイメージ・スキーマ[25]構造は、目標領域が内在的に持つ構造と矛盾しないような形で目標領域に投射される――に従う。

f. 写像は任意ではなく、肉体と日常の経験知識の中に確認されている。

g. 概念体系には、概念体系の高度に構造化された下位組織を形成する。非常に多くの慣習的なメタファー写像が含まれる。

h. 写像には２つのタイプがある。それらは、概念的写像とイメージ写像であり、両方とも不変性の原則に従う。

構造性は、メタファーを「領域間の写像」と定義し、写像（すなわち、構造的対応関係）の概念を導入することで理論に導入された。領域自体が構造性を有しているのである。例えば、「燃える」という用語の意味は、「火」、「燃やす」、「マッチ」、「油」、「熱」、「焼ける」、「燃え上がる」、「焦げる」、「くすぶる」、「再燃する」などの用語の意味と密接に関連している。これらの意味の関連性全体は、「火の領域」とでも言えるような火と燃焼に関する知識の総体を形成している。認知メタファー理論は意味に領域という構造性を導入し、メタファーそのものも構造の対応関係を指定すると考えた点で従来のメタファー理論と大きく異なる。

身体性は、共起性、身体的基盤、経験的基盤[26]とも呼ばれ、メタファーの存在理由である基盤を身体経験的共起関係に求めたのである。例えば、怒りという感情が生じる際の生理的反応の一つとして、体から熱が放出され、体温が上昇するというものが挙げられるため、≪怒りは火である≫というメタファーが存在している。これは、身体経験に基づく共起関係であり、身体的基盤の一例である。

認知言語学におけるメタファー理論では、離れた２つの領域の写像がなぜ存在するかというメタファーの基盤（動機づけ）が重要だとされている。Lakoff and

[25] イメージ・スキーマは、人間が世界と日常的に関わり合うことから生じる単純で基本的な認識構造であり、具体的な経験に基づいて形成される心的表象の一種である（池上, 1998）。我々は、身体を介して外界とインターアクトしながら、様々なことを経験し、概念に先行する意味のあるイメージ・スキーマを形成する。このイメージ・スキーマをもとに、我々は、さらに、メタファーを介して心理的領域や社会的領域に関わる経験を構造化していく。

[26] メタファーの経験的基盤には、大きく分けて「経験的共起性」（experiential occurrence）と「経験的類似性」（experiential similarity）という２種類の基盤がある。経験的類似性とは、客観的に存在する類似性ではなく、人間によって経験され、認識された類似性のことである（Lakoff and Johnson 1980: 154）。

Johnson（1980）以来、主にメタファーの共起性基盤、即ち起点領域と目標領域が共起する状態を体験することが重要視され、議論されてきている。例えば、《楽しい状態は上、悲しい状態は下》の基盤としては、人間は一般に嬉しくて元気である時はまっすぐな姿勢になり、悲しくて気持ちが沈んでいる時はうなだれた姿勢になるという肉体上の共起経験が考えられる。

しかし、その後、鍋島（2002）、（2011）は具体的な言語例に基づき、メタファーの基盤として共起性基盤だけでなく、同じく身体的経験に根ざしている構造性基盤と評価性基盤も存在すると主張している。構造性基盤とは、イメージ・スキーマ、または形状が基盤となることを指す。例えば、次のメタファーは「連続体」のスキーマを共有する構造性基盤のメタファーだと考えられる。

《群集は水である》

a. 駅からずっと甲子園に行く人の流れが続いている。

b. 人海戦術

c. 陽子は人波に飲まれていった。　（鍋島 2011：105）

一方、意味には、通常の辞書的意味とは別に、いい感じや嫌な感じ、大きな感じや小さい感じといった情緒・感覚的な意味が存在する。その意味に含まれる評価性（好ましい評価性、否定的な評価性）が基盤となるものが評価性基盤のメタファーである。例えば、以下の善悪に関するメタファーにおける「白」、「黒」、「奇麗」、「汚れ」などの起点領域は既に評価性を含んでいる。

《善は白、悪は黒》　黒い霧、身の潔白を証明する

《善は奇麗、悪は汚れ》　汚れた政治家、手を汚す

《善は直、悪は曲》　曲がったことが大嫌い

（鍋島 2011：110）

2.2　メタファーの形式

メタファーにはいくつかのタイプ[27]があるが、比較的分かりやすい例としては、まず「人生は旅である」のような「X は Y だ」という「体言述定型」である。これまでの研究では「X は Y だ」という「体言述定型」のメタファーのみが対象になる場合が多いが、実際に言語活動で使われるメタファーの形式はほかにもある。例えば、「対象指示型」である。これは「ある対象 X を指示するのに、元来は他の対象 Y を指示するために用いるシンボルを借用する用法」である。例えば、「走るのが遅いクラスメートの太郎君」のことを「太郎は亀だよ」と表現する場合である。

また、橋本(1989)が提唱した名詞と用言とが結びつく「用言述定型」も数多く存在している。これは「ある対象の動作・状態を述定する際に、本来他の範疇の対象を述定するために用いられる動詞・形容詞を援用する用法」である。例えば、「自民党は 15 年ぶりに野党に転落する」のように、国家における政府を構成する与党と対をなす政党「野党」と「転落する」という動詞の通常の意味と対象（足を滑らせて地面、池などに転び落ち、怪我や失命につながる〈負の行為〉であること）との間に不一致があるが、メタファーであることは意識されうる。そして、この「用言述定型」のメタファーは、下で述べる理由によって基本的に「X は Y だ」の「体言述定型」のメタファーと構造を等しくするとされる。橋本によれば、下記(11a)の「怒りが煮えたぎる」というメタファーは、(11b)と（11c)の命題に分解される。

（11）a. 怒りが煮えたぎる。

b. 怒りは Y だ。

c. Y が煮えたぎる。

「用言述定型」のメタファーでは、喩えとして用いられる概念範疇 Y が言語として言及されず、Y に関する述定形式がそのまま X の述定に援用されたとする。この場合、Y は「体言述定型」の場合とは異なり、特定の名称が設定されていない漠然とした「カテゴリー」である。(11)の例であれば、Y は湯やスープなど「煮えたぎるもの」一般である。以上を踏まえて、「怒りが煮えたぎる」

[27] 瀬戸（1995a:16）は、メタファーは、形式的には「A は B である」（男は狼である）のデアル型、「A の B である」（仕事の山）の連結型、「美しい理論」のような形容詞型、「東京砂漠」の名詞型、「新しい分野を開拓する」の動詞型、「一枚岩にひびが入った」をメタファーとして使う場合の文型などに区別されるとされる。

の解釈は「『怒り』という感情に、『煮える』がその一状態である物質（湯など）の状態描写に適用する分節範疇を援用すれば、今その怒りは、当該の範疇内において『煮えたぎる』という位置にある」（橋本 1989：164）となるとされる。つまり、「用言述定型」のメタファーでは、X は一旦 Y に喩えられた上で、元々は Y の状態を描写する表現が適用されていると考えられるのである[28]。

このように、メタファーであるとは意識されなくてもメタファー的な発想が認められる表現が数多くある。菅野（1985）は前者の二つを「隠喩であることの自覚があらわに伴うもの」として「明示的隠喩」と呼び、後者を「隠喩であることの自覚が話し手同士に表立って伴っていない」として「黙示的隠喩」と呼ぶ。「体言述定型」や「対象指示型」について夥しい数の論考が書かれているが、「用言述定型」のメタファーについては、まだ極め尽くされていない分野であり、研究の余地がある。以上の橋本（1989）の論述に従って、本研究では「用言述定型」のメタファーも「X は Y だ」を基本とするメタファーの形式であると考えて以降の論を進める。

2.3　メタファーの同定

メタファーを研究対象とするためには、まずメタファーである表現とメタファーでない表現とを区別する必要がある。メタファーの同定とは、ある表現がメタファーであるのかではないのかを判断する基準のことである。例えば、(12)の各文について、a は明らかにメタファー、b はかなり使い古されてはいるが、メタファーと呼ばれるであろう。c はコンテクストによってはメタファーでもありうる（彼が大人である場合などはメタファーである）。d はメタファーではない。

（12）a. 彼は法律家の卵である司法修習生だ。

b. 男は狼だ。

c. 彼は子供だ。

d. ペンギンは鳥だ。

[28] 樋口(1995)は、「用言述定型」のメタファーを動作主の隠れた「不在の隠喩」と呼ぶ。例えば、「山が笑う」という隠喩について、本来は人間の行為である「笑う」という語に接すると、人間的な動作主が暗黙のうちに想定され、山の様子が「笑う」に見立てられるときには「山」がその本来的な動作主「X」に類比されているとする。「山」が背後の「X」に対応する点で、「体言述定型」の潜在する隠喩であると考えられると述べる。

(12)の例文に見られたように、ある表現がメタファーであるかではないかの判断について、形式的な基準はない。

これまでの研究では、ある表現をメタファーとして認めるかどうかは研究者によって様々であったため、メタファーを量的に研究することは困難であった。例えば、もともとはメタファーであったものの、慣習化が進みもはや一般の話者にはメタファーだと捉えられなくなった、いわゆる死喩（dead metaphor）をメタファーとして認めるかどうかは、研究者や研究目的によって異なってくる。

メタファーを同定するための明確な基準は示されていないが、一つの基準となるのは「X は Y だ」という表現について、Y が X とは別の対象の表現としても使用され、X と Y とが異なる分類に属していること、すなわち、X と Y の間に「不一致[29]」があることである。(12)の場合、a の「彼」と「卵」、b の「男」と「狼」、c の「彼（大人）」と「子供」との間には分類上の「不一致」があるのに対して、d では「ペンギン」は「鳥」の事例であって、「不一致」はない。ハンデルマン(1987: 56)が指摘しているように、「隠喩的心理の中心的特性は、それが＜……である＞の内部に＜……でない＞を保持しており」、隠喩は「いかなる所与の概念の中にも同一性と差異性の間の抗争と緊張を提示する」（同上： 57)と言えよう。

本研究では前述の趣旨によって、この「不一致」の存在、すなわち「X は Y ではない」が潜在していることがメタファーを同定する基準のひとつとする。

2.4　本研究の実例分析に関わる先行研究

本研究の第 4 章～第 8 章において、各概念メタファーにおける言語表現を用いた具体的事例を検討するため、ここでは、実例分析に関わる重要な先行研究について各章のテーマに従って述べる。

第 4 章では、人間にまつわる漢語語彙がメタファーに基づき多様な意味に拡張された事例研究を行う。従来、日本語における身体部位を表す語彙の比喩的拡張に対する研究は多くなされたが、主に慣用句を対象としており、一般的な辞書の意味分類で分析を行っていた。堀川(2006)は身体部位名を含んだ慣用句の意味と語の原義はどう関わっているのかについて分析を行った。研究方法と

[29] 瀬戸（1995a:28）は、このような不一致を「言語学的には選択制限の違反」とされている。

して量的統計をした。有薗（2008）などは、「慣用的連結句」を構成する身体部位語彙の意味拡張についての分析を行った結果、慣用的連結句を構成する身体部位語彙の意味は、単に位置や形状が類似した全く別の物体を表すのではなく、メトニミーなどによって、＜行為（に関わる要素）＞、＜心的要素＞、＜人＞の意味に拡張していると指摘している。方（2011）は、認知言語学の視点から、特にメタファーとメトニミーのプロセスに着目して、日本語と中国語における「首」、「鼻」とその慣用句の意味拡張の異同を明らかにするとともに、当該慣用句の発生のメカニズムも詳述することを目的にした。陳（2012）は、「手」が本来の意味を超えて複数の意味へと拡張するプロセスに着目して中国語と対照させながら、日本語における「手」に関する比喩表現を考察した。
一方、松本（2000)は、「釘の頭」、「船尾」、「魚の目」のように、日本語における身体部位語彙を用いて物体部分を表わす比喩表現について考察している。彼は、物体部分語彙以外への拡張のパターンと比較することにより、比喩的拡張における意味的制約について分析を行った。

第5章では、「物質の状態変化」を表す表現が、メタファーの理論に基づき、新たな意味に拡張するケースについて考察する。「物質の状態変化」を表す語彙に焦点を当てた先行研究は現時点ではまだ少ないとはいえ、モト領域を液体の「水」に固定した「水」のメタファーについて論じた先行研究は多く見られる。「水」をモト領域としたメタファーのサキ領域として、これまでに、「感情」、「考え」(Nomura, 1996）、「音声」、「言葉」（野村,2002）、「金」、「群集」（鍋島 2003、2011）、「音声」、「感情」、「言語」（大石,2006)が挙げられている。野村(2002)の「液体」としての言葉では、水が多種多様な言葉のメタファーとして用いられていることを論じている。「言葉は考えや感情を内に含み、それらを相手に運ぶことによって移動が完成する」という「導管メタファー」の考え方を発展し論じているが、つまり言葉の中には感情が含まれているということを示唆していると考えられる。大石(2006)は、コーパスから作成されたデータに基づいて、「水」のメタファーを分析した。その結果、「水」の存在様態の違いに対応して、複数の異なる認知様式が存在し、サキ領域によって利用される様式が異なることを明らかにした。中には、「音声」や「笑い」、「感情」のように、複数の認知様式に基づいて「液体」として捉えられる領域もあり、特

に「言語」は、多くの「液体」のメタファーを利用している。これは、言語が情報として社会に流通するという側面、身体の中から発生するという側面、口から外部に放出されるという側面、群集の中から発生し、活発にやり取りされるという側面など、複数の性質をあわせ持った存在であるからであると指摘される。また、鍋島(2003、2011)は、≪感情は水である≫、≪言葉は水である≫、≪金銭は水である≫メタファーを取り上げ、「感情と水の間に共起関係があり、このメタファーの基盤は、感情の起伏と表出する体液の増減の相関である」、「金銭の場合、量的であり、複数的かつ連続体的な特質を有している」としている。

第 6 章では、「住居」の主構造を構成する「土台」、「壁」、「大黒柱」、副構造のうちの「天井」、「敷居」、「玄関」といった表現が、メタファーの理論に基づき、新たな意味に拡張される場合を主な考察対象とする。Lakoff and Johnson（1980）は、The argument is *shaky*（その議論はぐらついている）、We need to *construct* a *strong* argument for that（それには強靭な議論を組み立てる必要がある）といったふうに、我々は概念のレベルにおいてあたかも「議論」を「建築物」のようなものとすることがあるとされている。山梨(1988)によれば、議論や理論に関係した比喩的表現として一般的に使われる、家・建物の部分の表現と、そうでない表現があるとのことである。この関係の比喩的表現として使われる部分は、「土台」など建物の基礎となる部分と、「枠」、「骨組」、「柱」のような構造的な側面であるということである。山田(1989)では、家の輪郭を形成する部分「窓」、「戸」、「壁」、「屋根」に関するメタファー表現を、日英語を対照しながら考察した結果、これらのメタファー表現は、日英両語において、理論の構築、議論の進行という概念を形成するのみならず、理解の手がかり、理論の構築を妨げるものというように、様々な概念を構成するのに貢献しているということが分かった。瀬戸(1995a)では、「人生の設計」、「基礎勉強」、「研究が壁にぶつかった」といった用例を挙げ、「建築」という用語およびその関連語が理論、思考、思想、意見という知の領域を中心に広く浸透していると指摘する[30]。鍋島(2011)は、「円滑な人間関係を構築するのが得意」、「人間関係がぎすぎす」、「恋愛関係が崩壊した原因はどちらにある」のような例を挙げ、日本語に

[30] 詳細についてはは瀬戸（1995a：137-141）を参照。

おいて、関係が共同で建物を作るようなイメージで捉えられる表現が頻出すると指摘する。小野寺（2011）は、「今度こそ未来志向の確固とした日韓関係を築くにはどうすべきか」、「今の両国関係…日ロ行動計画を基礎に構築されている」のような例を挙げ、「国際関係」と「建造物」と類似性があると指摘している。これらの先行研究に見られるように、本来は住居を表す表現が、メタファーの理論に基づき、議論や理論といった知の領域、人間関係や国際関係など他の分野に意味が拡張されるということが分かった。

第 7 章では、サキ領域を固定したメタファーの研究事例として、ある目的を実現するためにとられる「手段・方法」という抽象概念がどのように意味づけされ、認知されているかを考察した。Lakoff, Espenson, and Schwartz（1991）は英語における数多くあるメタファー表現群の一例として部分的考察をしており、「手段」を「経路」で表すタイプの実例は、前置詞 through、名詞 way、route、path だけ、「手段」を「道具」で表すタイプの実例は key のみであると述べる。Kövecses (2002)は、本来空間移動を表す名詞 road、route、path、avenue がそれぞれ抽象的手段を表すと指摘する。メタファー表現の部分的考察をするにすぎないにもかかわらず、その分析方法として、個々のメタファー表現の背後にあり、メタファー表現を生み出す認識上の基盤とも言うべき「概念メタファー」を用いる点は、確認するに値する。山添（2007）は、英語の辞書 8 冊から用例を抽出し、英語における「手段・方法」を表すメタファー表現を網羅する形で考察した。その結果をまとめると次のようになる。

「手段・方法」を表すメタファー表現は大きく二つのタイプに分類できる。一つは、MEANS ARE PATHS タイプである。このタイプは、ある目的を達成するために取られる「手段・方法」を、目的地に通じる「経路」とする捉え方である。もう一つは、 MEANS ARE TOOLS タイプである。こちらは、ある目的を達成するために取られる「手段・方法」を、ある用途を果たす道具とする捉え方である。

第8章では、「自然現象」の領域に由来する語と「感情」の領域に由来する語がともに表現される慣習的メタファー表現に注目する。感情のメタファーについては、Lakoff (1987)の“anger”に関する研究やKövecses(2000)の一連の事例研究をはじめとして、多くの研究が行われてきている。感情は単なる感覚だ

けで、概念内容が全く含まれていないと普通思われているが、実は感情はとても複雑な概念構造を持っているとLakoffらは指摘している。代表的な研究としては、Lakoff and Johnson (1980)の第4章には、方向性のメタファーとして以下の用例が挙げられる。

a. I'm feeling up.（気分は上々だ）

b. Thinking about her always gives me a lift.（彼女のことを考えると、いつも気持ちが高ぶる）

c. I'm feeling down.（落ち込んでいる）

d. My spirits sank.（気分が沈んだ）

これらの例から、英語では感情を「上下」という位置関係を通して理解していることが分かる。私たちは、嬉しいときには、顔を上げ、飛び上がったりするなど姿勢が上向きになる。それに対して、悲しいときには、顔は下を向き、地面に座り込んだり、うなだれた姿勢になる。≪HAPPY IS UP ; SAD IS DOWN≫（幸せは上であり、不幸せは下である）という捉え方には、このような人間の自然な身体反応が関わっていると言ってよいであろう。

日本語の気象現象と感情のかかわりに関するメタファー表現について、以下の研究が挙げられる。Shinohara and Matsunaka（2003）では日本語におけるメタファーとして≪EMOTION IS EXTERNAL METEOROLOGICAL /NATURAL PHENOMENON THAT SURROUNDS THE SELF≫（感情は気象現象/自己を取り巻く自然現象）を挙げ、基盤として低気圧や太陽光の不足によって気分が落ち込むなど天気の変化は人間の心身に影響を与えることが指摘されている。また、籾山（2006）では「心が晴れない」、「気が晴れる」、「顔が晴れない」などの表現に言及し、＜よい心の状態（になること）＞を晴れ（ること）を通して見る＞という捉え方を示した。これらを基に籾山は、人間はどのような天気が人間（の活動）にとって、好ましいか、好ましくないか経験的に理解し、「天気」に関する表現を用いることによって、「人間の心の状態（の変化）」を明示的に表現していることを指摘した。松浦（2013）は気象現象である天気に関する表現の中で「晴れる」から気象現象と精神の概念間の対応関係を考察した。目標領域の精神において起点領域が持つ制約により「晴れる」のメタファー的意味が実現されるものは以下のような性質を持つと指摘されている。①感情領

域において光が少ないことが身体に及ぼす不安・心配に関する感情。②感情領域において雲・霧が身体に及ぼす「正体がつかめない」、「はっきりしない」、「持続性のある」などの性質を持つ好ましくない感情。③思考領域において雲・霧が身体に及ぼす「はっきりしない」、雲・霧の概念化から生じる「白黒判断できない」などの性質を持つ疑いに関する思考。

大森（2008）は現代イギリス英語約１億語を収録する British National Corpus World Edition から“of　pleasure”や“of sorrow”のような「前置詞 of+感情を表す語」用例を収集し、諸感情に関する下位メタファーを統合する認知モデル≪EMOTION IS A NATURAL PHENOMENON≫（感情は自然現象である）が英語に存在していることが指摘された。人間は共通の身体的経験や生理的反応があるため、日中両言語にも英語と同じような自然現象をモト領域とする感情表現が存在しているであろう。

次章では、本研究で用いるデータの収集と分析方法について論じ、本研究におけるメタファーの使用を量的に概観する。

第 3 章　データの収集と分析方法

本章では、本研究で用いるデータの収集と分析方法について論じる。漢語語彙のメタファー用例を取り出し、『分類語彙表』と《现代汉语分类大词典》の分類項目に従って意味分類したうえで、本研究におけるメタファーの使用を量的に概観する。モト領域となりやすい領域とサキ領域となりやすい領域を挙げてリストを作成する。さらに、特定の領域が特定の領域とペアの形でメタファーを構成するパターンを抽出して、日中両言語における意味拡張の傾向及び体系性を分析する。

3.1　データの収集と分析の手順

本研究では主に『2010 年度朝日新聞―社説[31]』、《2010 年度人民日報―人民論壇[32]》に基づいて用例を収集し提示する。新聞の社説を使う理由は、社説の文章は、主張が明瞭で、会話や引用文が少ないため、全文を一元的に処理しやすいこと、分量が適当であること、扱われている素材が多岐に渡ることなどにある。それに、新聞に用いられる表現はすでに多くの人々に受け入れられて、比較的正しい表現である。また、新聞の内容も時代の動きと深く結びついて、新語あるいは新しい意味をもより的確に伝えているからである。以下に、作業手順を示す。

STEP1：調査対象となる漢語語彙を抽出して[33]登録する

STEP2：抽出した漢語を意味分類する[34]

STEP3：カテゴリーごとの対応関係を調査する

STEP1 では、第 2 章のメタファーの同定の基準に従って、両言語における漢

[31]『朝日新聞』社説は、一日分が素材の異なる 2 文章で構成されている。2010 年度は合計 682 文章であり、全体で 75 万字を超えている。

[32]《人民日報》人民論壇は、一日分が 1 文章で構成されている。それに、休日や祝日などにはほかのコラムに取り換えられている。2010 年度は合計 96 文章であり、全体で 22 万字を超えている。

[33] 本研究では統計処理による頻度調査を目的としておらず、また検索の主眼は直観に照らして典型的な用例を集めることにある。最初はざっと読み、繰り返し読むうちに、気になる単語を抽出した。それに、抽出したデータの妥当性と信頼性を高めるために、本研究が用いる『朝日新聞』の社説を、一年間に渡って継続的に日本語を専攻する大学四年生の「新聞閲読」という授業に取り入れ、対象語彙の抽出にあたっては、学生たちの意見にも耳を傾けた。中国語における語彙の抽出は主に筆者が行ったが、判断に迷うときには他の中国人教師に協力を求めた。

[34] 日本語は付録１、中国語は付録２を参照する。

語語彙のメタファー用例を取り出す。STEP2 では、得られたすべての漢語の意味分類を行ったうえで、本研究におけるメタファーの使用を量的に概観する。基本的には、日本語は、国立国語研究所の『分類語彙表』(2004)[35]、中国語は漢語大詞典出版社の《现代汉语分类词典》(2007)[36]の分類項目に従って意味分類を行う。さらに、日本語の下位分類項目と辞書[37]の記載を参照し、中国語の17 分類を日本語と合わせるように 5 分類とする作業を行う。ただし、参照資料に抽出した中国語の漢語が含まれていない場合には、辞書[38]などで基本原義を調べ、筆者の判断で意味分類を行う。

最後に、STEP3 で、まずは、モト領域となりやすい領域を挙げてリストを作成する。それから、特定の領域が特定の領域とペアの形でメタファーを構成するパターンを抽出して、日中両言語における意味拡張の傾向及び体系性を分析する。さらに、カテゴリーごとの対応関係も調査する。同じ対応関係が多くあれば、それだけその領域間の結びつきが強く、抽象的な上位レベルの概念メタファーが成立している可能性が高いと考える。

3.2　本研究におけるメタファーの使用概観

3.2.1　両言語における意味分類の分布傾向

参照資料として収集したモト領域となりやすい漢語用例は『分類語彙表』の意味分類によって五つに分類できる。その結果は以下の通りである。

---

[35] 日本語の語彙研究の基礎的な資料と呼ばれている『分類語彙表』は収録総語数 9 万 6 千語、異なり語数は約 8 万語となる。選ばれた語彙は 1、体の類（名詞の仲間）2、用の類（動詞の仲間）3、相の類（形容詞の仲間）4、その他に分けられ、それぞれが 1、抽象的関係　2、人間活動の主体　3、人間活動-精神および行為　4、生産物および用具　5、自然物および自然現象といったように分類されている。それぞれの項目はさらに細かく下位分類される。例えば、体の類、人間活動の主体の項目は自他、男女、職、社会、機関などのように分類され、社会の項には天下、世の中、世間、世俗などの語が取り上げられるといった具合である。詳細については付録 3 を参照する。

[36] 《现代汉语分类大词典》(2007) は、近年誕生した語を含む、現代中国語でよく使用される単語・連語・成語・熟語など約 49000 語を、語の意味合い・概念により 17 大類・143 小類・3717 詞群に分類して収録されている。詳細については付録 4 を参照する。なお、本研究のデータを整理している途中、商务印書館が《现代汉语分类词典》(2013) が出版された。《现代汉语分类词典》(2013)は、現代中国語の語料庫に基づき、比較的使用頻度の高い 83,146 の中国語単語を語義により、一級類 9、二級類 62、三級類 514、四級類 2,069、五級類 12,623 に分類しており、上の層の単語は社会生活や中国語語彙の概貌を反映し、下の層の同義詞・近義詞・反義詞は中国語の「同義相聚、反義相隣」の関係を反映する極めてユニークな分類詞典である。『分類語彙表』に近い分類なので、本研究では、漢語の意味を分類する時には少々参照した。

[37] 日本語の部分は『日本国語大辞典』、『学研国語大辞典』、『例解新国語辞典』、『デジタル大辞泉』、『角川類語新辞典』より参照する。

[38] 中国語の部分は『大漢和辞典』、『漢字源』、『講談社中日辞典』、《新汉日辞典》、《辞海》より参照する。

表 3.1　漢語語彙の意味分類の分布傾向

項目 言語	抽象的関係	人間活動の主体	人間活動―精神及び行為	生産物及び用具	自然物及び自然現象	合計
日本語	20	3	36	79	135	273
中国語	6	5	100[39]	44	144[40]	299

日本語と中国語とでは、それぞれの意味の分布傾向がどうなっているであろうか。まず日本語の部分を見てみよう。

参照資料として収集した漢語語彙用例は合計 273 語である。字数別を調べてみると、一字の漢語は 44 語、二字漢語は 180 語、三字及び三字以上の複合語は 49 語である。品詞の分類から見ると、「用言述定型」に属する動詞もある程度存在しているにもかかわらず、名詞のほうが圧倒的に多い。

『分類語彙表』の意味分類によって 5 分類された各用例数の比率によると、「人間活動の主体」が 3 語、「抽象的関係」が 20 語、「人間活動－精神及び行為」が 36 語に止まっているのに比べ、「生産物及び用具」が 79 語、「自然物及び自然現象[41]」が 135 語である。図 3.1 の割合からも一目瞭然であるが、「自然物及び自然現象」の用例数がほぼ全体の半数を占めている。

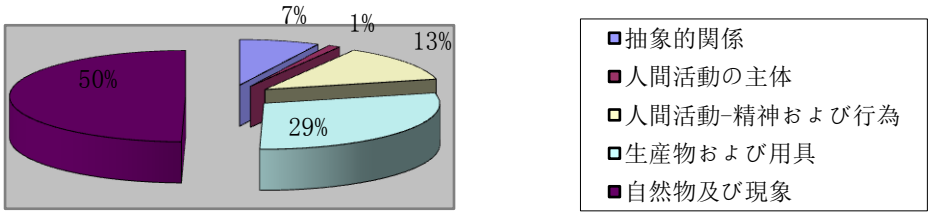

図 3.1　日本語の用例比率

[39] 付録 4 の F、G、H、I、J、K、L、M、N が含まれている。
[40] 付録 4 の A、B、C、P が含まれている。
[41] 中野（1981)は、ある言語の語彙体系を見渡して、特定の分野の語彙が豊富であるとか、別の分野の語彙が貧弱であるとかを決めつけることは、一概にはできない。日本語でも、たとえば「自然を表わす語彙が多いというのが定評」と言われるが、これは人々の直感から来る評判という意味以上のものではない。実際に、旧版『分類語彙表』によって分野ごとの語彙量の多寡を比べた結果によれば、名詞（体の類）のうち「人間活動―精神および行為」に属するものが 27.0%、「抽象的関係」が 18.3%、「自然物および自然現象」が 10.0%などとなっていて、この限りでは「自然」よりも「精神」や「行為」などを表す語彙のほうが多いことになる。

「自然物及び自然現象」の項目はさらに細かく下位分類されるが、使用頻度が極めて高いのは「身体」、「生命」、「物質」である。次いでは「生物[42]」、「天地」、「自然」である。各用例数の比率は以下のとおりである。

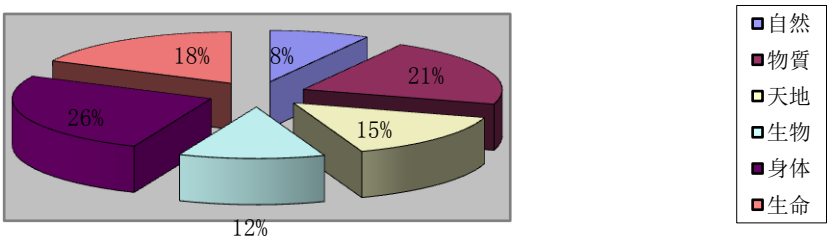

図 3.2「自然物及び自然現象」 における用例比率

二番目は「生産物および用具」の項目である。用例数が全部で 79 語と、ほぼ全体の 29%を占めている。「物品」、「資材」、「衣料」、「食料」、「道具」など細かく多項目に分類されているが、「住居」が最も多くを占めている。27 語と、全体の約 3 分の 1 を占めている。「住居」の次に多いのは「土地利用」14 語と「道具」15 語である。

次は「人間活動-精神および行為」の項目である。全部で 36 語と、ほぼ全体の 13%を占めている。そのうち、頻出回数が目立って多かったのが人間の行為を表すといった漢語語彙である。人間の精神活動と深く関わる心や芸術や言語は使用回数が限られており、一度だけ使われていた語彙も多く見受けられた。

5 分類の中で、用例数がわりと少ないのは「抽象的関係」と「人間活動の主体」の項目である。「抽象的関係」を表す項目は 20 語抽出されたことは、「メタファーに関する概念、モト領域は具体的で経験可能なものからなっている」と一見矛盾しているようにも見えるが、実は矛盾はない。なぜなら、『分類語彙表』で言う「抽象的な語」とは、基本義（第一義）のほうは元々具体的な概念を表す用語から出ているものが多いからである。例えば、分類枠の下位にある「1. 12. 存在」に属する「空白」という語を取り上げ、意味項目を調べてみ

[42] 普通は「動物」や「植物」などの一連の存在のことを総称して「生物」または「生き物」と呼ぶため、ここでは、「動物」や「植物」を「生物」のカテゴリーにまとめることとする。

たところ、第一義[43]は「紙面などの、書いてあるべき部分に何も書いてなくて白い所」と記述されている。用例「歴史の空白を埋める」、「記憶の空白な時期」を読めば分かるように、第二義の「あるべき部分が欠けていること、継続するものが途切れていること。また、その部分。ブランク」は、我々の認知能力及び物事の捉え方を基盤として、第一義からのメタファーによって物理的空間領域から時間的空間領域、認識空間領域へと拡張し、確立している。「1.13. 様相」に属する「汚点」も同じく、第一義はもともと「よごれた箇所、よごれ、しみ」と記述されているが、用例「水俣病の実相を明らかにしなければ、歴史に汚点を残すことにもなる」、「安保理で戦争の大義を主張した当時のパウエル国務長官はその後、自らの人生の汚点と振り返った」を見て分かることは、メタファーによって物理的空間領域から「好ましくない点、不名誉な点」と拡張されることが分かった。『分類語彙表』において、「空白」や「汚点」といった語彙が「抽象的関係」に配属される理由は、その語彙の第一義より拡張された意味が多用されているのではないかと考えられる。

次は中国語の部分を見てみよう。

参照資料として収集した中国語の漢語語彙用例は合計 299 語である。字数別を調べてみると、二字漢語は 236 語、三字及び三字以上の複合語は 63 語である。日本語の部分と異なり、一字の漢語は殆ど現われなかった。

『分類語彙表』の意味分類によって 5 分類された各用例数の比率によると、「人間活動の主体」が 5 語、「抽象的関係」が 6 語、「生産物及び用具」が 44 語に止まっているのに比べ、「人間活動－精神及び行為」が 100 語、「自然物及び自然現象」が 144 語である。日本語の用例比率と比較して、順序がやや異なっているが、図 3.3 の割合を見て分かるように、用例数が最も多いのはやはり「自然物及び自然現象」であり、ほぼ全体の半数を占めている。

[43] 辞書によって、意味立項の配列は多少違っているが、「紙面などの、書いてあるべき部分に何も書いてなくて白い所」という語義を第一義として挙げている点では一致している。

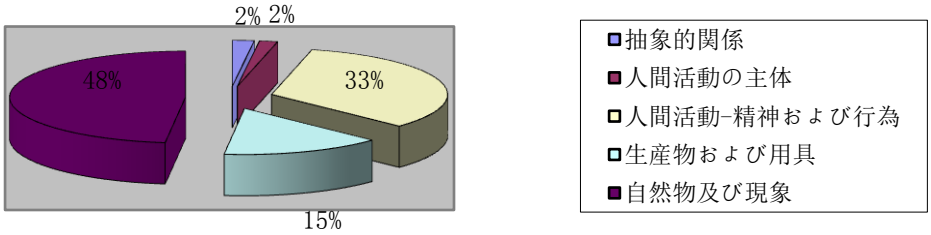

図 3.3　中国語の用例比率

「自然物及び自然現象」の項目はさらに細かく下位分類されるが、使用頻度が極めて高いのは“人体・医药卫生（身体及び生命にかかわる医薬や衛生）”である。次いでは“物质（物質）”、“宇宙・地球（天地や自然が含まれる）”、“生物（動物や植物が含まれる）”である。各用例数の比率は以下のとおりである。

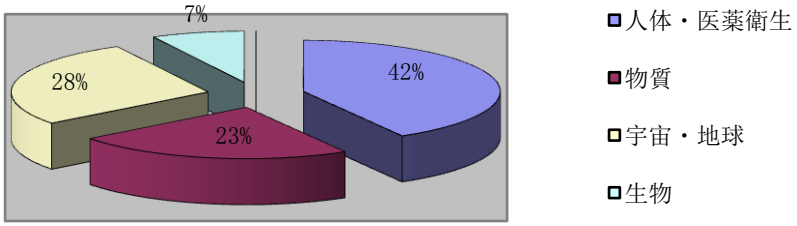

図 3.4「自然物及び自然現象」 における用例比率

二番目は「人間活動-精神および行為」の項目である。用例数が全部で 100 語と、全体のほぼ 33%を占めている。「農業」、「工業」、「交通」、「経済」、「政治」、「教育」など細かく多項目に分類されているが、そのうち、「教育」が最も多くを占めている。29 語と、全体の約 3 分の 1 を占めている。「教育」の次に比較的多いのは「農業」24 語と「交通」18 語である。

次は「生産物および用具」の項目である。用例数が全部で 44 語と、ほぼ全体の 15%を占めている。「資材」、「衣料」、「食料」、「道具」などいくつかの項目に分類されているが、「住居」が最も多くを占めている。18 語と、全体の約 41%を占めている。

日本語と同じく、5 分類の中で、用例数がわりと少ないのは「抽象的関係」と「人間活動の主体」の項目である。それぞれ 6 語と 5 語に止まっている。

3.2.2　両言語における語構成上の特色

日本語と中国語は多くの漢字[44]や単語を共有しており、その上、表現の言語構造も類似しているものが数多く存在しているにもかかわらず、メタファーによる意味の拡張は必ずしも一致しているとは限らない。第 1 章で述べたように、漢語語彙におけるメタファーには、「開花」のような日中両言語に表記もメタファーによる意味の拡張も共有するものもあれば、「水面下」、「歯車」、“渠道”、“健康”といったような表記は対応しているが、メタファーによる意味の拡張は日本語か中国語の一方にしか見られないものもある。ここでは、日中両言語間で語構成における表記とメタファーによる意味の拡張が対応するかどうかという特徴により、以下の表 3.2 のように分類できる。

表 3.2　語構成上の対応/非対応

種類	言語	代表例	用例数（%）
(1)表記上も意味上も対応	**日本語**	**試金石、台頭**	**156（57.1%[45]）**
	中国語	试金石、抬头	80（26.8%）
(2)意味上は対応、表記上は非対応	**日本語**	**命綱、盾**	**40（14.7%）**
	中国語	安全绳、挡箭牌	46（15.4%）
(3)表記上は対応、意味上は非対応	**日本語**	**看板、壁**	**33（12.1%）**
	中国語	看板、墙、	30（10%）
(4)表記上も意味上も非対応（日本語か中国語の一方にしか見られない）	**日本語**	**土俵、続投**	**44（16.2%）**
	中国語	下海、擦边球	143（47.8%）

まず、日本語の部分を見てみよう。表 3.2 の用例数から見れば分かるように、抽出された日本語 273 語のうち、(1)表記上も意味上も中国語と対応している

[44] 繁体字や簡体字のような差異や、形容動詞の語尾などの漢字ではない要因は考慮しない。
[45] （%）は抽出された漢語語彙、日本語 273 語、中国語 299 語から算出された。

語は 156 語にものぼり、中国人日本語学習者の立場から考えれば、このようなメタファー表現は非常に理解されやすいものであろう。それに、(2)意味上は対応、表記上は非対応している語のほうも、相互の訳語さえ分かれば、それほど難しくないであろう。一方、表記上は対応しているが、メタファーによる意味の拡張が対応していない語彙及び日本語にしか見られない漢語語彙は中国人日本語学習者にとって習得するのが比較的に難しく、母語の語形や意味と比較したうえで、慎重に判断したり、教師による適切な指導を行ったりする必要があると思われる。

次に、中国語の部分を見てみよう。日本語と中国語は、非常に洗練された「漢字」という文字体系を使っている点で共通しているが、実際に使われている文字の数は、日本語より中国語のほうが圧倒的に多いため、(4)表記上も意味上も非対応である（中国語の一方にしか見られない）語が 143 語にも上り、約半分を占めている。日本語を母語とする中国語学習者にとっては、理解が一段と難しくなるであろう[46]。

3.2.3　両言語における意味拡張の傾向

メタファーの場合は、派生の方向性に関して一方向性があることが知られているように、モト領域とサキ領域の対応関係には方向性がある。モト領域として選ばれているのはより具体的で、身体的経験とより密接に結びついた概念領域であるのに対して、サキ領域として選ばれているのは通常抽象的で、使用者にとって漠然としてつかみ所のない領域であるとされる（Lakoff and Johnson1980, Lakoff 1993, Kövecses2002）。しかしながら、抽象的概念なのか具体的概念なのかは相対的なものであろう。例えば、「人間」が抽象的概念なのか具体的概念なのかと問われたら、多くの人は「見方に左右される」と答えるであろうと思う。なぜなら、「私」一個人というと、とても具体的な存在であるが、それを少し抽象化すると、「人間」という概念ができるであろう。

下記の用例を見れば分かるように、「人間」をモト領域としたメタファーが成り立つ一方、「人間」をサキ領域としたメタファーも成り立っていると言え

[46] 本研究は中国人日本語学習者に対する日本語教育の立場から行なっているため、日本語を母語とする中国語学習者の立場から分析しないこととする。

るであろう[47]。

(1a)日本でも自治体や NGO、企業、教育機関が連携し、難民の暮らしを息長く見守り、一人ひとりの能力を**開花**させる「人づくり」の視点での支援態勢を築くべきだ。(9 月 24 日)

(1b) 这个在贫寒中长大的孩子，这个倔强的东北姑娘，终于有**开花结果**的那一天了(貧しさの中で育ったこの強情な東北娘の努力は見事に花が咲き、実を結んだ)。(5 月 19 日)

⇒≪人間は植物である≫

(2a)私はこの会社の**歯車**の一つにすぎない。(BCCWJ)

(2b) 他说雇员们仍然是工业化时代的**螺丝钉**, 说他们应该干重复性的工作（従業員たちが依然として工業化時代のネジであり、繰り返し性の仕事をやるべきだと彼は言った)。(9 月 3 日)

⇒≪人間は機械である≫

(3a) 消費者行政の司令塔役と期待され、**産声**を上げて半年。だが、何をしているのだろう、と思ってしまうほど消費者庁の影が薄い。(3 月 15 日)

(3b) 新政府**诞生**后,相继提出促进部族和解等一系列施政纲领（新政府が生まれて、相次いで部族間の和解など一連の施政綱領が公開された)。(CCL)

⇒≪行政機関は人間である≫

(4a)今年の場合、足踏み状態の期間はこれまでの想定よりも長くなっているが、昨年に比べると米国経済の**体力**はアップしており、様々な逆風のなかで歯を食いしばれるはずだ。(BCCWJ)

(4b) 当前日本经济比 7 月份“**原地踏步**阶段”又略有后退（今の日本経済は 7 月の「足踏み段階」よりはやや後退しつつある)。(10 月 18 日)

⇒≪経済は人間である≫

概念メタファー≪人間は植物である≫、≪人間は機械である≫、≪行政機関は人間である≫、≪経済は人間である≫に反映されているように、「人間」という概念が具体的であるか、 抽象的であるかははっきり分けることができな

[47] 渡邉（2010）は人間をサキ領域とするメタファー表現として以下の四つが挙げられる。①息子は大事な一粒種ですから、大切に育てた⇒≪人間は植物である≫。②古巣に戻って、昔の仲間たちと再会した。⇒≪人間は鳥である≫。③今、部長は低気圧だから、その話は後にした方がいい⇒≪人間は天気である≫。④日本企業は従順なロボットを求めている⇒≪人間は機械である≫ 。

いと思われる。

なお、今回抽出されたデータに見られるように、モト領域となりやすい領域とサキ領域になりやすい領域を順番通りに挙げていると、以下のとおりである。

モト領域の例としては、自然物及び自然現象、人間の身体、健康と病気といった生命にかかわる概念、生産物及び用具が目立って多かった。このほか、空間や方向、農業などにかかわる言葉もここに挙げていいであろう。サキ領域の例としては、感情表現、人間関係、道徳と思考、政治と経済、社会と国家、出来事と行為、方法と手段などがある。それに、特定の領域が特定の領域とペアの形で概念メタファーを構成しているケースも少なくない。《空間は時間である[48]》、《身体部位は容器である》、《感情は自然現象である》、《目標のある（長期）活動は経路を移動することである》、《住居は容器である》、《良いことは上であり、悪いことは下である》などが挙げられる。

ただし、ここで重要なことは、日本語か中国語の一方にしか見られない語に、それぞれ独特の文化や社会、宗教や信仰などが反映されている言葉の割合が突出して高いことである。例えば、日本独特の「特殊な文化」である大相撲は日本の国技として知られているだけでなく、相撲に関連する語彙もメタファーに基づき、様々な分野に新たな意味に拡張する場合がある[49]。

(5)来るべき国会を、与野党がともに日本の将来を真剣に探る機会にしなければいけない。そのための土俵を整える重い責任を、菅首相には自覚してもらいたい。(12 月 28 日)

(6)発効のめどがたたないままだと、オバマ大統領が打ち出した「核のない世界」への構想が根本から揺らぎかねなかった。土俵際で踏みとどまって、核ゼロに向かう構想を崩壊させなかったことの意義は大きい。(12 月 24 日)

両力士が土俵に上ってから競技を終えて土俵を下りるまで、相撲に欠かせないのが土俵である。＜勝負などが行われる場＞という特徴を受け継ぎ、＜与野党間の議論・交渉などが行われる場＞を指している。

---

[48]「鳩山氏は早くからクリーンな政治を掲げた政治家だが、もともとの出発点は旧田中派である」「１５年近い長期政権を倒して自らが権力の頂点に立った」のように、もともと空間を指示対象とする言語表現が時間を指示対象として用いられる現象が、数多く存在している。以下の各章において、ペアの形で構成されているメタファー表現を用いた具体的事例を検討していくこととする。

[49] 籾山洋介(2010)は、本来は「相撲」の「決まり手」(「うっちゃり」、「上手投げ」など)および「勝ち負け」(「軍配が上がる」、「金星を挙げる」など)を表す表現が、「メタファー」、「シネクドキー」、「メトニミー」という比喩に基づき、新たな意味に拡張する場合があると指摘されている。

また、日本の国民的スポーツと言えば、いうまでもなく野球[50]であろう。「私は何事にも直球勝負です」、「研究に全力投球で取り組む」などの表現に見られるように、日本の国民性になじむ野球の関連語彙は様々な分野に意味が拡張されている。メタファーによる意味の拡張において、頻出回数が目立って多かったのが「続投」という漢語で、その頻出回数は 18 回となっていると今回の調査で分かってきた。例えば、例文（7）と（8）は＜投手が交代せずに引き続いて投球すること＞という特徴を受け継ぎ、＜交代せずに役目や職を続けること＞を指している。

(7)小沢一郎前幹事長を退けることができたのは、大方の民意が菅首相**続投**を支持したからである。(9 月 17 日)

(8) **続投**を決めたとはいえ、ギラード政権の今後の政権運営は不安定にならざるをえまい。(9 月 21 日)

日本では、野球はスポーツのトップに立っている。しかし、体育大国と呼ばれる中国では、野球みたいな国民的なスポーツと言えば、ピンポンだと思われるであろう。ピンポンの用語もたびたびメタファーに基づき、他の分野に意味が拡張される場合がある。そのうち、卓球の競技で厄介なものとして扱われている卓球台のエッジに触れて落ちたボールの“擦边球”（エッジボール）で「法律や規定にぎりぎり抵触しない際どい行為」に喩える使用が最も多く見られる。

(9)于是，打“**擦边球**”成了惯例，睁只眼闭只眼的“木匠眼”成了常态。结果，各种事故不断，各类“学费”频交（そこで、「エッジボール」をするのが恒例となって、片目を瞑って眺める「大工の目」が常態となっている。結局、各種の事故が絶えず、さまざまな「授業料」を納める羽目になった）。（7 月 22 日）

また、日中両国の宗教や信仰には、多くの違いが存在している。人に似た想像上の怪物とされる「鬼」と言えば、中国[51]では幽霊や死んだ人のことを思い出され、残酷で非情な人を喩えるに使うが、日本人にとっての「鬼」は決して不気味な意味合いだけではない。

(10)「土俵の**鬼**」初代若乃花や 32 回の史上最多優勝を誇る大鵬ら、大横綱が輩出した名門である。（2 月 2 日）

---

[50] 籾山(2007)は、スポーツに由来する日常の言葉として「野球」を扱っている。

[51] 中国語には“酒鬼”、“色鬼”というスラングがある。“酒鬼”の意味は「アルコール中毒」や「飲んだくれ」という意味であり、“色鬼” の意味は「色情狂」である。いずれもののしりの言葉として使われている。

例文(9)を読めば分かるように、日本では何事か一つのことに執念を持って厳しい研鑽をしている人に対して、「仕事の鬼」、「研究の鬼」、「スポーツの鬼」などと良い意味での「鬼」という言葉が用いられている。

それに、メタファーに転換することばを通して、その社会の変化や動向などを見ることもできる。“下海”の用例を見てみよう。

(11)第二次转身，让深圳再次“折得东风第一枝”。……这里成了亿万中国人的“下海之地”、“追梦之地”（二回目のチャンスは、深圳市に最高の選択肢を与えた。ここが数多くの中国人の「脱サラの地」、「夢を追う地」となった）。（9月7日）

“下海”は 80 年代から生まれた中国語に特有の言葉で、この二文字から海水浴を連想する人がいるかもしれないが、実はそうではない。ここで言う“海”はビジネス界という意味である。「脱サラ」と訳せるケースもあり、元の仕事を離れてビジネス界に身を投じること、という説明も成り立つが、厳密に言えば、国家公務員や事業体、国有の企業などを辞め「自由の身」となって私企業に勤めるか、個人で起業することを指している。中国語には「公的な状態が上、私的な状態が下[52]」というメタファーが見られる。国から与えられた仕事であるから、公的な状態で「上」のメタファーに当てはまる。国家公務員や国有の企業に勤めるサラリーマンなど元々政府の部門で公的な仕事を持っている場合、毎日仕事をすることを“上班”と言う。一方、国家公務員が職を辞して、自分の会社を設立し事業を展開することは個人のことであるから、仕事がいくら仕事らしく、金をもうけても私的な状態で、「下」のメタファーに当たる。それに、陸に比べると、海のイメージは広く深いことで、波に浮いたりさらわれたりして、命の安全なところではない。金持ちになる前に存在する危険と難しさをメタファーとして表現するのである。経験的類似性から写像されたメタファー表現であると言えるであろう。

[52] 中国語にはこのような方向性のメタファー表現がたくさん見られる。例えば、“上班（仕事中）”—“下班（仕事が終わる）”、“上課（授業中）”—“下課（授業が終わる）”、“上台（政権を握る）”—“下台（政権を失う）”などが挙げられる。谷口（2003）は、方向性のメタファーの具現化に文化差が見られる点について説明する際には、日本語特有の例として「おのぼりさん」、「上京する」、「のぼり電車・下り電車」と例を挙げ、首都（都）を上、それ以外の地方を下とするという概念化には、≪HAVING CONTROL IS UP≫（コントロールは上である）、≪HIGH STATUS IS UP≫（高い地位は上である）と 2 つの方向性のメタファーが根底にあると指摘される。言い換えれば、国をつかさどる機能の所在地であるという点で首都は「上」であり、また、国内の数々の都市を代表するという特別の地位にあるという意味で首都が「上」となると言える。日本語と同様、中国語にも似たようなメタファー表現がある。“上朝（参朝する）”、“上街（町へ行く）”、“下乡（田舎へ行く）”といった例が挙げられる。

以下の各章において、各概念メタファーにおける言語表現を用いた具体的事例を検討していくこととする。

第 4 章
モト領域を固定した事例研究(1)―人間にまつわる漢語語彙[53]

漢語語彙のメタファー用例を取り出し、『分類語彙表』、《现代汉语分类大词典》の分類項目に従って意味分類して、「自然物および自然現象」の下位項目に分けられている漢語語彙の頻出語数が最も多いことが分かる(付録 1、2 参照)。「自然」、「物質」、「天地」、「生物」、「身体」、「生命」と細かく下位分類されているが、量的データの分析では、人間にまつわる「身体」と「生命」に分類されている語が最も多く、日本語のほうでは、合わせて 59 語と、「自然物及び自然現象」の項目の約全体の 44%を占めており、中国語のほうでは、合わせて 60 語と、約全体の 42%を占めている。本章では、モト領域を固定した事例の研究の一つとして、まず、『分類語彙表』の分類項目のうち、頻出語数が最も多い項目――「人間にまつわる用語」をモト領域とするメタファー表現の分析を行う。第 1 節では、問題の所在と本章の目的を明示する。第 2 節では、身体部位語彙をモト領域とするメタファーの類型について詳しく考察してみる。第 3 節では、人間の身体経験に基づくメタファーについて述べる。第 4 節では、本章の内容をまとめる。

4.1 問題の所在と本章の目的

我々人間は同じ身体構造を持っているが、両言語の身体部位が持っている比喩的拡張は、言語の構造と言語使用者が身体部位の形状や構造や機能のどこに焦点を置いて捉えるかによって異なっているのだと思われる。これまでの日中両言語における身体部位語彙のメタファー研究の多くは、「顔」、「頭」など身体部位語彙を構成要素に持つ慣用表現であった（籾山，1997)。例えば、「顔に泥を塗る」、「赤字で首が回らない」、「頭から湯気を立てる」等が挙げられる。しかしながら、身体部位語彙や生命に由来するメタファー用例は慣用表現に留まっていないことが考えられる。

（1a）指示を受けた都道府県は、単なる国の手足[54]として市町村への関与を

[53] この章は、李（2014）をもとに加筆・修正をしたものである。
[54] 日本語の「手足」に当たる中国語は“手脚”である。一方、中国語には“手足之情（兄弟みたいに親密)”、“情同手足（兄弟みたいに親密)”という四字熟語がある。

行うのではなく、当該指示が正当なものであると判断したうえで…(BCCWJ)

(1b)有人则在包装和印刷上做手脚把3年的茶叶说成是15年的陈茶（包装と印刷にインチキをやって、3年間寝かせた茶を熟成15年の陳茶と偽った人がいる）。(6月28日)

(2a)この技術に対して、韓国のトップ企業は新聞に関連記事が載ったその月のうちに専務が研究室を訪れ、その場で共同開発を持ちかけてきた。海外企業の腰の軽さを実感したという。(7 月 3 日)

(2b)于是，巴拿马运河区成了“国中之国”，巴拿马领土被拦腰斩断（そこで、パナマ運河区は「国の中の国」になり、パナマ領土を真中から真っ二つに断ち切られる)。（CCL)

(3) 県環境政策課は「佐久平や松本平の晴れの日の多さは全国でも有数で、適地は多い。導入したい会社の背中を押せる仕組みにしたい」と話している。(4 月 19 日)

(4)それゆえ、当面の景気の本格回復はこれまでの経済構造やシステムを改編し、日本経済の足腰を強化することによって達成しなければならない」とはっきり書かれている。(BCCWJ)

(5)今回の発表で予想外のデフレ悪化が示され、不透明感が強まったことは否めない。政府・日銀は景気が二番底に陥らないよう、足元の動向や先行きのシナリオを総点検する必要がある。(8 月 17 日)

(6)这种策略类似于汽车交易商常耍的手腕，推销员先出某个价钱……（このような計略は自動車販売業者のいつもの手口と似ていて、セールスマンが先にある値段を決めて……）（CCL)

(7)税収を上回る 44 兆円もの借金は異常なことだが、日本経済の体力や世界経済の先行きの不確実性を考えれば、一気に緊縮へ舵は切りにくい。(9 月 2 日)

(8)角界ではここ数年、不祥事の連鎖が止まらない。協会は問題が発覚するたび、再発防止と体質改善を誓ってきたはずだが、泥沼はむしろ広がる一方だ。(6 月 1 日)

「手足」、「腰」、「背中」、「足腰」、「足元」、“手脚”、“手腕”等はいずれも身体部位語彙として定着しており、「体力」や「体質改善」も我々人間が自分た

ちの健康のための先行投資と考えられるものである。しかしながら、上述の例文を見れば分かるように、元々は人間の身体や生命にまつわる語彙が団体や組織、経済、手段と様々な分野に意味が拡張されている。具体的な領域から抽象的な領域に写像されているこのようなメタファー表現は、日中両言語にはほかにどれだけ実例が存在し、どのような種類に分類できるか。また、その種類は、それぞれどのような認識に基づき成立している表現なのか。ここでは、人間の身体や生命にまつわる語彙[55]をモト領域とするメタファー表現に焦点を当て、それぞれの意味拡張に実際にどのような認知プロセスがかかわっているかについて考察する。

4.2　身体部位語彙をモト領域とするメタファーの類型及び分析

認知言語学においては、人間一人一人の経験に根ざした身体的な基盤を重視し、環境と人間が相互作用を経ていく中で、思考と行為の基盤が形成されていくと考えている。身体部位は我々人間にとって極めて身近なものであり、認知しやすいものであるため、身体部位を表す身体部位語彙が身体以外の物体部分や抽象物にまで意義が拡張されている。身体部位語彙をモト領域とするメタファー表現はほとんどの場合、類似性に基づく拡張であり、その類似性は、構造的位置づけ[56]、形状（形、大きさ）、機能から定義される。以下は、このようなメタファーによる意味拡張の基盤の種類ごとに、それぞれの代表的なもの[57]を考察していく。

4.2.1　構造的位置づけの類似性に基づくメタファー

人間の「頭」、「手」、「足」などは、基本的な構造は同じである。もし物体のある部分と人体のある器官において類似の関係を見出すことができるなら、見立てという人間の認知能力に基づいて、人間の身体部位を物体に投射することによって、物体の部分に身体部位語彙を使用することができる。言い換えれば、身体部位語彙が物体部分語彙に比喩的に意味拡張するとき、しばしば

[55] 抽出の方法としては、まずは日本語における「人間にまつわる用語」に関連する漢語を中心に検索を行った。次に、その語彙と対応する中国語の表現とその関連語の使用の状況を分析し整理した。
[56] 松本（2000）では「位置の類似」とされている。
[57] 本章で採集した用例は、「人間にまつわる用語」をモト領域とするメタファー表現を必ずしもすべて網羅するものではないが、その主要なものは大抵取り扱っているものと考える。

空間認識が働いており、その物体の構造上の主軸をどのように捉えるかが問題となる。このメタファーの中で最も典型的なのは「山」についての認知である。

(9a)今朝は、仕事場から富士山の頭が見えた。天気のいい日に、たまに見える。(BCCWJ)

(9b)为建船闸，建设者们削平了 18 座山头，硬是在坝区左岸山岗中劈出一条道来（閘門を建てるため、建設業者は 18 か所の山を切り崩し、ダムの左側の丘を真ん中から切り開いて道をつくる)。(CCL)

(10a)右下に見えるのは噴火口跡だ。山腹の木道を過ぎると左下に鏡池が見える。(BCCWJ)

(10b)乘坐架空索道平稳地飞越山谷时，同样可欣赏山腰的美丽景色，眺望远处的风光（ロープウェイで山と谷を穏やかに飛び越える時も、山腹の美しい景色が見られ、遠くの風光を眺める)。(CCL)

(11a)学校から程遠くない所に私たちがその木を植え終ったとき、山の背の辺りから、そよ風が吹いてきた。(BCCWJ)

(11b)维多利亚港是这座城市美的缩影，维港之南香港岛起伏的山脊是这座城市优美的轮廓线（ビクトリア港はこの都市の美の縮図であり、南にある香港島起伏の山の背はこの都市の優美な輪郭線である)。(CCL)

(12a)ツアンポーよりも一八五二フィート上の、深い石がちの谷のかみ手、サンルン山脚に到達したので、今夜過ごす場所を捜し求めた。(BCCWJ)

(12b)1713 年，意大利的一个农民在山脚下打井时，挖出了一些石碑和大理石神像（1713 年、イタリアの農民が山の麓で井戸を掘る時、石碑と大理石の像をいくつか掘り出した)。(CCL)

(9a)～(12b)の例文を見れば分かるように、「山」の各部分は身体の部位と位置が類似しているために、我々は「山」を認識するとき、「人」に見立てることが多い。「富士山の頭」は、身体における「頭」の位置を「山」の最上部の位置に投射した比喩であり、「山の背」は身体における「両肩から腰あたりまでの部分」の位置を「山」の中部あたりの位置に投射した比喩である。「山」の各部分は「人」との対応関係はおおよそ次のようになる。

表 4.1　位置の類似性に基づく身体部位語彙と「山」の対応関係

人体	→	類似点	→	山（中国語）
頭		最上部		山頂（山头）
腹、腰		真ん中		山腹（山腰）
背中		中部		山の背（山脊）
脚		下の部分		山麓（山脚）

言うまでもなく、日中両言語に構造的位置づけの類似性に基づいて拡張される用例が数多く、共通例も多い。例えば、

(13a)断水が続き、お湯に**パンの耳**やご飯を混ぜた団子しか提供できなかった日もあった。(BCCWJ)

(13b)我都没来得及提醒你，这**锅耳朵**[58]有毛病（言い忘れてしまったんですが、この鍋の取っ手の調子が悪い)。(CCL)

(14a)それが可能なら、敵の**戦列の頭**から三分の一ほどのところを、ただちに攻撃しようと思う。(BCCWJ)

(14b)在战斗中，他常常屹立**船头**[59]，挥刀督战（戦いの中で、彼はいつも船首に立ち、刀を振り回し、督戦する)。(9 月 3 日)

(15a)薄暗い**地面**には下草もなく、生き物の気配もない。荒れた森の様子に多くの人が息をのんだに違いない。(6 月 27 日)

(15b)大气核试验，使大量的放射性沉降物污染了大气、**地面**和海洋（核実験は放射性物質を大量放出し、大気、地面と海洋を汚染してしまった)。(11 月 3 日)

(16a)実はトヨタは昨秋に問題をつかんでいた。滑りやすい**路面**でのスリップを防ぐアンチ ABS に原因があると特定。(2 月 6 日)

(16b)公路赛是在**路面**良好的封闭公路上进行的多圈赛（ロードレースは路面の良好な閉鎖道路で行われている競技である)。(CCL)

---

[58] 上から鍋を見れば、その面が円形で、両側に対称の取っ手がある。そのイメージは、人間の顔の両側にある耳の配置や形状に非常に似ていると言えるので、鍋の取っ手のことを「鍋の耳」とも称している。

[59] “船头”、“机头”に当たる日本語は、それぞれ「船首」、「機首」である。古典中国語では、「あたま」を表すのに「首」「頭」があるが、『詩経』、『尚書』などでは「あたま」を表すのに「首」という言葉が多く使用されたが、「頭」という漢字がまだ現れず、やがて戦国時代（紀元前 475 年～紀元前 221 年）に入って「頭」という字が出現し始めた（王力 1980：497)。

通常、身体は、諸器官の有機的な結合体としてイメージされる。「耳」は頭部の両側に突き出た部分であり、「頭」は体の最上部にあり、「面」は頭部の最前部にある。これらの語は構造的位置づけの類似性に基づくメタファーによって、その基本的指示範囲が「頭」から、＜パンの端＞、＜行列や船の前部[60]＞及び＜土地や道路の表層＞といった身体部分以外のさまざまな物体に対して用いられることがある。

これらの例に見られるように、構造的位置づけの類似性に基づくメタファーはほとんど具体的で経験可能な物体部分のある位置に投射した比喩である。また、物体部分詞が全体とのかかわりが強い。言い変えれば、構造的位置に基づく物体部分詞は必ず全体を表す形態素と共に用いられる。位置とは何かを参照物として定義される。物体部分の位置の場合は、それを含む全体との関係によって定義がなされるのである。「船頭」、「地面」、「路面」などの複合名詞の場合、複合名詞前項が全体を、後項が部分を表し、「前項の後項の部分」という意味を表す。「パンの耳」、「戦列の頭」のようにノ格で全体が示される場合もある。

4.2.2　形状の類似性に基づくメタファー

人体の外観はおおまかに見ると、頭、首、胴体、腕、足に分かれ、それぞれ独特な形状を持っている。「網の目」、「親指の腹」、「山脈」といった言葉に見るように、形状の類似は様々なメタファー表現を形成する。

(17a)中部チャオプラヤ川流域の平野に水路や運河が**網の目**に広がる。(BCCWJ)

(17b)浙江沿海渔区渔网的**网眼**尺寸必须变大（浙江省沿岸漁場の網の目のサイズを大きくしなければならない)。(CCL)

(18a)僕が最初にそう感じた場所は、世界の屋根ヒマラヤ**山脈**を擁するネパールだった。(BCCWJ)

(18b)台湾岛上的**山脉**纵贯南北，中间的中央**山脉**犹如全岛的脊梁（台湾島の

[60] 「富士山の頭」のように、「頭」が「物体」というカテゴリーに対して適用された場合、「頭」に含まれる意味は、「物体」の上部ということになるであろう。この上部という意味は、物体の垂直方向における上端部分ということになるが、「船首」のように、「頭」は水平方向における先端部分を指すこともある。「行列の頭」では、厳密に言えば、物体ではないが、複数の人間が並んで作った行列を細長い物体に見立ててその先頭、即ち先端を「頭」と呼んでいるわけである。

山脈が南北に走っていて、中間の中央山脈はまるで全島の背中のようだ)。(CCL)

(19a)ご飯の真ん中に、梅干し一個を**親指の腹**で押しこんで、出来上り。(BCCWJ)

(19b)卑弥子也沉默不语，只用**手指肚**抚摩着自己的嘴唇边和鼻翅周围的皱纹（卑弥子さんも黙って、指の腹で自分の唇と鼻翼周辺の皺を撫でている)。(CCL)

(20a)温暖化被害を受けやすい途上国への資金支援や、被害軽減のための新機構の設立など、2013 年以降の**対策の骨格**が示された。(BCCWJ)

(20b)一个以拉萨为中心，以青藏、川藏、滇藏、中尼公路为**骨架**的公路网络已经形成（ラサを中心に、チベット、川蔵、滇藏、中国・ネパール道路を骨格とする道路ネットワークがすでに形成される)。(8 月 3 日)

(21a)妻と自宅にいた時、地震が起きた。瓦が落ちてくるので外に逃げられず、**机の脚**にしがみついた。(BCCWJ)

(21b)钟观光仿效古人“头悬梁，锥刺股”的苦读精神，把自己的腿捆在**桌子腿**上读书（鐘観光さんは古人の「首をつって、錐刺株」の勉学精神を真似、自分の足を机の脚に結んで読書する)。(CCL)

(22)鳩山政権が発足して４カ月、普天間問題という太い刺は喉に刺さったままだが、日米関係の**歯車**がようやく噛み合い出した。(1 月 14 日)

「目」は顔の前に付いている光を感知する器官であり、正円に近い丸型の形をしている。私たちは別の物体に身体の「目」と同じような形状をしていることに気付く時、「目」でこの物体を比喩するため、「網の目」という言い方が存在する。「山脈」とは、低地の間に挟まれる、細長く連続的に伸びる山地のことであり、人体の脈絡のような形をしている。(19)の「指の腹」は指先の内側にある部分で、少々膨らんでいるところは身体の腹部に似ている[61]。(20)の「骨格」は、＜骨の集まりで、身体の全形を形成・保持するものである＞がその本来の意味。ここでは、全体を形作る基本となる部分に着目することによって、

[61] 鍋島（2011）では、形状（イメージ）の類似は、構造（イメージ・スキーマ）の類似と連続的であると唱えている。例えば、「指の腹」は膨らんだ部分だが、「山の腹」となると位置づけが真ん中という点だけが似ている構造の類似性と思われる。「つぼの腹」は通常膨らんでいようが、そうでない場合もあり得る。構造的には真ん中にある必要があり、両者の中間例と考えられる。

＜対策の全体を形作り、それを保っていく上で、最も中心となるもの＞に意義が拡張される。 (21)の「脚」とは、本来＜身体の下部にある細長い部分＞を指している。メタファーとしての「脚」は、＜縦に細長い形状＞という特徴を受け継ぎ、＜机の本体を支える独立した細長い部分＞という意味を含む。(22)の「歯車」に見るように、＜複数個並んで、基体から突き出している＞という特徴を受け継ぎ、＜歯車の突き出るギザギザになっている部分＞を指している。

これらのいくつかの身体部位語彙の例を見て分かることは、「眼球を思わせる形状」、「細長く伸びる」、「膨らんでいる」、「全体を形作る基本となる部分」、「物の下部にある細長い部分」、「基体からの突起部分」といったような特徴は、「網」、「山」、「指」、「対策」、「机」、「日米関係」という異なった領域に写像され、形状類似のメタファーによって意味拡張されている点である。

4.2.3　機能の類似性に基づくメタファー

身体部位語彙に由来するメタファー用例は以上の構造的位置づけ、形状の類似に基づく意味拡張の他、喩辞（喩えるもの）と被喩辞（喩えられるもの）の間に機能の類似性が中心的な役割を果たしている例もある。人体には多くの器官があり、その機能はそれぞれに違う。口ならば食べたり話したりする、足ならば歩いたり走ったりする、目ならば見る、耳ならば聴くことが、それぞれの機能である。そして、各器官は「機能していること」によって、正常で健康な状態を保つことができるのである。もしある物或いは物事に人体器官と同じような機能があるとすれば、メタファー表現が用いられることになる。

(23)総理は**一国の顔**[62]。できれば長く務められ、世界各国首脳と長いつきあいをされていくことが望ましい。(BCCWJ)

(24a)国政が混沌としている中、**日本の心臓**部である首都圏はスクラムを組んで頑張らないといけない。(BCCWJ)

(24b)当全国政协委员们从祖国各地、各条战线、各个领域汇聚到祖国的**心脏**时，这个日子变得崇高而且庄严（全国政協委員たちが祖国の各地、各戦線、各

[62] 同じような表現としては、中国語では“一国之首”が使われている。『和名抄』では「首」について、「首加宇倍。始なり。頭加宇倍。一に云ふ、賀之良。獨なり。言ふこころは、體に處りて獨り貴きなり」つまり、古い日本語では「首」という漢字は「かうべ」「かしら」と読み、「頭」を意味していた。これは中国語の「首」「頭」の意味と一致している。

分野から祖国の心臓に集まる時には、この日が崇高で荘厳になっている）。(CCL)

(25) 会員は自然科学から人文、社会科学まで、全国約 83 万人の研究者を代表する 210 人、日本の頭脳集団である。(2 月 15 日)

(26) ＪＲ山形新幹線に「カリスマ車内販売員」がいる。財布の口が堅いご時世に、売上額は平均的な販売員の約 1･2 倍。(BCCWJ)

(27a) 足利事件の再審無罪が確定した菅家さんを招き、取り調べの可視化を議論するシンポジウムが 17 日、福岡市中央区で開かれた。菅家さんは「警察はどんな手を使うか分らない。一部ではなく、取り調べの全面的な可視化が必要だ」と訴えた。(4 月 18 日)

(27b) 张作霖手黑……（張作霖は手口がひどい……）(CCL)

(28) TX 開通以前、つくば市中心部の住民にとって都心に出る重要な足となっていたのが、つくば―東京間の高速バス路線だ。(8 月 25 日)

(29a) ホルムズ海峡は原油輸送の大動脈であるだけに、テロ攻撃だったことが確認されれば、通過するタンカーは警備の大幅強化など緊急対応を迫られることになる。(BCCWJ)

(29b)长江江阔水深，是我国南方的交通大动脉，素有“黄金水道”之称（長江は河床の幅が広くて、水が深くて、我が国の南方の交通の大動脈であり、古来から「ゴールデン航路」と呼ばれている)。(CCL)

(30a) しかも今年から始まった民主党政権の目玉政策、農家への戸別所得補償制度では枠が大きいほど補償額も増える。(12 月 20 日)

(30b) 作为生活游中的传统旅游项目，老北京胡同游自然会吸引更多游客的眼球（生活の中での伝統的な観光旅行プロジェクトとして、老北京胡同遊が自然に多くの観光客の目を惹かれている)。(CCL)

(31) ネットは様々な情報や意見が流れる、中国の人々の暮らしに欠かせない血管となっている。(3 月 24 日)

「顔」とは、本来＜重要な感覚器である眼、鼻、耳などが集まっている頭部の正面＞を指している。通常、人体の大部分は服に覆われていて、外に露出しているのは頭部、顔と手だけである。容貌を判断したり表情によって内的心情を認識したりする上で、身体の上方の前面に位置する「顔」は人体において最

も目立つ部分である。他者を認識する際に主要な箇所であるため、その身体的重要性と社会的重要性との類似性に基づくメタファーによって「主要（重要）な人」を表している。内閣の首長である内閣総理大臣は行政の最高責任者として行政各部の指揮・監督を行う。例文(23)を読めば分かるように、メタファーとしての「顔」は、＜身体における重要性＞という特徴を受け継ぎ、＜社会において重要な代表＞に意義が拡張される。言い換えれば、「顔」は他者を認識する際に主要な箇所であるため、その身体的重要性と社会的重要性との類似性に基づくメタファーによって＜主要な（重要な）人＞を表している。

「心臓」は我々が生きているかぎり、一刻の休みもなく働いて生命を維持している非常に重要な器官であり、循環システムの動力でもある。「心臓」の動きが止まったら、命は救うことができない。日本の発展も例外ではない。(24a)は、東京を中心とする首都圏では混乱が発生したら、日本全体の安定と発展に悪影響を与えることを示唆する。(24b)の場合は、国家機関や指導者の所在地は北京であり、全国各地の政府機関をリードしているため、国をつかさどる機能の所在地である北京を祖国の心臓に見立てていることを物語っている。なお、国家の首都が「心臓」という概念化には、≪重要は中心であり、非重要は周辺である≫のメタファーが根底にあると考えられる。「日本の中枢」、「組織の中核」、「周辺的な問題」、“党中央（党の中央）”、“组织部门的中枢机构（組織部門の中枢機関）”、“依法治国的核心（法によって国を治める核心）”といった表現に見るように、我々は重要性のことを中心の空間位置と見なし、中心という空間領域に関する具体的な概念に基づいて重要性という抽象的な概念をメタファー的に把握しているということを窺うことができる。

身体部位語彙「頭」の基本的な指示範囲は、人間の身体のうちで最も上位の部分であると同時に、人体の最も重要な知能器官でもあり、「頭」の運行は身体全体の動作、思考や感覚を制御しているため、(25) の「頭脳」はグループのリーダーや団体の中で知恵を持つ重要な人物を指し、すなわち〈知性〉〈思考力〉などへの意味拡張が生じたのであろう。

「口」の典型的な行為の一つとして発話行為が考えられる。「口が堅い」の「堅い」という表現は、基本的な意味としては、加えられた力に対する抵抗が大きいことを表す（籾山 1994 の分析参照）。容器であれば、開けよ

うとして加えられる力への抵抗が大きい、従って（特に他者によって）開けにくいということになる。そこで「口が堅い」とは、＜他者によって口を開かせることが困難だ＞という概念を表すことができる。言い換えれば、＜秘密などを軽々しく他へ漏らさない＞ことを指している。(26) におけるメタファーとしての「口が堅い」は、＜あまり物を言わない質＞という特徴を受け継ぎ、＜不況下にあって、人々は無駄な金を使わず不必要な支出を減らす＞という意味を含む。

資料を調べる時、字を書く時、食事をする時など、どんな時でも手を使う。身体のうちで「手」は非常に便利で、最も良く動く部位であるため、(27a)において、被疑者を取り調べるための手段として選ばれやすい。（27b）の場合は、“手”を“黒”と組み合わせて使われる表現である。色彩の用語である「白」は、知覚推論によって純粋さ、清潔さを連想されるのに対して、「黒[63]」は汚れや不純さを示唆する知覚推論である可能性が高いため、“手黒”で「あくどいやりかた」を指している。(28)では、足は体全体を支え、日常的に「歩く」「走る」という移動に頻繁に用いる部位であり、それに、歩行は人間にとって極めて一般的な行動の一つであるため、公共交通などよく使われる移動手段を指して「地域住民の足」、移動手段がないという意味で「足がない」と言われる。例文(29) において、心臓から全身に血液を送り出す体循環系の動脈の本幹が「大動脈」だと言われている。全身を流れる血管のうち最も大きなものであることから、地理分野で比喩的に、重要な道路・鉄道や航空路線のことを「大動脈」と表現することがある。例文(30)を読めば分かるように、＜人の目を引く＞という特徴を受け継ぎ、「目玉政策」で多くの政策の中で特に注目されるものを表し、「観光客を呼び込む目玉」とは観光客を誘致するために様々な施策を行うことである。（31）の場合は、血液を身体の各所に送るための通路となる血管が大変重要な役割を果たしている臓器であるため、「血管」で＜現代社会ではインターネットは日常生活に欠かせない情報インフラとなっている＞と比喩的に表現する。

[63] 鍋島(2011)では、≪善は白であり、悪は黒である（表現例：「黒い霧」、「身の潔白」）≫のメタファーでは、起点領域としての「白」、「黒」は本来評価性を含んでいると指摘されている。“白衣天使（白衣の天使)”、“一生清白（潔白な人生)”、“白璧无瑕（瑕無き玉)”、“白客（ホワイトハッカー)”、“黑客（ハッカー)”、“黑心（腹黒い)”、“黑社会（暴力団のような闇社会)”といった言葉に見るように、中国人の概念体系の中でも《悪いことは黒である》というメタファーが活発に働いている。

我々は何かを掴むときには「手で」掴み、何かを見るときには「目で」見、何かを聞くときには「耳で」聞き、歩くときには「足で」歩く。このように、人間の身体部位は、様々な行為を行う際の道具である。以上の考察から分かるように、身体部位を表す語彙は様々な形でメタファーによる意味拡張がなされ、その際、起点領域における身体部位の諸側面のうち、特定の位置、形状、機能が中心的な役割を果たしていると認識されている。構造的位置づけと形状の類似性に基づくメタファーは、殆ど表面的で、具体的なものに集中している。例えば、「富士山の頭/山头」、「机の脚/桌子腿」、「指の腹/手指肚」などが最も典型的な用例である。その一方、機能に基づくものは、抽象的な概念を指す場合が多い。例えば、「一国の顔」、「日本の心臓部」、「民主党政権の目玉政策」等が挙げられる。

また、身体部位は、何らかの行為を行ったり、ある感情に伴い生理反応が生じたりするという点で、私たちにとって極めて際立つものであるため、以下に見るように、身体的な経験を基盤にしてさまざまなものを概念化している表現が日本語にも中国語にも数多く存在すると言える。

4.3　人間の身体経験に基づくメタファー

Lakoff and Johnson（1980）では、私たちは比喩を用いることで、人間以外の物に関するさまざまな種類の経験を、人間の性格、動機、活動という観点から理解することを可能にしていると指摘している。このような視点から考えれば、私たちはある出来事や物事を理解する時、その発生原因をしばしば出来事や物事の特質と関係があると判断する。その背景には、＜出来事や物事は行為である＞のメタファーが働いており、私たちはその特性の持ち主を出来事や物事を引き起こす行為者として擬人化する。以下の例文を見れば分かるように、メタファーによって意味が拡張されているものは人間の姿勢や具体的な動作を表す語彙のみではなく、生命や健康にまつわる様々な語彙も含まれる。

4.3.1　人間の姿勢や動作に基づくメタファー

瀬戸（1995a）は、台風は、「成長」し、「ゆっくりと北上を続け」、本土を「窺い」、ついには「上陸し」、各地で「暴れまわり」、「相当な被害をもたらし」、

ようやく東の海上を「去っていく」といった例を挙げ、台風について語る際には、ほとんど擬人法的メタファー以外で考えることが不可能であると指摘している。以下の用例に見るように、人間の姿勢や動作を表す漢語語彙もメタファーによって確かに様々な領域へ意味が拡張されている。

(32)それぞれに矛盾を抱え、支配力を失っていく東の大国と、力をつけていく西の大国とどう付き合っていくのか、日本の姿勢は定まらない。(12 月 29 日)

(33a)将来に向けた改革の姿を描けていないため、場当たり感が強い。(12 月 17 日)

(33b)随着西部大开发战略的实施，西藏正以崭新的姿态走向现代化（西部大開発戦略の実施に伴って、チベットが新しい姿勢を示している)。(CCL)

(34a)新興国の台頭で多極化が進み、長引く対テロ戦争や経済危機で米国の一国優位が揺らいでいる。(11 月 19 日)

(34b)近年来，俄国内反美情绪上升，民族主义势力抬头，多数人不甘心丧失其大国地位（近年、ロシア国内では反米感情が上昇し、民族主義が台頭し、大国地位を喪失するのに甘んじない人が多くなっている)。(6 月 12 日)

(35)2 万 3 千人の観衆は、今秋のプロ野球ドラフト会議で目玉となる選手たちと、次世代を担う若手プロとの真剣勝負を満喫したことだろう。(7 月 28 日)

(36)中国对外开放的决定就像是打开中国的一扇门，现在，中国张开臂膀拥抱整个世界（対外開放の決定は、中国の扉を開けているようである。中国は腕を広げて世界を抱きしめようとしている)。(11 月 12 日)

(37a)それにしても、2 人の子どもたちを救えなかったものか。自治体や児童相談所がもう一歩踏み出す手立てはないだろうか。近所の人たちの知らせをもっと生かせないか。(3 月 6 日)

(37b)克拉克认为，他的来访使加中关系又向前迈出一步（彼の来訪はカナダと中国との関係を一歩前に進ませるとクラーク氏は思っている)。(CCL)

(38)今春以降、世界経済は欧州の混迷に揺さぶられてきた。ギリシャ危機に右往左往する欧州連合（EU）への不信がユーロ安や世界的な株安を呼んだ。(7 月 3 日)

(39)预计这种情况下半年美元利率掉头向上后才能有所改善（ドルの金利が

下半期にUターンし上昇するに従って、このような情況が改善される見込みである)。(4 月 12 日)

(40a)地球環境問題で国際社会の対応は順調といえない。乱開発による生態系の破壊はいっそう速度を増している。温暖化の規制づくりは**足踏み**している。(10 月 31 日)

(40b)有的领导干部摆不正个人和组织的位置。提拔重用了，觉得是凭能力、靠“后台”；“**原地踏步**”者，就认为组织“亏欠”了他（個人と組織の位置関係を誤解している幹部がいる。抜擢されたら、能力や人脈力が認められたためだと思う。足踏み状態だったら、組織から不公平に取り扱われていると思う）。(10 月 11 日)

(41a)だが、それからまもなく日本では戦争の**足音**が高まっていく。41 年に大会は中断。塔の銅板は軍に供出され、施設全体も大戦中の空襲で崩壊した。(8 月 8 日)

(41b)55 年来，北京伴随着新中国的**脚步**不断前进、发展（55 年間以来、北京は新中国の足音に伴って絶えず前進、発展していく)。(CCL)

姿勢や姿は年齢、性別、人種などによって異なっていると思われる。団体や組織を「人間」に喩えると、＜静的姿勢を取るかスポーツなどによる動的姿勢を取るかといった体の構え方＞と＜団体や組織の物事に対する心の持ち方や行動の仕方＞の類似性は一目瞭然である。(34)の「台頭」とは、本来＜頭をもたげる＞という一般的な動作を指している。ここでは、具体的なしぐさである＜持ち上げる＞を通じて、抽象的なナショナリズムや新興国の＜浮かぶ、表に出てくる＞を表し、両者には「下から上へ」という類似性がある。言い換えれば、＜それまでに目立たない勢力、組織や考え、気持ちなどが次第に浮かびあがって目立つ存在になってくる＞に意義が拡張される。また、メタファーとしての「台頭」は主体が多くの場合、人間ではなく、「ナショナリズム」のような抽象的な思想や問題などであることが特徴的である。「新鮮な魚介を満喫する」とあるように、(35)の場合は、＜美味しいものを存分に飲み食いすること＞が「満喫」の元の意味である。ここでは、＜飲食に関して十分に味わうこと＞を含む元の意味から、＜現場でプロ野球の試合の雰囲気などを十分に楽しむこと＞に意義が拡張する。(36)の“拥抱世界（世界を抱きしめる）”は中国語

にしかない漢語表現であるが、「中国を人間に喩え、様々な領域で世界諸国と協力しあい、信頼関係を深めて仲良くする」という意味が読み取れる。

「一歩」、「右往左往」、“掉头”、“原地踏步”はいずれも人間の一般的な動作を表す動詞であり、「足音」は歩く足の音である。(37)～(41)の例文に見るように、国家や社会的な組織などによって行われる施策、対応及び活動を人間の動作や行為に見立てて理解するという概念化には、≪出来事は行為(人間の営みや活動)である≫や≪人間の活動は移動である≫といったメタファーが根底にあると考えられる。換言すれば、移動表現の種類として、歩行、走行、その場所を動かないで足を交互に上げ下げすること、右へ行ったり左へ行ったりして入り乱れることなどいろいろ考えられるが、「自治体が一歩踏み出す」、「EUがギリシャ危機に右往左往する」といった用法から共通するある特徴が確認できる。それは、プロジェクトのような出来事の動作主は人としての性質を帯びることと、出来事が移動物と捉えられることである。

4.3.2　人間の生命や健康に基づくメタファー

人生において生命や健康ほど大切なものはないとよく言われている。以下の例文を読めば分かるように、政治や経済領域に写像されるメタファー表現には人間の生命や健康に基づくものが数多く存在している。

(42a)米国で温暖化対策に積極的なオバマ民主党政権が**誕生**し、温暖化の国際交渉に復帰した。(11 月 30 日)

(42b)美国克林顿新政权的**诞生**，给日美关系注入了新的未知因素（アメリカクリントン新政権の誕生は、日米関係に未知の新要素を加える）。（11 月 11 日）

(43)消費者行政の司令塔役と期待され、**産声**を上げて半年。だが、何をしているのだろう、と思ってしまうほど消費者庁の影が薄い。(3 月 15 日)

(44)ここ数年の異様なまでの**短命**政権の連続には、日本の政党政治の機能不全、民主主義の未成熟を指摘されてもやむをえない面がある。(9 月 15 日)

新政府や行政機関の発足など政治の問題は社会に対して全体的な影響を及ぼす複雑な領域であるため、様々なメタファー表現が用いられている。「誕生」と「産声を上げる」は、＜人間や動物などが生まれる＞がその本来の意味であ

る。ここでは、新しくできることによって、＜制度・組織・施設などが新しく作られる、成立すること＞に意義が拡張される。それに対して、「短命政権」とは＜若くして死ぬこと＞という特徴を受け継ぎ、＜政権の存在期間や有効期間の短いこと＞に意味が拡張される。「政権が誕生する」、「消費者庁が産声を上げる」、「短命政権」に見るように、動物や人間の成長段階が出来事の発展段階に見立てられている傾向がうかがえる。人間の一生はおおざっぱに言って「誕生→成長→衰え→死」という過程をたどる。政府や行政機関などは「人間の集合」そのものとは言えないが、「人間」が重要な構成要素であることは間違いない。また、政府や行政機関なども「人間」が作り、「人間」が属するものであるため、人間の一生と同じように、「政権の発足→本格的な展開を通して成果を上げる→勢力が衰え→政権交代」という過程をたどる。したがって、政府や行政機関の運営の過程と人間の成長過程との間に対応関係が認められると言えるであろう。

また、経済が複合的で複雑な側面を持ち、なかなか一筋縄ではいかないということがあり、さらに経済の良し悪しが我々の生活に直接かかわってくるという迫真性を持っているということが考えられるため、我々にとって最も身近なものである身体のドメインに属する病気というより具体的なものをモト領域とする用例が数多く見受けられる。(45)では、＜医薬品の一定の作用を利用して疾患を治療する際、その薬剤が有する多種の作用のうち、治療目的に沿わない不都合な作用が働く場合もある＞が「副作用」の元の意味である。ここでは、＜不必要なもの、または障害となるような作用＞を含む元の意味から、＜景気刺激策を行っている逆効果として、インフレや不動産バブルを招く＞ことに意義が拡張される。(46)～(50)の用例も同様、これらは、いずれもメタファー的概念化の原理にもかなっている。

(45) 最大の不安要素は、景気刺激策の<u>副作用</u>だ。こうした<u>副作用</u>を抑えるため、中国政府はいずれ金融引き締めなどで景気対策からの「出口」を探らざるをえない。(1 月 24 日)

(46) 日本はバブル経済崩壊の<u>傷</u>が容易に癒えず、低成長の下で企業はリストラを伴う競争力強化で何とかしのいできた、というのが実情だ。(1 月 28 日)

(47) 后凯恩斯主流经济学派认为，通货膨胀与失业<u>并发症</u>是由生产要素供给

方面的原因所造成的（インフレと失業の合併症は、生産要素の供給側に原因があるとケアンズ主流経済学派は思われる)。(CCL)

(48)プーチン氏が経済の危機対応に追われるのを横目に、メドベージェフ氏はロシアの**持病**ともいえる汚職対策に本格的に取り組み始めた。(5 月 17 日)

(49)通貨安競争の渦は猛烈な遠心力を G20 にもたらした。そうした試練にさらされても、ソウルで首脳たちが結束を示したことは注目に値する。とはいえ、解決への**処方箋**作りは今後に託された。未体験ゾーンに突入した世界経済に効く**良薬**探しに世界の英知が問われる。(11 月 13 日)

(50) 日本も水面下で TPP への参加を**打診**されている。ところが民主党政権はこれまで及び腰だった。(10 月 5 日)

(51)の「健康」と(52)の「元気」は類義語だと言われ、＜日常の社会生活や積極的な行動に堪え得る体の状態＞がその本来の意味。ここでは、すこやかで調和のとれた良い状態に着目することによって、＜国民経済全体や地域経済の健全な発展＞に意義が拡張される。

(51) 在这一年里，中国国民经济持续、快速、**健康**发展，民主和法制建设明显加强（この一年間、中国の国民経済が持続的、迅速かつ健全な発展を遂げ、民主と法制建設も明らかに強化されている)。(CCL)

(52)沖縄県知事選が始まった。候補たちは、本土以上に停滞している地域経済をどう**元気**にするかを訴えている。(11 月 12 日)

以下の(53)の例文は、＜食べた物を胃で溶かし、腸の働きを通じ、細胞が吸収しやすい状態に変化させる＞ことと、＜取り入れた理論や知識などをよく理解して自分のものとして身につける＞ことの類似性は明らかである。(54)の場合は＜口の中で食べ物をよくかみ砕き、やがて自分の血とし、肉とする＞ことが「咀嚼」の元の意味である。ここでは、＜かみくだいて味わう＞を含む元の意味から、＜文章や事柄の意味などをよく考えて十分に理解し味わう＞ことに意義が拡張する。

(53a) 近代化における電気通信の重要性が認識され、早い時期にこれらの技術が導入され、これを**消化**吸収して国産化することにより、一応の水準に達していた。(BCCWJ)

(53b)现时楼宇供过于求的问题正逐步获得**消化**（現在のビル供給過剰の問題

も徐々に消化されていく)。(CCL)

(54a) 日本はまさに、欧米から学んだ知識を**咀嚼**し、自らのものにして発展させたのだった。(BCCWJ)

(54b) 他在**咀嚼**生活的同时，随时了解当代文坛的动态（彼は生活を味わいながら当時の文壇の動きを見ている)。(CCL)

なお、以下の用例を見れば分かるように、交通問題や環境問題など様々な社会問題を病と見立てる表現も見受けられる。

(55a)特に東京周辺では、各地から東京の状況を案じて続々とつめかける人と車のため、深刻な交通**麻痺**が起り、一部では不穏な状況さえ発生していると伝えられる。(BCCWJ)

(55b)许多民宅和道路被冰雹融化的积水淹没，造成交通**瘫痪**（多くの民家や道路が水没されて、交通が麻痺している)。(3 月 21 日)

(56a) 昨年末、デンマーク・コペンハーゲンであった国連の気候変動枠組み条約締約国会議（COP15）で先進国と新興国・途上国が激しく対立した。その**後遺症**が残り、「最終合意は早くても来年の COP17 になる」という悲観的な空気も漂っている。(5 月 2 日)

(56b) 巴以争端、伊拉克战争“后遗症”,以及伊朗核问题已成为中东地区最具威胁的问题（パレスチナの争いやイラク戦争の「後遺症」及びイラン核問題は中東地区で最も重大な脅威の一つとなっている)。(CCL)

(57) 地球環境破壊が文明の**慢性病**なら、核戦争は文明を滅ぼす**急性病**とも言われる。(1 月 3 日)

(58)賭博問題に加え、維持員席の券が暴力団に渡っていた疑惑も警察が捜査中である。角界を覆う**病根**は手つかずのままだ。大相撲関係者にその自覚があるだろうか。(7 月 6 日)

(59)警視庁は、オウム真理教による組織的犯行との見方に立ってきた。だが、１５年間の捜査は迷走を繰り返した。真相を闇の中へと押しやったのは、警察組織の**病理**が招いた失敗の連鎖だったといっていい。(3 月 30 日)

(60)新規国債発行額は税収を上回り 44 兆円にのぼる。借金**中毒**のような財政の姿がここにある。(3 月 3 日)

(55)の「麻痺」とは、本来＜四肢などが完全に機能を喪失していることや、

感覚が鈍って、もしくは完全に失われた状態＞を指している。メタファーとしての「麻痺」は、＜本来の機能や働きが停止する＞という特徴を受け継ぎ、＜極度の交通渋滞や災害等により、道路機能が失われること＞という意味を含む。（56）～（60）の「後遺症」、「慢性病」、「急性病」、「病根」、「病理」、「中毒」の用例を一々分析しなくても分かることは次の点である。我々は身体を介して日々様々なことを経験する。個々の具体的な経験は非常に複雑な構造をしているが、その中には繰り返し現れる比較的単純なある一定のパターンや形、規則性などが存在する。人間の身体経験に基づくこのような用語は、人間以外と共用され、比較的に抽象的な政治、経済、交通、国家関係や社会政策、法規など異なった領域に写像され、メタファーによって意味が拡張されている。

ここまで見てきて明らかになったように、人間の身体部位を物体に投射するのは、身体部位の構造的位置づけや形状が物体の部分との間に、視覚的類似の関係を見いだすことができるという認知プロセスに基づくためだとすれば、人間の身体経験に基づくメタファー用例が突出しているのは、世界を認識する基盤は人間の身体経験に根ざすという認知様式と深い関係があると言えるであろう。両言語の比喩的概念において、完全に一致する「麻痺」、「台頭」、「消化」であれ、一致していない“掉头”、“健康”であれ、身体的な経験を基盤にしているメタファー的な表現は、様々なサキ領域の物事を理解するのに役立っているのである。

4.4　まとめ

認知言語学では、世界を認識する基盤は人間の身体経験に根ざすと考える。自らの身体を投射して事物を理解しようとすることは、指で数を数えることと同様、分かりやすく納得しやすい方法である。例えば、擬人化は人間の持つ知識を最大限に活用し、出来事、抽象概念、無生物などを理解する上で洞察力を与えてくれる（岩田，2002）。本章では、認知言語学の知見を生かし、身体部位語彙をモト領域とするメタファー表現に焦点を当て、漢語語彙における日中対照を行った。その結果、日本語と中国語における身体部位語彙のメタファー表現が非常に豊富であるということが判明した。

1）身体部位語彙をモト領域とするメタファー表現はほとんどの場合、類似

性に基づく拡張であり、その類似性は、構造的位置づけ、形状、機能、身体経験から定義される。構造的位置づけや形状の類似性に基づくメタファーはほとんど具体的で経験可能な物体部分のある位置に投射した比喩であるのに対して、機能や身体経験の類似性に基づくメタファーの写像されたサキ領域の大半は抽象的な概念である。

2) 日本語と中国語は異なる言語であるにも関わらず、数多くの共通点を有している。その理由として、身体的経験に基づいて身体化された文化普遍的なイメージ・スキーマが言語表現を支えていることが考えられる。つまり、共通的な理解と認識をベースに、類似した表現が出てくる。「頭」についてのメタファーは、まず＜頭の身体の位置関係＞に基づき、「富士山の頭」/“山头(山頂)”に意味が拡張されている。中には、「鼻の頭/“鼻头”」のように、形状の類似性（丸みを帯びている）を伴う場合もある。また、「英語の文章を左から右へ、つまり頭から読む習慣が身についていく」、「新構想の内容を盛り込んだ年頭演説を終えた後」とあるように、「頭（アタマ/トウ)」は文や年などの抽象物の＜最前部・はじめ＞に関して使われる。「頭」を＜物事のはじめ＞と見なす例では、物理的上下と時間的前後が対応づけられていると言えるであろう。

なお、脳は全身の部位から集めた感覚の情報を整理し、また全身に指示を出す役割を持つため、「頭（カシラ)」は集団のトップの位置にある人を指す意味を持ち、この場合、位置、重要性の類似性のほかに、＜指令を出す＞という人間的な機能の類似性が関与している。この場合は、物体部分ではなく集団の一部としての人間への拡張であるがゆえに、「武士の頭（カシラ）として朝廷から征夷大将軍に任じた」、“部队的头儿”といったような表現が許されているものと思われる。

3) 構造的位置づけの類似性に基づくメタファーであれ、形状の類似性に基づくメタファーであれ、すべて単純な構造写像を保っている。すなわち、A概念領域はB概念領域に写像されていることである。その一方、用例数が少ないにもかかわらず、身体部位語彙に由来するメタファー表現には、幾重にも重なる構造写像も存在する。例えば、

(61a)昔の<u>傷口</u>に触れたその時、君は微かに震えていた。(BCCWJ)

(61b)而这些幸存者回首往事，余悸犹在。心灵的<u>伤口</u>依然流血（これらの

生存者は過去を振り返ってみると、まだドキドキしている。心の傷口は流血のままである)。(CCL)

(62)事態好転の**糸口**を探ろうという狙いはわかる。だが、今いきなり6者代表が集まって、現実的な成果をあげられようか。(11月30日)

(63)理解确实是沟通人间情感的钥匙，它能打开各自心灵的**窗口**（理解は確かに対人交渉コミュニケーションの扉を開く鍵であり、それがそれぞれの心の窓を開けられる)。(CCL)

(64)每到经济快速增长的一个周期，铁路就成为经济发展的**瓶颈**（経済の急速な成長のサイクルを繰り返していると、鉄道が経済成長を遂げる上でボトルネックになりうる)。(CCL)

(65)事后，夫妇俩商量远走高飞，但又觉得即便是插翅也难逃出戴笠的**手心**（その後、夫婦二人で高跳びしようと相談してみたが、たとえ羽が生えても戴笠の手のひらから逃げられないと感じた)。(CCL)

「口」はまず、先端という位置の類似性に基づいて、「傷口」、「窓口」、「入口」、「出口」、「川口[64]」といったような「先端の部分」という意味を表す。さらに、物体を表す「先端の部分」から、抽象度の高い「心の傷口」、「問題解決の糸口」、「宵の口」、「秋口」といったような「時間」・「空間」を表す語にまで拡張されている。船や飛行機を認識する場合は、「船首」や「機首」というように、身体部位の首の位置を物体の首に当たる位置への意味拡張がなされた例が日本語と中国語の両方に見られる。一方、日本語の「首」にあたる中国語の“颈”に関する外来語「ネック」は障害となるものを意味する。英語の“bottleneck”（障害）からの派生である。英語の“bottleneck”には「障害」以外に「狭い通路」という意味もあるので、「鉄道が経済成長を遂げる上でボトルネックになりうる」というように、＜生産活動や文化活動などで、全体の円滑な進行・発展の妨げとなるような要素＞に意味が拡張されている。古代から「心」は心臓にあるという考え方が一般的であった。「心臓」は体の中心にあるため、手の中心部分を中国語では“手心”と呼ばれている。メタファーとしての「心」は、＜中心部分＞という特徴を受け継ぎ、＜ある人や組織によってコントロールされ

[64] 「川口」では、「口」は「川」というより大きな実体の一部で水が海へと出ていくために通る部分であり、「宵の口」「秋口」では、「口」は「宵」や「秋」というそれぞれ一つの実体として捉えられたものの中へ人（経験者）が入って行くために通過するところと言える。

ている範囲＞に意義が拡張される。つまり、身体部位語彙 A はまず具体的な B 概念領域に写像され、それから、B 概念領域はまた抽象的な C 概念領域に写像されることである。この複層レベルの構造写像における対応関係はおおよそ次のようになる。

表 4.2　複層レベルの構造写像

A	→	B	→	C
口		傷口		昔の傷口
口		窗口（窓）		心灵的窗口（心の窓[65]）
颈（首）		瓶颈（瓶の首）		经济发展的瓶颈（経済発展のボトルネック[66]）
心		手心（手のひら）		戴笠的手心（戴笠の手のひら）

4）人間は皆、同じ身体構造と知覚器官を持っているが、文化や環境によって認知構造に影響を受け、それらが言語表現にも反映される。そのため、異なった言語においては、異なった意味拡張の方向性を見ることが可能になる。聴覚にとって重要な器官として広く認知されている「耳」は、日本語では＜人間の顔の端に位置する＞に焦点を当てる位置類似のメタファーによって「パンの耳[67]」、「布の耳」、「お金の耳」といった平面的なものの端に位置するものに意味が拡張されているのに対して、中国語では形状類似のメタファーによって“木耳（キクラゲ）[68]”、“银耳（白キクラゲ）”に意味が拡張されている[69]。

また、日本語の「手足（てあし）」には、「地方の手足を縛っている」というような使い方もあり、「思いのままになる人」と喩える言い方もある。例えば、

---

[65] 日本語にも「目は心の窓(心の中の澄み濁りを映して見せるものだ)」という表現が見受けられる。これは窓の「展望」機能を、人間の目に当てはめて表現している。

[66] 「ボトル」は瓶、「ネック」は首を指し、本来の意味は、瓶の首の細くなったところ。流れが滞る場所という本来の意味を生かせば、「隘路」という言い換え語が適切であるが、「隘路」の「隘」は、常用漢字外の難解な漢字であり、読み仮名を付けたとしても意味が伝わりにくい可能性がある。分かりやすさを重視すれば、新鮮なイメージがあった「ボトルネック」という外来語を使う方が多い。

[67] 日本語では「パンの耳」は食パンの焼かれて茶色く固く変質した周辺部分の俗称である。「耳」は人間の顔の端にある。そこで何か平面的なものの端に位置するものを人間の耳に例えて「耳」と呼ぶわけである。ところで中国では「パンの耳」という言い方はしない。これは中国でパンと言って思い浮かべるのが日本のような食パンではなく、丸くて固い皮の付いたパンなので「耳」という発想が浮かばなかったからかもしれない。メタファーが異なった領域に働くさまざまな要因に関しては、今後の更なる考察が必要だと考えられる。

[68] 木の平面に菌が萌え、その形が人間の耳に似ていることから“木耳”と呼ばれている。

[69] 中国語には、以前、＜平面的なものの端に位置するもの＞という特徴に注目し、伝統的な建築様式“四合院”の母屋の脇にくっつけたような形状の小さめの部屋を“耳房”、“耳舎”、“耳屋”と呼ばれていたが、都市化が進むにつれて、“四合院”が減少しつつあり、“耳房”、“耳舎”、“耳屋”のような言い方が現在では社会から消えたようである。

「主人の手足となって働く」。その一方、中国語では、“有人则在包装和印刷上做手脚把3年的茶叶说成是15年的陈茶”の“手脚”は＜何らかの企みを実現するために手を加えて不正を行う＞といったようなネガティブな感情しか表出できない。異なった言語においては、同じ身体部位が異なった領域に写像されるのは当然なことと思われる。

5）構造的位置づけ、形状の類似性に基づくメタファーと比べ、機能のみの類似性に基づくメタファー表現が少なく、必ず他の要素が伴っている。言い換えれば、機能の類似性に由来する表現には、複数の類似性が関与しているケースは多い。例えば、「歯車」の「歯」では、形状の面で＜複数個並んで＞、位置の面で＜基体から突き出している＞、さらに＜切る＞、＜噛み合う＞あるいは＜食い込む＞という機能の類似性によって拡張も行われている。「手首」の「首」は、＜頭に相当する比較的小さな部分と胴体に相当する比較的大きな部分（あるいは安定して部分）の間にある＞、＜比較的細くなっている部分＞を指している。機能上では人間の「首」と同じ、「頭に相当する部分の向きを変える」。人間の「足」は＜最下部にある＞、＜縦に細長く＞、＜本体を支える独立している＞であり、「机の脚」は本数を除いてこれらのすべての類似性の条件を満たす。身体部位語彙のメタファー拡張において、「歯車/“齿轮”」、「手首」、「机の脚/“桌子腿”」のように構造的位置づけ、形状、機能の三つが複雑に絡んだケースが少なくないであろう。

6）以上に見てきたように、身体部位語彙をモト領域とするメタファーにおいて、日中両言語の間には広くはっきりした類似点がある一方、言語が歴史的・文化的存在である以上、言語間にいろいろな細かな差が見出されることは、むしろ当然である。例えば、「移動の手段や交通機関」を表す時、日本語では「大都会の足が乱れた」、「国民の空の足の機能を再生する」が使用されているのに対して、中国語ではこのような意味拡張は見られない。これは中国語の語彙における構造的な特徴の一つと言えよう。形態の面から言うと、中国語は日本語と比べると、殆どの場合では単音節語「足」、「手」は使用されていなく、“手脚”、“手腕”のような名詞性並列構造の二音節語として用いられるからである。一方、中国語では、「生産活動や文化活動などで、全体の円滑な進行・発展の妨げとなるような要素」を表す時、“瓶颈（瓶の首）”が使用されている

のに対して、日本語では「ボトルネック」という外来語が多用されている。これは、外国語を使うと格好がよいと思う心理が働いているであろう。

7）身体のイメージは、一般に、垂直の姿勢である。上から、「頭」、「首」、「背」、「足」などがある。身体は、もちろん見える部位にとどまらない。「脳」、「内臓」、「血管」など見えない部位も身体構成上重要である。「頭」、「背」、「足」など可視的な主要部位と比較し、「内臓」など不可視的な部位をモト領域とするメタファー表現は割と少ない。その理由は、内臓は身体の内部に位置し、人々の臓器の機能に対する認知経験が足りないためと考えられる。これは、認知主体としての我々は、感覚的・具体的な経験によって作られたイメージ・スキーマを介して、より形式的・抽象的な対象を理解しているという普遍的な認知プロセスに合致するものである。

Agus Suherman Suryadimulya(2005)は、「身体語彙に満ちて日常生活における経験、特に身体で受け止めた経験を感情豊かに表現するということは、多くの言語に見られることだ」と述べた。以上のように、日中両言語における身体や生命にまつわる漢語語彙がメタファーに基づき、思考、行為などへと多岐にわたって多様な意味に拡張された事例研究を行った。このことは異なる言語間においても認知的に普遍的なものの存在を裏付ける要素になり得る可能性を示唆してくれる。

次章では、同じくモト領域を固定した研究事例として、「物質変化」を表す表現が、メタファーの理論に基づき、新たな意味に拡張するケースについて考察してみる。

第 5 章
モト領域を固定した事例研究(2)
―物質の状態変化を表す漢語語彙[70]

第 4 章（人間にまつわる用語をモト領域とするメタファー表現の分析）で見たように、「自然物および現象」の下位項目に分けられている漢語語彙のうち、「物質」を表す語彙の頻出語数が人間にまつわる「身体」と「生命」に分類されている語彙に次いで、日本語のほうは 29 語と、2 位になっており、中国語のほうは 33 語にも達している。ここで興味深いのは、「物質」項目のうち、特に注目すべき語群が一つ存在する。それは、「蒸発」をはじめとする「物質の状態変化」を表す漢語語彙である。本章では、モト領域を固定した事例の研究として、本来は「物質の状態変化」を表す「蒸発」、「沸騰」、「昇華」、「結晶」といった表現が、メタファーの理論に基づき、新たな意味に拡張する場合を主な考察対象とする。拡張した意味はもともとの言葉の意味とはどのように関わっているのか、このような多様なメタファーの基盤はどのように考えればよいのかなどについて、以下で考える。第 1 節では、問題の所在と本章の目的を明示する。第 2 節では、物質の状態変化をモト領域とするメタファーの典型用例について詳しく考察してみる。第 3 節では、語義の変化は、具体的にいつ頃、またいかなる背景のもとに生じたのであろうかという語義の推移の観点から「蒸発」[71]を取り出し、通時的分析を試みる。第 4 節では、本章の内容をまとめる。

5.1　問題の所在と本章の目的

物質は、温度や圧力の変化によって「固体」、「液体」、「気体」の 3 つ状態に変化することは化学プロセスにおける常識だとされている。例えば、「蒸発」というのは液体の表面から液体が気体になることであり、「沸騰」とは、液体

[70] この章は、李（2012）をもとに加筆・修正をしたものである。

[71] 呉(2003)は、中国で発行されている全国紙などに対する日常的な観察を通じ、新語及び復活語のうち、日本語に起源があると考えられるものを収集してリストを作成した。そのうち、「蒸発」がもともと中国語の語彙であるが、日本語の影響とみられる、従来とは異なる意味や用法が追加されている語彙だと指摘されている。そして、赤平（2006）は、日中同形語の観点から新語における比喩的用法の実態を探るべく、“新干线（新幹線）”の比喩的語義について検討する際、「本稿では、日本語と異なる比喩的語義の生まれた語として“新干线（新幹線）”一語を扱うことしかできなかったが、“蒸发（蒸発）”など日本語と同様の比喩的語義が生まれた語でも用法上差異のあるものが少なくない」と指摘されている。この語が興味深いふるまいをする語として研究者の関心を引いたことをうかがわせるため、第 4 節では「蒸発」一語に絞り、比喩的な転用された語義が定着していく過程の一断面を捉えてみようと考える。

が表面からだけでなく内部からも気体に変わることである。「蒸発」は温度と関係なく起こるが、一方、「沸騰」はある特定の温度に達したら起こる現象である。それに、固体が、液体を経ないで直接気体になることは「昇華」と呼ばれている。ところで、以下の(1a)から(6b)の表現は、いずれも基本義である「物質の状態変化」を表すものではない。

(1a)くるみのアルバイト先の「おっさん」が、借金を残して蒸発した広吉の知人であることも発覚した。(7 月 20 日)

(1b)现在，以高楼大厦为标志的新北京拔地而起，四合院一个接一个“蒸发”掉（今は、高層ビルをマークとする新しい建物が建てられ、四合院は次々と蒸発してしまった)。(10 月 22 日)

(2a)尖閣諸島事件をめぐる対応が強い批判を浴びていることは間違いないが、一方で政権は日中双方のナショナリズムの無益な沸騰や衝突を防ぐ責務も負う。(11 月 16 日)

(2b)这些贪官的胆大妄为令人瞠目结舌，也令民意沸腾（民衆は官吏の汚職行為に目を見張り、世論が沸騰した）。（8 月 24 日）

(3a)日本人にとってさえ曖昧な「武士道」を、ここまでわかりやすい形で熱い人間ドラマに昇華させた例も珍しい。(BCCWJ)

(3b) 中日人民的友好情谊在一阵阵欢笑声中得到了弘扬和升华（中日両国人民の友情が長い笑い声の中で実証され、昇華した)。(CCL)

(4a)1972 年，封闭了 20 余年的中美关系宣告解冻，美国总统尼克松应邀访华（1972 年に閉鎖された 20 年余りの中米関係の「解凍」が始まり、アメリカの大統領ニクソンが周恩来総理の招きで中国を訪問した）。(CCL)

(4b)圧縮ファイルを解凍するには、解凍のためのソフトが必要となります。(BCCWJ)

(5a)オバマ大統領は海底油田の開発許可を向こう半年間にわたり凍結し、再発防止策を作る方針を示した。(6 月 13 日)

(5b)世界银行也宣布冻结对科特迪瓦的 8 亿美元资金援助（世界銀行もコートジボワールへの 8 億ドルの資金援助を凍結することと表明した)。(CCL)

(6a) ネピアは 1614 年、20 年間にも及ぶ努力の結晶である著書「デスクリプティオ」を発表した。(BCCWJ)

(6b)对这七个问题的回答，则是来自不同领域的专家学者的共同智慧**结晶**（これらの問題の答えは、異なる領域から集まってくれる専門家や学者の共同の知恵の結晶である）。（7 月 14 日）

「蒸発」、「沸騰」、「昇華」、「結晶」などは物質の状態変化を表す語彙として定着している。「凍結」とは気温が氷点以下になり積雪や降雨の後の水溜りなどが凍りつくことであるのに対して、「解凍」とは冷凍して保存されている食料品などを常温下に置いたり電子レンジなどを使用して加熱したりして凍結状態をなくすことである。しかしながら、上述の例文を見れば分かるように、元々は「物質の状態変化」を表す語彙がメタファーという比喩に基づき、資産や資金、思想、芸術、国際関係、コンピューターと様々な分野に意味が拡張されている。本章では、日本語と中国語における「物質の状態変化」をモト領域とするこのようなメタファー表現に焦点を当て、それぞれの意味拡張に実際にどのような認知プロセスがかかわっているかについて考察する。

5.2　物質の状態変化をモト領域とするメタファーの典型用例

付録 1、付録 2 で見たように、「物質の状態変化」語群にまとめられている語彙は「蒸発」/“蒸发”、「沸騰」/“沸腾”、「昇華」/“升华”、「結晶」/“结晶”、「解凍」/“解冻”、「凍結」/“冻结”とそれぞれ 6 語が挙げられる。「物質の状態変化」を表す言葉として、日中両言語におけるこれらの漢語の「第一義」は同じであるにも関わらず、メタファーに基づき拡張された意味用法が完全に一致する場合も一致しない場合もある。以下の用例が、両言語における「物質の状態変化」を表す語彙が様々なサキ領域に写像されるのを示している。

5.2.1　拡張された意味用法が完全に一致するケース

◇「蒸発」と“蒸发”

「蒸発」に関する辞書の記述を見れば分かるように、「蒸発」の語義は大別すると、以下の二つに分けられる。

日本語：①液体がその表面から気化すること。沸点でなくても、どんな温度でも部分的に起こる。②ある日突然行方をくらまし消息が分からなくなること。

中国語：①液体表面慢慢地转化成气体。②比喻很快或突然地消失。

日中両言語における辞書の記述を比較すれば分かるように、語義の区分であろうと、配列順序であろうと、「蒸発」と“蒸发”の基本的な語義も派生的な語義も完全に一致している。それでは、「蒸発」と“蒸发”がそれぞれどのようなサキ領域に写像されるのかを見てみよう。

(7)私には、この名前も知らぬ「翻訳家」は、家族の元から蒸発してきたように思えてならなかった。(BCCWJ)

(8)マンションの消火器“蒸発”、一晩で 11 本。(2 月 6 日)

(9)なぜかはよくわからないが、大学院から教職へと進むうちに、いつしかそういう夢は蒸発してしまった。(BCCWJ)

(10)一些不法商家在收取购卡款后突然“蒸发”(不法業者の一部がカードの代金を受け取ったとたんに蒸発してしまった)。(5 月 20 日)

(11)若还按规定处罚，违规企业很有可能“人间蒸发[72]”(ルールに従って処罰するとしたら、規則違反だと判明した企業が「人間蒸発」する可能性は高い)。(1 月 28 日)

(12) 公司股价蒸发了近一半（会社の株価が半分近く蒸発してしまった)。(7 月 19 日)

「蒸発」と“蒸发”は、まず、「人間」という領域に写像される。「翻訳家が蒸発」、“不法商家突然蒸发”、“违规企业人间蒸发（規則違反だと判明された企業が人間蒸発)”を読めば分かるように、「蒸発」は人間に使用する場合、否定的なイメージが圧倒的な大部分を占めており、そして、内容に関しては、「蒸発」した当事者本人が何らかの事情で意図的に皆の視界から消えてしまうものが多く含まれている。

一般的に言って、液体と人間とは全く異なる領域のものとして捉えられる（大石,2006)。水のような液体はわりと理解しやすいものである。温度が高くなると、蒸発しやすくなる。言い換えれば、液体状態の原子或いは分子が十分なエネルギーを得て気体の状態になる。それに対して、人間は感情を持つ、把握できない生き物である。なぜ液体で可視物として存在していたものが気体と

[72] 日本語の「人間蒸発」と異なり、中国語では“人间蒸发”の“人间”は主語ではなく、場所を表す状語である。つまり、“人间”と“蒸发”は主述構造ではなく、修飾構造のフレーズで、「この世から」、「消えなくなる」意である。

いう不可視のものになってしまうことから転じて、人間が突然行方不明になってしまうことに「蒸発」を用いるのであろうか。それはメタファー理論を中心として検討することが可能であろう。

谷口（2003）は、「人の身体は容器、感情や気質は内容物」という、非常に一般的な概念メタファーがあると述べられているように、人間の身体を容器と見なし、感情をその内容物と見なしているメタファーが数多く存在している。「怒りが吐き気のようにこみ上げる」、「不安が沸き上がる」、「漠然とした不安な予感が水のように満ちる」、「胸に底潮のような悲しみと嫌悪が沸き起こる」とあるように、感情が水をはじめとする液体に喩えられる表現はしばしば見られる。言い換えれば、容器内の内容物と身体内の感情は以下のように対応している。

起点領域：容器内の内容物の量が増えすぎたり（内的圧力）、外部から力を加えられたりする（外的圧力）と、容器が破損し、内容物を収めておけなくなる

起点領域：身体内の感情の程度が増えすぎたり（内的要因）、外部から力を加えられたりする（外的要因）と、制御を失い、感情を収めておけなくなる

つまり、「嫌悪や怒りなど興奮状態になると、身体の体温が上がる」、「圧力を加えれば加えるほど嫌悪や怒りの程度が強くなり、最後に抑えきれない」と、「液体の温度が高くなると蒸発する」、「蒸発は液体の温度が高かったりするほど早く進行する」というようなプロセスが構造的に対応する。この対応関係はおおよそ表 5.1 のようにまとめることができる。

表 5.1　液体の蒸発と感情変化の対応関係

	起点領域	目標領域
第一段階	加熱の始まり	何らかの内的要因或いは外的要因が加わる
第二段階	液体の温度が上昇	逃げたくなったり消えさせてしまったりする感情の発生
第三段階	蒸発して気体化	意図的に皆の視界から消えてしまう

用例(8)、(12)を見て分かるように、「蒸発」と“蒸发”は、また、「物」と

いう領域にも写像される。「物」と言えば、大きく 2 つに分けられる。一つは空間のある部分を占め、人間の感覚で捉えることが出来る形を持つ対象である。例えば、物質、実体または物体等具体的なものが挙げられる。もう一つは、具体的な存在から離れた、人間が考えられる形を持たない対象である。 例えば、物事や事物、言葉、学問等抽象的な概念が考えられる。「マンションの消火器が蒸発」といった用例を分析すれば分かるように、＜具体的な物+「蒸発する」＞が表す命題の内容は、いずれも現金や金銭に換算できる財物がある場所からなくなることを表している。現金であろうと、財物であろうと、あくまでも人間或いは団体や組織の所有物である。日本語には、「資金が流れる」、「資金を注ぐ」、「儲けを吸い上げる」、「公的資金を注入する」のような表現が挙げられるように、金銭の場合には、団体や組織を容器に見立てた表現があると（大石 2006）指摘されてきた。言い換えれば、「物が蒸発する」という表現の背後には「団体や組織を容器に見立て、銭や財物はその容器の内容物」というメタファーが存在しているのである。

鍋島(2003)は、「水」を起点領域としたメタファーの一つとして、≪金は水である≫を挙げている。また、『日本国語大辞典』第二版には、金銭などを、あるにまかせて無駄遣いすることの喩えとして「お金を湯水のように使う」が挙げられているように、日本語には本来金の浪費を液体の湯水に喩える使い方も観察できる。そして、高橋（1993）によれば、メタファーには本来的に曖昧性が伴い、メタファーの表現と意味との間には読者の想像力で埋めなければならない亀裂が存在し、メタファーの解釈には読者の想像力が介入するとされる。例文を見れば分かるように、株価が下落することにしても、盗難の被害に遭う事件にしても、国民の生活や金融システムの安定性や経済全般に好ましくない影響を与える事実は否定できないであろう。そして、このような比喩的な転用が使われることによって、マイナスイメージを和らげたり、読者に深い印象を与えたり、或る暗示を読み取ったりすることを要求しているように思われるのであろう。

一方、「いつしかそういう夢は蒸発してしまう」を見て気がつくのは、「蒸発」との結びつきに出てくる言葉は金銭に換算できる具体的な財物に限らず、「夢」

のような抽象的な概念[73]にまで拡張しつつあることである。

Lakoff and Johnson（1980）によれば、ある概念領域を別な概念領域でもって理解するというのは、我々の認知の営みである。そして、「具体的な物」から「抽象的なモノ[74]」を理解するということはメタファーの機能の一つだとされる。とくに、私たちは、直接把握できない抽象的な概念を理解するときに、より具体性の高い事物や概念を介してメタファー的に捉えることが多い。たとえば、「米国発の信用収縮で自動車や家電製品などがバッタリ売れなくなった。世界的な需要の蒸発だ」という用例を読めば分かるように、ある複雑な構造をもつ「世界的な需要」の全体像を把握する際に、「可視物として存在していたものは温度が高くなると、気体という不可視のモノになる」という視覚に頼って、「需要の落ち込みぶり」にかかわるイメージを作り上げることができる。

野内（1998）は「隠喩は彩の中でも一番目立つ、派手な存在だろう。それに、ひどく知的で高級な印象が強い」と述べている。確かに、具体的な概念の「現金や財物」であろうと、抽象的な概念の「夢」であろうと、「液体」とのそれぞれのカテゴリーを超えて見出された「最終的に無くなる」という類似性によって、異なる二つのものが結び付けられるという大胆さと、新しい視点に気付かされるという意外性や新鮮さに私たちは強い感銘を受ける。

◇「沸騰」と“沸腾”

「沸騰」に関する辞書の記述を調べてみれば分かるように、種々の辞書の解説はかなりな一致を示すのである。「沸騰」と“沸腾”の語義は大別すると、以下のようになっている。

日本語：①煮えたつこと。液体がある温度以上に熱せられて、その蒸気圧が周囲の圧力よりも大きくなり、液体の表面だけでなく、内部からも気化する現象。②激しく、騒がしくなること。騒然となること。

中国語：①液体达到一定温度时急剧转化为气体，产生大量气泡。②比喻情绪

[73] 朝日新聞オンライン記事データベース（聞蔵Ⅱ）を調べた結果、「たちまち言葉は影も爪跡ものこさずに蒸発してしまう（2010年2月14日）」、「今は官民を問わず、世界中どこでもリーダーの大安売りだ。リーダーシップの蒸発である（2010年7月3日）」、「しかし今や世界は『善悪の境界が蒸発してしまった豊穣の貧しさ』の中にある（2010年11月22日）」に見るように、「蒸発」との結びつきに出てくるものは「言葉」、「リーダーシップ」、「善悪の境界」のような用例も見受けられる。

[74] 瀬戸（2005）に倣って、漢字の「物」は「具体的なもの」を表し、カタカナの「モノ」は「抽象的なもの」を表すことにする。

高涨。③比喻喧嚣嘈杂。

辞書の記述を見て分かるように、意味立項の配列には多少違っているが、「沸点に達し、液体の表面からだけでなく、内部からも気化が起こり、気泡がのぼりはじめる現象」という語義を第一義として挙げている点では一致している。それに、派生的な語義についての記述項目数は日本語と比較し、中国語の方は2項目とより細分化されているが、比喩的な意味が同じだと思われている。それでは、「沸騰」と“沸腾”がそれぞれどのようなサキ領域に写像されるのか、その比喩的な用法が文中で示される目立つタイプを見てみよう。

(13) 米軍当局は同じ場所で二度目の事件であり、国民世論が**沸騰**しているのに気を遣ったのか合同調査に応じた。(BCCWJ)

(14) 子どもを取り巻く「暴力文化」について話し合った全体会議は、聴衆も巻き込んで議論が**沸騰**した。(BCCWJ)

(15)长引く不况や一時の野菜高騰などでモヤシの人気が**沸騰**。(7 月 14 日)

(16)特价房的时讯和评论已很**沸腾**（特価不動産をめぐって世論が沸騰している）。(6 月 21 日)

(17)中国豪华车市场的火爆让这些世界级豪车大佬热血**沸腾**（中国の高級車市場の盛り伸びに世界級の高級車の持ち主は血が沸いた)。(12 月 14 日)

(18)智利**沸腾**了，世界各国电视机前数亿双眼睛湿润了（チリ中の国民は感情が高まり、テレビの前で世界各国の人々は目が潤んだ)。(12 月 30 日)

(19)每当夜幕降临时，武馆里就开始**沸腾**起来（夜が来るたびに時、道場が感動と喜びに沸いた)。(7 月 19 日)

「世論が沸騰する」、「議論が沸騰する」、「人気が沸騰する」といった用例を見れば分かるように、日本語の「沸騰」は何らかの話題の展開を巡り、個人や集団あるいは場の雰囲気が最高潮に盛り上がる様子を表している表現が数多く見受けられる。それに対して、中国語のほうには「世論が沸騰する」のような表現がないというわけではないが、動作主の激しい情熱を表す四字熟語“热血沸腾（血が沸く)”の使用が圧倒的に多いことが分かる。それに、国、都市や競技場などの雰囲気が盛り上がる様子を「お湯が沸騰して湯気が吹き上がる様子」に喩えた表現もうかがえる。ここで留意しておきたい点は、ある話題をめぐり、議論が高まる場合であろうと、ある空間にいる人が情熱に満ち溢れる

場合であろうと、その背景には、個人や集団といった群集が関わっている点である。

鍋島(2011)は、「駅からずっと甲子園に行く人の流れが続いている」、「人海戦術」、「陽子は人波に飲まれていった」と用例を挙げ、日本語には≪群集は水である≫と呼べるような、群集や多数の固体が集合している際に水のように捉えられることがあると指摘する。群集はいわば、多数の個体から構成される複数体である。上述の「沸騰」と“沸腾”の用例を分析すれば分かるように、我々の概念体系の中に≪群集は水である≫のような概念レベルのメタファーが存在しているからこそ、「『坂の上の雲』ブームで、福沢翁は人気沸騰中」のような言語レベルのメタファー表現が可能である。

なぜ「液体の温度が上がり、圧力で決まる一定の温度に達すると、液体の内部からの気化が起こる」ことから転じて、「議論や感情が高まる」ことに「沸騰」を用いるのであろうか。その理由として、身体的経験に基づいて身体化された文化普遍的なイメージ・スキーマが言語表現を支えていることが考えられる。言い換えれば、上述の「蒸発」と同じく、「沸騰」をモト領域とするメタファーの用例の根底にも、感情を持つ人の身体または心を容器とし、感情をその容器内の流動体とする概念メタファーがある。人間は感情に引きずられる動物であり、それに、感情の伴った行動は強力なパワーを持っているとされる。一人の人間の強い感情は周りに波及し、周りの人間にも同じ感情を持たせるほど強い力を持っていることは一般常識として容易に想像できるため、「議論が白熱化すること」と「世論が高まること」などを表現するためには、「沸騰」のような激しい水の動きとして捉えるのである。

◇「凍結」と“冻结”

「凍結」と“冻结”に関する各種辞書の記述を整理してみれば、以下の通りである。

日本語：①こおりつくこと。氷結。②資金・資産などの移動や使用を一時的に禁止すること。③物事の解決・処理を一時的に保留の状態にすること。

中国語：①液体遇冷凝结。②比喻阻止流动或变动（指人员，资金）。③比喻

暫不执行或发展。

日中両言語における辞書の記述を比較すれば分かるように、語義の区分であろうと、配列順序であろうと、「凍結」と“冻结”の基本的な語義も派生的な語義も完全に一致している。それでは、「凍結」と“冻结”がそれぞれどのようなサキ領域に写像されるのか、両者はどのような点で一致しているのかを見てみよう。

(20) 全国の朝鮮学校からの就学支援金の支給申請を受理しているが、審査を凍結しているという。(12 月 2 日)

(21) 会合後の共同記者会見で、北朝鮮指導部を対象にした資産凍結などの追加制裁を実施すると発表した。(7 月 22 日)

(22) 交流・文化施設計画の凍結、見直しなど、現市政に対する批判票の取り込みを狙った。(3 月 29 日)

(23)湖南省对所有新车购置审批一律实行“冻结”(湖南省はすべての新車を購入する審査の手続きを「凍結」することになっている)。(11 月 9 日)

(24) 因哥美签署了一项损害委国家安全利益的军事合作协议，委内瑞拉宣布冻结与哥伦比亚的关系（ベネズエラの国家安全利益を損害する軍事協力協議にコロンビアとアメリカが署名したため、ベネズエラはコロンビアとの外交関係凍結を発表した)。(7 月 25 日)

(25)据报道，布什政府 22 日已命令美国银行冻结上述 4 家分支机构的存款（報道によると、ブッシュ政権が 22 日、アメリカ銀行に上記 4 家の支店機構の預金を凍結すると命令を下した)。(CCL)

用例を見れば分かるように、「凍結」と“冻结”は、まず預金や資産といった領域に写像される。言い換えれば、金銭の流通性は水の流動性と捉えられており、資産や資金などの使用及び移動を一時禁じること、金融機関が顧客の口座について入出金等の取引を全て停止することを「凍結」に喩える。これは、鍋島 (2002)、大石(2006)で言及された「水」をモト領域としたメタファーの一つとして、≪金銭は水である≫があるという研究と一致している。日中両言語における経済用語で、生産設備などの長期資産を「固定資産」、現金や当座預金などの短期資産を「流動資産」と呼ぶのも≪金銭は水である≫の一例と言えよう。

「文化施設計画の凍結」、「審査の手続きを凍結する」といった用例を見て分かるように、「凍結」と“冻结”は、出来事という領域にも写像される。プロジェクの計画や審査のような出来事は何らかの目的をもって作り出されており、よい状態が実現しないことが、順調に進まないことで表現される。水の流動の妨げとして「凍結」が挙げられているため、「凍結」と“冻结”は出来事の実現の妨げという領域に写像されている。「外交関係の凍結」も同様、二国間の交流を水の流動性と捉えられている。

事業や資産であろうと、外交関係であろうと、凍結させることは制裁手段の一つであり、国や政府は何らかの目的を達成するために、プロジェクトの審査、事業開始の許可及び資産運用を制御することである。モト領域の「液体は低温に遇うと凍結する」という物理変化と、サキ領域の「プロジェクトや資金などは何らかの妨げを受けて正常な運行ができない」という構造とは対応していると言えるであろう。

◇「昇華」と“升华[75]”

「昇華」と“升华”の語義について、種々の辞書の解説はかなりな一致を示している。

日本語：①化学で、固体が液体にならずに、すぐ気体に、またその逆に変化する現象。②情念などがより純粋な、より高度な状態に高められること。

中国語：①固态物质不经液态直接变为气态。②比喻事物的提高和精炼。

今回の検索では、「昇華」と“升华”が最も注目すべき一組であり、メタファーによる意味拡張の用例数が 100%に達している。

(26)健吾の家族と関わるうちに、表情や言葉遣い、行動に表れてくる心を、演技として<u>昇華</u>させていく後半。(12 月 30 日)

(27)現実の問題をＳＦに<u>昇華</u>させる際の独特の作風と、がんと闘った実人生とが混じり合い、読者をとらえている。(5 月 14 日)

(28)田んぼの泥、芸術に<u>昇華</u>。(2 月 4 日)

[75] 日本語においては、「昇華」という用語は主に固体から気体への変化を指すが、気体から固体への変化を指すこともある。中国語では固体から気体への変化を“升华”、気体から固体への変化を“凝华”と呼んで区別している。

(29)友谊，在一天天的真诚帮助中积累，升华（日々の生活の中でお互いに助け合い、友情も昇華された)。(12 月 30 日)

(30) 吃苦的过程，就是灵魂升华的过程……（苦しみの過程は、魂の昇華の過程であり……)。(10 月 20 日)

小学校、中学校の理科実験においては、ヨウ素は昇華性があるようなことはよく知られているが、固体が水にならず一気に水蒸気になるという昇華現象が日常生活であまり実感されていないためか、「昇華」の第一義よりメタファーによる意味拡張のほうが多用されるのではないかと今回の分析で分かった。

「物質の状態変化」と言えば、必ずしも、「固体→液体→気体」や「気体→液体→固体」と順序よく変化するわけではない。中には、ドライアイスのように、液体の形を取らないですぐに気体になってしまうケースもある。上述の例文に明らかなように、「液体にならないで固体から気体への変化」に着目して、「更によいものにするために内容を検討したり、手を加えたりする」という特徴を受け継ぎ、メタファーによって「物事がさらに高次の状態へ一段と高められること」に意義を拡張させる。

それに、用例の内容を吟味して気が付いたのは、「昇華」は殆ど抽象的な感情領域に写像される。我々はふだん自分の考えや感情を心に思ったり、誰かに喋ったりしている。芸術の世界でも同じく、言葉の中には感情が含まれ、感情をぬきにしては内面世界を十分に描き出せない。演技であろうと、文学作品であろうと、芸術作品の一種であり、感情の体験だと思われている。それに、芸術的な創作活動には様々な工夫や苦労を伴うことが多いにもかかわらず、創作活動に携わる人間でもなければ誰でも分からないであろう。このような芸術の創造的なプロセスは「固体が液体にならずに、すぐ気体に変化する」というプロセスと一致していると言えるであろう。

◇「結晶」と“结晶”

「結晶」のプロセスをもっとも一般的に表現する言い方は、「形を成す」であろう。「雪の結晶」というように、次第に形が整って輪郭が明瞭となり、やがて自他を区別するだけの自立した内実を備えるに至るプロセスが語られている。以下は「結晶」と“结晶”の解釈に関する辞書からの抜粋である。

日本語：①原子あるいは原子団・分子・イオンが空間的に規則正しく配列した固体。②積み重ねられた努力などが一つの形をとって現れること。また、そのもの。

中国語：①物质从液态或气态形成晶体。②比喻珍贵的成果。

日中両言語における辞書の記述を見て分かるように、語義の区分であろうと、配列順序であろうと、「結晶」と“结晶”の基本的な語義も派生的な語義も完全に一致している。

(31)ゆめぴりかという新品種も、多くの人の努力の**結晶**なのである。(12 月 30 日)

(32)先人の、匠たちの、伝統の技の**結晶**が今日、空に高く聳え立つことに私は感動を覚える。(10 月 7 日)

(33)日本国憲法はいろんな場面で歯止めとなり、生活を守ってきた。21 世紀の人類が生き残るための知恵の**結晶**。(5 月 4 日)

(34)著书乃著者心血**结晶**（著書は著者の努力が見事に結晶したものである)。(12 月 30 日)

(35)优秀文化遗产是我们祖先聪明智慧的**结晶**（優秀な文化遺産は私達の祖先の英知の結晶である)。(8 月 3 日)

(36)空客天津总装公司是中欧友谊的**结晶**（エアバス天津総装会社は中国と欧州との友情の結晶である)。(9 月 15 日)

「結晶」といえば、すぐに頭に思い浮かべるのは、あの六角板状の、スキー場などでは肉眼でも見ることができる雪の結晶であろう。それに、我々の生活と密接に関わっている身近な例として、食塩や砂糖の粒なども挙げられる。規則正しい外形をとらなくても、一般には固体の物[76]という概念として捉えられている。しかしながら、上述の用例を分析して分かることは、「結晶」との結びつきに出てくる言葉は殆ど「次第に形が整う過程」という特徴を受け継ぎ、「人間の行為」を表す表現に集中していることである。

「努力の結晶」とは長い間の労力と努力が積み重なり、なんらかの形で公開された成果物が現れることである。例えば、例文(31)では、品質の最も高い「ゆ

[76] 大石亨（2006）は、「物」とは五感のすべてに訴える対象を指す。水は目に見え、叩けば音がするし、触れることも味わい匂いを嗅ぐこともできるので、物である。

めぴりか」という新品種の稲が開発されたことを指しており、(34)では、著者が長年にわたり心血を注いで書きあげた研究成果を指している。

人は時代を超えて過去のすぐれた人々と直接会うことはできないが、書物などを通じて、彼らの人生から学ぶべきものは少なくない。そのため、「先人の伝統の技の結晶」、「祖先の知恵の結晶」と表現されている。それに、愛情で結ばれた男女の間にできた子を「愛の結晶」とよく表現されているように、「友情の結晶」とは、これまで目的に向かって双方の不断の努力を積み重ね、大勢で関わったプロジェクトが成功したことを表している。「努力の結晶」、「知恵の結晶」といった表現に見るように、汗や涙をたくさん流すほど努力し、歯を食いしばって頑張った暁に生まれた成果物を表す際、「結晶」の「最初に小さいものがたくさんできて、それらがだんだん集まって大きなものになる」というプロセスと構造的に対応すると言えるであろう。

瀬戸（1995a）は、「存在のメタファー」は、あらゆる思考対象を≪もの≫化し、それに一つの形を与えるのであるとされる。上述の「努力の結晶」、「友情の結晶」といった言い回しを吟味すれば分かるように、我々はある事態や感情や抽象概念をあたかも物理的な「もの」であるかのように扱っている。言い換えれば、我々はある無定形なものに物理的な形を与え、その「もの」が私たちの意識の上で成長を遂げ、形を成す。

ここまでの分析で明らかなように、漢語6組のうち、「蒸発」/“蒸发”、「沸騰」/“沸腾”、「凍結」/“冻结”、「昇華」/“升华”、「結晶」/“结晶”といった5組は拡張された意味用法が完全に一致している。

5.2.2　拡張された意味用法が部分的に一致するケース

◇「解凍」と“解冻”

以下は「解凍」と“解冻”の解釈に関する辞書からの抜粋である。

日本語：①冷凍したものを解かしてもどすこと。②コンピューターで、圧縮されたデータを一定のアルゴリズムを用いて変換し、もとに戻すこと。

中国語：①冰冻的江河，土地融化。②解除对资金等的冻结。

辞書の記述を見て分かるように、「凍っていたものがとけること。凍ってい

たものを融かすこと」という語義を第一義として挙げている点では一致しているにもかかわらず、比喩的な意味が異なっている。日本語における「解凍」とは、圧縮処理によってデータの意味を保ったまま容量を削減されたデータを、元の状態に復元することを指しているが、中国語における“解冻”とは、資金、資産凍結等の措置を解除することである。「解凍ファイル」、「解凍ソフト」がITに関する用語に当たり、今回のデータに表れていないため、以下では中国語における用例のみを見てみよう。

(37) 目前欧元区各国正在履行相关法律程序，以便迅速**解冻**有关资金（ユーロ圏諸国は関連する法律に基づき、資金凍結の解除に取り組んでいる)。(4 月 25 日）

(38)在我看来，要**解冻**“小候鸟”的内心，可以通过组织活动，让“小候鸟”们一起“阅读城市”(私から見れば、「小渡り鳥」＜出稼ぎ労働者の子女＞の心の扉を開くツールは、活動を通じて小渡り鳥らに対する社会の更に多くの注目と関心を引き起こすことである)。(7 月 29 日）

(39) 1991 年大陆华东地区遭遇特大洪灾，其时两岸关系尚未**解冻**（1991 年に大陸の華東地域が特大洪水に見舞われた時、両岸関係 ＜台湾問題＞はまだ凍結されたままである)。(11 月 19 日）

上記の「凍結」/“冻结”と同じように、“解冻”がまず、資産や資金などの使用及び移動のようなサキ領域に写像される。≪金銭は水である≫は、5.2.1 で見た≪群集は水である≫と同様に、＜連続体＞のスキーマ[77]を基盤としている。「解冻“小候鸟”的内心」のような心の中の感情というサキ領域に写像される場合は、5.3.1 で述べたように、≪感情は水である≫[78]を基盤としている。ここでは、とりわけ“解冻”が外交関係のようなサキ領域に写像される表現を見てみよう。

鍋島(2011)は、「現場との関係が切れ」、「円滑な人間関係を構築する」、「2 人の関係を急速に接近させた」といった用例を挙げ、日本語には≪線としての関係≫、≪建物としての関係≫、≪近いものとしての関係≫のようなメタファー

[77] 鍋島(2011：106)は、水は不可算名詞を形成するもととなる概念区分上の物質であり、池上（1981）の述べる＜連続体＞の一種と考えられる。
[78] 8.2 においても分析を行うこと。

表現があると指摘している[79]。(24) の「ベネズエラはコロンビアとの外交関係凍結を発表した」、(37) の「两岸关系尚未解冻（台湾との関係はまだ凍結されたまま)」という表現に代表されるように、関係が「水」のようにも捉えられると言えよう。地球の水は常に動いており、液体から蒸気へ、さらに氷へと姿を変え、また液体へと戻るように形が変化している。水が氷になると流動性が無くなるため、国同士の交流を中断することを「凍結」に喩える。中日関係の改善に関する報道には、“破冰之旅”（氷を割る旅)、“融冰之旅”（氷を解かす旅）という言葉が多用されていた。硬い氷を割ったり融かしたりするには時間や労力などを要する。中日両国の関係修復はたやすいことではない。これも、日中両国の冷えきった政治的関係を氷に喩えるメタファー表現の一例と位置付けられるであろう。時代と共に言語が変化していくように、日本語における「解凍」は、中国語 “解冻”の影響を受け、将来的に意味的な変化が起きる可能性が潜んでいると言えるのであろう。

ここまで明らかになったのは、「物質の状態変化」というカテゴリーとしての基本的な指示範囲が日本語と中国語とではかなりの一致が見られるにもかかわらず、比喩的な転用に一定の相違が見られるということである。相違点として挙げられるのは、中国語における“解冻”は資産や資金、外交関係といった様々なサキ領域に写像されるのに対して、日本語における「解凍」の意味拡張は IT 用語に限られていることである。

5.3 「蒸発」に関する通時的分析[80]

語の変化は、語形の変化と語義の変化の両面に分かれる。語形も語義も時代の推移につれて異なった様相を示す。「蒸発」という語を比喩的に使うことは、一時的なものとしては、いつの時代にも可能であったろう。しかし、これが広

[79] 詳細は第 16 章、「関係のメタファー」を参照すること（鍋島, 2011：308～313)。

[80] 日中両国の交流が増え、距離が縮まるにつれ、中国語語彙の中にもさまざまな日本語の語彙が入ってきている。呉（2003）によれば、中国語の中に流入しつつある日本語語彙のリストには「蒸発」という漢語も収録されている。しかしながら、中国における“蒸发”についての各辞書の記述を調べてみれば分かるように、「蒸発」は元来中国語として存在していたが、90 年代までには液体の蒸発などにしか用いなかった。《现代汉语词典》(商务印书館) 2002 年には「液体または固体がその表面において気化する現象」しか挙げていないのに対して、2005 年の最新版には「動機を明らかにしないまま不意にいなくなり、家族と音信を絶ってしまうこと」というメタファーに基づいた意味合いを挙げている。そのため、日本語と比べて、中国語の「蒸発」の比喩的な転用はそれほど時間がたっていないと言えるであろう。にもかかわらず、興味深いのは、2005 年から中国では「人間蒸発」という言い回しの使用が各メディアに頻出され、『人間蒸発』という名前でドラマや映画も何本か放映されはじめている。中国語インターネット検索最大手の「百度」で“人间蒸发”というフレーズで検索すると、約 879,0000 件と表示され、比較的用例数が多いことが分かった（2014 年 4 月調べ)。

く定着したのはいつ頃であろうか。本節では、辞書の記述[81]及び「朝日新聞記事データベース」から得た同新聞 1960 年から 2010 年までの本文データに基づき、「蒸発」という語の意味の変遷について見る。

5.3.1 「蒸発」についての辞書記述

語の意味は時代とともに変遷する。辞書の機能には、国語の規範を示すという一端もあるが、最新の情報や学説などを取り入れ、必要に応じて、用例や共起語の記述、新しい意味の追加なども行われている[82]。以下は「蒸発」についての各辞書の記述である。

A　液体または固体が気化する現象。(金田一京助編『新選国語辞典』改訂版, 小学館, 1962)

B　液体がその表面で気化すること。(西尾実他編『岩波国語辞典』第 1 版, 岩波書店, 1963)

C　液体または固体の表面から気化する現象。(山田俊雄〔ほか〕編『新潮国語辞典』, 新潮社, 1965)

D　液体がその表面から気化すること。「人間～」(まるで蒸発したように、ある人が不意にいなくなり所在不明となること。)(西尾実他編『岩波国語辞典』第 2 版, 岩波書店, 1971)

E　液体が熱を加えられたりして、気体となること。〔俗に、人に気づかれずに、居なくなることにも例えられる〕(金田一京助[ほか]編『新明解国語辞典』第 2 版, 三省堂, 1974)

F　①液体がその表面で気化する現象。②人に気づかれないようにその場からいなくなること。また、家出をすることを俗に言う。(日本大辞典刊行会編『日本国語大辞典』第 1 版, 小学館, 1974)

---

[81] 外国人学習者は日本語の語彙を習得する際に、日本語辞書の助けに頼ることが多い。とりわけ日本語の国語辞書の意味記述は、語彙の意味用法を調べ、理解する上で大きな助けになる。だが、辞書の意味記述は語彙のすべての意味用法を網羅しているわけでもない。「蒸発」に関する種々の辞書の解説はかなりな一致を示すのであるが、必ずしもそうでない点も見られる。もとより、それぞれの辞書には個性があるものである。特に、比喩的な用法の場合、可能な使い方を網羅することは事実上不可能であり、そこに編者の判断による選択が働いて当然である(後藤 1993)。

[82] 語義の解説にあたっては、現在通行している意味や用法を先にし、古語としての解説をあとに記述した。また、広く一般的に用いられる語義を先に、特定の分野で行われる語義や、限られた形での用法などはあとに記した。それ以外については、原義から転義へと時代を追って記述した。(『デジタル大辞泉』)

G　①液体がその表面から気化すること。②〔比喩的に〕（ものが）ある場所からなくなること、また、（人が）消えてしまったように行方不明になること。（金田一春彦他編『学研国語大辞典』, 学習研究社, 1978）

H　蒸発〔名・スル動サ変〕夫婦のうち、夫か妻のどちらかが、何の手がかりも残さないで姿を消してしまうことを言う。やや俗語的な言い方。「中年男子の蒸発が急増している。」（藤原与一『表現類語辞典』，東京堂出版, 1985）

I　①液体がその表面から気化すること。沸点でなくても、どんな温度でも部分的に起こる。②ある日、突然、行方をくらまし、消息が分からなくなること（梅棹忠夫［ほか］監修『日本語大辞典』, 講談社, 1989）

J　①授業中、抜け出すこと。学生語。〈類義語〉エス、エスケープ。②周囲の人間にはまったく心当たりがないのに、ある日、突然、失踪すること。（米川明彦『日本俗語大辞典』，東京堂出版, 2003）

「蒸発」に関する辞書の記述を見れば分かるように、「蒸発」の語義は大別すると、①「液体がその表面から気化すること」②「突然、消息が分からなくなること」の二つに分けられる。そして、比喩的な意味の記述が追加され始めたのは 70 年代の初めごろだと分かった。それに、「蒸発」の比喩的転用は人間に限らないということも分かる。

5.3.2　年代別に見た「蒸発」の使用例

国立国語研究所『現代雑誌九十種の用語用字（1）』(1962)の語彙表はこの語を挙げていない。「蒸発」は、調査対象となった 1956 年の雑誌 90 種の 1 年分の記事の中でこの語の出現回数が 7 回に満たなかったということである[83]。

今回の調査において、「蒸発」の比喩的な使い方は最初に登場したのは 1964 年 9 月 1 日の朝刊のようである。

> ＜8 月 30 日の“テレビドキュメント・日本 1964”『人間蒸発』を見たあとのショックは、類のないものであった。＞

この用例が出た後、つまり 1964 年以降は、「人が消えてしまったように行方

[83] 佐藤喜代治編『語彙研究文献語別目録』(1983) も「蒸発」を対象とした文献をあげておらず、80 年代まで、この語が興味深いふるまいをする語として研究者の関心を引かなかったことをうかがわせる。

不明になること、また、ものがある場所からなくなること」の意味で用いられることが 80 年代頃まで一貫して多くなっている。同データベースの 1960 年～2010 年の「蒸発」の使用例を年代別に統計して表 1 に示した。

表 5.2　「朝日新聞記事データベース」における「蒸発」の使用頻度

年 代	使用例	比喩的用法	パーセント
1960.1.1～1969.12.31	111	103	92.8%
1970.1.1～1979.12.31	306	289	94.4%
1980.1.1～1989.12.31	428	249	58.2%
1990.1.1～1999.12.31	978	105	10.7%
2000.1.1～2010.12.31	1221	106	8.7%

表 5.2 を見れば分かるように、「蒸発」の比喩的な使い方は登場した 60 年代から 70 年代の終わりごろまで、使用頻度が相当高く、用例全体数の 90%以上を占めている。人が突然姿を消すという意味に使われる「蒸発」の比喩的な表現が広まったのは、故映画監督今村昌平『人間蒸発』という映画がきっかけだったと考えられるが、もっとも、調査対象の期間は失踪者の増加が社会問題化した時期を含んでおり、このような表現が何回も繰り返して使われる状況にあった[84]。

5.3.3　「蒸発」の意味別の用例数の変化

50 年間の本文データから取ったものを分析した結果、「蒸発」の比喩的な使い方はその文脈に応じてさまざまな使われ方をしているが、主として＜人間+「蒸発する」＞で文を構成する場合[85]、＜モノ+「蒸発する」＞となる場合[86]、

[84] このことは新聞をこの種の調査の資料に使う際の一つの限界を示しているため、この数字は多少割引して考えるべきであるかもしれない。

[85] “蒸発する”勤労青少年(66.12.23)新学期、新任の 30 人“蒸発”(68.4.5)“蒸発”の学校経営者を手配(69.4.12)母子三人が心中、父親の蒸発を悲しみ(70.8.13)幼女を残し母親が蒸発(71.4.21)農政局の課長補佐が“蒸発”(72.2.15)“蒸発”の母と再会、幼い姉弟、胸にすがる（73.8.25）胡娜選手の“蒸発”事件（82.7.27）六年前蒸発の韓国女優と監督、北朝鮮連れ去る（84.4.2）夫が蒸発したという妻の訴えも多い（95.10.14）中学一年女子生徒の蒸発事件を人づてに聞き（97.2.10）広島でも人間が蒸発した。原爆と 9・11 では、起きたことの意味合いがまったく違う（06.12.8）そして罪のない人たちを一瞬で蒸発させてしまっても「不可欠」と言って（09.8.8）くるみのアルバイト先の「おっさん」が、借金を残して蒸発した広吉の知人であることも発覚し（10.7.20）

[86] 下請業者が手抜き、蒸発する安全管理費（67.9.24）空の玄関で大金“蒸発”観光旅行団の七百万円（68.2.13））配給米蒸発（70.10.2）５億円の土地蒸発、開発の鹿島、住職が寺領を売り（71.4.7）「急行列車が蒸発！」鉄橋に立往生、

と二つのパターンに分けられることが判明した。

表 5.3　比喩的な転用に使われる「蒸発」の意味別の用例数の変化

		60 年代	70 年代	80 年代	90 年代	10 年代	合計
人　間		75	186	176	65	53	555
もの	具体的(物)	21	93	69	24	20	227
	抽象的(モノ)				7	18	25
合　計		96	279	245	96	91	

上記の表 5.3 のデータを見れば分かるように、「蒸発」という語の比喩的な用法が広く定着したのは 70 年代であったらしい。そして、90 年代に入ってから、「蒸発」との結びつきに出てくる言葉には抽象的なモノまで現れてきた。

籾山（2003）は、ある語が比喩的に使われるプロセスとして、個人レベルと言語共同体レベルがあると提示した。まず、個人レベルでは、ある語が新しい意味で使われることを何度も経験することによって、その意味をその語に定着したものとして習得するようになるというプロセスが考えられる。一方、言語共同体レベルでは、最初、誰かがこれまでにない意味である語を使った後、同じ言語を使う言語共同体の他のメンバーもその意味で使うようになり、最終的に多くの人がその意味をその語に定着したものとして理解し、使用するようになるプロセスが考えられる。両者の過程を経て、比喩的な意味が定着するわけである。

「蒸発」の比喩的な使い方が登場した 60 年代から 80 年代ごろまで、使用頻度が相当高かった。『昭和・平成家庭史年表』の 67 年の項を開けてみると、世相語や流行語の中に「蒸発」という言葉が載せられている。大した動機もなく、突然消えてしまう人がこの頃から増えており、当時の社会現象で大きな話題を集めていたそうだ。しかしながら、90 年代に入ると、ほかの類義語と比較して、「蒸発」の比喩的な使い方は減っていく一方である。

連絡とれず（71.5.23）選挙違反記録が蒸発、故ナセル大統領の金庫（71.5.24）荷物ごとタクシーが蒸発、来日のアルジェリア人（71.12.16）好況ムードに警鐘、第一証券の債券大量蒸発（72.5.3）麻薬蒸発、なんと 220 億円分に（73.2.1）乗務員離れた数十秒、現金車から 800 万円蒸発（84.10.13）日通で 1500 万円の貴金属蒸発、東京支店に保管中（84.12.27）国宝梵鐘蒸発事件、元住職ら 3 人逮捕（86.1.17）全国の主婦らから約 18 億円を集めたまま会社ぐるみで蒸発、倒産して被害を広げた抵当証券業者（90.7.10）

表 5.4　比喩的な転用に使われる「蒸発」の類義語の使用頻度

年代	蒸発	失踪	失跡	行方不明
1960.1.1～1969.12.31	103	58	44	448
1970.1.1～1979.12.31	289	14	151	265
1980.1.1～1989.12.31	249	35	426	3006
1990.1.1～1999.12.31	105	235	1396	12717
2000.1.1～2010.12.31	106	1597	1199	15197

90 年代以降比喩的な転用で用いられなくなる背景はいろいろ考えられる。例えば、「蒸発」は本来液体がその表面で気化する事を表す言葉なのに、それを、まるで蒸発したように、ある人が不意にいなくなり、所在不明となることとして使用されるようになる。つまり、意味合いとして２つある。逆に「失踪」等の類義語には、家を出て行方をくらますことの意味しかない。「蒸発した」と聞いて、それが本来の意味なのか、隠喩に基づき拡張された意味なのか、モノなのか、ヒトなのかは前後の文脈等を見ないと判断できないのに対して、「失踪した」なら、ヒトだとすぐ断定できる。そのような事情から、混乱を招きかねないとして使用が差し控えられたのではないであろうか。

もちろん、時間が経つにつれて、かつて流行語だった言葉がピークを過ぎてしまって、新鮮さが感じられなくなったため、使用の減少につながる可能性も考えられる。それに、「蒸発」という語は、同じ意味合いを持つ「失踪」や「行方不明」などに比べ、表現としてどことなく俗っぽく、品が落ちているため、蒸発は使われなくなり、従来蒸発が使われた場面で「失踪」や「行方不明」が使われるようになった可能性も考えられる。

また、時代の流れに照合すれば、自ずと説明がつくであろう。周知のとおり、経済成長の代償に、深刻な環境悪化に見舞われている世界各地では、干ばつや地球温暖化で水分蒸発が激しくなったため、「蒸発」の本義に使われる例文が大量に出てきて、それは、その時々のトピックを追いかけるという新聞の性格からして、新聞記事の中での分布に大きなばらつきが出てしまいがちであるということも分かる。

そして、実際の用例においても、70 年代終わり頃までには、「蒸発」或いは「～蒸発」というように、かぎかっこでくくって表記する例が圧倒的な大部分を占めている。これは、書き手の側に、この用法の比喩的な性格がまだ意識されているということである。しかし、言語そのものは、時代とともに変化するものだと言われているように、話題に上れば上るほど認知度が高くなる。「蒸発」の比喩的転用に対する認知度が高くなるにつれて、かぎかっこがいつの間にか消えてしまったのであろう。

5.4　まとめ

本章では、モト領域を固定した研究事例として、本来は「物質の状態変化」を表す「蒸発」、「沸騰」、「凍結」、「解凍」、「昇華」、「結晶」といった表現が、メタファーの理論に基づき、新たな意味に拡張する場合を主な考察対象とした。考察の結果、「物質の状態変化」を表す語彙がメタファーという比喩に基づき、資産や資金、思想、芸術、国際関係と様々な分野に意味が拡張されていることが判明した。

1)「物質の状態変化」は、ふつう、水の例で示されることが多い。鍋島 (2002) は、「水」をモト領域としたメタファーとして、≪感情は水である≫、≪言葉は水である≫、≪群集は水である≫、≪金は水である≫の４つを挙げている。今回使われたデータでも、「水」を含む液体のカテゴリーと共起する用例のうち、「日々の生活の中でお互いに助け合い、友情も昇華された」といった感情カテゴリーの語とも共起する用例、「たちまち言葉は影も爪跡ものこさずに蒸発してしまう」といった言葉カテゴリーの語とも共起する用例、「古墳の築造年代を巡る議論も沸騰している」といった群集カテゴリーの語とも共起する用例、「北朝鮮指導部を対象にした資産凍結」といった金銭カテゴリーの語とも共起する用例、従来研究で言及されたメタファーをすべて発見することができた。水は我々の生活の中で、非常に身近な存在であり、不可欠なものであるため、水に対する我々の概念が、そのまま言葉に反映されている例は多い。これは、認知主体としての我々は、より明確な輪郭を持つ具体的概念に基づいて、より抽象的な対象を理解しているという普遍的な認知プロセスに合致するものである。

2）語義が時代の推移につれて異なった様相を示すとされている。「蒸発」の比喩的な使い方は1964年から見られるものであるが、これがどのように用法を変化させて今日に至ったのか、50年間の新聞記事データベースを利用し、出現当初から現代までの出現数・出現率の変化と実際の用法の変化を観察した。その結果、失踪者の増加が社会問題化した60年代から「蒸発」の比喩的な表現が広まったが、年代を追うごとに減少していることが分かった。時代環境の変化に合わせて新たな比喩的な使い方が生み出されたり、あるいは言葉が変容したりするのは、言葉自体が人間の感覚によって生み出されているものだからと言えるであろう。

3）松本（2003）は、いずれの伝統的な説においても、メタファーは個々の語の問題として扱っている。しかし、メタファー表現の中には、個々の語の意味を超えた体系的意味拡張の実例と見なしたほうがよいものがあると指摘するように、「物質の状態変化」を表す語彙の意味拡張も体系を成している。

「貧困と格差めぐり議論が沸騰 」、「負の感情を成功への原動力に昇華させる」、“当这一喜讯传回新宁时，这座山城沸腾了（この朗報が新寧市に伝わったとき、この都市は沸騰した)”、“文学艺术创作是精神的舞蹈，是情感的升华（文学や芸術の創作は精神のダンスであり、感情の昇華である)”といった用例から、日中両言語では「人の身体は容器であり、感情や気質は内容物である」という関係を通して感情を理解している概念のレベルでのメタファーが存在することによって、「物質の状態変化」にまつわる語彙が体系的に感情の表現として使用されるのである。このような表現は、メタファー的であることに気づかないほど一般的に定着していると言えるであろう。それに、頭の中で「金は水であり、金銭の流通性は水の流動性に相当する」と捉えていることによって、「物質の状態変化」にまつわる語彙が体系的に資産や資金などの領域に写像されている。

以上の考察から明らかなように、それぞれの意味拡張はいずれもプロトタイプ的意味に密接に関わっていることと、「物質の状態変化」への認知に関しては、中国語と日本語では相違点よりも共通点が多いことが明らかになり、それは異なる民族の間に見られる論理的思考の同質性によるものだと思われる。

次の第6章では、同じくモト領域を固定した研究事例として、「住居」を表す

表現が、メタファーの理論に基づき、新たな意味に拡張するケースについて考察する。

第 6 章
モト領域を固定した事例研究(3)―住居を表す漢語語彙[87]

第 3 章（データの収集と分析）で見たように、『分類語彙表』の意味分類によって 5 分類された各用例のうち、「自然物および現象」、「人間活動―精神及び行為」項目の語彙と同じく、「生産物及び用具」に分類されている語彙の頻出語数も比較的に多い。日本語のほうでは、「生産物及び用具」が 79 語と、全体の約 29%を占めており、中国語のほうでは、44 語と、全体の約 15%を占めている。「資材」、「衣料」、「食料」、「道具」などいくつか項目に分類されているが、「住居」が最も多くを占めている。本章では、モト領域を固定した事例の研究として、本来は「住居[88]の構造」を表す「天井」、「大黒柱」、「壁」、「土台」といった表現が、メタファーの理論に基づき、新たな意味に拡張する場合を主な考察対象とする。拡張した意味はもともとの言葉の意味とはどのように関わっているのか、このような多様なメタファーの基盤はどのように考えればよいのかなどについては、以下で検討する。第 1 節では、問題の所在と本章の目的を明示する。第 2 節では、本住居をモト領域とするメタファーの典型用例について詳しく考察する。第 3 節では、本章の内容をまとめる。

6.1　問題の所在と本章の目的

典型的な「住居」について、我々はどのような知識を持っているのであろうか。「屋根があり、部屋があり、柱があり、土台がある」という、ごく常識的な知識がその構造の基本をなしていると考えられている。ところで、以下の用例から明らかなように、「住居」の主構造を構成する「土台」、「壁」、「大黒柱」であれ、副構造のうちの「天井」、「敷居」、「玄関」であれ、いずれもメタファーに基づき、様々な領域に深く浸透している。

（1a）日本経済の<u>大黒柱</u>の自動車や電機産業は、海外に製品を安く売り込める。（10 月 28 日）

（1b）书法界真正的精英和<u>顶梁柱</u>，还是中青年书法家（書道界の本当のエリ

[87] この章は、李（2013）をもとに加筆・修正をしたものである。
[88] 先行研究によっては、「住居」の代わりに「建物」が使われる場合もある。本論文では、『分類語彙表』 の分類項目に従って意味分類したため、「住居」と表記する。

ートと大黒柱は、やはり中青年の書道家である）。(9 月 6 日)

(2a) 音楽関係者が「オペラへの敷居を低くして本番も見てもらおう」と無料でミニ版を開催する。(8 月 24 日)

(2b) 随着市场进入门槛的提高，创业的成本和风险在增加（市場参入への敷居が高くなるにしたがって、起業のコストとリスクが高くなっている）。(5 月 19 日)

(3a) 九州の玄関、博多駅が改装される日が来る。(11 月 26 日)

(3b) 如果以色列总理内塔尼亚胡决定继续扩建定居点，他将关上和平的大门（イスラエルネタニヤフ首相が入植地の建設工事を引き続き拡張するとしたら、平和の扉が彼によって閉ざされることになる)。(CCL)

(4a) 今回の改革は原点を振り返りつつ、今後の通貨・金融体制について検討を進める土台となることが期待される。(11 月 21 日)

(4b)不断夯实科学发展的根基，推动经济社会又好又快发展（科学的発展の土台を固め、経済社会の持続可能な発展を促進する）。(1 月 1 日)

(5a)言葉の壁がある人の場合、受診せずに市販薬や母国から送ってもらった薬を飲んで済ませることも多い。(11 月 13 日)

(5b)在魔术师和所有观众之间，的确存在一堵神秘之“墙”（魔術師と観客との間に、確かに神秘の「壁」が一つ建てられている）。（4 月 9 日）

(6)人的一生波澜起伏，扬帆起航遇着顶头风，铆劲攀升遭遇“天花板”（人生が波乱万丈である。帆を張り出航しようとしている時に突如嵐に見舞われることがある。より良い仕事をして、もっと昇進しようとしている時に困難にぶつかる)。(9 月 2 日)

(1)の「大黒柱」/“顶梁柱”は、＜家の中央部に立っている最も太い柱＞がその本来の意味。ここでは、＜中心となり支えとなっている＞という特徴を受け継ぎ、＜日本経済全体で見ると自動車産業の占める重要な位置＞に意義が拡張される。(2)の「敷居」/“门槛”とは、本来＜門戸の内と外とを区別するために敷いた横木＞を指しているが、メタファーとしての「敷居」は、＜門の内外を分ける＞という特徴を受け継ぎ、＜オペラのチケット代などを安くしたりすることによって、富裕な市民に限らず、オペラ鑑賞を大衆の間にも浸透してほしい＞という意味を含む。(3)～(6)の「玄関」/“大门”、「土台」/“根基”、

「壁」/“墙”、“天花板”も同様、もはや文字通りの意味合いはなくなっている。

2.1.2 で見たように、Lakoff and Johnson（1980）は「構造のメタファー」、「方向付けのメタファー」、「存在のメタファー」と、3 種類の概念メタファーを提唱し、多くの例を挙げている。日本語と中国語における「住居」をモト領域とするこのようなメタファー表現はどのメタファーのカテゴリーに属するか、それぞれどのようなサキ領域に写像されるのか、それに、メタファーに基づく意味拡張の範囲及び特徴はどうなっているか。両者はどのような点で一致しているか、またはどう異なっているかなどについては、以下で考察する。

6.2　住居をモト領域とするメタファーの典型用例

付録 1 で見たように、「生産物および用具」の下位項目「住居」にまとめられている漢語語彙は、日本語のほうでは 27 語、中国語のほうでは 28 語が抽出されている。本章では住居の基礎や構造を構成する「大黒柱」/“顶梁柱”、「土台」/“根基”、「敷居」/“门槛”、「壁」/“墙”、「玄関」/“大门”、「天井」/“天花板”と 6 組の漢語語彙に焦点を当て、それぞれの意味拡張に実際にどのような認知プロセスがかかわっているかを見てみよう。

6.2.1 構造のメタファーに基づく表現

柱は建築物の構成要素となっており、「大黒柱」/“顶梁柱”は家の中心に来る柱であり、他の柱より大きいサイズが使われている。「土台」/“根基”は木造建築で、基礎の上に横にして据える材のことである。丈夫な家を作るためには、頑丈な土台が必要であるため、日常では目にしない地味な部材ではあるが、住宅の支持を受け持つ重要な部材だとされている。以下の分析に見られるように、この 2 組の漢語は主観的に認知される構造的類似性に基づき、メタファーに転換する。

◇「大黒柱」と“顶梁柱”[89]

伝統的な建築工法の中で、もっとも重要な柱が「大黒柱」だとされて

[89] 日本語では、家などの建造物で、上部を支えるために立てて使う細長い材を「柱」、「支柱」、「大黒柱」と呼ばれている。中国語も同様である。ここでは比喩的な使い方が多用される「大黒柱」に焦点を当てて考察する。

いる。それを象徴するように他の柱よりも太い材料が用いられ、柱自体が存在感と威厳に満ちている。確かに、年代の古い宮殿や古民家[90]の玄関に足を踏み入れると、最初に目に飛込んで来るのが、中央にどっしりと構える「大黒柱」である。他の柱に比べて明らかに太く、存在感のある「大黒柱」は、構造的には家の中心にあって大きな荷重を負担していることが知られる。ところで、辞書の記述がどうなっているかを調べてみよう。

日本語：①家の中央にあって、最初に立てる柱。②民家の土間と床上部との境にある特に太い柱。③転じて、家や団体の中心となり支えとなっている人。

中国語：①传统建筑中，用于支撑房屋横梁的立柱[91]。②比喻起主要作用的骨干力量。

日中両言語における辞書の記述を比較すれば分かるように、意味区分の立項は多少違っているが、「大黒柱」と“顶梁柱”の基本的な語義も派生的な語義も完全に一致していると言えるであろう。それでは、「大黒柱」と“顶梁柱”がそれぞれどのようなサキ領域に写像されるのかを用例を通して検討してみよう。

(7) 一瞬にして一家の<u>大黒柱</u>を奪われた遺族の気持ちを考えると、いたたまれない思いだった。(12 月 23 日)

(8)選抜大会以降、直球、変化球に磨きをかけた沼田投手が奈良大会で 3 完投し、<u>大黒柱</u>の役割を果たした。(8 月 7 日)

(9)この 20 年間、<u>大黒柱</u>として日本の柔道を守り、伝えてくれた。(10 月 16 日)

(10)只有信仰坚定的党员，才能在关键时刻站出来成为群众信赖的<u>顶梁柱</u>（信仰を一貫して堅持する共産党員だからこそ、肝心な時に立ち上がって民衆が信

[90] 生活スタイルなどの急激な変化に伴い、住居の様式も大きく変貌している。現代の住宅の中に大黒柱がすっかり見られなくなったのは、建築工法や様式の変化も理由にある。

[91] 中国の代表的辞書《新华词典》と《现代汉语词典》の“顶梁柱”に関する意味記述を調べて気が付いたことは、2001 年以降の修訂版には、“顶梁柱”本来の意味ではなく、圧倒的に頻度の高い「家や団体の中心となり支えとなっている人」の意味を第一義とした。遠藤(2007)は、中国語辞書における多義語の記述について述べる時には「語義項目の配列には以下の 3 通りがある。すなわち、年代順（語義派生順）、頻度順、意味関係順である。年代順とは、時間軸に沿って語義が本義から派生していく順番に語義項目を配列する方法である。頻度順は、語義項目の使用頻度の高い順に配列する。意味関係順は、中心義（あるいは基本義）をまず定め、他の意義項目を、基本義との関係性によって配列する方法である」。時代を追って“顶梁柱”の意味記述の変化を見れば分かるように、使用頻度の高い語義から配列することにより、使用者の接触頻度が高い語義にすばやくアクセスすることが可能になるという編集の主旨が読み取れる。その理由として考えられるのは、ここ数十年くらいの傾向として、マンションなどを中心に、伝統的な大黒柱が見える部屋の多くが個人の住宅から消えてきたことである。

頼できる大黒柱になれる)。(9 月 3 日)

(11)他们大都是青壮年，是家庭经济的**顶梁柱**（彼らは大半青壮年層であり、家庭の経済を支える大黒柱である)。(5 月 25 日)

(12)始终把国家利益、消费者利益、员工利益放在至高、至上的企业是国民经济的“**顶梁柱**”（常に国の利益、消費者の利益、社員の利益を優先する企業は国民経済の「大黒柱」である）。（12 月 14 日）

上述の用例を見て分かるように、中国語の場合も日本語と同じように、「大黒柱」という言葉は、団体や組織において、全体を支える中心人物を比喩して用いられることが多く、そこが家族であれば、家を支える重要な役割を果たす一家の主人を示すこととなる。

「大黒柱」とは、建物の中央に位置する場所に設置する、「家の構造の中心を担う」という重要な役割を果たすため、「大黒柱」が倒れれば、家屋は不安定になり倒壊してしまう。それと同じようなことが、家庭においても言えるのである。日本の家庭の大半において、父親が外で働き収入を得る、母親が家事全般を受け持って父親が働くのによい環境を作る。用例(7)から分かるように、一家の大黒柱[92]に万一のことがあったとき、残された家族の打撃は計り知れない。(8)のスポーツチームの場合も同様、チームを牽引するリーダーとなれる人間がいなければ、勝利をものにすることも難しい。社会的な組織である会社や企業においても言えるであろう。企業は、経済を牽引する力であり、社会の主役である。経済の先行きを大きく左右する企業は業績が悪化すると、国民生活の安定及び国民経済の円滑な運営に支障をきたす恐れがある。こうしてみると、大黒柱は単に空間的なものだけではなく、精神的にも家族や組織の象徴であると言えるであろう。

◇「土台」と“根基[93]”

日本語:①直立して上の荷重を支える材。②頼りとなる人。根幹となるもの。

---

[92] 昔から一家の主である父親のことを「一家の大黒柱」と呼んだりしてきたが、現在では、女性の社会進出、経済的自立等の社会状況の変化とともに、家族の中における主人(父親)の存在感が希薄となっていることがあるため、「一家の大黒柱」は必ずしも父親のことを指すわけではないと思われる。

[93] 『講談社中日辞典』、《新汉日辞典》の辞書記述を比較すれば分かるように、「土台」の中国語訳が“基础”、“地基”、“根基”、“根脚”と何通りもある。そして、日本語の「土台」と比較して用例がわりと少ないが、これらの訳語はすべてメタファーに基づき、他の領域に浸透しつつある。そのうち、“基础”はむしろ第一義的意味より派生的な転義としての使い方が圧倒的に多いため、日常言語化したメタファーだと言えるであろう。ここでは、“根基”に焦点を当て、分析することにする。

中国語：①建筑物的根脚,基础。 ②事物发展的根本或起点。

「土台」は、建物全体をまとめる非常に重要な部分である。「土台」が丈夫ではないと、どんなに見た目が立派な建物も倒れたり壊れたりして長持ちしない。一方、「土台」は使用される木材の中で最も地面に近く、陽もあたらず、地面から湿気の影響を受けやすいため腐朽菌が繁殖しやすい場所でもある。日中両言語における辞書の記述を比較すれば分かるように、「土台」と“根基”の基本的な語義も派生的な語義も完全に一致していると言えるであろう。それでは、「土台」と“根基”がそれぞれどのようなサキ領域に写像されるのかを典型的な用例[94]を検討してみよう。

(13) 日米両首脳は今回、同盟深化をうたう新しい共同声明のとりまとめで一致した。両国関係の土台を築き直す重要な作業となろう。(11 月 14 日)

(14) 人口減少がこのまま続けば、社会保障の制度を支える土台は細っていくばかりだ。(7 月 9 日)

(15) 教育や職業訓練の機会を充実して新産業を担う人材をつくることも、経済成長の土台を強化するのに役立つ。(7 月 2 日)

(16) 党员干部，唯有以真纯之心处世，以为民之心干事，才会心灵有归属，事业有根基（共産党員及び幹部が真心をもって世渡りをし、人民大衆のために心身を捧げてこそ心の帰属感があり、事業の土台が固まるのである)。(11 月 8 日)

(17)继续开展深入学习实践科学发展观活动，不断夯实科学发展的根基，推动经济社会又好又快发展（科学的発展観の学習・実践活動を引き続き繰り広げ、科学的に発展している土台を次第に固め、経済社会の発展をよりよくより速く推し進める)。(1 月 1 日)

(18)在谈到柬中关系时,洪森说,柬中友好关系源远流长、根基深厚（カンボジアと中国との関係に触れた時、フン・センがカンボジアと中国の友好関係は歴史が長く、すでに丈夫な土台が築かれていると語った)。(CCL)

「砂上の楼閣」という言葉があるように、 どんなに丈夫な建物でも土台がしっかりしていなくてはすぐに壊れてしまう。(13)と(18)の国と国との関係も

[94] 日本語には「研究の土台」、「学問の土台」、「新型 ID カード普及の土台」、「町の発展の土台」、「親への感謝が人生の土台」、「活動の土台」、「地域経済の土台を作る仕事」、「相互理解の土台を築く」と様々な用例が数多く見受けられる。

同様、率直に対話を行い、あらゆるレベルで相互の信頼関係の強化と緊密な政策協調が行われているからこそ、同盟の信頼性や友好関係を保つことができる。(14)に見るように、社会保障の制度を支える主役は現役世代、特に若い世代だと言われている。若い人たちが仕事に就けず、不安定な雇用で収入が安定しない状況では、制度を支えることもできない。そのため、こうした世代への育児支援、雇用支援などの様々な根本的な問題に目を向けないと、社会保障は維持できなくなる。正しい土台を据えなければ、丈夫な家が建てないのと同様、(15)の場合は、様々な面で経済の中核を担う人材の育成などを疎かにすれば、経済成長も難しくなる。

(16)と(17)でも同じ意味に読み取れる。丈夫な家づくりは、土台敷き込み工事から始まると言われている。完成すると決して目に見えない部分であるが、こういう基礎部分を丁寧に作っていくことが丈夫で安全な住居が建てられるポイントである。事業の展開や経済の発展も同じく、しっかりさせる基礎づくりが必要である。何かの物事を達成しようと、必死になって努力している初期段階を「土台を固めたりすること」に喩えるのは、住居のような建物が出来上がっていく過程との共通性から来るメタファーであると考えられる。

「大黒柱が倒れる」、「大黒柱が支える」、「土台を固める」、「土台を据える」、「土台を固定する」といった言い回しに見るように、「大黒柱」、「土台」がメタファーに転換するときには、「支える」という機能が注目されている。一般的に言えば、大地に固定されたものは、自らを支える力を必要とする。「支える[95]」は、最も一般的な語であり、ふつう力は下から上へと向かう。下の部分が少しでも崩れたり変形したりすれば、その上にあるものは歪みや不安定が生じてしまう。「歪んでいる」の上位スキーマとして「形が正しくなく曲がっている」がある。「不安定」は「状態が一定していない」という上位スキーマを持つと考えられる。私たちの認識の上で、「安定」が通常の状態であり、「不安定」が異常な状態であると受け取られているため、整った形は安定性などのプラスの価値を生むであろう。

Lakoff and Johnson（1980)は、構造メタファーである≪ARGUMENT IS WAR

[95] 藤堂（1965）によれば、「支える」の「支」は象形文字であり、「又」（手）の上に「十」（竹や木の枝）が乗っていて、「支える」の意味を表す。

（議論は戦争である）≫を説明する際に、この構造メタファーでは、その類似性が経験のゲシュタルトの構造に見出されるとしている。すなわち、経験を通して主観的に認知される類似性であり、2 つの事物に客観的に観察することができる特性に基づく「目玉焼き」のような類似性とは異なるという。すでに述べたことから明らかなように、「大黒柱」はスポーツチームや家庭経済と、「土台」は経済の成長や国家と国家の間に生じる様々な関係との間にも客観的類似性は存在しないにもかかわらず、「支えること、支えられること」という構造上の類似性が見出される。すなわち、「大黒柱」、「土台」がメタファーに転換するときに、「支える」という共通する特徴が受け継がれている。このようなメタファーの基盤はどのように考えればよいのかなどについて、以下で考える。

2.1.2 で見たように、Grady(1997)によって提唱された「プライマリー・メタファー」のうちには、≪VIABILITY IS ERECTNESS（正しく機能することは、まっすぐ立つことである）≫がある[96]。縦に立つ「大黒柱」はしっかりしていて、安定しているほど、住居の永続性は高い。大黒柱で支えられている家のように 、信頼や協調があるからこそ国と国との関係は継続を維持できていることには間違いない。それに、鍋島（2011）は、モラルという抽象的概念を説明する際に、≪善は直であり、悪は曲であり≫を取り上げ、「標準的、定形、理想形、数学的な形を美しいと感じることは、整った形を善と捉える認識につながる」と指摘されている。このように考えれば、「大黒柱」であろうと、「土台」であろうと、安定している整った形を良いと認識する能力が人間には生まれながらに備わっていると思われる。「大黒柱」、「土台」がメタファーに転換するときに、これらの概念メタファーによって基盤が与えられていると言えるであろう。

6.2.2　存在のメタファーに基づく表現

「存在のメタファー」の中に、「容器のメタファー」と呼ばれているものがある。私たちの日常生活の中では、文字通りの容器がたくさんある。例えば、茶碗や鍋、釜のようなものは、もっとも容器らしい容器であろう。文明批評家

[96] The new regime has been *toppled* by defectors within the ruling party.（新体制は与党内の離反者によって崩れ落ちた）のような例が挙げられている。

のマンフォード（1971:47）は「入れ物」という概念の重要性に触れ、「最初に炉、穴、わな、網、後には籠、箱、ウシ小屋、家、さらに後には貯水池、運河、都市のような集団的容器があった」ことを強調している。このように考えれば、住居は壁などに囲まれた空間であるため、一種の「容器」として捉えられるであろう。

◇「壁」と“墻”

「壁」は、住居の主構造を構成する建築の三要素の一つだと呼ばれる。垂直方向に立ち、建物の外周を囲んで内と外の空間を区切るものと、建物内部を仕切り部屋を作るものに分けられている。「壁」の最も大きな機能は「遮断」である。外周の「壁」では風雨や断熱、間仕切り「壁」では音などの外部からの侵入を防ぐ目的で設けられることが多い。家の「壁」であろうと、かつて存在した町の「壁」であろうと、「壁」の外側からの視点と、内側からの視点とでは、そこから想像されるものが異なるであろう。「壁」と“墻”に関する辞書の記述は以下のようになっている。

日本語：①外部との接触を絶つように家のまわりを囲い、また独立を確保するために部屋を仕切ったもの。昔は多く、土を練って作った。②それを突き破らないと先へ進むことが出来ない障害。

中国語：砖、石或土等筑成的屏障或外围。

どこで誰が聞き耳を立てているか分からないことを警戒して生まれた諺として、日中両言語には昔から「壁に耳あり障子に目あり（隔墻有耳）」という言い回しがある。しかしながら、辞書の記述を見て分かるように、「家の四方を囲い、または室と室の隔てとするもの」という語義を第一義として挙げている点では日本語と中国語とでは一致しているが、中国語の辞書には派生的な語義について一切記述されていない。以下、用例の分析を通して、「壁」がメタファーに転換するときには、どのようなイメージが生じるのであろうかを検討してみよう。

(19) 日中両国間の大きな懸案である東シナ海のガス田共同開発問題で、早急に条約締結交渉入りすることが合意された。締結までに乗り越えなければならない<u>壁</u>は多かろうが、道筋がひとまずついたことを評価する。（6 月 1 日）

(20)難解な漢字や用語が出てくる国家試験が壁になり、外国人の看護師や介護福祉士の受け入れにブレーキがかかっている。(8 月 25 日)

(21)インフルエンザ菌 B 型と肺炎球菌のワクチンは、世界中で小児の命を救っている。日本でもやっと承認されたものの、任意接種のために高い費用が普及の壁になっている。（9 月 8 日）

(22)在慈善事业中，也存在这样的“社会之墙”：对慈善机构不信任，阻挡了爱心人士的脚步；善款运用不透明，消解了人们的捐助热情（慈善事業の中で「社会の壁」がある。義援金の使途への不信感から、慈善事業への募金を敬遠する）。（2 月 1 日）

(23)高交会树起知识产权保护之“墙”（中国国際ハイテク成果交易会に、知的財産権保護の「壁」が一つ建てられている）。（CCL）

(19)の例文に見られるように、東シナ海の資源問題は、排他的経済水域の線引きがからんで、日中双方のナショナリズムを刺激しやすいため、共同開発や出資をめぐる条約締結交渉の議論が容易でないことは十分に予想されることを「乗り越えなければならない壁」とメタファー表現で語られる。(20)の「国家試験が壁になる」、(21)の「高い費用が普及の壁になる」も同じく、「前進を阻むもの、進展の妨げとなるもの」という障害の意味で用いられている。

「お客様との間に壁を作るな」、「保守の壁」、「言葉の壁」、「文化の壁」、「制度の壁」、「心の壁」、「克服可能な壁」など、日本語の新聞には、毎日と言ってよいほど「壁」という表現が使われている。「お客様との間に壁を作るな」とは、容器としての内と外の関係性が、人間関係の描写に拡張されている代表的な用例と言えるであろう。「壁」が内と外とを隔て、外界からの影響を遮断するものであることから、転じて心理的あるいは象徴的に何かを隔てるもの、あるいは行く手に立ちふさがる大きな障害を比喩的に「壁」と呼ばれているであろう。

一方、日本語の用例は数多く存在するのに対して、中国語の場合は、「壁」がメタファーに転換する用例がわずかしか見当たらない[97]。それに、(22)、(23)

[97] 中国語では、象徴的に何かを隔てるものを表す時には“～障碍”が使われている。“制度障碍（制度の壁）”、“语言障碍（言葉の壁）”、“心灵障碍（心の壁）”、“无形的障碍（形のない壁）”、“体制障碍（体制の壁）”、“环境障碍（環境の壁）”、“行政障碍（行政の壁）”、“中日关系的障碍（中日関係の壁）”、“沟通障碍（意思疎通の壁）”といった様々な言い回しが数多く見受けられる。

の例文に見られるように、かぎかっこでくくって表記されており、“保护之墙（保護の壁）”のような“之”字構文[98]で表されている。意味としては、「隔て」というイメージが伴っているのであろう。日本語にも「ベルリンの壁」、「東西の壁」に象徴される「隔て」の意味合いが用いられるが、かなり限られた表現なので、日本語の「壁」の場合は、「内に入るのを妨げるもの」という面にのみ、中国語の“墙（壁）”場合は、「隔て」という面にのみ、視点を当てて用いられると言えるであろう。

人間は、昔から内なる安らぎの空間を確保しようとして、明瞭な境界を設定する努力を積極的にしてきた。その代表的な例としては、「住居」が挙げられる。壁で囲えば、外部から守られた安息感を生んでいる。言い換えれば、「住居」は守られた空間であり、安心の空間である。内側の人にとっては、それは人々を保護するものであり、人々のプライバシーを守ってくれるものである。しかし、壁の外側のものにとっては、視界を遮り、障壁となるものである。このように見てくれば、「壁」がメタファーに転換する時には、「住居という容器の内外を限る」という特徴が受け継がれていると言えるであろう。

◇「敷居」と“门槛”

「敷居」とは、元来は門の内外を限るもので、昔の民家や建物の出入り口は敷居で区切られていたが、今では、石や金属で区切られているか敷居がない建物が多くなってきた。「敷居」と“门槛”に関する辞書の記述は以下のようになっている。

日本語：部屋の境の戸・障子・襖の下にあって、それをあけたてする為の溝の付いた横木。

中国語：①门框下部挨着地面的横木，也有石头的。②比喻标准或条件。③窍门，也指窍门或占便宜的本领。

辞書の記述を比較すれば分かるように、「家の門や玄関、部屋の出入口などの引き戸や障子、ふすまなどを開け閉めするために床に設置される溝のついた横木のこと」という語義を第一義として挙げている点では日本語と中国語とでは一致しているが、日本語の辞書には派生的な語義について記述されていない。

[98] “之”は現代中国語の“的”に相当し、“的”の使い方は日本語の「の」と非常に近い。基本的には所属関係を表す。

一方、慣用句「敷居が高い[99]」を辞書で調べると、「相手に不義理をしたり、また、面目のないことがあったりするために、その人の家に行きにくくなる。また、その人に会いにくくなる状態をいう語」などと書いてある。「敷居」と“门槛”がそれぞれどのようなサキ領域に写像されるのか、その比喩的な用法が文中で示される目立つタイプを見てみよう。

(24) 大学の敷居をゼロにしたい。(10 月 26 日)

(25) 専門用語をならべて敷居を高くするのではなく、平易な話しことばで語りかける必要がある。(BCCWJ)

(26) 敷居を下げて運動苦手の人にこそ、スポーツに親しんでほしい。(BCCWJ)

(27) 在一些本应由大专生甚至是职高毕业生就可以胜任的岗位上，非得抬高学历门槛，实质是人才的浪费(本来は短大生や専門高校の卒業生が適任できるポストなのに、学歴の敷居を高くすることは、人材をムダに消耗させるだけである）。(11 月 4 日)

(28) 据调查，能跨入贵族学校门槛的，如今多为私营业主、外企职员、公司“白领”的子女（調査によると、貴族学校の敷居を跨いだ人には、自営業、外資企業の社員、会社のホワイトカラーの子女が多いとのことだ)。(12 月 30 日)

(29) 欧盟此时降低反倾销的门槛，是为了适应欧盟扩大后成员国增加的现实需要（EU が反ダンピングの敷居を引き下げることは、EU 加盟国の増加に伴う需要に適応するためである)。(12 月 14 日)

(30) 产业升级面临资金、技术门槛，举步维艰。(産業のグレードアップは資金や技術確保などのハードルが依然として高くて、行き詰まっている)。(7 月 19 日)

日本語の場合から見てゆこう。(24)～(26)などの言い回しに明らかなように、「敷居」の派生的な語義について日本語の辞書には記述されていないにもかかわらず、「敷居をゼロにする」、「敷居を低くする」、「敷居を高くする」、「敷居を下げる」といった用例が数多く見受けられる。なお、これらの表現は、いずれも慣用句「敷居が高い」を元とする表現である。例えば、(24)の「大学の敷居をゼロにする」とは、近隣地域社会と大学の教職員・学生の間には、目

[99] 文化庁が発表した平成 20 年度「国語に関する世論調査」では、「あそこは敷居が高い」を、本来の意味である「相手に不義理などをしてしまい、行きにくい」で使う人が 42.1 パーセント、間違った意味「高級すぎたり、上品すぎたりして、入りにくい」で使う人が 45.6 パーセントという逆転した結果が出ている(佐々木：2013)。

に見えない境界が存在している。そこで、その乖離をできる限り取り除くように、関連事業を進めてほしいという意味を指す。(25)の「敷居を高くする」とは、専門学術用語を用いず、一般大衆に理解できる平易な言葉や例で説明したものを指している。(26)の「敷居を下げる」とは、プロ志向の専門のジムは運動強度などを下げたりして、プロ以外の一般の方にも気軽に参加できる雰囲気づくりをしてほしいということである。

(27)～(30)の用例を見て分かるように、中国語の場合も日本語と同じような意味で“门槛”が比喩的に用いられている。学歴と仕事能力に関係があると言えばあるが、絶対的な要件ではない。なぜなら、学歴が高くても仕事ができない者もいれば、そうでなくても仕事ができる者もいる。「敷居」が高ければ、跨ぐのも容易でないところから、(27)の例文に見られるように、求人する際に設けられる学歴による制限を「敷居を高くする」と表現される。 (28)の場合は、教育費の高さによる制限を「敷居を高くする」と表現される。中国の親は、我が子がスタートラインで出遅れることのないよう、先を争うように子供を私立のいわゆる「貴族学校（お金持ち学校)」に通わせている。学校は豪華な施設と高い水準の教育を売り物にしており、教育費も驚くほど高額であるため、富裕層の子供でもなければこのような学校にはなかなか通えない。(29)、(30)の例文も同じく、反ダンピング関税をWTO水準まで引き下げることや高水準の技術制限を「敷居」に見立てて理解する。

日中両言語には他人の住居に入ることを、「敷居をまたぐ」という使われ方がある。このように見てくれば、「敷居」が室内空間を隔てる境界としての要素を持っている。「敷居」がメタファーに転換するときには、内と外とを隔てる境界を表現するために用いた用例も見受けられるし、「なんらかのハードルが立ちはだかる」のように「ハードル」を「障害」、「障壁」を意味する比喩表現として用いる用例も見受けられる。

鍋島（2011）は、「事象構造メタファー」[100]を記述している時には、移動が変化で、目的が着点である世界では、よい状態が実現しないことが、順調に進まないことで表現される。移動の妨げとしては重要な具体例が「重荷は困難」

[100]「事象構造メタファー（ESM）」とは、線と移動、力及び人間の移動に関連した複合領域をモト領域とするメタファーである。詳細についてはLakoff(1993)、鍋島（2011）を参照する。

と「障害物は困難」と二つ挙げられる。このような観点からすれば、「壁」、「敷居」が障害物の一種であり、そして、障害物は困難の具現化したものと言えるのであろう。言い換えれば、「壁」、「敷居」がメタファーに転換する際、その背後には「事象構造メタファー」の変種の一つと考えられる≪活動は移動である≫という概念メタファーが存在しているのである。

◇「玄関[101]」と“大门”

「玄関」とは、建物に入ったり出たりする時に通る主要な出入口、また出入口の部分に設けられる空間を指している。「玄関」は内と外をつなぐ場所であるとともに、外から家の中を守る結界でもある。「玄関」と“大门”に関する辞書の記述を見てみよう。

日本語：①建物の最も主要な入口。②〔禅寺で〕客殿に入る門。

中国語：大的门，特指整个建筑物临街的一道主要的门。

辞書の記述を比較すれば明らかなように、日中両言語における辞書には派生した比喩的な意味についてはまったく記述されていない[102]。にもかかわらず、以下のような用例が数多く見受けられる。

(31)この万博の空の<u>玄関</u>として、急ピッチで建設が進められた中部国際空港も2月17日に開港しました（BCCWJ)。

(32)中国では、黄海は「<u>玄関</u>」で、南シナ海は「客間」とたとえられることがあるほどだ。(8月19日)

(33)東京・銀座の<u>玄関</u>として一世を風靡した、有楽町マリオンの西武有楽町店が今年末に閉店する。(3月2日)

---

[101]「玄関」はもともと中国語の語彙である。古代漢語ではそもそも仏教の禅宗の言葉で、当初は宗教的な社会に限られた存在であった。「玄関」というものが、広く一般的に設けられるようになったのは明治以降のことだと言われる。以後、住宅の様式の変遷に伴い、玄関も形や役割を大きく変えてきた。一方、中国では、改革開放の進展に伴う経済社会の大きな変化の中で、日本語に起源があるとみられる新語や新しい使い方が数多く誕生している。“玄关”がその一つである。日本語の影響で、現在は中国語にも「ドアを入ったところの小さな空間」の意で使用されている表現が次第に見受けられるようになってきた。例えば、“她发现小妹妹正坐在门口的<u>玄关</u>处痛哭（女の子が入口の玄関のところに座って泣いているのに気が付いた)”（≪文汇报≫10月13日)。なお、建物の開口部を表す表現として用いられる漢語語彙には、「玄関」のほか、「扉」、「門戸」、「門」といった類義語があり、これらの語彙が類似した意味を持つメタファーとして用いられることがある。例えば、「日韓自由貿易の意義は、両国経済を活性化することだけではない。もっと大きな成果として期待できるのは、その先にある東アジア自由貿易圏への<u>扉</u>を開くことである（8月20日)」、「国や地域をかたちづくる構成員の資格や権利をどう定め、どれだけ移民に<u>門戸</u>を開き、多様性をコントロールしつつどう活力に変えるか（7月5日)」などが挙げられる。しかし、「扉」、「門戸」などは一般に建物やその内部の部屋の出入り口を指すほか、自動車、鉄道車両、航空機などの乗り物の出入口にも使われているため、ここでは、「玄関」に焦点を当て、分析することにする。

[102]「玄関」の類義語に当たる「扉」、「門戸」の比喩的な意味に関して、同辞書にも記述されていない。

(34)当你打开心灵的大门，把周围人的冷暖饥饱、快乐痛苦，纳入胸中时，个人的痛苦就会减少（あなたが心の扉[103]を開け、周りの人々の喜怒哀楽を読み取ることができれば、あなた個人の苦痛も減少される）。(9 月 27 日)

(35) 俄罗斯跨入世贸组织的大门虽已不再是遥遥无期,但仍然有相当长的路要走（ロシアが加盟国として正式に WTO への加盟が承認されるまでそれほど長く続くとは思わないものの、依然として長い道のりがある)。(CCL)

(36)1972 年，他又协助毛泽东打开了中美关系的大门，并实现了中日关系正常化（1972 年、彼は毛沢東と協力して中米関係の扉を開けた。そして中日両国が国交正常化を実現した)。(CCL)

(37)15 年前，埃及同以色列签订了埃以和约，打开了中东和平的大门（15 年前、エジプトとイスラエルの間で平和条約が締結され、中東和平の扉が開かれた）。(CCL)

人間は住居を建てる。しかし、その中にひき籠もってしまうわけではない。窓をうがち、玄関をつくり、内部と外部を結ぶ通路をしつらえる。「玄関」は、人間のいる空間とその外側にある一切のものとの間の関節をなし、そのことによって、外部と内部を区別してきたため、「他人との繋がりの場である」という特徴を受け継ぎ、「玄関」が様々な領域へ意義が拡張される。

(31)の空港がその土地への航空機の入り口になることから、中部国際空港を「万博の空の玄関」と喩えられている。(32)では、黄海の背後には北京、天津、青島、大連などの主要都市がある。中国にとって、黄海は戦略上において極めて重要な海であるため、「中国の玄関口である黄海」という比喩的な使い方が見受けられる[104]。(33)の場合は、立地条件が良い都心の百貨店の西武有楽町店を建物の玄関口に喩えるのも、身近な空間の感覚と言えるであろう。(31) ～(33)の例文を読めば分かるように、国家、地域、都市等を「容器」に喩えるとしたら、近海、空港、駅は「容器」の出入り口に相当すると言えるであろう。

(34)の「心の扉を開ける」というメタファーのイメージは、その扉の向こうに広がる世界と結びついているように思える。(35)では、WTOという国際組織

[103] 辞書には、「玄関」の訳語には“大门”と、“大门”の訳語には「玄関」と記載されているが、実例の中では“大门”の訳語として「玄関」より「扉」のほうがもっとも文脈に合うと思われる。

[104] 国家という境界を持った領域の中に国民がいるという意味で考えれば、「容器」のスキーマも関連すると言えるであろう。

を建物に喩え、WTOへの加盟が承認されることを建物の中に入ることに見立てて理解する。(36)、(37)は国と国との関係を喩えで表現しようとする発想があることを示している。開かれた扉は、内側に入れるのを示し、歓待が象徴されるのに対して、閉じられた扉は拒否というイメージが喚起されるため、二国間関係を住居の入口の扉として捉えた。

私たちは外界と境界を接する表面（皮膚）と内外（肉体の内と外）という方向性をもつひとつの「容器」なのである。これを他の物体にも投影し、「容器」とみなすことができる。土地の領域についていえば、森の中(in)や外に(out of)いるという表現ができる（Lakoff and Johnson 1980）。建物は、通常鑑賞用に作られているのではなく、人間がそこに住んだり、或いはその中で何らかの活動を行ったりする実用的な場所である。ゆえに、「住居」という部類に属するものは、いわゆる辞書で定義される「物を入れる器」という字義どおりの「容器」と異なっているにもかかわらず、外界から人間が中で活動できる特別な空間を作り出し、それを人間側に与えてくれるという意図的なアフォーダンスという点から考えると、一種の抽象化された「容器」であると言える。主要な出入口の「玄関」であろうと、空間を仕切り区画を形成するために設けられる「壁」であろうと、あるいはふすまなどを開け閉めするために床に設置される溝のついた「敷居」であろうと、「住居の内外を限る」という共通する特徴が受け継がれている。

ここまでに明らかになったのは、このタイプのメタファーは、人間が入口などを経由して建物の中に入ってくるという具体的な概念がモト領域となって、抽象的な対象である状況、国際関係、精神(心)を喩えで表現しようとする発想があることを示している。場所の概念は我々がそもそもある場所にある存在であるという解釈から出てくると考えられ、身近で自然な認知であると言えるであろう。

6.2.3　方向付けのメタファーに基づく表現

メタファーとは類似性に基づいて、ある対象を別な領域のものごとに喩えて理解する認知能力であり、その中には「上下」、「内外」、「前後」など空間の方向性を用いたメタファーが多く見られる。これは、人間の身体が肉体構

造・成長過程・運動性などの点でそうした方向性を持っていること、その身体が物理的な環境と相互作用することから起因する（Lakoff　and Johnson 1980）。下記の「天井」がメタファーに転換する用例を考察してみれば分かるように、このような方向性は、次のような概念を写像したメタファーを構成する。≪量が多いこと≫と≪優位に立つこと、支配すること≫は一貫して「上」に対応付けられ、概念的に逆の≪量が少ないこと≫と≪従属すること、支配されること≫は、方向的に逆の「下」に一貫して対応付けられる[105]。

◇「天井」と“天花板”

日本語：①室内の上部の小屋組または床組を隠すために張った板壁。②物の内部の最も高い所。③相場の最高値。

中国語：室内的天棚，有的上面有雕刻或彩绘。

「天井」は住居の上部にあり、建築様式によって「天井」の形状や装飾など様々な種類があるが、上下階の遮音性能を高めるという遮る機能と、インテリアデザインとして美観的な機能が強調されるのは共通認識となった。日中両言語における辞書の記述を比較すれば分かるように、意味区分の立項は違っているが、「屋根裏をおおい隠し、塵よけ、保温のためなどに板を室内の上部に張ったもの」という語義を第一義として挙げている点では日本語と中国語とではかなり一致している。しかし、派生的な語義についての記述が異なっている。日本語の辞書には派生的な語義が 2 項目記述されているのに対して、中国語の辞書には派生的な語義について一切記述されていない。日本語では、「箱の天井」で箱の内部の最も高い所を指す。それに、物価や相場などが高騰し、最高値をどこまでも更新していくことを青空に喩えて「青天井」、「天井知らず」というように、物価や相場などの一番高い所のことを比喩的に「天井」という。さて、「天井」がメタファーに転換するときには、どのような意味が生じるのであろうかを見てみよう。

(38) 人の欲望は<u>天井知らず</u>。（11 月 16 日）

(39) 起伏に富んだ曲が進むほどに、<u>天井知らず</u>の高揚感が生まれ、会場が揺

[105] 英語には、 I couldn't get **on top of** the whole situation.（私はすぐに全体の状況を把握することができなかった）；The bank was placed **under** state control.（その銀行は国の管理下に置かれた）といった用例が挙げられる。

れた。(6 月 18 日)

(40) “マルス”プロジェクトもその例にもとるものではなかった。その背景に、列車の数の天井知らずの増加があった。(BCCWJ)

(41)我们的能源开发到底要多少？有人主张应该设立“天花板”（エネルギー開発の上限値の設定はどうしたらいいのか。「天井」を張るべきだと主張する人がいる)。(11 月 26 日)

(42)随着影院建设的加快，电影票价可能已经到了“天花板”（映画館が相次いで誕生されるに伴い、映画料金が最高額に達した可能性がある)。(7 月 9 日)

(43)从涨工资到职位晋升，从户籍制度到收入分配制度，到处都有或明或暗的“天花板”（昇給や昇進の場合であれ、戸籍制度や所得分配制度の改革であれ、至る所には「天井」が張られている)。(9 月 16 日)

(44)这就打破了以往在技工院校，教师副高职称就到顶的“天花板”限制（これは技術学校の教師が副教授以上の肩書を持つことができないという従来の上限を破った)。(9 月 2 日)

日本語の用例を考察してみれば分かるように、「天井」がメタファーに転換するときには、ほとんどと言っていいほど「天井知らず」という慣用句の形をもって、際限がないという意味を表す。ただし、ここで注目したいのは、「天井知らず」の語義解釈が「相場や物価の上昇」に限定されているが、欲望や高揚感のような抽象的な領域に写像される用例も見受けられる。

一方、中国語の辞書には派生的な語義について記述されていないにもかかわらず、“天花板”が社会的地位、技術・能力、状態、数・量とメタファーに転換する用例が数多く見受けられる。それに、かぎかっこでくくって表記する例が圧倒的な大部分を占めている。

構造から言えば、「天井」は建物の上部にあり、どのくらいの高さが適しているかは空間の広さにもよるが、一般的に言えば、高い「天井」は、部屋を広く見せる開放感があるため、「天井」が高い場所のほうが、人間はよりクリエイティブになるのに対して、低い「天井」の部屋にいると圧迫感を感じ始めるのではないか。機能から言えば、「天井」には室内の温度調整あるいは明るさの確保、外部からの音の遮断、収納、屋根裏からの塵埃の落下防止といった様々な機能が考えられる。(41)～(44)の用例を分析して分かるように、「天井」が

メタファーに転換するときには、写像される特性は空間位置と機能と二通りに分けられている。

(41)の場合は、風力や水力、太陽光など、どれだけ使ってもなくならない自然エネルギーとは異なり、石油や石炭、天然ガスなどのエネルギーがいつかは無くなってしまう限りある大切な資源である。過度の採掘を防ぐためには、資源の種類別に一年ごとに採掘をしていい量の上限を定めることを表す時には「天井を張る」と見立てられる。(42)も同じく、最高額に達した映画料金を「天井」に喩えられている。(41)と(42)に見るように、「天井は建物の上部にある」という空間位置に注目して、「エネルギー開発の最上限と映画料金の最高額」に意義をメタファー拡張させる。ここから分かるように、日本語と同様、中国語でも「多少」という概念は「上下」を通してメタファー的に理解されうる。言い換えれば、「量が多いことは上、量が少ないことは下[106]」という経験的基盤と密接に結びついている。一方、(43)と(44)の場合は、「天井」の遮る機能が強調されていると言えるであろう。戸籍制度や所得分配制度などの改革を深化させることは、十分困難な系統的プロセスである。改革を成功に導くためには、いくつかのハードルをうまく越えていく必要があるため、改革に立ちふさがる制度上などの障害を「天井」に見立てて理解する。

日本と同様、中国の教師でも同じく上下関係がはっきりした職階制を採っている。昇給であろうと、昇進であろうと、業績評価の基準が厳しいため、より上の地位に昇進するまでのハードルが高いとされている。このように見てくれれば、我々は「地位」などの社会的概念を「上下」という人間の肉体感覚に根差した単純な概念によって理解されている。言い換えれば、昇進までのハードル[107]を「天井」に喩える表現は「高い地位は上、低い地位は下」という経験的基盤と密接に結びついている。

「上下」という位置関係が様々な概念のモト領域となることは Lakoff and Johnson（1980）でも詳細に記述されており、「住居」をモト領域とするメタ

[106] 左(2007)は、「(1a) 毎年自動車の生産台数が上昇し続けている（1b）毎年汽车的产量不断上升」といった様々な例文を挙げ、日本語と中国語における「上」と「下」のメタファーの類型及び分析を試みた。

[107] 日本語には「ガラスの天井」という表現がある。「ガラスの天井」とは、当初は女性がいくら頑張っても、能力があっても、組織のトップになることを阻む「見えない障害」があるという意味で、女性の社会進出が本格的に始まった1980年代に使われ始めた言葉であるが、現在は男女を問わずマイノリティの地位向上を阻む壁としても用いられるようになった。

ファー表現に関して、「上下」という方向性が関わっていても不思議ではない。

6.3　まとめ

本章では、モト領域を固定した研究の一事例として、本来は「住居」の主構造を構成する「土台」、「壁」、「大黒柱」、副構造のうちの「天井」、「敷居」、「玄関」といった表現が、メタファーの理論に基づき、新たな意味に拡張する場合を主な考察対象とした。考察の結果、日本語と中国語における「住居」のメタファー表現が非常に豊富であるということが判明した。

1)「住居」は私たちが社会生活を営むうえで必要不可欠な施設である。我々にとって極めて身近なものであり、認知しやすいものであるため、本来は「住居」を表す言葉が人間の営みや状態などを表現するように様々な多義性を持ち始めている。「チームの大黒柱は主将のＭＦ朴智星選手」、「町の発展の土台」といった言い回しに見るように、「大黒柱」、「土台」がメタファーに転換するときに、「支えること、支えられること」という構造上の類似性が見出される。一方、存在のメタファーの一種である「容器のメタファー」は我々が人為的に境界を設定したり、分類したり、また識別する経験を概念構造化するのに重要な役割を果たしているため、「保険料の引き上げは壁に突き当たりつつある」、「芸術の敷居を下げる」、「静岡の空の玄関」といったようなメタファー表現が数多く見受けられる。“土地改革的天花板（土地改革の天井）”、“教师副高职称就到顶的“天花板”限制（教師が副教授以上の肩書を持つことができない）” といった言い回しに見るように、「天井」がメタファーに転換する際、その背後には≪量が多いことは上、量が少ないことは下≫と≪優位に立つこと、支配することは上、従属すること、支配されることは下≫という方向付けのメタファーが存在しているのである。「住居」をモト領域とするタファー表現の基盤はおおよそ以下の表6.1のようにまとめることができるであろう。

表 6.1 「住居」をモト領域とするメタファー表現の基盤

メタファーの種類	構造のメタファー		存在のメタファー			方向付けのメタファー
住居の構造	大黒柱	土台	壁	敷居	玄関	天井
認知の基盤	直立（整った形）は良いこと ↓ 支える（垂直性）		内に入ることは認められること ↓ 遮る（内と外）			量が多いこと、優位に立つことは上 ↓ 積み重ねる（上と下）

2）メタファーの言語間比較を行う際に浮き彫りになる問題の一つに、メタファーの普遍性と文化的差異の問題であるとされている（松井, 2002）。日本語と中国語は異なる言語であるにも関わらず、以上の考察に明らかなように、「住居」への認知に関しては、中国語と日本語では相違点よりも共通点が多いことが明らかになった。その理由として、身近な空間の感覚に基づいて抽象的な組織、人間主体や人間活動などに関するものの属性や特性などを把握している文化普遍的なイメージ・スキーマが言語表現を支えていることが考えられる。つまり、高低の空間感覚や建物が出来上がっていく過程といった共通的な理解と認識をベースに、類似した表現が出てくる。

一方、メタファーの文化的差異はその土地の歴史や文化、地理などから生じているものである。「土台」、「壁」の意味拡張の用例は、中国語と比較して日本語の例の方が圧倒的に多い[108]。その理由として考えられるものは次の通りである。日本のような地震多発国では、「土台」がしっかりしていないと、大きな地震の時は、住宅が倒壊する危険性が高くなる。「土台」への注目度が高いため、「日本外交の土台」、「研究の土台」、「民主主義の土台」、「科学的な発展の土台」といった様々な言い回しが頻繁に用いられている。 また、日本社会では「内」と「外」意識が非常に強いとよく言われている[109]。「住居」で言えば、「壁」の内部はコントロール可能で安全な領域である。それに対して「壁」の

[108] 李(2013)は、住居をモト領域とするメタファーを量的に概観してみたところ、日本語の「土台」の意味拡張の用例は全体の 31%を占めているのに対して、中国語の“根基”の意味拡張の用例はわずか 3%にとどまっている。一方、日本語の「壁」の意味拡張の用例は、全体の 67%を占めているのに対して、中国語の“墙”の意味拡張の用例はわずか 1%にとどまっている。

[109] 日本での「ウチ」と「ソト」の問題については、これまで様々な研究者から報告がなされている。中根（1972）、山下（1986）、司馬遼太郎・山崎正和(2001)などを参照する。

外は、危険が潜む領域であり、予測できない未知の世界である。人間がこのような身体的な経験を持っているため、「住居」という容器の内外を限る「壁」が様々な領域へ意義が拡張される。

3）外国人学習者は第二言語の語彙を習得する際に、辞書の助けに頼ることが多い。とりわけ国語辞書の意味記述は、語彙の意味用法を調べ、理解する上で大きな助けになる。しかしながら、日中両言語における「住居」のメタファー表現を分析すれば分かるように、新聞記事から抽出された実際の使用例には、辞書で見落とされていた意味用法や拡張された用法が存在することが分かった。すなわち、データに現れた語彙の実際の使い方と辞書における語義の記述と必ず一致しているとは限らないことが分かった。表 6.2 を見て分かるように、抽出された漢語語彙 6 組のうち、一致しているのは「大黒柱」/“顶梁柱”と「土台」/“根基”の 2 組のみにとどまっている。

表 6.2　実際の使い方と辞書の記述との対照[110]

日本語の用例	天井	大黒柱	壁	玄関	敷居	土台
辞書の記述	△	○	○	×	△	○
中国語の用例	天花板	顶梁柱	墙	大门	门槛	根基
辞書の記述	×	○	×	×	○	○

佐藤（1992）は、「辞書は、言葉の説明の中に、意味①、意味②、意味③…と、次々に革新の成果を組み込んでいく。成功した隠喩は次々と、ステレオタイプ化されて、辞書に登録されていく」[111]とされる。言葉は社会、文化の変化に応じて変わっていくため、現段階では辞書に「玄関」、“天花板”、“墙”、“大门”といった言葉の派生的な語義について記載されていないにもかかわらず、使用頻度や認知度が高まるにつれて、最初は革新的な比喩であったものを、やがて徐々に辞書の中へ取り込み、編入していくであろう。

4)「高い費用が普及の壁になる」、「両国関係の土台」、「静岡の空の玄関」、

[110] ここでは、○を完全一致、×を不一致、△を断定できない（単語自体には派生的な語義が記述されていないが、慣用句を元とする比喩的な使い方が見受けられる）として表示している。
[111] 詳細については佐藤（1992：129）を参照する。

“电影票价的天花板（映画料金の天井）”といった表現に見られるように、語彙の基本的意味（第一義的意味）には、そうでない意味（派生的な転義）と比べて、形式的な制約が少ない。換言すれば、「壁」には＜具体的な物体を表す＞意味と＜象徴的に何かを隔てるもの＞意味があるが、このうち、象徴的に何かを隔てるものを表す場合には「高い費用が普及の」のように修飾語がなければならないが、「壁には海を行く船の絵がかかっている」のような具体的な物体を表す場合にはそのような制約がない。

次章では、第4章（人間にまつわる漢語語彙）、第5章（物質の状態変化を表す漢語語彙）、第6章（住居を表す漢語語彙）のモト領域を固定した研究と逆に、サキ領域を固定したメタファーの研究事例として、ある目的を実現するためにとられる「手段・方法」という抽象的な概念がどのようなモト領域から形成されているのかを、認知言語学のメタファー理論の観点から考察する。

第 7 章
サキ領域を固定した事例研究―「手段・方法」を表す表現[112]

本章は、サキ領域を固定したメタファーの研究の事例となる。メタファー的写像によって特徴づけられるのはサキ領域のある一側面にすぎないため、一つのサキ領域は通常複数のモト領域によって特徴づけられる事例の研究として「手段・方法」というサキ領域を固定し、それがどのようなモト領域から形成されているかを検討するという手法を用い、漢語語彙におけるメタファーの日中対照研究を行う。第 1 節では、問題の所在と本章の目的を明示する。第 2 節では、「手段・方法」を表すメタファーのモト領域を大きく六つに分類し、日中両言語の対照について詳しく考察する。第 3 節では、本章の内容をまとめる。

7.1　問題の所在と本章の目的

2.1.2 で述べたように、メタファーの理論として、よく知られているのは、Lakoff and Johnson（1980）の提案する「概念メタファー」である。彼らは、メタファーを、「ある概念を別の概念と関連付けることによって、一方を他方で理解する」という認知プロセスとして広く捉え直した。それによれば、メタファーは、喩えるものが存在する領域、すなわち起点領域から、喩えられるものが存在する領域、すなわち目標領域への領域間の写像である。しかしほとんどの場合において、メタファー的写像によって特徴づけられるのはサキ領域のある一側面にすぎないため、一つのサキ領域は通常複数のモト領域によって特徴づけられる[113]。例えば、ある行為や状態の「手段・方法」を表す時、我々は下記の通り様々なメタファーを用いる。

(1a)誰にでも分かるような姑息な<u>手</u>を使うことに何の恥ずかしさも感じないようだ。（BCCWJ）

(1b)管某拿到刘某的 6 万元现金后，在购货交款时动了<u>手脚</u>，实际支付 20 吨的尿素款 4.6 万余元(劉さんから 6 万元をもらったあと、管さんは 20 トンの尿素の購入代金を支払うときに<u>インチキ</u>をやって、実際に 4.6 万元支払った)。

[112] この章は、李（2013）をもとに加筆・修正をしたものである。
[113] その理由について、Lakoff and Johnson（1980）は、我々の概念が複数の異なる側面を持つため、一つの起点領域だけによってそのすべてを特徴づけることはできないと述べている。

（CCL）

(2a)日航が生き残りをかけて挑むアジア市場には、低コストを**武器**にした各国の格安航空会社がひしめいている。（9 月 1 日）

(2b)充分运用群众监督，用好查处和问责这个最直接、最有威慑力的**武器**，真正达到标本兼治（人民大衆の監督を十分に生かし、摘発や問責という最も有力的な手段を通して、最終的な目標を達成する）。(4 月 12 日）

(3a) 鳩山政権の機能不全を反面教師に、菅政権が統治能力と政策実現能力を発揮できるか、その**鍵**を握るのが新しい「政策決定一元化」の態勢である。（6 月 8 日）

(3b)不断地摸索，才有可能解开一个又一个的难题，当你找不到解决问题的**钥匙**时，你会非常痛苦（絶えず模索して、次々と浮上してくる難題を解決することができる。問題解決の鍵が分からない時、とてもつらいと思われる）。(CCL)

(4a) こうした事態の根っこには、政府が 77 年に造った現行の認定基準をかたくなに見直さず、被害を小さくとらえて、とりあえず眼前の紛争を解消できればいいという**対症療法**を繰り返してきたことがある。（3 月 31 日）

(4b)不**对症下药**解决好这些矛盾和问题，群众利益就没有根本保障，社会稳定也缺乏坚实基础（対症療法を施し、これらの矛盾と問題を解決しないと、大衆の正当な権利と利益を守ることが難しくなるし、社会の安定も保証されない）。（5 月 18 日）

(5a) アクセス向上という課題を解決する**道**は探らねばならない。その見通しを立てたうえで、10～15 年後の伊丹廃港をめざすとしている。（1 月 12 日）

(5b)古往今来，俊采星驰，尽管人们成功的**途径**各异，但差异性中又隐藏着共性的东西（古今東西、人々が成功への道はそれぞれ異なっているにもかかわらず、共通した特徴もある）。（10 月 20 日）

(1)の「手」、(2)の「武器」、(3)の「鍵」は、もはや文字通りの＜腕の末端にある器官＞、＜戦いに用いる道具＞、＜錠の穴に差し込んで、戸や箱の蓋などを開閉するための器具＞」の意味合いはない。(4)の「対症療法」の意味は＜表面にあらわれた種々の症状に対して適切な処置を行なって患者の苦痛を除くことを主眼とした治療法＞から離れている。(5)の「道」も＜地点 A と地点 B を結ぶ経路＞の意味合いはなくなっている。上述の 5 つの漢語はそれぞれ

違う意味領域を表すにもかかわらず、抽象的な「手段・方法」を表す使い方が同じである。

これらの用例に見られるように、ある目的を実現するためにとられる「手段・方法」は様々な領域の物事をモト領域としてメタファー表現で語られる。このようなメタファー表現は、ほかにどれだけ実例が存在し、どのような種類に分類できるか。また、その種類は、それぞれどのような認識に基づき成立している表現なのか。本稿では、日本語と中国語における「手段・方法」を表す表現を集め、「手段・方法」という概念がどのようなモト領域から形成されているのかを、認知言語学のメタファー理論の観点から考察する。

7.2　「手段・方法」を表すメタファーの日中対照

「手段・方法」を表すメタファーは日本語にも中国語にも数多く存在する、汎用的な表現である。本章では、言語的に興味深い用例を収集し提示する。ここでは、まず用語に近いメタファー名称を使用して例文を分類するに止まる。方法としては、まず「手段」と「方法」に関連する類語を中心に検索を行った。次に「手段」や「方法」を表す文脈と思われる例文に関しても検索し、必要に応じて補った。本章で採集した用例は、「手段・方法」を表すメタファー表現を必ずしもすべて網羅するものではないが、その主要なものは大抵取り扱っているものと考える。分析の結果、「手段・方法」を表すメタファーのモト領域は、次のように大きく分類される。

1）経路：第一歩、道、近道、早道、筋道、経路、出口　等々

2）道具：武器、鍵、盾、両刃の剣、命綱、試金石　等々

3）治療や医薬品：処方箋、対症療法、妙薬、秘薬、良薬、劇薬、特効薬　等々

4）身体部位詞：手、足　等々

5）拠り所：防波堤、避難所、生命線、扉 等々

6) その他：突破口、献立、種　等々

それぞれの意味カテゴリーがどのように拡張しているのか、拡張した意味はもともとの言葉の意味とはどのように関わっているのか、このような多様なメタファーの基盤はどのように考えればよいのかなどについては、以下で考える。

7.2.1　手段・方法は「経路」である

『日本国語大辞典』第二版に「人や物の通って行く道筋」と解説されているように、「経路」とは、もともとは人や物が移動する道のことである。私たちが毎日の生活で利用している道はいろいろある。有名で交通量も多く長い道もある一方、誰もその存在を気にすることのない、名もなき短い道もある。そして、一つの終着点に達する経路は複数存在する。2.4 の先行研究で見た英語の表現と同じように、日本語にも中国語にも「手段・方法」をさまざまな「経路」に見立てた表現があると言える。

(6a)このウイルスについて詳しく知る人は小児科医などの間でも決して多くない。まずは全国の医師や保健師などを教育し、知識のある人を育てることが第一歩だ。(11 月 8 日)

(6b)在和别人差距比较大的时候，模仿常常是创新的第一步（他との差が大きく開いている場合、模倣が創造の第一歩である)。(12 月 8 日)

(7a)とりわけ中国市場に溶け込むには、経営の中から国境を取り除く効果が期待できるＭ＆Ａを通じて、中国側に理解者を増やすことを考えてはどうか。日本の技術や感性の「良さ」への評価を広げ、中国の豊かさにも役立つことを示すのが近道[114]だ。(7 月 19 日)

(7b)这可能是国有大中型企业“抄近道”进入社会主义市场经济轨道的现实选择（これは大中型国有企業が社会主義市場経済の軌道に乗る一番の近道なのかもしれない)。(CCL)

(8a)日朝首脳会談から 17 日で 1 年がたつ。国交正常化交渉再開の展望も開けないなか、失踪者の家族らは無事を信じて再会を夢み、在日関係者は「日朝両国の友好が深まることが問題解決の早道」と願う。(9 月 18 日)

(8b)与本地教育机构合作办学，成为许多海外名校涉足中国教育市场的捷径（現地の教育機関と協力してスクールを経営するのは、海外の名門校が中国教育市場に進出する近道となっている)。(CCL)

(9a)小林容疑者が女性に投与した点滴は同病院で使用している種類とは

[114]「近道」の類義語には、「抜け道」がある。今回使用されている社説には「個人献金の禁止が実現しても、企業や労働組合などが禁止の対象とならない政治団体をつくったり、経営者が個人名で寄付したりする抜け道は残るだろう」という手段・方法を表す表現が見受けられる。

異なるといい、同課は、ほかの薬剤の入手**経路**を調べている。(5 月 21 日)

(9b)仍在持续的国际金融危机给我们提供了一个**路径**，去思考潜藏于金融这一现代经济核心背后的深层问题（金融という現代経済の核心の背後に潜む深層の問題を考える道が現下の国際金融危機によって示唆される）。(5月6日)

(10a)大阪府の橋下徹知事の構想は、伊丹を廃港し、関空を西日本の国際ハブ空港にすることだ。ただ、関空はとかく「遠い」と敬遠されがちだ。アクセス向上という課題を解決する**道**は探らねばならない。(1 月 12 日)

(10b)实际行动往往是让世界了解中国很有效的**途径**（実際に行動することは世界が中国を理解する効果的な方法である）。(1 月 15 日)

(11) どちらの懸案も、小沢氏が幹事長として支えた鳩山政権がやろうとしてできなかったことだ。小沢政権で真の「政治主導」を確立し、解決できるというなら、そのための手段と**道筋**を、もっと具体的に語ってほしい。(9月2日)

(12)利用电子邮件、博客、微博等**渠道**，加强与人民群众的沟通（電子メール、ブログ、ツイッターなどのルートを利用して、国民とのコミュニケーションを高める）。(3月11日)

(13)烟花爆竹是年味的重要体现，讲究低碳不是要回到一律禁放的老**路子**，而是适当、适量燃放（花火と爆竹は正月気分を醸し出す主なものである。低炭素とは爆竹や花火の使用を全面禁止するという古い方法ではなく、適切に、適量に打ち鳴らすことである）。(2月26日)

(14)随着经济的发展和就业**门路**的拓宽，城乡人民收入增加，生活继续得到改善（経済の発展と雇用のルートが広がるにつれて、都市と農村の人民の収入が増えて、生活が改善されつつある)。(CCL)

(15)米軍基地の問題が日米同盟全体を揺るがす。そうした事態をなんとかして避ける高度な政治的力量が菅政権には求められる。米国政府も「日本の国内問題」と傍観せず、ともに**出口**を探る責任を果たすべきである。(11月29日)

「点」が「線」を構成するという認識に基づいて考えれば、移動や行動の開始の意味の「第一歩」は「経路」の一部分を表す事例である。(6a)の例から、新しいウイルスを熟知していなければ、早く対応できないのは当然であるため、医師の養成から力を注ぐのはウイルスと戦う最初の方法であることが分かる。

新商品の開発などには創造的な要素が欠かせないが、それらはまったくのゼロから出発するわけではない。先人たちが築き上げてきた土台の上に打ち立てられるものであるため、(6b)は模倣が創造の最も基本的な方法であるという事実を物語っている。

「近道[115]」、「早道」、“捷径”、“近道”はいずれも「目的地までの距離がより短い道」という意味なので、これらが類語辞書における「類語」となっている。＜目的地に向かう際には、近道すれば早くたどり着き、遠回りすれば当然到着するのが遅くなる＞が一般常識として容易に想像できるため、この四語がともにある物事を達成するのにてっとり早い手段、方法の意としても使われている。なお、例文(7a)～(14)を見れば分かるように、「近道」、「早道」、「道筋」、「道」、“捷径”、“近道”、“途径”、“门路”、“路子”、“渠道[116]”はすべて「経路」／“路径”を表す語の下位レベルに収まる。特に(11)では等位接続で「手段」と「道筋」がつながっている。等位接続は、形式および意味的に類似したものを接続するのがその機能の基本であるため、両者の関係を示す一つの傍証となる。(15)の「出口」とは、本来＜外へ出るための所＞を指している。メタファーとしての「出口」は、＜外へ出ようとする＞という特徴を受け継ぎ、＜米軍基地の問題に苦しむ沖縄の人々に手を差し伸べ、双方が納得できる解決策を見いだす＞という意味を含む。

このように、ある手法をとることを経路として表現されるメタファーは日本語にも中国語[117]にもある。ここで重要なことは、モト領域からサキ領域に写像されるのが語彙だけに限らないということである。Lakoff and Johnson（1980）は、メタファーが認知の重要な機構であると述べたように、知識も写像されることが用例を通して分かる。

経路に関して人間の理解を詳細に見ると、次のような暗黙の領域に属する知識が多岐にわたって存在することに気づく。

---

[115]「近道」の対義語には「回り道」があると同様、中国語の“近道”の対義語には“弯路”がある。

[116] 中国語の“渠道”に当たる灌漑用、排水用に掘った水路の「渠」が日本語にはあるにもかかわらず、常用漢字ではないため、使用が限られていると推測される。

[117] “门路”、“路子”、“渠道”はいずれも中国語特有な表現である。中国社会に根付いている「コネ」文化の一側面を反映すると言えよう。

a　ゴールに到達するために、移動が関わっている

b　移動の発生には通常力も関わっている（移動する際に交通手段等を利用したりする）

c　ゴールに到達した時に、達成感が得られる

手段や方法とはある結果（普通は理想的な結果）、すなわちゴールに到達するためにする行為のことである。現実（問題の発見）とは「ここ」であり、現実から離れる（問題解決の方法を探る）ことは、「ここではない場所」に移動することとして概念化される可能性が高い。言い換えると、現在の状態としての起点と現在とは違う状態のゴールを結び付けるもの（道）というように解釈することができる。「経路」と「問題」の対応関係はおおよそ表１のようになる。

表 7.1　「経路」と「問題」の対応関係

	モト領域	サキ領域
第一段階	スタート	問題の発見
第二段階	始発点と終着点を移動する	問題解決の方法を探る
第三段階	ゴール	問題解決

「手段・方法」をさまざまな「経路」として概念化されている表現を見れば分かるように、もともとの経路の意味での「道」と拡張された意味は一見つながりがないように思えるが、しかし、「道」は根底には「始発点―途中―終着点」というイメージ・スキーマがあり、意味が拡張してもこのイメージ・スキーマの構造が保持されていることが分かった。すなわち、もともとは文字通りの経路を表していたものが、「始発点―途中―終着点」というイメージ・スキーマを構造基盤として、形状や機能が類似したものへと意味が拡張していったと分析できる。

7.2.2　手段・方法は「道具」である

道具とは、生活のために用いられる様々な物品のことである。現在、私たち

は様々な道具に囲まれて日々生活している。次の例文を見れば分かるように、多くの道具が直接的あるいは間接的に「手段・方法」として使われている。

（16ａ）スポーツは人々を熱狂させ一体感を与える。それだけに政治家の目には、利用したい**道具**と映り、ときに介入へと暴走させるのだろう。（7 月 13 日）

（16ｂ）但也有些人，把公权力当成了谋取私利的**工具**（しかし、国家国民のためにあるべき公の権力を、私利私欲のために用いる人もいる）。（6 月 9 日）

（17ａ）同社は、この技術を**武器**に産業用ロボットの世界シェア 2 割を握る。（12 月 20 日）

（17ｂ）面临不可预知的突发危险，人的应急反应能力是拯救自己的有力**武器**（見えない突発的な危険に直面した時、人の応急能力は自分を救う強力な武器になる）。（5 月 12 日）

（18ａ）ビルサック長官が繰り返し説いたのが、世界の人口増加が引き起こす食糧問題。「多くの課題の解決の**鍵**は農業にある。若い人は…」と呼びかけた。（4 月 8 日）

（18ｂ）他认为，中国和欧盟的合作也许是打开多哈回合谈判僵局的一把**钥匙**（中国と EU の協力がドーハ・ラウンド交渉の行き詰まりを打破する鍵となるかもしれないと彼は思っている）。（CCL）

（19ａ）イラク戦争の開戦から来月で 7 年になる。当時の米ブッシュ政権は、フセイン政権が大量破壊兵器を開発・保有していると主張し、国連安保理決議を**盾**に軍事侵攻した。（2 月 22 日）

（19ｂ）一旦下面的工作没有做好，或者出现纰漏、出了事故，就以下面执行能力低、贯彻不彻底作借口、当**挡箭牌**（部下の仕事がうまくいっていなかったり、手抜かりや事故を起こしてしまったりすると、部下の実行の能力が低いことやら徹底的に貫いていないことやらを盾に言い訳する）。（3 月 29 日）

（20ａ）原子力は人間にとって**両刃の剣**である。（4 月 5 日）

（20ｂ）正因为互联网是把“**双刃剑**”，所以对互联网的管理才为各国政府所重视（インターネットが両刃の剣だから、各国政府がネットの管理体制を重視している）。（1 月 26 日）

（21ａ）LT 貿易は日中を結ぶ経済の**命綱**だった。日本は将来の大国の中国と縁を広げたい。中国は日本の経済力、技術力を身につけたい。（10 月 2 日）

(21ｂ)给贷款系上“安全绳”可以化解困难企业的燃眉之急（ローンに「命綱」をかけるのは、困難な立場に立たされている企業の焦眉の急を解決できる)。(CCL)

(22ａ）尖閣諸島沖の中国漁船衝突事件などで危機管理が問われた菅首相にとって､今回の対応は政権の浮沈を占う試金石ともなりかねない｡(11月25日)

(22ｂ）此次中国-东盟博览会只是拓展对方市场的一个试金石（今回の中国―アセアン博覧会は海外の市場を開拓する試金石にすぎない）。(CCL)

(23) そのなかでもとくに老人医療が抱える難問は多く、解決の糸口さえ見えないのが現状である。(BCCWJ)

(24)因为制裁是美国对付利比亚的一张“王牌”(制裁はアメリカがリビアを制圧する切り札だからである)。(CCL)

(25)善于用好“紧箍咒”，是干部老实做人、干净做事的“护身符”（「金縛りの法」を上手に使うのは、誠実に身を処し、信用を守って事をする幹部のお守りである）。(6月8日)

(26)权力拥有者渐渐忘记了规则和契约，把手中小小的权力视作通行天下的“尚方宝剑”（権力を持つものは次第にルールと契約を忘れて、手にした小さな権力を世間を渡る尚方宝剣と見なす）。(7月20日)

人間は生活を支障のないものにするため、また快適なものにするために、様々な道具が作り出されている。(16)の例文を見て分かるように、スポーツを政治に持ち込むために利用されることであろうと、公の権力を私利私欲のために用いることであろうと、＜何らかの目的のために作ったりするもの＞という「道具」の役割に着目することによって、メタファーに転換するのである。もちろん、一口に「道具」と言っても、種類、形状、機能は様々である。(17)～(26)の「武器」、「鍵」といった語彙はすべて「道具」を表す語の下位レベルに収まると言えるであろう。

(17)の「武器」は本来＜戦争や軍隊で用いる兵器や武装＞を表す。武器が人を傷付けたり守ったりできる点に注目して、競争社会で有効な長所や生き残りの手段と危険な状況から身を守る方法を「武器」と比喩的に表現する。(18)は扉などに取り付けて、鍵を開けられる人間以外の使用を制限するための「鍵」における＜ある場所を通過する際に必ず必要になる道具＞を表す意味から、＜

ある目的を達成する際に必ず必要になる手段＞に意義が拡張される。(19)の場合は＜敵の矢・石・剣などを防ぐための板状の武具＞が「盾」の元の意味である。ここでは、＜自分の身を守るために使う道具＞を含む元の意味から、＜国連安保理決議を自分の立場などを正当化する理由として使う＞と＜部下の責任を口実に言い訳する＞に意義が拡張する。(20)の両方の縁に刃のついている「両刃の剣」は、＜人を斬ることもできるが、一つ間違えれば自分自身も傷ついてしまう恐れがある＞ことから、＜一方では非常に役立つが、他方では大きな損害をもたらす危険もある＞と意義が拡張される。 (20ａ)のチェルノブイリと福島原発事故の悲惨さは、原子力が人類に大きな恩恵をもたらす一方で、一歩間違えれば、人や環境に回復不能な打撃を与えかねない事実を物語っている。(21)の「命綱」は、＜落下事故の可能性を伴う作業を行う際、落下防止のために装備されるロープやワイヤーのこと＞がその本来の意味。ここでは、保護作用に着目することによって、＜危機的な状況で最低限の保身を維持するためのもの＞に意義が拡張される。(22)の「試金石」とは、本来＜金など貴金属の鑑定に用いられる黒色の硬い石＞を指している。メタファーとしての「試金石」は、＜鑑定＞という特徴を受け継ぎ、＜物の価値や人の力量などを計る基準となる物事＞という意味を含む。

衣服を縫ったりするのに欠かせないのは「糸」である。(23)の「糸口」は本来＜糸の端＞を表す。こんがらかった糸をほどく際には、きっかけになる端はどこにあるのかを探らなければならない。＜ここを通せばうまくほどけそうな輪＞という点に注目して、物事を解決する際の手がかりを「糸口」と比喩的に表現する。(24)の“王牌”は、本来トランプ用語であり、他の札を全て負かす強い力をもつと決められた札のことである。そこから、最後に出すためにとってある、最も有力な人・物・手段を言うようになった。 (25)の“紧箍咒”と言えば、中国の神話小説『西遊記』を読んだことがある方はピンと来るのではないであろうか。三蔵法師が孫悟空を懲らしめるために唱える呪文のことである。それを唱えると悟空の頭につけられた金の輪が締まるため、人を服従させるための有効な手段と意義が拡張される。(26)の「尚方宝剣」とは皇帝が持つ剣のことであり、これを与えられた者は皇帝とほぼ同等の権力を持ち、軍を動かすことや諸侯以下大臣らの処罰などを皇帝から一任されるなど、その権力は

絶大なものである。＜権力の象徴＞という点に注目して、自分たちが有利に立つため、道徳への顧慮を払うことなく、権力の奪取のためには手段を選ばないことを「尚方宝剣」と比喩的に表現する。

(24)～(26) の “紧箍咒”、“尚方宝剑”はいずれも中国人の信仰や伝説から影響を受けて、中国語にしかない漢語表現であるが、これらの語から＜危険な状況から身を守る手段＞という意味合いが読み取れる。

上述のデータから、≪手段・方法は道具である≫というメタファーが存在しそうに思えるが、これをなんらかのメタファーの継承[118]あるいは具現化[119]と考えることはできるのか。鍋島・菊地（2003)、鍋島（2011）は、「問題と戦う」、「問題にてこずる」などの例を挙げて、問題を敵と見立てる表現は存在すると述べている。このようにして考えると、≪問題は敵である≫メタファーが「ある目的を達成するために取られる手段・方法を、ある用途を果たす道具として理解している」表現の基盤であると言えるであろう。なぜなら、＜困難な問題にぶつかり、これに対処していく方法・手段を考える＞と＜武器や防具を装備し、敵を撃退するのに役立つ＞と構造的に対応するという常識は、どの文化でも生じ得る基本的経験であることは想像するに難しくないからである。そのため、「手段・方法」を「道具」に見立てた表現は、つまり、ある目的を達成するために取られる「手段・方法」を、ある用途を果たす道具として理解できるわけである。

7.2.3　手段・方法は「治療」や「医薬品」である

私たち人間は誰しも、生きている間にさまざまな病気に苦しめられている。診断を受けてから治療の結果が分かるまでの一連の流れが一般常識として容易に想像できるため、以下のような多様なメタファー表現が用いられている。

(27a)野球賭博問題で日本相撲協会は４日、処分を発表した。しかし、これ

[118] メタファーＡとメタファーＢがカテゴリー関係にある場合、両者は「継承関係」にあるという。また、下位メタファーが上位メタファーの写像を引き継ぐことを「継承を受ける」という。サキ領域がカテゴリー関係を形成するものにＡがあり、モト領域がカテゴリー関係を形成するものにＢがある。Ａ：「大統領選は戦い」は「選挙は戦い」から継承を受ける（「大統領選は選挙の一種」）Ｂ：「理解は消化」は「理解は身体の一部」から継承を受ける（「消化することは身体の一部とすることの一種」)。鍋島(2011：96)

[119] メタファーの具現化とは、あるメタファーＡのモト領域の表現が、より具体的に、より詳細なレベルの事物として表現されることである。具現化は継承と類似しており、重なりを持つが、典型的には次のような相違を念頭に置いている。具現化とはモト領域の概念のある属性から、その属性を持つ具体物が想起されることであり、典型的かつ偶発的である。これに対して継承は上位概念の持つ主要な写像が下位概念に引き継がれることであり、構造的である。鍋島(2011：99)

は名古屋場所をなんとか開くための「**対症療法**」に過ぎない。(7 月 6 日)

(27b)解决当前中东问题的途径并不那么“玄”,关键是要“**对症下药**”(中東問題を解決する道はそれほど奥深くはない。肝心なのは対症療法を行うのである)。(CCL)

(28a)銀行の不良債権が増え、金融を萎縮させて消費も投資も冷やすことで全体の需要が長期的に停滞する。これが財政赤字や銀行の不良債権を再び悪化させる。こうした悪循環を打破する**特効薬**は見つかっておらず、回復には長い年月がかかる。(8 月 5 日)

(28b)诗发表了之后，得到稿费，他的苦痛便立刻减轻了。钱是**特效药**(詩が発表されて、原稿料をもらったら、彼の苦痛がすぐに軽減された。お金は特効薬である)。(CCL)

(29a)心の葛藤や悩みを抱えた作家や文化人にとって、釣りは現実から逃れたり、気持ちを整理したりするための**妙薬**だったのかもしれない。(10 月 13 日)

(29b)股份制也不是包治百病的灵丹**妙药**(株式制もあらゆる病気に効く妙薬ではない)。(CCL)

(30a)小沢氏が選挙戦術や国会運営に通じ、政権交代を実現する「**良薬**」であると同時に、離党・解党を繰り返す副作用も持った「**劇薬**」と知っていた。(8 月 27 日)

(30b)俄籍教练的忠告对中国摔跤运动的发展是一剂**良药**(ロシア出身の監督の忠告は中国の相撲運動発展にとっては良薬である)。(CCL)

(31) 国家の近代化への**秘薬**として「科学技術のすぐれた経験を持ち帰りたい」とトウ氏が語ったのを新自由クラブ代表だった河野洋平氏は覚えている。(10月13日)

(32a) 世界同時不況から脱し、次の危機も封じる有効な**処方箋**は何か。(7月2日)

(32b)解决“啃老”问题**处方**何在(「ニート」の問題を解決するための処方箋はどこにあるのだろう)?(CCL)

(27)は症状がある場合に、その症状を和らげる「対症療法」に含まれる＜病気の原因に対してではなく、その時の症状を軽減するために行われる治療法＞に注目して、＜相撲界八百長問題の真相を分析せず、根本的な対策とは離れ

て、表面に表れた状況に場当たり的に対応して物事を処理すること＞と＜中東問題の本質＞に転じた用法である。(28)の「特効薬」は、本来＜ある病気・症状などに対してすぐれたききめのある薬＞を表す。特効薬が早く見つかれば、早期に治療することが望まれている。＜特別に著しい効果を発揮する＞という特徴を受け継ぎ、＜計画や事業などを進めるについての障害を解消するために優れた効果のある対策＞に意味が拡張されるため、不良債権によってもたらされた悪循環を打破する効果的な措置や政策を「特効薬」と表現される。

(28)の「特効薬」と同様、(29)～(31)の「妙薬」、「良薬」、「秘薬」はすべて「薬」を表す語の下位レベルに収まると言える。ここには、いずれも、ある目的を達成するためにとられる「手段・方法」を、健康を回復するために投与される「医薬品」と捉える見方がある。もちろん、(30a)は医薬品の開発は医療上国民に大きな恩恵をもたらしていることは事実であるが、一方、予期しない副作用も生じ、その有効性と安全性が大きな問題となっているところから、小沢氏を揶揄するメタファーの意義に広がる。(32)の例文は、＜健康を回復するために、患者が医師に与えられた処方箋に基づいて、薬を飲んだり治療を受けたりする＞ことと、＜不況を乗り越えるためには、世界的な金融危機の背景を詳細に分析していく上で、対策を打ち出す必要がある＞こと、＜ニートがひきこもる原因を分析し、社会復帰をいかにするか＞ことの類似性は明らかであり、つまり、＜処方箋に記載してある処理法や解決法＞という特徴を受け継ぎ、＜世界的な金融危機に対処する方法＞と＜ニート問題の解決法＞と意味が拡張される。

鍋島（2011）では、「問題にメスを入れる」、「問題が再発する」などいくつか実例を挙げて、≪問題は病である≫というメタファーは一見存在するように思われるが、個人的にはやや違和感を覚えると指摘される。だが、(27)～(32)の用例を見ればわかるように、これほど数多くの用例が採集されるという事実は、≪問題は病である≫というメタファーは存在することを意味しており、そして、≪手段・方法は治療や医薬品である≫というメタファーは、≪問題は病である≫というメタファーの継承あるいは具現化のように思われるであろう。

その理由としては以下の点が挙げられる。つまり、どんな病気であっても、普通、かかったら、まずは薬を飲む、または医者へ行き、診察・検査などを経

た上で、医師から処方された薬を飲むというのが、自然な流れだと思われる。このようにして考えると、病気が治るようにいろいろ工夫されることと、問題が発生したら解決しようと努力することと構造的に対応することが分かるであろう。

7.2.4　手段・方法は「身体部位詞」である

我々人間は身体を持ち、頭、手、足など体のそれぞれの特徴を有効に使って様々な活動を行っている。このような現実から考えると、これらの身体を表すことば（以下、身体部位詞）が言語においても重要な役割を果たしていることが想像できる。日本語における身体部位詞は数多く存在する。にもかかわらず「手段・方法」を表すまで発達したのはこの「手」、「足」あたりに集中しているように思われる。

(33) 足利事件の再審無罪が確定した菅家利和さんを招き、取り調べの可視化を議論するシンポジウムが 17 日、福岡市中央区で開かれた。約 110 人が参加し、菅家さんは「警察はどんな手を使うかわからない。一部ではなく、取り調べの全面的な可視化が必要だ」と訴えた。(4 月 18 日)

(34) TX 開通以前、つくば市中心部の住民にとって都心に出る重要な足となっていたのが、つくば―東京間の高速バス路線だ。(8 月 25 日)

(35)有人则在包装和印刷上做手脚把3年的茶叶说成是15年的陈茶（包装と印刷にインチキをやって、3年間寝かせた茶を熟成15年の陳茶と偽った人がいる）。(CCL)

(36)这种策略类似于汽车交易商常耍的手腕，推销员先出某个价钱……（このような計略は自動車販売業者のいつもの手口と似ていて、セールスマンが先にある値段を決めて……）(CCL)

(37)张作霖手黑…（張作リンさんは手口がひどい…）(CCL)

(38)怎么也没想到，世上还有这样心狠手辣的女人（世の中には彼女ほど心が残忍で手口があくどい人はいるものか）。(CCL)

日本語では「足」と「脚」が同じ発音であり、厳密に立て分けることはあまりないが、中国語では“足”はくるぶし以下の部分、“脚”は太ももからくるぶしまでと厳密に区別される。日本語と同じように、中国語にも「手段・方法」

を表す身体部位詞が見られる。ここで重要なことは、単音節語「手」、「足」はほとんど使用されていなく、“手脚”、“手腕”、“手黒”、“手辣”のような二音節語として用いられることである。中国語では一文字が一音節である。現代中国語の語彙においては二音節以上の語が優勢を占めている。中でも特に二音節語が多いとされる（相原,1988）。中国語は二音節語としての安定性を保つため、“手”を“脚”、“腕”などと組み合わせて使われるのであろう。「手段・方法」を表す日本語の身体部位詞には「手」と「足」あたりにしか集中していない理由は以下のようなことが考えられるであろう。資料を調べる時、字を書く時、食事をする時など、どんな時でも手を使う。身体の中で「手」は非常に便利で、最も良く動く部位であるため、被疑者を取り調べるための手段として選ばれやすい。足は体全体を支え、日常的に「歩く」「走る」という移動に頻繁に用いる部位であり、それに、歩行は人間にとって極めて一般的な行動の一つであるため、公共交通などよく使われる移動手段を指して「地域住民の足」、移動手段がないという意味で「足がない」と言われる。言いかえれば、＜物事との関与を、物体との接触を通してとらえる（手は、対象に接触する際に顕著な部位であるため、手という身体部位を媒介にする）＞という概念メタファーと＜物事の進展を、身体運動としての前進を通して捉える（昔は歩きだけが唯一移動の手段であったため、足という身体部位を媒介にする）＞という概念メタファーが私たちの頭の中に存在していると言えるであろう。

7.2.5　手段・方法は「生命や財産を守る拠り所」である

ここには、ある目的を達成するために取られる「手段・方法」を、「人の生命や財産を守る」ために存在する「拠り所」と捉える見方がある。

(39a)经济のグローバル化は成長の機会を拡大する一方で、社会を不測のリスクにさらす。だが、スウェーデンは、ギリシャ発の危機も乗り切りつつある。医療、育児から雇用まで手厚い社会保障制度が<u>防波堤</u>になっている。（8月1日）

(39b)美国改变了政策，为了把日本搞成一个对付共产主义的<u>防波堤</u>，积极对日本进行了经济援助（アメリカは政策を変更し、日本に共産主義に対応する<u>防波堤</u>になってもらうように積極的に日本へ経済援助を行った)。(CCL)

(40a)もう一つは、人びとが日々の生活の苦痛に耐えかねて宗教を一時の**避難所**としてそこに逃げ込む、という意味である。（BCCWJ）

(40b)维多利亚时期的小说不但是朱虹孤独的少年时代的精神**避难所**，也是她一生中的最爱（ビクトリア時代の小説は朱虹にとっては孤独な少年時代の精神的な避難所だけではなく、一生で最愛の存在でもある）。(CCL)

(41a)中国は今年、金正日総書記の訪問を2回も受け入れ、友好を演出した。経済やエネルギー、そして食糧の面で北朝鮮の**生命線**を握ってもいる。(11月28日)

(41b)始终站在群众立场上想问题办事情，这确实是党员干部不可稍忘、不能懈怠的政治**生命线**（常に大衆の立場に立って物事を考え、仕事をするのはまさに党員幹部が忘れたり怠ったりしてはならぬ政治的生命線である）。（11月23日）

(42a)米国のオバマ大統領は「最も強い制裁で、核拡散防止への国際社会の決意を示した」と評価しながらも、「イランの態度が一晩で変わることはない」と述べた。決議の厳格実行と同時に、米独自の制裁措置を友好国と協力して強める考えだ。一方で、「外交的解決の**扉**が閉じられたわけではない」とも述べ、米国との対話に応じるよう要請。（6月10日）

(42b)经过3天的示威活动之后,双方协商解决问题的**大门**正在逐渐开启（三日間のデモを通じて、双方の協議によって問題解決への扉が開かれつつある）。（CCL）

外洋からの波浪を防ぎ、もしくは津波の被害から陸域を守るために設置された「防波堤」、災害によって短期間の避難生活を余儀なくされた場合に、一定期間の避難生活を行う「避難所」、個人や国家・物事の存立のために、どうしても防ぎ守らねばならない境界線の「生命線」といったような言葉を比較してみれば分かるように、＜何らかの形で何々を守る＞という特徴を受け継ぎ、「何々を守る手段・方法」に意義をメタファー拡張させる。(39a)に見るように、社会保障制度が整っているため、国民もあるレベル以上の生活をすることが保障される。(40)では、世界には無数の宗教がある。人によって信仰の目的が異なっているにもかかわらず、人それぞれ抱えている悩みや問題を癒す心のよりどころとして熱心に信じられていることを意味している。(41)は、最大の

経済支援国である中国から供給される大量の食糧や資源などが途絶えれば、北朝鮮が崩壊する可能性は高くなると言われているため、一国の存否にかかわる「生命線」で喩える一例と考えた方がいい。(42a) に見るように、＜開かれた扉が閉じられることは入れないことを意味する＞ことに注目して、交渉の手段を用いて、核問題に政治的な解決をもたらせようと米国がイラン側に働き掛ける意図を読み取れる。(42b) も同じ意味に読み取れ、扉が開かれてこそ、建物の中へ入ることが許可され、なんらかの活動が開始できることを示唆する。

上述の例文を見ればわかるように、「手段・方法は生命や財産を守る拠り所である」というメタファーには、いずれも行為や活動や状態を「容器」とみなす「容器メタファー」が関与しているように思われる。2.1.2 で述べたように、「存在のメタファー」の中に、「容器のメタファー」と呼ばれているものを挙げている。谷口 (2003) は、私たちは、自分自身の身体が容器であり、その中に食べ物や空気などの内容物を取り込むと見なすこともでき、また、私たちを取り囲む環境（家、部屋など）を容器とし、自分自身がその内容物であると指摘される。このように考えれば、「防波堤」、「避難所」、「生命線」、「扉」といった「容器」のスキーマは、外側と内側を区切る有界的な領域として認識され、「内部」、「外部」、「外周」という 3 つの部分からなる構造を持っている。また、外周は外部からの力を緩衝するとともに視覚的な接近を困難にする。

言い換えれば、「防波堤」の境界線によって「内側」と「外側」という領域ができると同じように、「避難所」や「扉」の外側から内側へ、あるいは内側から外側への出入りを可能にするという「容器」の特徴が読み取れるであろう。

7.2.6　その他

本節では、一つのタイプにまとめられないような、その他種々雑多な発想に基づく表現が散発的に存在する事例を見る。

(43a) 北朝鮮は米朝対話を突破口に、対話に慎重な韓国や日本との関係を改善して経済支援を受ける外交戦略を描いてきた。（11月22日）

(43b) 建立现代企业制度，是改革的难点和重点，也是改革的突破口（現代企業制度の確立は、改革の難点と重点であり、改革の突破口でもある）。(CCL)

(44) 住民に近い自治体に権限も財源も移すため、各省の抵抗を打ち破る。

こう宣言して、大阪府の橋下徹知事らを入れた地域主権戦略会議を司令塔に、改革の**献立**を練ってきた。（6月17日）

(45)阿部学長は、百人ほどの事務職員を前に…エネルギー問題、環境問題など、人類のこれからを左右する問題に、大学から解決の**種**をまいていきたい」と抱負を語った。（11月9日）

(43)は＜堅固な陣地などの一方を突破して作った攻め口＞が「突破口」の元の意味である。ここでは、＜困難や障碍を乗りこえる＞に着目して、＜相互不信の状態にある米朝は相手との交渉を通して、難しい問題などを解決するための手掛かり＞と＜改革を模索する動き＞に意義拡張する。(44)では、買った食材をどうやって調理するか、どうすれば栄養のバランスが取れるか、毎日の献立を考えるのは大変だと感じている人が少なくないであろう。＜更によいものにするために内容を検討したり、手を加えたりする＞という特徴を受け継ぎ、＜行政改革をするための計画・準備・手配＞に意義をメタファー拡張させる。(45)の例文は、問題解決の方法を植物の成長過程で喩える一例と考えられる。植物の成長過程について、私たちは「種→発芽→開花→結実」のような知識を共有している。＜問題や困難に遭遇してしまった時、それを乗り越える方法を考え、最終的には何かを達成できる＞と＜植物が種から芽を出し、花が咲き、実が成る＞という変化の過程と構造的に対応するという常識は誰でも身につけられる。言い換えれば、「始まり→経過→終わり」という＜線と移動＞のイメージ・スキーマを共有している。

籾山(2006)は、「僕（野球選手の与田剛）のように大学までは芽が出ず、社会人になってようやく花が咲いた人間もいる」、「いずれにせよ、いくつかの宗教哲学論文によって、土岐の哲学的思索の、白熱的ともいうべき高度な結実と一つの開花が示されたことは確かなようであった」などのような例をあげ、「何かを達成すること・成果を上げることを目的とした人間の営みを植物の生長過程を通して見る」という見方が私たちの頭の中に存在していると指摘する。(45)の「解決の種をまく」という用例を吟味して分かるように、「問題解決の方法を植物の成長過程に見立てた表現」は、間接的に籾山(2006)の記述を支持する用例だと考えられるであろう。

7.3　まとめ

本章は、認知言語学の知見を生かし、「手段・方法」というサキ領域を固定し、それがどのようなモト領域から形成されているかを検討するという手法を用い、漢語語彙におけるメタファーの日中対照を行った。日本語と中国語における「手段・方法」を表す表現が非常に豊富になったということが判明した。

日本語と中国語には異なる言語であるにも関わらず、数多くの共通点が見られた。その理由は、身体的経験に基づいて身体化された文化普遍的なイメージ・スキーマがあり、それが言語表現を支えているためと考えられる。つまり、共通的な理解と認識をベースに、類似した表現は出てくる。「手段・方法」を表すメタファーのモト領域としては、経路、道具、治療や医薬品、身体部位詞、拠り所、その他などさまざまなものが挙げられることは、メタファーは、偶然の産物ではなく、なんらかの動機づけが存在することも示唆する。

2.1.3 で述べたように、鍋島（2002)、(2011）ではメタファーの基盤の類型として「共起性基盤」「構造性基盤」「評価性基盤」「カテゴリー性基盤」と四種類を挙げているが、上述の例文を分析してみれば分かるように、「手段・方法」を表すメタファーは、いずれも「構造性」を基盤としていると言えるであろう。より厳密にいうと、「手段・方法」と「経路」、「道具」、「治療や医薬品」から「始まり→経過→終わり」という＜線と移動＞のイメージ・スキーマが共通して想定され、「身体部位詞」から「物体との接触を通して物事との関与をとらえる」というイメージ・スキーマ、「生命や財産を守る拠り所」から「容器」のイメージ・スキーマを想定することができるからである。

一方、言語が歴史的・文化的存在である以上、言語間にいろいろな細かな差が見出されることは、むしろ当然である。例えば、「手段・方法」を表す時、身体部位語彙が使用されている場合には、中国語ではネガティブな感情しか表出できないのに対して、日本語では中性的なイメージが強いと言えるであろう。また、形態の面から言うと、中国語では二音節語としての安定性を保つため、単音節語「道」、「手」、「足」などはほとんど使用されていないことが分かる。この点が両言語の漢語語彙における構造的な差異と言えよう。

次章では、モト領域とサキ領域を固定したメタファーの研究事例として、「自

然現象」をモト領域とする「感情表現」に焦点を当て、ペアの形で構成される慣習的メタファー表現に注目する。

第 8 章
モト領域とサキ領域を固定した事例研究
―ペアの形で構成される表現[120]

本章では、「自然現象」の領域に由来する語と「感情」の領域に由来する語がともに表現される慣習的メタファー表現に注目する。代表的な感情を 6 種類抽出し、それぞれがどのような自然現象の観点から理解され、その写像にどのような構造的一貫性があるのか、また、類似する感情や反対関係にある感情を特徴づけるメタファー写像についても分析したい。第 1 節では、問題の所在と本章の目的を明示する。第 2 節では、自然現象をモト領域とする中性的感情表現についての写像の傾向を詳しく考察してみる。第 3 節では、自然現象をモト領域とする肯定的感情表現について述べる。第 4 節では、自然現象をモト領域とする否定的感情表現についての写像の傾向を考察してみる。第 5 節では、本章の内容をまとめる。

8.1 問題の所在と本章の目的

「自然現象」とは、自然界に見られる諸現象である。山、川、雨、風、草木、天体など、人間の作為によらずに存在するものや現象を指している。その主な特徴としては、人間の意志や働きかけとは無関係に、自然の法則によって起こる事柄である点が指摘できる。それに対して、感情表現とは、人間がいろんな事柄に対して生じる様々な心の動き、外から見えない、意識的なものである。いわゆる、人間の内面的な状態が言語で表現されたものだと考える。中村（1993）では、感情表現を喜・怒・哀・怖・恥・好・厭・昂・安・驚という十種に分けられている。人間は群れ社会を高度に複雑化していく過程で、更に感情の細分化したカテゴライズを必要としたため、多種多様な感情を生み出していったと言える。例えば、環境の悪化を予想することによって未来に対する不安感が生じたり家族との再会を思うことによって喜びが込み上げてきたりすることなどである。

人間にはどのような感情があるのかについては古来様々に議論されてきた

[120] この章は、李（2014）をもとに加筆・修正をしたものである。

が、一般的には感情を大きく「中性的感情」、「肯定的感情」、「否定的感情」と3 種類に分類されている。「中性的感情」は、「一見何の関連もなさそうだが、考えようで、現在の社会に潜む欲望の形が見えてくるかもしれない」に見る「欲望」のようなポジティブな特徴もネガティブな特徴も伴わない感情である。「肯定的感情」は、快楽・快適・安心を感じさせる感情である。多くは欲求が実現されたとき生じる反応であるが、欲求不満すなわち否定的感情（緊張・不快）状況が終結し解放された状態になっても肯定的感情が起こる。例えば、「解放翌日の演説には数万人の群衆が歓喜の声を上げたというスー・チーさんは、民主化と自由を求める人々の希望の星であり続けている」というように、「希望を持つ」などは良いことだと思われている。「否定的感情」は生命の生存を脅かす刺激に対する不快と不安の感情である。不快は単に欲求が充足されない状態の感情であるが、不安は心身に支えをなくすような感覚である。例えば、「政権交代への失望を招いた首相の責任は重い」、「駅でとりわけ恐怖を感じているのが高齢者や障害者だ」とあるように、「失望」、「恐怖」などはネガティブなことだと思われている。

感情表現は形もない、抽象的な概念であるため、感情を表す時、我々は様々な概念メタファーを用いる。言い換えれば、我々はできるだけ感情という抽象的な存在を具体的な表現に置き換えて表現している。例えば、Lakoff（1987）[121]が挙げる上下のメタファーの中に、≪HAPPY IS UP≫（幸せは上である）がある。「喜びが湧く」は、イメージ・スキーマ（喜びは上）を、感情領域へ写像した表現である。中国語にも日本語にも≪喜びは上である≫というメタファーが数多く存在している。

（1）　成功は確信していたのだから、プランが受け入れられただけでは有頂天にもならなかった。

（2）「人工呼吸器を外そう」その言葉を聞いた時には、まさに天にものぼる心地がした。

（3）前两天刚刚出院的马拉多纳跟没事人一样兴高采烈地打起了高尔夫球（先日退院したばかりのマラドーナさんは、何もなかったかのようにゴルフを楽し

[121]本研究では、Lakoff（1987）と引用するところは、すべて邦訳引用（池上嘉彦他訳）であり、原典引用ではない。以下も同じである。

んだ)。

(4)山大师生每每谈及自己学校的党政班子，总是喜上眉梢（山東大学の教師と学生が大学の党政陣を話すたびに喜んでいる)。

「有頂天になる」、「天にも昇る心地」などは上への姿勢を示し、「高」、「上」も文字通りに上がるという勢いが見られる。両方とも≪喜びは上である≫という概念メタファーに属すると考えられる。しかしながら、感情を表すメタファー用例は「上下」という位置関係のみにとどまっていないことが考えられる。以下のような例文を見れば分かるように、感情を自然現象の観点から理解するメタファー表現が日中両言語には豊富に見られる。これらの対照研究は具体的な表現までの研究に及んでおらず、メタファー表現の意味拡張のプロセスについては研究の余地がある。

(5a) 死を前にしたモーツァルトが絶叫しているような、悲しみを通りこした絶望の淵に立って救いを求めているような響きをぼくは感じとった。

(5b) 佛罗多的脸色跟着变成墨绿色。山姆掉入了绝望的深渊（フロドの顔色が深緑色になって、サムが絶望の淵に落ちてしまった)。

(6a)「お前らが俺に危害を加えたりしたら、一人残らず殺してやるぞ！」と叫び、静かな村を恐怖の渦に陥れてしまう…。

(6b) 但看了恐吓信的白井不由得感到惶恐不安，仿佛越来越深地陷入了恐怖的漩涡之中（脅迫状に目を通した白井が怯えるように感じられ、ますます恐怖の渦の中に陥った)。

(7a) その使命に生き抜こうと決意した時、彼は、苦悩の雲を破って、歓喜の太陽が胸中に昇りゆくのを感じた。

(7b) 恺撒的眼睛里迸发出喜悦的光芒，但他立刻回复平素的镇静态度（シーザーの目には喜びの光が輝いているが、すぐに普段通りの落ち着いた応対に戻ってきた)。

(5)の「淵/“深渊”」は、＜川の水が深くよどんでいる所＞がその本来の意味である。ここでは、深いところに陥って、なかなか脱出できないことによって、＜感情の激しく動いて入り乱れ、混乱している状態＞に意義が拡張される。(6)の「渦/“漩涡”」とは、本来＜速度の違う二つの流れが合わさるとき、流れが鋭い角を曲るときなどに生ずる螺旋状に巻きめぐる水の流れ＞を指して

いる。メタファーとしての「渦/“漩涡”」は、＜めまぐるしい動きのあるところ＞という特徴を受け継ぎ、＜なかなか浮かび上がることのできない苦しい境遇＞という意味を含む。(7)の「太陽」は地球に熱・光を与え万物をはぐくむ恒星である。＜光が多ければ好ましい状態であり、遮蔽物である大気中の雲・霧によって光が遮られれば好ましくない状態になること＞と＜苦悩などの好ましくない感情が消え、安心感や爽快感が光として差し込むことが「太陽」と捉えられていること＞の類似性は明らかであろう。

上述の3組の漢語はそれぞれ自然現象を表すにもかかわらず、抽象的な感情を表す使い方が同じである。そこで、本章では、「感情（Emotion）を表す語+ノ格+自然現象（Natural phenomena）を表す語」（中国語の“定中结构短语”に相当）というパターンに限定し、自然現象の領域に由来する語と感情の領域に由来する語がともに表現される慣習的メタファー表現に注目し、人間の感情がどのような自然現象の観点から理解され、その写像にどのような構造的一貫性があるのか、このようなメタファー表現は、ほかにどれだけ実例が存在し、どのような種類に分類できるか。また、その種類は、それぞれどのような認識に基づき成立している表現なのかを考察してみる。最後に、反対関係にある感情を特徴づけるメタファー写像についても分析したい。

方法としては、主に『現代日本語書き言葉均衡コーパス』、《北京大学现代汉语语料库》[122]に基づいて、「感情（Emotion）を表す語+ノ格+自然現象（Natural phenomena）を表す語」のような自然現象（天気を含む気象現象や山、川、雨、風など自然現象）をモト領域とする感情表現を中心に検索を行った。ここでは感情を大きく中性的感情、肯定的感情、否定的感情の三つにまとめて用例を収集した。中性的感情は＜感情一般＞と＜欲望＞、肯定的感情は＜歓喜＞と＜希望＞、否定的感情は＜失望（絶望）＞と＜恐怖＞という6つの感情領域を観察する。まずは日中両言語における「感情の奔流」や“欢乐的海洋”のような慣習的メタファー表現をキーワードとして検索し、用例を抽出した。こうして収集した用例を、モト領域由来の要素が自然現象の「水」、「火」、「地」、「光」、「風」と、どの領域に属するか分類し、整理した。

[122] 本研究が用いた社説のデータには、自然現象をモト領域とするメタファーが見受けられるにもかかわらず、感情表現をサキ領域とするメタファー表現がわずかしか抽出できなかったため、他の章とは異なり、本章では主に『現代日本語書き言葉均衡コーパス』、《北京大学现代汉语语料库》に基づき、データの抽出を行った。

8.2　自然現象をモト領域とする中性的感情表現

8.2.1　感情一般をサキ領域とするパターン

「歓喜」や「恐怖」のような個別の感情の調査に先立ち、まず感情一般についての写像の傾向を見てみよう。

表 8.1　感情一般をサキ領域とする用例対照

モト領域	日本語	代表用例[123]	中国語	代表用例
水	16	感情の波、感情の渦、感情の奔流	72	感情的波涛、情感的涟漪、感情的波澜、感情的洪水
火	4	感情の火に油を注ぐ	12	感情的火花、情感的火焰
地	44	感情の起伏	13	情感的起伏、感情的沙漠、感情的绿洲
光			2	情感的光芒
風	8	感情の嵐が吹き荒れる		

表 8.1 のデータに見られるように、感情を表現するために、日中両言語に「水」、「火」、「地」、「光」、「風」が関わる様々な自然現象をモト領域としてメタファー表現で語られる。日本語のデータに表れた最も顕著な特徴は、≪感情は地形、地表の変化である≫のような「地」をモト領域とする用例が突出して多いということである。しかも、そのほとんどは「感情の起伏」という形で使用されている。「起伏に富んだ地形に、びっしりとひしめき合うように並ぶ建物」が示すように、「起伏」とは、本来＜地形が高くなったり低くなったりしていること＞を指している。しかしながら、

(8a) そこにあるのは、さっきまでの、あのはげしい感情の起伏とは正反対の、無力感と、敗北感だけだった。

(8b) 避免有情感的起伏，因为一位能忍受不安状况的管理者才会受到信任（感情の起伏を避けるのは、不安感を我慢する管理者こそ最も信頼されているから

[123] 個々の用例を全部挙げてみた結果、回数が目立って多かった用例があるにもかかわらず、使用回数が限られており、２回以下の使用頻度となるものもある。特に「感情一般」では、一度だけ使われていた用例も多く見受けられて、資料として収集した用例は予想より多様性に富むものとなったため、一応付録の形で出してみた。詳細については付録５を参照。

である)。

例文（8）に描かれたように、「感情の起伏が激しい」とは、他人の行動や言動にいちいち左右されたり、まわりの状況に振り回されたりすることである。＜盛んになったり衰えたりして、さまざまな経過や変化があること＞という特徴を受け継ぎ、＜ちょっとした事で喜んだり、そうかと思えば怒ったり泣いたりして、感情が安定していないこと＞に意義をメタファー拡張させることが分かる。

日本語に比べ、中国語には“情感的起伏（感情の起伏）”、“感情的沙漠（感情の砂漠）”といった「地」をモト領域とする用例が存在するにもかかわらず、中国語では、特に≪感情は水のような液体である≫という概念メタファーが頻繁に見られる。例えば、心境に少々変化が起きた時には、“感情的细流（感情のせせらぎ)”、“情感的涟漪（感情のさざ波）”が使われ、心境の変化が激しい時には、“情感的波涛（感情の波)”、“感情的洪水（感情の洪水）”、“感情的激流（感情の激流）”が使われる。これらの言い回しに明らかになったように、感情は容器の中の水[124]のように、高まったり、低まったりすることがある。そして、心境も澄んだ水面のように、安らかに落ち着いたり、波瀾万丈でハラハラドキドキするようになったりする時がある。

5.2.1 で述べたように、≪感情は水のような液体である≫とは、人間の身体または心を容器とし、感情をその容器の中の流動体として捉えるメタファーである。このメタファーの基盤は比較的簡単である。我々の生活で、水は非常に身近な存在であり、不可欠なものである。誰もが頭の中に水がどんなものであるかを思い浮かべることができる。人間が感情的になる際、汗や涙として液体が体から流れ出すことがある。「食べ物を身体に取り入れる」とあるように、人間の身体または心が一つの「容器」であり、容器と同じような「内 」と「外」を区切る境界があり、外側から内側へと内容物を入れることができる。鍋島（2011）は、≪感情は容器内の液体である≫と述べ、「感情と水の間に共起関係があり、このメタファーの基盤は、感情の起状と表出する体液の増減の相関である」としている。

次に感情が「火」として概念化されている表現を見てみよう。

[124] 容器の中の水を増やせばその嵩が上がっていくのに対して、減らせばその嵩が下がっていく。

（9a）ただでさえ気が立っているお客さまの感情の火に油を注ぐようなものです。クレーム電話を取り次ぐときの応対…

（9b）感情的火焰暂时熄灭了，可过一段时间却又死灰复燃（感情の炎はまもなく消えてしまったが、しばらくすると燃え始めた）。

「火」を借りて感情を表現することは、生理的現象をベースにしたメタファーだと言えるであろう。異なる民族の人々の感情の体験は大体同じである。緊張状態や、恥ずかしさを感じたときに体温が上がり、顔が赤くなる。これは火が燃える時の光と炎と物理的性質や特徴が似ている。それに、火には強さが異なっているのと同様、感情にも強弱濃淡が様々ある。強烈な感情がまるで灼熱の炎のように燃えている。そのため、感情が「火」として概念化されている。

このほか、感情を「光」に見立てる表現も存在する。「光」とは、基本的には、人間の目を刺激して明るさを感じさせるものである。人間の体に光が当たった時には、明るさや暖かさが増す。このような快適な感じが心理面に写像され、人を奮起させるため、「光」と感情がメタファー表現として結び付くわけである。

（10）坦尼斯惊讶地发现精灵的眼中闪动着情感的光芒（精霊の目に感情の光がきらめいているのに気が付き、タンニースが驚いた）。

一方、低気圧が急速に発達することによって起こる嵐は、急な天気の変化をもたらしやすい。感情にもその日によって、喜怒哀楽がある。そして、それは天気のように気まぐれである。そのため、何らかの事件や騒ぎで感情が激しく揺れ動くことについて表現するときには「彼は、そこに二、三分間待ったが、心の底から沸々と湧き上っている感情の嵐は、彼を一分もじっとさせていなかった」のような例が使われている。

8.2.2　欲望をサキ領域とするパターン

欲望とは、何かを欲しいと思うことや、そう感じている状態である。欲望は持つものではなくて、 人間に生まれながらに具わっている本性のひとつと言えるのであろう。我々人間は、駆動力で自然を造り変えることにより、さまざまな製品を作り、物質的欲望を満たしてきたとされるように、いつの時代でも、人間の欲望は無限である。「欲望」をプラスの感情として捉えてみると、「少し

でも多く給料をもらいたい」、「新型車を買いたい」などと、個人が豊かになるためのものになるであろう。反対にマイナスの感情として考えてみると、「ライバルのあの人よりもいい生活がしたい」といったものになるであろう。「欲望」という感情は、確かに人をやる気にさせる。そして、生きるための原動力でもある。ただし、欲望は効果が強い反面、際限がないという怖さを持っていることもあるため、欲望を上手にコントロールできる能力が必要である。

表 8.2　欲望をサキ領域とする用例対照

モト領域	日本語	代表用例	中国語	代表用例
水	5	欲望の渦	2	欲望的漩涡
火	5	欲望の炎	1	欲望之火
地	1	欲望の泥沼	1	欲望的泥潭

上記の表 8.2 のデータを見れば分かるように、「欲望」をサキ領域とするメタファーには用例数が少ないにもかかわらず、日中両言語に自然現象をモト領域とする共通例が存在している。そして、ほとんどはネガティブなイメージが伴っている。

ここでは、まず欲望が「水」として概念化されているメタファー表現を見てみよう。橋の上から川の流れを見ると、橋脚の後ろでは流れが渦を巻いていることがある。もっと身近にも、風呂の栓を抜いたときに排水口のまわりに渦ができるのはよく知られている。このように見てくると、「渦」というのは水や空気などの流体が、円を描いて運動している状態と言えそうである。川で発生した渦巻きが物凄い勢いで渦を巻き、渦は次第に勢いを増してゆき、大きな氷や木材など巨大なものばかりではなく、周りにあるものをことごとく飲み込んでいく凄まじい渦巻きの映像を見て、いったん渦に巻き込まれたら、もう逃げられない恐怖感が誰でも想像がつくため、以下のような表現が観察されるのであろう。

（11a）一个走进大都市的懵懂少年，在不知不觉中，卷进了一场欲望的漩涡（大都市に来ている無知な少年は、いつの間にか欲望の渦に巻き込まれてしまった）。

（11b）気がつけばその美貌ゆえに、戦争という大きな欲望の渦の中に放り込まれていた。

次に欲望が「火」として概念化されている表現を見てみよう。人類は火の使用により、照明と暖を取ったり、獣から身を守ったり、食物に火を通したりするなど多くの利益を得た。「火の使用により初めて人類は文明を持つ余裕を持てた」と考える人もおり、火を文明の象徴と考える人もいる。現在では、私達はもはや火の力なくして生活してゆくことはできない。その一方、火は制御不能となって暴走状態となることがある。例えば、火は火災を引き起こし、燃焼によって多くの人命や財産が失われる場合が多い。人間の欲望も火と同じような二面性を持っている。それは人を成功させる大きな要素でもあるし、失敗させる要因の一つでもある。

（12a）せっぱつまった欲望の炎が起こったかと思うと、今度はさらに足の速い怒りがこみあげてきた。

（12b）梅尔卡兹察觉到在场的许多贵族们早已散发出以自我为中心的欲望之火（梅尔卡兹は周りの貴族達が自己中心的な欲望に火をつけていたことに気付いた）。

火の＜災害を引き起こす恐れがある面＞と＜人間は欲望があまり強いと、それは容易に満たされないので、葛藤を起こして悩み苦しむ＞という欲望のポジティブの面と構造的に対応するという常識は、どの文化でも生じ得る基本的経験であるため、「人の欲望を燃える炎に喩え、コントロールしないと自分や他人を傷つけてしまう」というメタファーが生まれてくる。

このほか、欲望を「泥沼」と見立てる表現も存在する。

（13a）だから、自制心というブレーキがないと、この欲望という引力に引っぱられて、欲望の泥沼に引きずり込まれてしまうのです。

（13b）刺激使某些人欲望膨胀，一旦丧失了抵御能力，那么就会落入诱惑的陷阱、欲望的泥潭（刺激を与えれば、人間の欲望は膨れ上がる。いったん防御能力を失ったら、誘惑の罠と欲望の泥沼に落ちてしまう）。

湧き起こる欲望をしっかりとコントロールできれば、 欲望に振り回されることなく、前に進めるのに対して、うまくコントロールできなければ、冷静に対応することができなく、結局どこまで行っても欲望に振り回される可能性がある。このように考えれば、「欲望が強すぎる」ことはまるで底の知れない泥沼に踏み込みでもしたように、逃げようともがいても、這い上がれない。

欲望は中性的な感情であり、人間をよい方向へも、あるいは悪い方向へも向かわせることができる。欲望が「渦」、「泥沼」、「火」として概念化される表現を見ればわかるように、欲望がネガティブな方向へ向かえば、自分自身を傷つけるばかりか社会にも害をもたらす可能性がある。

8.3　自然現象をモト領域とする肯定的感情表現

8.3.1　喜悦をサキ領域とするパターン

「喜び」とは、情動のうちで比較的基本となっている体験であり、悲しみと対比される。人間は、自分が求めていた事物を獲得したことで、その事物を所有したり、あるいはその求めていた事物と自分とが一体となったという思いで、満足するという喜びの感情を味わうことができる。「喜び」は誰もが望む感情である。表 3 を見れば分かるように、日中両言語には「喜悦」を「水」と「光」に見立てた表現が比較的に目立っていると言える。

表 8.3　喜悦をサキ領域とする用例対照

モト領域	日本語	代表用例	中国語	代表用例
水	15	歓喜の渦、喜びの泉、喜びの波	71	欢乐的海洋、喜悦的浪花
光	1	歓喜の太陽	32	喜悦的光芒

表 8.3 のデータに見られるように、「喜び」を「水」と概念化するメタファー表現は用例数が最も多く、そのうち、中国語では、“欢乐的海洋（喜びの海）”の用例が 61 ヶ所にものぼる。用例“斗牛场成了欢乐的海洋（闘牛場が喜びの海になった）”を読むだけで、力による闘いに勝つことで、原初的な喜びを人々は味わう壮観な場面を頭の中で想像したりすることができるであろう。少し風

が出て、透き通った海面にサザ波が立っている時には、大変気持ちがよい。「喜びの波」、「喜びのさざ波」は当事者の感情の微細な揺れ動きをきっちりと描いている。

次に「喜び」を「光」に見たてる表現を見てみよう。中国語では、「喜び」を光と概念化するメタファー表現は圧倒的に用例数が多い。「喜び」は一種の積極的な感情である。心に喜びがあれば、顔全体が引き締まり、はりが出て顔色も明るく輝く。Deignan（1997）ではsunny・cloudについて以下のように指摘している。

When it is sunny, the sun is shining. Most people think that sunny weather is pleasant, and it often makes people feel happier. Sunny is used as a metaphor to describe people and situations that are cheerful and pleasant. Someone who has a sunny personality is cheerful and friendly, and makes the people around them feel happy. If someone is in a sunny mood, they feel optimistic and happy. You can also say that the outlook or the future is sunny if you feel positive and optimistic about it.

この記述によれば、「晴れる」は太陽が出て、光が当たる好ましい状態である。太陽の光は、人間を元気に、健康にし、生命力をアップさせることができるため、「喜び」は下記の用例に見るように、「光」と概念化される。

（14）老人朝他走过去，紧紧地抱住他，热情地说了很多话，眼里充满喜悦的光芒（老人は近づいてきて、彼を強く抱き締めて、親切に話して、目には喜びの光が満ちた）。

（15）彼は、苦悩の雲を破って、歓喜の太陽が胸中に昇りゆくのを感じた。

日本語と中国語の対照から分かるように、「喜び」をサキ領域とするメタファーには共通点が見られたにもかかわらず、言語が歴史的・文化的存在である以上、言語間にいろいろな細かな差が見出されることは、むしろ当然である。例えば、≪喜びは水である≫を表す時、日本語では「歓喜の渦」、「興奮の渦」

が 12 ヶ所も観察されているのに対して、中国語[125]ではこのような意味拡張はまったく見られない。

（16）大はしゃぎで歓喜の渦に加わった下柳は同年代の金本と、矢野と、がっちりと抱き合う。

（17）東洋の魔女と呼ばれた日本の女子バレーボールチームが金メダルを獲得し、日本中を興奮の渦に巻き込んだ。

「渦」とは、本来＜流体やそれに類する物体が回転して発生する螺旋状のパターンのこと＞を指している。ここでは、＜試合後、優勝したチームの選手同士及びサポーターと勝利の喜びを分かち合った風景＞に意義が拡張される。通常、「渦」といえば、流体がある点の周りに回転している様子を念頭におく。互いに合併しながら、大きくなり、回りながら流れ消えていく渦に一旦巻き込まれれば、不死の神といえども逃れることが出来ないという恐怖感は容易に消滅できないであろう。鍋島(2011：141)は、

不満／嫉妬／欲望が渦巻く
＊勇気／＊悦びが渦巻く

などのような例をあげ、「渦巻く」が「まっすぐではない状態」を例示していると考えれば、「不満が渦巻く」や「嫉妬が渦巻く」などの形で、マイナスの評価性を持った表現と整合性が高く、プラスの評価性を持った「勇気」のような用語とは衝突を起こすと指摘する。このような観点から考えれば、「歓喜」や「興奮」も「勇気」と同じく、プラスの評価性を持っているため、「渦巻く」と衝突するであろう。

もう一つ注目すべきことは、一般に螺旋の方向性には上方向と下方向があるが、Lakoff and Johnson (1980)の方向性のメタファー≪GOOD IS UP ; BAD IS DOWN≫（良いことは上であり、悪いことは下である）を適用して考えると、「歓喜」や「興奮」は良い現象であり、その渦巻き曲線は上方向に向かうもの

[125] 中国語では、“漩涡（渦）”との結びつきに出てくる言葉は殆ど中性的感情と否定的感情を表している。CCL でフレーズ検索すると“～的漩涡（の渦）”は約 349 件と表示され、比較的数が多かったのは“战争的漩涡（戦争の渦）”、“政治斗争的漩涡（政治闘争の渦）”、“破产的漩涡（倒産の渦）”、“矛盾的漩涡（矛盾の渦）”（2013 年 7 月調べ）などである。

と考えられる。液体をかき回すことによってできる渦は下方向の形をしていることを考え合わせると、「歓喜」や「興奮」と「渦」は上下軸が逆転しており、衝突している。しかしながら、ここで興味深いのは、今回の調査結果を見れば分かるように、「歓喜の渦」、「興奮の渦」の使用が≪喜びは水である≫メタファー表現全体のかなり大きな割合（8割強）を占めていることがわかる[126]。

それでは、中国語とは異なり、日本語では、喜びや興奮を「渦」と概念化されるのはどうしてであろうか。想像がつくことは次の点であろう。中国語のメタファー写像は「渦」の恐怖の力、つまり、「激しく動いている渦に巻き込まれれば、命はその地点で終わりである」という混乱している状態に焦点を当てているのに対して、日本語のほうは「渦」の＜幾重にもぐるぐる回っている＞という形や＜点から線へ、線から面へ＞という変化に着目する。言い換えれば、「喜びの渦」から、「喜びや興奮に満ちた気持ちや空気が、自分の心の中や、自分の周囲をぐるぐると回っている」というイメージが読み取れるであろう。この違いは、ひとつの単語に含まれている意義特徴（或いはそれ相当の意味要素）のどれかに心的視点の焦点が当てられているかによって生じるであろう。「渦」の意義素には、＜水の力強い循環する流れ、通常は潮の衝突の結果＞の意義特徴の他に、＜中心点からの距離が常に増大するように回る点の軌跡となる平面曲線＞という意義特徴があることがWeblio類語辞典に記載されている。だが、中国語の≪大辞海≫における“漩涡”の意味要素に＜水流遇低洼处所激成的螺旋形水涡（螺旋形に巡る、激しい水の流れ）＞としか記載されていない。同一モト領域であっても、モト領域のどの部分がサキ領域に写像されるかは言語によって一致する側面と一致しない側面の両方が存在するということが分かった。

8.3.2　希望をサキ領域とするパターン

「希望」は、幸福感とともに、精神の最高位層に位置する快系列の感情であり、好ましい事物の実現を望むことである。希望があれば、それを目標に努力できる。

[126] Googleでフレーズ検索すると「歓喜の渦」は約197,000件、「興奮の渦」は約582,000件と表示され、比較的数が多かった（2013年7月調べ）。

表 8.4　希望をサキ領域とする用例対照

モト領域	日本語	代表用例	中国語	代表用例
火	4	希望の火、希望に燃える	81	希望之火
光	63	希望の光、希望の星、期待の星	283	希望之星、希望之光、希望的光芒
地	2	希望の道	183	希望的田野、希望之路

ここでは、「希望」はまず「火」と捉えられたように見える。数千年の昔から私たちの祖先が「火種」を手に入れ、獣や外敵から身を守り、物を作ったり、食べ物を煮たり焼いたりすることを知り、また世の中を明るくすることも考えられた。火は自らを焼き尽くしながら、光と熱とを与えてくれる私たちの命とも言えるものである。天界の火を盗んで人類に与えたプロメーテウスの神話を読めば分かるように、火を与えられたおかげで、人間は闇と寒さを恐れなくなった。火は人々に安らぎを与え、希望を抱かせ、勇気を奮いたたせてきたプラスのイメージが付くため、日本語でも中国語でも「希望」は「火」に喩えられ、それに関連したメタファー表現が多く見られる。火が灯った状態で希望があるということを表し、火が消えることは希望がなくなることを表す。しかも、炎の強弱と希望の大きさが構造的には対応している。

（18a）能源开发给老区人民的心中点燃一把希望之火（エネルギー開発は現地の人々の心に希望の火を灯した）。

（18b）少なくともグリフの身の安全が確認されたことは、虎王の心に小さな希望の火を灯したが……。

次に「希望」が「光」として概念化されているメタファー表現を見てみよう[127]。「光」の出所として我々が真っ先に思い浮かべるのは太陽であり、次に火や月や星であろう[128]。太陽の光は、人間を元気に、健康にし、生命力をアップ

[127] 瀬戸(1995b:53)では、「光のメタファーは、世界をあまねく照らす。あまねく照らし、世界が無知蒙昧の淵に陥るのを防ぐ。暗愚を退け、明知を導き入れる。「光」は、つねに「明」(明るい＝明らか)を引き寄せ、未来に「光明」を与える。また、過去に「照明」をあてる」とある。瀬戸は光の最大の特性を「明るさ」とし、メタファーとして意味を展開する際、互いに関連する意味の方向性として(1)輝き、(2)希望、(3)明らかを挙げている。

[128] 中国人日本語学習者 136 名を対象に、「希望は光」メタファー表現 5 例を読んでもらい、「光と言えば、何が真っ先に思い浮かぶか」について、調査を実施した。その結果、1 位が「太陽」、2 位が「火」、3 位が「星」だということが明らかとなった。太陽の光は地球に熱と光を供給し、植物の成長を促し、地球の生物の存続に欠かせない他の多くの役割を担っている。無数に散らばる星と異なり、太陽はそもそも唯一の存在である。また、その輝き方の強弱も大きく異なることから、太陽はエネルギーを与える存在としての肯定的でダイナミックな価値を付与されている。

させるばかりではなく、我々は通常太陽の光が支配する昼間に、生きるためのさまざまな営みを行い、闇に包まれた夜の間は休息をとる。しかも、太陽の光のおかげで植物は豊かな実を結ぶ時期が生産者にとっては希望と活気のある季節となるため、例文（19）のような≪希望は光である≫というメタファーに基づいた表現が見られるわけである。

（19a）她又一头扎进祖国的中医宝库，在这里看到了希望的光芒（彼女は祖国の漢方医の宝庫に没頭して、ここから希望の光が見えた）。

（19b）彼女の横顔を見るジャンカルロの黒っぽい目にかすかな希望の光がまたたいた。

夜空の星のほとんどは、太陽と同じように光っている。「学会のスター」、「スーパースター」といった言い回しに見られるように、星とは「輝いているものである」、「魅力的なものである」、「頭上に光るものである」というようなプラスのイメージ[129]が付くため、以下のように、「希望」が「星」として概念化されている[130]。

（20a）しかしこの事実は私にとって精神医療改革の希望の星であった。

（20a）在男子 110 米栏预赛中，中国田径的“希望之星”刘翔闪亮登场（男子 110 メートルハードル予選で、中国陸上選手の「希望の星」と呼ばれている劉翔が登場した）。

このほか、「希望」が「道」として概念化されていることも示している。人間は常に欲求に基づいて移動するとされる。言い換えれば、人間は何らかの目的を達するために「どこかへ向かおう」としていると考えられる。移動する際には「道」を利用するため、「道」は、人間生活を支えるもっとも重要な社会基盤の一つである。道路整備が進まなければ、生活も社会も経済も発展できない。人間は「希望」がなければ生きてはいけないのと同じように見える。「希望の道」とは、「現在苦難な生活をしていても、時が経てば必ず明るい希望に満ちた渡れる道があるのだから、希望を持ち続けよう」という思いから捉えら

[129] 有光（2008）は、日本語でも英語でも「星」、あるいは“star”は上下の対比を認知基盤としてよい価値評価を与えられていることが多い。ひいては、輝いていることが明暗の対比を認知基盤としてよい価値評価を与えられていることとして解されるのは日英語で共通していると指摘される。

[130] 鍋島（2011）は、≪希望は星≫という表現は、光としての希望と、高いものとしての希望が合成されたと指摘される。すなわち、≪希望は上≫＋≪希望は光≫⇒≪希望は上の光≫。そして、≪希望は星≫は≪希望は上の光≫の具現化である。

れたであろう。

（21a）もしあなたが大きなことを探し求めて、小さいことを蔑むならば、希望の道の途中で、道に迷ってしまうでしょう。

（21b）在今后几十年的大发展中，京九铁路将成为振兴江西的“希望之路”（今後数十年の発展の中で、京九鉄道は江西省を振興する「希望の道」となるであろう）。

上述の共通するもののほかには、中国語の一方にしか見られないものもある。自然現象をモト領域とする「希望」のメタファーで、“希望的田野（希望の田野）”は中国語に特有の表現であり、用例は 98 ヶ所にものぼる。その大半は“在希望的田野上（希望の田野で）”という曲の形で現れている。

春は万物の蘇りの希望に満ちた季節であり、農家にとって、春は待ちに待った一年のスタート時点に違いない。春に一粒の種を植えれば、秋には何万粒も収穫できることを期待している。20 世紀 80 年代に流行していたこの曲は、中国改革開放後の新しい変化を適切に反映したと言えるであろう。1978 年、中国では、改革開放政策が実施され、天地を覆したような変化が起こり、内外のマスコミの注目を浴びてきた。視聴者がこの曲から、田野と希望を巧みに結合して、豊かで、幸せな未来に憧れているイメージを読み取ることができるであろう。このようにして考えると、言葉は社会の変化や文化などの影響を受けながら、常にその社会の現状を反映し、社会と共に生きる一側面として捉えられていると言えるであろう。言い換えれば、社会と共に変化していく言葉は、その言葉が使用されている文化背景や社会と切っても切られない関係にある。

8.4　自然現象をモト領域とする否定的感情表現

人間の感情は、「喜び」等のポジティブなものだけではなく、「失望」、「恐怖」など、我々の悩みのもととなるものも多い。このような不快な感情は否定的感情と言われている。否定的感情が心身に悪影響を及ぼしてしまうことがよくある。今回のデータに見られるように、日中両言語の中には、不気味な自然現象や災害で否定的なネガティブ感情を表す表現が存在することが判明した。

8.4.1　失望（絶望）をサキ領域とするパターン

「失望（絶望）[131]」とは、期待がはずれてがっかりすることである。例えば、社会的地位の喪失、信頼すべき相手の喪失・裏切りなどに遭遇したりする時、未来への希望を失ったりする時には、人は失望や絶望に陥るであろう。否定的なネガティブ感情であるため、有害な自然現象になぞらえて表現することが比較的に多い。

表 8.5　「失望（絶望）」をサキ領域とする用例対照

モト領域	日本語	代表用例	中国語	代表用例
水	23	失望の渦、絶望の深淵、絶望の淵	38	绝望的深渊、失望的深渊
地			7	绝望的低谷、失望的泥沼、绝望的泥潭
光			5	绝望的黑暗

表 8.5 のデータによると、「失望（絶望）」を「渦」、「淵」に喩える用例が最も多い。8.4.1 で述べたように、流水が地形、水速などの影響を受けたり、障害物に当たったりする時には、その場所に下流で「渦」をつくることがある。「深淵」とは、深い淵や水の深く淀んだ場所を指す。莫大なエネルギーで何もかも引き込んでいく「渦」であろうと、底が見えない「深淵」であろうと、いったん巨大な流れに飲み込まれてしまったら、もはや自分の力だけでは脱出することが非常に難しくなる。

（22a）そしてそれがまぎれもなく本物の汽車だと悟ったとき著者同様絶望の深淵から立ち上がろうという気力が湧いてきたであろう。

（22b）是谁把中国股市推向绝望的深渊（中国の株式市場を絶望の淵に立たされているのはいったい誰であろう）。

（23）游泳名将戴国宏对记者说："1992 年，我坠入了绝望的低谷"（「1992 年、私は絶望のどん底に落ちた」と水泳の名将戴国宏さんが記者に言った）。

例文（22a）の「絶望の深淵から立ち上がる」では、日本全土が荒廃し、日本全国民が天皇の終戦宣言に茫然自失している時間に汽車がダイヤ通りに走

[131] 「絶望」は、希望が 100%断ち切られたと認識することである。「失望」も似た意味ではあるが、希望の一部が失われた場合でも使えるということは両者の区別である。両者は類義語であるため、ここでは、「失望（絶望）」と表示している。

っていたという事実を知っていた時の興奮さなどを意味している。（22b）に見られるように、中国株式市場の暴落によって８割の投資家が損失または含み損を抱えることから、先行きに不安が強まっている絶望感に陥り、投資した資金が回収できない可能性が大きくなる。これは、深い淵の中に落ちれば、人は容易に這い上がれないことと同じであろう。スポーツの場面では、常に失敗がつきまとっている。(23）の場合は、水泳選手がミスを連発したり、試合に負けたりする時には気持ちが最も落ち込んでいる時期を「絶望のどん底」と喩える用例である。

「失望（絶望)」についての写像の傾向を見れば分かるように、「渦」や「深淵」であろうと、“低谷（谷)”や“泥潭（泥沼)”であろうと、方向から言えば「下」のほうに位置する。これは、Lakoff and Johnson（1980）が唱える≪GOOD IS UP; BAD IS DOWN≫（良いは上、悪いは下）と合致する用例でもあると考えられるであろう。

また、中国語には、「絶望」を「暗闇」に見立てる用例が見られる。

（24）在他的世界里，永远是没有光亮、没有色彩，只有一片黑暗，绝望的黑暗

（彼の世界には、光も色も何もない。真っ黒な世界である。絶望の暗闇である)。

「闇」は、光がなくあたり一面が暗いことである。「光」と「闇」の二項対立は、私たちの最も原初的な認識のタイプのひとつと考えられる。一般的に言えば、日中太陽の光が頭上にある場合に私たちは恐怖心がなく前に進めるのに対して、夜の闇中を歩いている場合には、私たちは道に迷わないように慎重に進む。失敗や落ち込みから立ち直れずにいる時間は、暗闇の中にいるような気持ちになってしまうため、“绝望的黑暗（絶望の暗闇)”という言い回しが使用されている。そして、「暗闇」の対義語が「光明」と言われているように、8.4.2で分析した「希望の光」という用例が見られる。

8.4.2　恐怖をサキ領域とするパターン

「恐怖」は、現実もしくは想像上の危険、喜ばしくないリスクに対する強い生物学的な感覚である。人間は恐怖を感じるとき、背筋がヒヤリとしている。上述の否定的なネガティブ感情「失望」、「絶望」と同じように、深淵や暗闇への恐怖感といった人間の身体的な経験に基づくメタファーの用例がいくつか

抽出された。

表 8.6　「恐怖」をサキ領域とする用例対照

モト領域	日本語	代表用例	中国語	代表用例
水	4	恐怖の淵、恐怖のうねり	3	恐怖的深渊、恐怖的漩涡
地	19	恐怖のどん底、恐怖の谷		
光			3	恐怖的黑夜

（25a）こんなことをしていても治りませんが、そのままにしていると恐怖の淵に陥るという最悪の事態は避けられます。

（25b）作为一个从医不久的医务人员，最近，如履薄冰，时常感觉自己行走在恐怖的深渊（医療に携わり始めまもなくのスタッフとして、この頃は薄氷を履むかのように、恐怖の深淵をさまよっているような気がする）。

（26）彼女はたえず目を上へむけて、見さだめがたい頂上の方角を探りながら、一刻も早くこの恐怖の谷をのりきろうとする一念でのぼりつづけた。

（27）她在黑暗里静坐回忆书中的情节。托尔斯泰的小说帮助她度过了那些恐怖的黑夜（彼女は闇の中で座り込み、本のストーリーを考えながら、トルストイの小説のおかげで恐怖の夜を過ごしていた日々を思い出した）。

底の見えない深淵に落ちると、容易に抜け出ることができないことは誰でも想像できるであろう。（25a）は、積極的に前向きな姿勢で治療に臨めなければ確実に死亡することを「恐怖の淵」に喩えられている。（25b）は経験の浅い医療従事者の恐怖心や不安感を物語っている。（26）では、一人で深い谷にいると、恐怖心が倍増する経験が表現されている。夜は暗い。一般に、光は善で闇は悪、というイメージがあるため、（27）は、戦争を「恐怖の夜」に喩えている用例である。

人間は暗い部屋の中で心細さと恐怖が醸成されていく。そして、「絶望」や「恐怖」といった好ましくない感情を経験する際には、大抵の場合、身体の心拍数や体温が変化したり、鳥肌が立ったりするような身体的な反応を伴うため、人間の身体経験に基づくこのようなメタファー表現が存在すると言えるであろう。

8.5　まとめ

感情は複雑で抽象的なものであるため、人間は他人の感情を察知する際、あるいは自分の感情を他人に伝える場合には認知能力が求められる。「欲望の炎」のように、欲望といった抽象的なものを炎などの具体的なものにたとえ、欲望を抑えきれず、限界を超えた場合には、「彼の内に残っていた理性の断片が、欲望の炎に焼かれ、溶かされ、風に飛ばされる灰のように消え失せていった」と表現する。つまり、人間は日常では、ある事柄を他の事柄を通して理解し、経験するといったメタファーの方法を用いて、思考を行う。本章では、モト領域である自然現象の「水」、「火」、「地」、「光」、「風」は、どのようなサキ領域である「感情」があるかを考察した。その結果、日本語と中国語における自然現象をモト領域とする感情メタファー表現が非常に豊富になったということが判明した。

1）自然現象をモト領域とする感情メタファー表現が日本語と中国語に共通して見られる。本章で使われているデータによると、「希望」という肯定的感情のほかに、自然の中で最も基本的な物質「水」を感情に投射して、「感情の渦」、「歓喜の渦」、「失望の渦」、「欲望の渦」といったような様々なメタファー[132]を形成する。水の存在様態における流れ、深さ、清濁、パワーといった特徴は感情という抽象的でつかみ所のない領域に写像される。例えば、「自分自身が自分の感情の洪水から身を守るスキルを身につけるようにしなければなりません」、「心中便一阵阵涌动喜悦的涟漪（心には何度も喜びのさざ波が湧く）」、「感情の渦に巻き込まれると、冷静さを欠き、もてる力も発揮できない」などが挙げられる。「行く川の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず[133]」というように、「水」の「移り変わり」という特性は、常に変化する人間の感情と類似性を持っているため、日中両言語には、感情の変化が水に喩えられる用例が数多く存在する。

感情が水をはじめとする液体にたとえられることは、(Nomura,1996；大石,

---

[132]　本稿で考察された感情６種類のほかに、方（2009）では、「怒りの火を消す」、「怒りが燃えだす」“她窝了一肚子火”といった例文を挙げ、日本語と中国語では火の発生（燃えだす）、持続（燃え上がる）、消滅（消す）で怒りを概念化している。また、「怒りが徐々に湧き出す」“我因为这件事憋了一肚子气”のような例文を挙げ、日本語では怒りは液体であるのに対して、中国語の怒りは「气」であるという概念メタファーの違いが顕著であると指摘している。

[133]　『方丈記』冒頭より。現代語訳は「ゆく河の水の流れは絶える事がなく流れ続ける状態にあって、それでいて、それぞれのもともとの水ではない」。

2006）などで指摘されてきたように、これは、認知主体としての我々は、感覚的・具体的な経験によって作られたイメージ・スキーマを介して、より形式的・抽象的な対象を理解しているという普遍的な認知プロセスに合致するものである。

また、感情一般をサキ領域とするメタファー表現に見られるように、中国語では、圧倒的多数を占める用例は≪感情は水である≫のメタファー概念であるのに対して、日本語の例文は、≪感情は地形、地表の変化である≫に相対的に集中している。地勢の起伏と比べ、水の流れの変化は比較的明らかになっている。それは、日本語の感情表現の一般的な傾向を表すと言えるであろう。つまり、自分の主張や感情を露骨に表すことを避ける。千年に一度と言われる未曾有の東日本大震災に見舞われた日本人の忍耐力や冷静さに世界中で褒め称えられている。どんな時でも冷静に対応する冷静さを日本人が持つ原因は日本の地理、自然環境と深い関係があるばかりではなく、稲作文化の影響も無視できない。日本人は所属する集団や社会への帰属意識が高く、常に穏やかで落ち着いた気質を保ち、喜怒哀楽の感情を表に出したりはしない。日本語においては「感情の起伏」が多用されることは文化が言語に反映されている一側面として捉えられていると言えるであろう。

2）構造的類似性から見れば、自然現象と感情の認知に構造的な対応関係が存在すると言えるであろう。「火花」とは細かく飛び散る火のことであり、石や金属などが激しくぶつかったりするときには瞬間的に発する火である。飛び散った火花は一瞬で消えてしまうケースもあるにもかかわらず、強風に煽られ、火花が散る原因で炎が燃え上がるケースも珍しくない。感情は火花みたいなもので、「バチッ」と火が出たと思ったら、あっという間に冷めて無くなってしまうこともあれば、炎のように燃える情熱を生み出したりすることもある。つまり、感情の程度の大小や表出のされ方が、炎の燃え方の様々な様態によって構造的に表現されていることが分かる。言い換えれば、徐々に盛り上がっている感情と火がついてから次第に炎が立つことと構造的に対応しているため、“感情的火花（感情の火花）”、“情感的火焔（感情の炎）”のような表現が存在している。

「感情」への「水」からの写像も同じである。「水」と言えば、海、川、湖、

滝など様々な風景が頭に浮かぶ。海が時には大荒れしたり、時には穏やかになったりする。川の水が干ばつで激減したり、雨のため氾濫したりする。私たちの感情も一瞬一瞬変化していく。「感情の波」とは感情の起伏が激しいことを表すのに対して、「感情のさざ波」とは些細な感情の変化を捉えている。感情の度合いと自然現象の「火」、「水」の存在と構造的に対応していることが分かるであろう。

3)「希望」とは、好ましい事物の実現を望むことであり、「失望」とは、期待がはずれてがっかりすることである。一般的に「希望」のほうはよいものとされているのに対して、「失望」のほうは悪いものとされている。私達人間は、楽しい時、嬉しい時には姿勢が上向きになり、逆に、悲しい時にはうつむいた姿勢になる。それと同じように、希望を持っている時にはいつも自信満々に胸を張っているのに対して、失望しているときには気持が沈み込み、頭を前に低く垂れている。「希望」と「失望」は逆方向の感情だと思われている。論理的に言えば、「水」と「火」[134]、「闇」と「光」は意味が逆の具体的な概念であり、反対関係にあるモト領域としてサキ領域へ投射する場合には、対称性を保持しているはずである。しかし実態はどうなっているかは収集したデータの分析が必要である。今回のコーパス検索によって得られたさまざまな例の観察により、日中両言語には、「失望を水に、希望を火に喩え」と、「絶望を闇に、希望を光に喩え」というメタファー投射が共有されていることが分った。

Kövecses（2002)は、“There was a glow of happiness in her face（彼女の顔には喜びの光があった)”、“When she heard the news,she lit up（ニュースを聞いて彼女はぱっと明るくなった)”、“She was shining with joy（彼女は喜びに輝いていた)”などの例をあげ、≪Happiness Is Light（幸せは光である）というメタファーを記述している。鍋島弘治朗（2011）は「希望は明るい感情の一種であり、幸せと類似しており、未来の良い状態を考えると幸せになることから、≪希望は光である≫は≪幸せは光である≫から継承を受けていると考えられる」と指摘される。星は光るものであり、そして、火は可燃性の物質と酸素が反応して熱と光を出している現象であるため、希望を星、火や光にたとえ、絶望を闇に

[134] 古代中国の思想に端を発した陰陽説では、「火」は陽に属し、「水」は陰に属する。つまり、「火」と「水」は陰陽の両極にあり、正反対な存在である。

たとえる用例が存在している。それに対して、外的な強制要因がなければ、水は重力に従って下方に流れるものである。これは、Lakoff and Johnson（1980：14－21）が挙げる方向性のメタファーのうち、上下のメタファー≪HAPPY IS UP; SAD IS DOWN≫（幸せは上、不幸せは下）、≪GOOD IS UP; BAD IS DOWN≫（良いは上、悪いは下）とも合致しているため、「希望」を「水」に喩える説は存在しないと言えるであろう[135]。

4）第5章（物質の状態変化を表す漢語語彙をモト領域とするメタファー表現の分析）で見たように、「水」をモト領域とする≪感情は水である≫メタファーの用例の根底には、感情を持つ人の身体または心を容器とし、感情をその容器内の流動体とする概念メタファーがある。言い換えれば、「感情の波」、「喜びの泉」といった表現は＜身体部位は様々な感情という内容物を入れる容器である＞というメタファーの具体例である。このメタファーの基盤は、感情の起伏と表出する体液の増減の相関であることが想像できる。≪感情は火である≫、≪感情は光である≫の場合も、このような共起性基盤が考えられる。我々は希望や欲望などの感情が生じる際、それに伴う生理的反応を知覚することができる。例えば、欲望が満たされると喜びを感じ、希望が膨らむ時には興奮が止まらない。我々はこれらの感情を経験するとき、これらの感情によってもたらされる熱などの生理反応をも一緒に経験する。さらに、この熱などの生理反応は概念レベルにおいて＜火の熱＞、＜光の熱＞と結びついた結果、我々は直接理解するのが困難な抽象的な感情を、直接理解可能な火や光を通して概念化することが可能となると考えられる。一方、≪感情は地である≫の場合も同様、深淵や泥沼をある種の容器として解釈することができるであろう。

5）「感情の波（感情的波涛）」、「欲望の渦（欲望的漩涡）」、「 希望の光（希望的光芒）」、「絶望の淵（绝望的深渊）」に見るように、形態の面から言うと、中国語は日本語と比べると、殆どの場合では単音節語「波」、「渦」、「光」、「淵」は使用されていなく、“波涛”、“漩涡”、“光芒[136]”、“深渊”のよ

[135] 鍋島（2011）は、希望が空間的に上にあるものとして捉えた「希望を掲げる」のような表現があると指摘され、希望のイメージ調査についてアンケートを行った結果、「希望は上」は「希望は前」に続き、設定平均が高かった。また、「希望は下」がイメージに近いという回答はほとんどなかったこととされた。

[136] 中国語は明示的な形式標示が極めて少ない言語である。名詞性並列構造には、「ＡとＢ」型のほかに、ＡＢ型のように並列標識が生起しない名詞性並列構造もある。ＡＢ型のＡとＢは「何らかの意義づけで括られる一組のセットの構成員がそろうこと」を表す。それに、ＡとＢ両者は従属、主従の関係を持っていない。

うな名詞性並列構造の二音節語として用いられることである。中国語の特徴として、1 音節が 1 語に対応し、1 文字で表記され、最初はすべて単音節語より成っていることが上げられる。例えば、中国最古の歌謡集として知られている『詩経』は四言形式を主としており、全 305 篇中の 90%以上は四字一句の四言詩である。一つの音節が必ず一つの意味をもっている（周,2000)。だが、魏晋以降の中国語には二音節語や二字連語の数が増えてゆく。この現象は社会の発展変化にともなって、より豊かな表現法を言語に対して求めるという社会的要請（潜在的ではあるが）のあらわれでもあった（文,2003)。現代中国語の語彙においては、二音節以上の語が優勢を占めている。中でも特に二音節語が多いとされる（相原,1988）。中国語は二音節語としての安定性を保つため、“波”を“涛”、“漩”を“涡”などと組み合わせて使われるのであろう。言い換えれば、二音節語は時代を追って増えて来たものである[137]。

ここでは、もう一つ注目すべきことは、中国語では、“欲望之火（欲望の火)”、“希望之路（希望の道)”のような“之”字構文[138]が観察されることである。“之”字構文は現代中国語では「～的～」構文に相当する。そのうち、A が本体（比較されるもの）であり、B が喩体（比較するもの）である。「欲望の火」は「欲望が火のように燃えている」と解釈されているように、「欲望」と「火」のカテゴリー的不一致が確認されているにもかかわらず、両者の間にある＜熱い・燃え上がる＞という共有特徴が観察される。吴（2006）は、「经济性原则是“之”字结构备受青睐的一个主要原因。“之”字结构以尽可能简洁而经济的语法结构传递尽可能多的有效话语信息，这是现代汉语中由结构助词“的”连接的组合式定中结构所无法企及的（“之”字構文が愛用されている理由は基本的に経済性の原理に拠るものである。簡潔で経済的な文法構造でなるべく多くの有効な情報を伝えるメリットは、連体修飾マーカー“的”が及ばないものである)」と指摘されているように、“之”字構文の使用は前述の「形態の面では、単音節

137　文（2003）では、現代中国語では一文字の語彙よりも二文字の語彙が圧倒的に多い。二文字語彙の創出はしやすいので、時代の新しい事柄は新二文字の語彙を創出するか、既存の二文字語彙に新しい意味を付け加えるかによって表されると指摘されている。

138 “之”は現代中国語の“的”に相当し、“的”の使い方は日本語の「の」と非常に近い。基本的には所属関係を表す。中国語文法では、“定語（限定語）と呼ばれ、連体修飾マーカーの役割を果たす。吴（2006）は、“经济性、审美性和庄重性是“之”字结构最主要的语用特征；该结构经常出现在新闻语体、广告语体中；在使用过程中经常会运用一些修辞格来增加语言交际的魅力（経済性、審美性と荘重性は“之”字構文の最も主要な特徴である。この構文がニュースや広告などによく使われている。レトリックの使用を通して言語の魅力を伝えることがある)”と指摘されている。

語はほとんど使用されていない」ことと一見矛盾しているように見えるが、実は中国語の語彙における構造的な特徴の一つであると言えよう。

以上のように、本章では、自然現象の領域に由来する漢語語彙と、感情領域に由来する漢語語彙がともに表現される慣習的メタファー表現に着目し、日中両言語において、人間の感情がどのような自然現象の観点から理解されるかについての事例研究を行った。人間は共通の身体的経験や生理的反応があるため、日中両言語に自然現象をモト領域とする共通例が存在している。このことは異なる言語間においても認知的に普遍的なものの存在を裏付ける要素になり得る可能性が示唆される。ただし、メタファーの中には、豊富な文化的要素が含まれており、世界への認識は文化の相違によっては違ってくる事例も存在する。

次章では、本章までの分析と考察を踏まえて、本研究のまとめを行った後、今後の課題について述べる。

第 9 章　結論

本章の第 1 節では、第 8 章までの分析と考察を踏まえて、共通性と文化相対性の視座から日本語と中国語における漢語語彙のメタファーの実態をまとめる。第 2 節では、今後の課題について述べる。

9.1　本研究のまとめ

日中両言語におけるメタファーの対照研究は、日本語と中国語が同じ漢字圏であり、語彙を同じ漢字で表記し、その語の「第一義」は同じであるにもかかわらず、「拡張」した意味用法は必ずしも一致しないことを検証し、その要因となる両言語の特性や文化的背景などについて考察した。

本研究は、主に 2010 年度の『朝日新聞』と中国語の《人民日報》の社説に基づき、漢語語彙におけるメタファー用例を抽出し、漢語語彙の実際の用例に基づき、それぞれの表現の本来の意味のどのような特徴に注目し、どのようなメタファーに基づき、新たな意味に拡張しているかを考察した。

第 1 章から第 3 章まで、本研究の背景と目的、先行研究の概観及び本研究で用いるデータと分析方法について論じた。

日中両言語におけるメタファーの使用概観を数字的に分析した結果、人間にまつわる「身体」と「生命」に分類されている語が最も多いことが分かってきた。第 4 章では、モト領域を固定した事例の研究の一つとして、頻出語数が最も多い項目――「人間にまつわる用語」をモト領域とするメタファー表現の分析を行った。我々人間にとって最も身近な物は自身の「身体」に他ならない。身体部位は我々にとって非常に際立つ存在のものであり、認知しやすいものであるため、身体部位を表す語彙が構造的位置づけ、形状（形や大きさ）、機能に基づき、思考、行為などへと多岐にわたって多様な意味に拡張された。構造的位置づけと形状の類似性に基づくメタファーにおいては、身体部位の構造的位置づけや形状が物体の部分との間に、視覚的類似の関係を見いだすことができる。それに、殆ど表面的で、具体的なものに集中している。一方、機能に基づくものは、抽象的な概念を指す場合が多い。なお、我々は身体を介して日々様々なことを経験する。人間の身体経験に基づく用語は、人間以外と共用され、

比較的に抽象的な政治、経済、交通、国家関係や社会政策、法規など異なった領域に写像され、メタファーによって意味が拡張されている。これらの意味の拡張は、身体を何らかの行為をする際の道具として捉えることに端を発しており、各身体部位が喚起するそれぞれの典型行為（典型機能）によって表されている。

第 5 章では、モト領域を固定した事例の研究として、本来は「物質の状態変化」を表す「蒸発」、「沸騰」、「昇華」、「結晶」といった表現に焦点を当て、それぞれの意味拡張に実際にどのような認知プロセスがかかわっているかについて考察した。その結果、「物質の状態変化」を表す語彙がメタファーという比喩に基づき、資産や資金、思想、芸術、国際関係と様々な分野に意味が拡張されていることが判明した。その背景には、従来の研究で言及された≪人間の身体は容器、感情や気質は内容物≫という、非常に一般的な概念メタファーと、≪感情は水である≫、≪言葉は水である≫、≪群集は水である≫、≪金は水である≫という概念メタファーとが関わっている。

第 6 章では、「住居」の主構造を構成する「土台」、「壁」、「大黒柱」、副構造のうちの「天井」、「敷居」、「玄関」といった表現が、メタファーの理論に基づき、新たな意味に拡張される場合を主な考察対象とした。「住居」は私たちの生活において不可欠な「容器」であるため、本来は「住居」を表す言葉が人間の営みや状態などを表現するように様々な多義性を持ち始めている。「大黒柱」、「土台」がメタファーに転換するときには、「支え、支えられること」という構造上の類似性が見出される。「壁」、「敷居」、「玄関」がメタファーに転換するときには、「住居という容器の内外を限る」という共通する特徴が受け継がれている。「天井」がメタファーに転換するときには、「量が多いことや地位が高いことは上、量が少ないことや地位が低いことは下」という「上下」の位置関係が関わっている。

第 7 章は、第 4 章から第 6 章のモト領域を固定した研究とは逆に、サキ領域を固定したメタファーの研究事例として、ある目的を実現するためにとられる「手段・方法」という抽象概念が日本語話者と中国語話者によってどのように意味づけされ、認知されているかを考察した。その結果、「手段・方法」を表すメタファーのモト領域としては、経路、道具、治療や医薬品、身体部位詞、

拠り所、その他などさまざまなものが挙げられることが判明した。その基盤として考えられるのは以下の通りである。すなわち、「手段・方法」と「経路」、「道具」、「治療や医薬品」から「始まり→経過→終わり」という＜線と移動＞のイメージ・スキーマが共通して想定され、「身体部位詞」から「物体との接触を通して物事との関与をとらえる」というイメージ・スキーマ、「生命や財産を守る拠り所」から「容器」のイメージ・スキーマを想定することができるからである。

第 8 章では、「自然現象」の領域に由来する語と「感情」の領域に由来する語がともに表現される慣習的メタファー表現に注目した。「感情一般」、「欲望」、「喜悦」、「希望」、「失望」、「恐怖」と代表的な感情を 6 種類抽出し、それぞれが「水」、「火」、「光」、「地」、「風」と、どのような自然現象の観点から理解され、その写像にどのような構造的一貫性があるのか、また、類似する感情や反対関係にある感情を特徴づけるメタファー写像についても分析してみた。人間は共通の身体的経験や生理的反応があるため、日中両言語に自然現象をモト領域とする共通例が存在している。このことは異なる言語間においても認知的に普遍的なものの存在を裏付ける要素になり得る可能性が示唆される。

メタファーをある言語の体系内で見るだけでなく、異なる言語と比較対照して検討することで普遍性と文化相対性の視座が生まれるとされる。本研究では、多言語比較ではなく、日本語と中国語を対照として研究しているため、第 9 章では共通性と文化相対性の視座から日本語と中国語における漢語語彙のメタファーの実態をまとめた。それから、中国人日本語学習者を対象に、メタファー表現理解テストを用いて、母語とメタファー基盤にかかわる概念・言語の知識、認知様式の知識などは、日本語メタファー表現の理解にいかなる影響を及ぼすのかを考察し、日本語教育に与える示唆を検討した。

各章における言語表現を用いた具体的事例を考察して分かるように、日本語と中国語には異なる言語であるにも関わらず、数多くの共通点が見られた。

1)私たちは、不明瞭なものを明瞭なものに、構造がよく分からないものを既知で構造をよく知っているものに、直接的な経験を持たないものをすでに経験済みのものに喩え、身体的な経験を基盤にしてさまざまなものを概念化している（尼ヶ崎, 1990）。今回抽出されたデータに見られるように、モト領域とし

て選ばれているのはより具体的で、身体的経験とより密接に結びついた概念領域であるのに対して、サキ領域として選ばれているのは通常抽象的で、使用者にとって漠然としてつかみ所のない領域である。そのうち、モト領域の例としては、自然物及び自然現象、人間の身体、健康と病気といった生命にかかわる概念、生産物及び用具が目立って多かった。このほか、空間や方向、農業などにかかわる言葉もここに挙げていいであろう。サキ領域の例としては、感情表現、人間関係、道徳と思考、政治と経済、社会と国家、出来事と行為、方法と手段などがある。それに、特定の領域が特定の領域とペアの形で概念メタファーを構成しているケースも少なくない。例えば、「物質の状態変化」にまつわる語彙と自然現象に由来する語彙が体系的に感情の表現として使用されることが挙げられる。なお、第 4 章から第 8 章における各用例からすでに明らかになったように思うが、身体を通じて経験できる事柄であるほど、私たちにとっては「基本的経験」であり、メタファーの起点領域としても機能しやすいことを証してくれている。例えば、水は我々人間が生きていく上で最も重要であると同時に、最も身近に親しんでいるものである。水に触れる経験は、人間にとって基本的な経験であり、人間が初めて遭遇する事物や抽象的なことがらを理解するためのよりどころとなるため、容器と水の関係を、身体と感情の関係に置き換える≪感情は水である≫という概念メタファーが支持される。

2) 日中両言語は数多くの概念メタファーを共有すると言える。その共通性の起源は人間の身体的経験、あるいは、環境・経験的普遍性に起因すると考えられる。例えば、「日本の心臓部である首都圏の活性化」、“首都北京作为祖国的心脏（祖国の心臓である首都北京）”に見られるように、 国家の首都が「心臓」という概念化には、≪重要は中心であり、非重要は周辺である≫のメタファーが根底にあると考えられる。「言葉と文化の壁を超え」、「従来のスポーツジムにはなかった要素で敷居を下げ」といった言い回しの考察を通して、≪住居は容器である≫という概念メタファーの存在をさらに裏づけることができた。「貧困と格差めぐり議論が沸騰 」、「負の感情を成功への原動力に昇華させる」といった用例から、≪人の身体は容器であり、感情や気質は内容物である≫という概念メタファー、「感情の嵐が吹き荒れている」、「歓喜の太陽」といった用例から、《感情は自然現象である》という概念メタファー、「日朝両国の

友好が深まることが問題解決の早道」、「アクセス向上という課題を解決する道」といった用例から、《目標のある（長期）活動は経路を移動することである》という概念メタファー、「希望の星」、「失望の渦」といった用例から、《良いことは上であり、悪いことは下である》という概念メタファーなどが想像できる。

3）第4章から第8章の日中両言語における具体的事例を考察して分かるように、メタファーの基盤を説明するのに少なくとも共起性、構造性、評価性の三つを設定する必要があることが分かってきた。この結果は鍋島(2002)、（2011）などの主張の妥当性を裏づけるものである。Lakoff and Johnson（1980）では共起性と類似性は、いずれもメタファーの基盤になり得るという見解を示している。しかしながら、Lakoff and Johnson（1980）以降対立する二つの立場が現れ、一つはGrady(1997)などに代表されるメタファーの基盤として共起性しか認めないものであり、もう一つは鍋島(2002)、（2011)などに代表される共起性を含む複数の基盤を認めるものである。

メタファーの基盤を共起性に集約する立場からは日中両言語における≪人の身体は容器であり、感情は内容物の水である≫、≪感情は火である≫などの基盤について説明することができる。言い換えれば、特定の感情が生じる際に伴う体温の上昇と、基本レベルのカテゴリーに属する＜水＞の＜温度が高くなると蒸発する＞、＜火＞の持つ＜熱＞といった属性の間にある種の類似性を見出すことができる。それに対して、≪金銭や群集は水である≫、≪直立（整った形）は良いことである≫、≪手段・方法は経路や道具である≫といった概念メタファーにおいては、「事態Ａを経験すると同時に事態Ｂをも経験する」という共起性基盤で説明できない。これらは構造的類似性によるもの（すなわち構造性基盤）という観点からアプローチすることができる。換言すれば、＜大量性＞がサキ領域である＜金銭や群集＞とモト領域である＜水＞を結ぶ基盤であり、＜直立性＞がサキ領域である＜家族や組織＞とモト領域である＜大黒柱＞を結ぶ基盤であり、「手段・方法」と「経路」や「道具」から「始まり→経過→終わり」という＜線と移動＞のイメージ・スキーマが共通して想定される。一方、“张作霖手黑（張作霖は手口がひどい）”、“绝望的黑暗（絶望の暗闇）”、“恐怖之夜（恐怖の夜）”、「希望の光」、「希望の星」といった表現から≪光は善であり、闇は悪である》という評価性を持つメタファーが活

発に働いていることが伺える。

4)論理的に言えば、「希望」と「失望」、「凍結」と「解凍」は意味が逆の具体的な概念である。反対関係にあるモト領域としてサキ領域へ投射する場合には、対称性を保持しているはずであるが、しかし実態は必ずしもそうなるとは限らない。今回のコーパス検索によって得られたさまざまな例の観察により分かってきたのは、日中両言語には、「失望を水に、希望を火に喩え」と、「絶望を闇に、希望を光に喩え」という対称性を保持しているメタファー投射が共有されているが、「解凍」と「凍結」からはこのような対称性が観察できない。

5)＜“蒸発”の学校経営者を手配＞或いは＜设立能源开发的“天花板”（エネルギー開発に「天井」を張る＞というように、比喩的な使い方にはかぎ括弧でくくって表記する例が圧倒的に大部分を占めている。文におけるかぎ括弧の使用によって際立たれることは、書き手の側に、この用法の比喩的な性格がまだ意識されているということである。しかし、言語そのものは、時代とともに変化するものだと言われているように、話題に上れば上るほど認知度が高くなる。語彙の比喩的転用に対する認知度が高くなるにつれて、かぎ括弧がいつの間にか消えてしまったのであろう。

それに、日中両言語の辞書において、多義語に関する意味記述の配列順序や仕方は様々であるが、両言語の実例と用法においては、メタファーによって拡張された意味のかなりの部分が、基本的な意味と同じ程度に慣用化され、定着度に関し際だった差は認められないものが少なくないことが今回の調査で分かってきた。例えば、“升华（昇華）”、“顶梁柱（大黒柱）”といった漢語語彙に関して、日本語話者と中国語話者間においては慣用的な、定着度のかなり高い表現であり、比喩としての意味をほとんど失った死喩であると言えるであろう。

一方、上述のような共通点がある反面、メタファーによる意味拡張の間には相違点も見受けられる。 相違点としては主に以下のような点が挙げられる。

1）メタファーには地理や歴史、社会文化的な要因が強く影響する場合が数多くある。「住居」をモト領域とする第 6 章において、「土台」と「壁」の 2 語が挙げられる。日本は世界で有数の地震大国であるといわれる。「土台」がしっかりしていなければ、どんなに立派な建物でも地震の揺れで倒れたり壊れた

りしてしまう。「土台」への注目度が高いため、「米中関係の土台」、「技術の土台」、「成功の土台」といった様々な言い回しが中国語より圧倒的に多い。それに、日本社会では「内」と「外」の意識が非常に強いとよく言われている。「住居」で言えば、「壁」の内部はメンバーが安全に活動できる保護された領域であるのに対して、「壁」の外は、危険が潜む領域である。日本には「内」と「外」の概念があるため、「住居」という容器の内外を限る「壁」という日本語が「言葉の壁」、「制度の壁」、「文化の壁」と、様々な領域へ意義が拡張される。また、日中両国の宗教文化や民間信仰には多くの違いが存在している。それはメタファー表現にも反映されている。例えば、人に似た想像上の怪物とされる「鬼」と言えば、中国では幽霊や死んだ人のことが思い出され、残酷で非情な人を喩えるのに使うが、日本人にとっての「鬼」は決して不気味な意味合いだけではないため、「仕事の鬼」、「スポーツの鬼」といったメタファー表現が生まれる。一方、“紧箍咒（中国の神話小説『西遊記』に由来する。三蔵法師が孫悟空を懲らしめるために唱える呪文のことである。それを唱えると悟空の頭につけられた金の輪が締まるため、人を服従させるための有効な手段と意義が拡張される）”、“尚方宝剣（皇帝が持つ剣のことであり、これを与えられた者は皇帝とほぼ同等の権力を持ち、軍を動かすことや諸侯以下大臣らの処罰などを皇帝から一任されるなど、その権力は絶大なものである）”はいずれも中国人特有の信仰や伝説から影響を受けて、中国語にしかない漢語表現である。

「身体部位語彙」をモト領域とするメタファーにおいて、「耳」という語が挙げられる。例えば、第 4 章の人間にまつわる漢語語彙をモト領域とする事例研究で考察した聴覚器官の「耳」のように、中国語には、以前、＜平面的なものの端に位置するもの＞という特徴に注目し、伝統的な建築様式“四合院”の母屋の脇にくっつけたような形状の小さめの部屋は“耳房”、“耳舎”、“耳屋”と呼ばれていたが、都市化が進むにつれて、“四合院”が減少しつつあり、“耳房”、“耳舎”、“耳屋”のような言い方が現在では社会から消えているようである。一方、中国では“面包耳朵（パンの耳）”という言い方は現在では比較的なじみが薄いと思われる。これは、中国でパンと言って思い浮かべるのが日本のような食パンではなく、丸くて固い皮の付いたパンなので「耳」という発想が浮かばなかったという考えが関連するかもしれない。しかしながら、

食生活が欧米化するとともに、食パンが常食となるにつれて、“面包耳朵（パンの耳）”という言い方が次第に使われるようになるであろう。それに、「木耳（きくらげ)」が中国でたくさん採れるため、中華料理によく使われる食材として知られているが、和食には少ないためか、漢字「木耳」で表記されるのが割と少なくなった。言い換えれば、メタファーによる意味拡張された「耳」はその地でとれた農産物などの食材とその地域特有の食習慣などが相まって形成されたものだと言えるであろう。

「自然現象」をモト領域とする概念メタファーにおいても、文化などによる特有の差異が伺える。「感情の起伏」、“感情的波涛（感情の波)”、“感情的洪水（感情の洪水)”といった感情一般をサキ領域とするメタファー表現に見られるように、中国語では、圧倒的多数を占める用例は≪感情の変化は水の移動である≫のメタファー概念であるのに対して、日本語の例文は、≪感情は地形、地表の変化である≫に相対的に集中している。地勢の起伏と比べ、水の流れの変化は比較的明瞭に捉えられている。このような相違は、文化が言語に反映されている一側面として捉えられていると言えるであろう。換言すれば、これは、「日本人は理性的で、感情を表に出さない傾向にあるのに対して、中国人は感情をストレートに表現する傾向にある」の現れの一つだと言える。

2）言語の構造（語構成）から言えば、中国語のほうでは、一字（1 音節）の漢語（単純語）[139]はほとんど現われなかった。

参照資料として収集した日本語の漢語語彙用例 273 語のうち、一字の漢語語彙は 44 語と、約全体の 16%を占めているのに対して、中国語のほうでは、ほぼ皆無と言える。そして、各章における具体的事例を分析してみれば分かるように、日本語のメタファー表現によく見られる単音節語「手」（「卑怯な手を使う」/“卑劣的手段”）、「足」（「都会の足が乱れる」/“城市交通紊乱”）、「壁」（「言葉の壁に遭遇する」/“遭遇语言障碍”）、「道」（「解決の道を探る」/“解决问题的途径”）、「渦」（「恐怖の渦に巻き込まれる」/“恐怖的漩涡”）、「光」（「希望の光」/“希望的光芒”）などは中国語ではほとんど使用されていないことが分かる。その理由としては、以下のようなこと

[139] “社会之墙（社会の壁)”、“欲望之火（欲望の火)”、“希望之路（希望の道)”のように、前後を繋げる副詞である“之”の後ろには一文字の漢字が観察されるにもかかわらず、これは中国語特有の“之”字结构（“之”が付く四字熟語）に相当する。

が考えられるであろう。

中国語は極めて明確な音節構造を有し、その特徴として、1 音節が 1 語 に対応し、1 文字で表記されることが挙げられる。現代中国語の語彙においては二音節以上の語が優勢を占めている。中でも特に二音節語が圧倒的に多いとされる[140]。これは一音節の単語の場合におこる同音衝突（同音異義語）を避け、安定性を保つために、用いられた方法だと言える。例えば、「壁」を表す“墻壁”という単語は、文字に書かれている場合は前の“墻”だけでも意味がはっきりしているが、耳で聞いたときには、同じ音を持つ文字（単語）が、声調は異なっても“强・蔷・樯・抢・枪・腔”などたくさんあり、混乱しないとはいい難い。そこで、“墻”の中心的な意味を表す部分と“壁”（意味は“墻”という意味と同様で“墻”と並ぶものと言ってもいい）という音を添える付加的な部分を合わせて、二音節の単語にしている。中国語のいわゆる“并列结构合成词（近義並列型二音節語の構造）”である。

9.2　今後の課題

認知言語学における重要な発見の 1 つとして「抽象概念の大部分はメタファーに基づいて理解される」というのが挙げられる。本研究では漢語語彙におけるメタファーの日中対照研究に関する分析を通してこの主張の妥当性をさらに裏づけることができた。これは、本研究で取り上げた具体例のほとんどが詩歌などの分野で用いられる特殊な表現ではなく、新聞などでよく使用されるごく一般的な言語表現であるにもかかわらず、程度の差こそみられるものの、いずれもメタファーの色合いを帯びているというところからも窺える。今後、日本語教育に関するさまざまな課題に取り組むにあたっては、メタファーが内包する文化相互理解の可能性とメタファー意識、メタファーの活用をどのように日本語教育に応用できるかなどを研究課題として取り組みたい。

コーパスを用いたメタファー研究は、現在は発展途上の段階であるが、いろいろな可能性を秘めた有望な方法論だと考えられる。しかしながら、どれぐら

[140] 古代中国語では単音節語が圧倒的に多かったが、現代中国語は 2 音節語が多い。使用頻度の高い 8000 の常用語についての統計によると、現代語では 2 音節語が 71%を占め、単音節の 26%を大きく上回っている。といってもこの二つで 97%を占めてしまい、残りの 3%を 3 音節語や 4 音節語（例えば“研究生（大学院生）”、“ 奥林匹克（オリンピック）”などの名詞や音訳語など）が取り合うという構図だ。(『中国語ジャーナル』（アルク）の「伝えるヒント」連載 2005 年)

いの用例があればメタファーとして認めてよいのか、領域の記述はどのようにすればよいかなど方法論に関して詰めていくべきことは少なくないと思われるが、今後はさらに資料を加えて分析、検討を行っていきたいと考えている。

参考文献

[1] 相原茂（1988)『中国語学習ハンドバック』大修館書店.
[2] 赤平恵里(2006)「改革開放後の新語における比喩的用法:日中同形語“新干线”(新幹線)小考」『藝文研究』90 号，120-141.
[3] 阿久津智（1991)「漢字圏の学生に対する漢字教育について」『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』第 6 号，129-144.
[4] 尼ヶ崎彬（1990)『ことばと身体』勁草書房.
[5] 有薗智美(2008)「「顔」の意味拡張に対する認知的考察」『言葉と文化』9, 287-301.
[6] 有光奈美（2008)「日英語の「星」に見られる方向付けメタファー--商品・企業におけるメタファー的命名について」『東洋大学経営論集』第 71 号, 233-249.
[7] 池上嘉彦（1981)『「する」と「なる」の言語学―言語と文化のタイポロジーへの試論』大修館書店.
[8] 池上嘉彦訳（1998)『認知言語学入門』大修館書店.
[9] 岩田純一（2002)「乳幼児の発達とメタファー」『月刊言語』31 (8), 40-46.
[10] 遠藤雅裕（2007)「中国語辞書における多義語の記述について」『中国文学研究』 33 号，99-115.
[11] 大石亨(2006) 「水のメタファー再考―コーパスを用いた概念メタファー分析の試み」『日本認知言語学会論文集』第 6 巻, 277-287.
[12] 大越美恵子・高橋美和子（1997)『中国人のための漢字の読み方ハンドブック』スリーエーネットワーク.
[13] 大森文子（2008)「感情が形づくる心の風景-“a flood of joy”型メタファー表現に見る写像の特性」『日本認知言語学会論文集』第 8 巻, 285-295.
[14] 小野寺美智子（2011)「概念メタファー理論に関する一考察―メタファーの認知的基盤と動機」『拓殖大学語学研究』（124)，1-23.
[15] 菅野盾樹（1985)『メタファーの記号論』勁草書房.
[16] 国広哲弥（1997)『理想の国語辞典』大修館書店.
[17] 呉悦、筒井紀美（2003)「中国語新語の中の日本語語彙についての研究」『日中言語対照研究論集』5 号, 147-169.
[18] 国立国語研究所（1962)『現代雑誌九十類の用語用例 第 3 分冊分析』秀英出版.
[19] 後藤斉(1993) 「「神話」の比喩的用法について―コーパス言語学からのアプローチ」『東北大学言語学論集』第 2 号，1-16.
[20] 近藤良樹(2007)「希望とはー希い望むこと」『広島大学大学院文学研究科論集』第 67 巻, 1-15.
[21] 左咏梅（2007)「「上」と「下」のメタファーについて―日中対照研究―」『杏林大学大学院国際協力研究科大学院論文集』4，47－63
[22] 佐々木文彦(2013)「コーパスを利用した言葉の意味・用法の変化の研究―「敷居が高い」を例に―」第 4 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集.
[23] 佐藤信夫（1992)『レトリック感覚』講談社.
[24] 佐藤喜代治編（1983)『語彙研究文献語別目録』明治書院.

[25] 司馬遼太郎・山崎正和(2001)『日本人の内と外―対談』中央公論新社.
[26] 下川耿史・家庭総合研究会編（2001)『昭和・平成家庭史年表』河出書房新社.
[27] 瀬田幸人（2009）「メタファーについて」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』142, 49-59.
[28] 瀬戸賢一(1995a)『空間のレトリック』海鳴社.
[29] 瀬戸賢一(1995b)『メタファー思考』講談社.
[30] 瀬戸賢一(2005)『よくわかる比喩――ことばの根っこを知ろう』研究社.
[31] 高橋 渡(1993)「 閉ざされる円環－The Dead の結末の解釈を巡って」JOYCEAN JAPAN No.4, June 16 p.35＜http://www.hirojo-u.ac.jp/~takahasi/
[32] 谷口一美（2003)『認知意味論の新展開：メタファーとメトニミー』研究社.
[33] 陳毓敏（2002)「日本語二字漢字語彙とそれに対応する中国語二字漢字語彙は同じか－台湾及び中国の中国語との比較」『言語文化と日本語教育』24, 40-53.
[34] 陳頴卓（2012)「「手」に関する比喩表現について ： 日本語と中国語における表現の比較」『山口国文』 35, 68-55.
[35] 中根千枝（1967）『タテ社会の人間関係』講談社.
[36] 中野洋（1981)「『分類語彙表』の語数」『計量国語学』12（8), 376-383.
[37] 中村明（1993)『感情表現辞典』 東京堂出版.
[38] 鍋島弘治朗（2002)「メタファーと意味の構造性―プライマリー・メタファー及びイメージ・スキーマとの関連から」『認知言語学論考』2, 25-109.
[39] 鍋島弘治朗（2003)「領域を結ぶのは何か―メタファー理論における価値的類似性と構造的類似性―」『日本認知言語学会論文集』3, 12-21.
[40] 鍋島弘治朗・菊池敦子（2003)「『問題』の概念化―認知メタファー理論の視点から―」『文学論集』53－2, 91-137.
[41] 鍋島弘治朗(2011)『日本語のメタファー』くろしお出版.
[42] 野内良三（1998)『レトリック辞典』 国書刊行会.
[43] 日本大辞典刊行会編（2003)『日本国語大辞典』第二版　小学館.
[44] 野村益寛(2002)「＜液体＞としての言葉： 日本語におけるコミュニケーションのメタファー化をめぐって」大堀壽夫編『認知言語学 II ：カテゴリー化』, 37-57, 東京大学出版会.
[45] 橋元良明（1989)『背理のコミュニケーション』勁草書房.
[46] ハンデルマン, S.A.（山形和美訳）（1987)『誰がモーセを殺したか：現代文学理論におけるラビ的解釈の出現』法政大学出版局.
[47] 樋口桂子(1995) 『イソップのレトリック－メタファーからメトニミーへ』勁草書房.
[48] 菱沼透（1983). 「日本語と中国語の常用字彙」『中国研究月報』428, 1-20.
[49] 菱沼透（1984). 「中国語の標準字体と日本の常用字体」『日本語学』3, 32-40.
[50] 藤堂明保（1965)『漢字語源辞典』学燈社.
[51] 文楚雄（2003)「中国のことばと文化・社会（一)」『立命館産業社会論集』

第 39 巻第 2 号, 137-150.
[52] 方小贇（2009）「日本語と中国語における怒りの表現について」『宇都宮大学国際学部研究論集』第 27 号, 177-185.
[53] 方小贇（2011）「日本語と中国語における「首」を含んだ慣用句の比較」『宇都宮大学国際学部研究論集』第 31 号, 137-150.
[54] 方小贇（2011）「日本語と中国語における「鼻」を含んだ慣用句の比較」『外国文学』(60), 15-32.
[55] 堀川知佳子(2006)「慣用句にあらわれた身体部位」『東京女子大学言語文化研究』, 96-105.
[56] 松井真人(2002)「メタファーの普遍性と文化的変異についての一考察―英語と日本語におけるイヌに関するメタファー表現をめぐって―」『山形県立米沢女子短期大学紀要』37, 19-30.
[57] 松浦光(2013)「気象現象とメタファーの一考察 ： 精神における「晴れる」を中心に」『言葉と文化』14, 113-127.
[58] 松本曜（2000）「日本語における身体部位語彙から物体部分詞への比喩的拡張―その性質と制約―」坂原茂（編）『認知言語学の発展』ひつじ書房.
[59] 松本曜編（2003）『認知意味論』大修館書店.
[60] ルイス・マンフォード著； 樋口清訳(1971)『機械の神話:技術と人類の発達』河出書房新社.
[61] 籾山洋介（1994）「形容詞「カタイ」の多義構造」『名古屋大学日本語日本文化論集』(2), 65-90.
[62] 籾山洋介（1997）「慣用句の体系的分類―隠喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中心に」『名古屋大学国語国文学』(80), 29-43.
[63] 籾山洋介･深田智(2003)「意味の拡張」松本曜(編)(2003)『認知意味論』大修館書店.
[64] 籾山洋介（2006）『日本語は人間をどう見ているか』研究社.
[65] 籾山洋介（2007）「スポーツに由来する日常の言葉（１）－「野球」（その１）－」、『名古屋大学日本語・日本文化論集』第 14 号, pp. 93-123.
[66] 籾山洋介（2010）「『相撲』の言葉に由来する比喩」『日語学習与研究』第 5 期, 7-15. 中国対外経済貿易大学
[67] 山崎誠・小沼悦（2004）「現代雑誌における語種構成」『言語処理学会第10 回年次大会発表論文集』, 670-673.
[68] 山下秀雄（1986）『日本のことばとこころ』 講談社学術文庫.
[69] 山下洋子(2007)「敷居が高い」放送研究と調査2007 年11 月号. NHK 放送文化研究所. p69.
http://www.nhk.or.jp/bunken/summary/kotoba/kotobax3/pdf/031.pdf.
[70] 山添秀剛（2007）「『手段・方法』を表すメタファー表現に関する一考察」『人文学会紀要』第 82 号, 81-97. 札幌学院大学人文学会.
[71] 山田伸明（1989）「日英語に於ける家のメタファー」『国際研究』 6, 125-142.
[72] 山梨正明(1988) 『比喩と理解』東京大学出版会.
[73] 李愛華（2012）「漢語における比喩的な転用について―新聞記事に出現した「蒸発」に関する分析」『広島大学比較日本文化学研究』第 5 号, 33-48.

［74］李愛華（2013）「漢語語彙におけるメタファーの日中対照―「手段・方法」を表す表現に関する分析」『广岛大学比较日本文化学研究』第 6 号，1-19.
［75］李愛華（2014）「身体部位語彙の比喩的拡張における日中対照」『广岛大学比较日本文化学研究』第 7 号，1-22.
［76］渡邉美代子(2010)「メタファーを通しての理解と知識--コトバという形式知と身体知としての暗黙知」『東京経済大学人文自然科学論集』129 号，47～71.
［77］Agus Suherman Suryadimulya(2005)「鼻を使った慣用句の日、イ語対照研究―日本語教育のために―」『国際シンポジウム比較語彙研究Ⅷ・語彙研究セミナーⅤ』，語彙研究会.
［78］Beardsley,M.C(1962)The metaphorical twist.Philosophy and phenomenological research, (22-3):293-307.
［79］Black,M(1979)More about metaphor.In Ortony,A.ed.,Metaphor and thought . Cambridge: Cambridge University Press.
［80］Deignan,Alice(1997)CollinsCobuildEnglishGuides 7: Metaphor. London :London Harper Collins.
［81］Glucksberg,S.andB.Keysar(1993)Howmetaphors work. In Ortony,A.ed.,Metaphor and thought . Cambridge: Cambridge University Press,401-424.
［82］Grady, Joseph (1997)Joe. THEORIES ARE BUILDINGS revisited. Cognitive Linguistics8(4), 267-290.
［83］Kövecses, Zoltan（2000)Metaphor and Emotion: Language, Culture, and Body in Human Feeling, Cambridge: Cambridge University Press.
［84］Kövecses, Zoltan（2002) Metaphor: A Practical Introduction. Oxford University Press
［85］Kövecses, Zoltan（2005）Metaphor in Culture： Universality and Variation. Cambridge：Cambridge University Press.
［86］Lakoff, George and Mark Johnson（1980）Metaphers we live by. Chicago: University of Chicago Press.（渡部昇一他（訳）1986『レトリックと人生』 大修館書店.
［87］Lakoff, George (1987) Women, Fire, and Dangerous Things, Chicago: The University of Chicago Press.（池上嘉彦，河上誓作，他（訳）『認知意味論―言語から見た人間の心』紀伊國屋書店，1993）
［88］Lakoff,George(1993)Thecontemporarytheoryofmetaphor.InOrtony,A.ed.,Metaphor and thought . Cambridge: Cambridge University Press
［89］Lakoff, George,Jane Espenson, and Alan Schwartz （1991）Master Metaphor List.2nd ed, Cognitive Linguistics Group. University of California at Berkeley.
［90］Nomura,Masuhiro(1996) The Ubiquity of the Fluid Metaphor in Japanese: A Case Study. Poetica, 46
［91］Shinohara,Kazuko and Matsunaka, Yoshihiro(2003)“An analysis of Japanese emotion metaphors.”『ことばと人間』4 横浜「言語と人間」研究会.

［92］ Shinohara,Kazuko and Matsunaka, Yoshihiro(2009)“Pictorial metaphors of emotion in Japanese comics.” Multimodal Metaphor.Berlin. de Gruyter.
［93］ Yokosawa, K. & Umeda, M. (1988). Processes in human Kanji-word recognition. Proceedings of the 1988 IEEE International Conference on Systems, Man, and Cybernetics, 377-380. August 8-12, Beijing and Shenyang, China.
［94］ 蓝纯（2005）《认知语言学与隐喻研究》外语教学与研究出版社.
［95］ 李爱华（2012）“从概念隐喻理论探讨日汉同形词的语义扩展—以表物质变化词汇为主”《 语言文化比较研究》2012 年. 创刊号, 69-77.
［96］ 李爱华（2013）“日语词汇基于隐喻的语义扩展”《内蒙古师范大学学报》. 第 7 期, 117-120.
［97］ 李爱华(2013）“日汉“房屋”隐喻的认知分析”《北研学刊》. 第 9 号, 168-177.
［98］ 李爱华(2014）“基于概念隐喻理论的日汉情感隐喻对比分析”《北研学刊》. 第 10 号, 17-30.
［99］ 中国科学院语言研究所（2005）《现代汉语词典》第 5 版. 商务印书馆.
［100］ 王力（1980）《汉语史稿下》中华书局.
［101］ 吴永存（2006）“现代汉语中″之″字结构的语义指向分析”《语文学刊》第 12 期, 126-128.
［102］ 周及徐（2000）“上古汉语双音节词单音节化现象初探”《四川大学学报(哲学社会科学版)》第 4 期, 122-128.
［103］ 朱小安（1994）“试论隐喻概念”《解放军外语学院学报》3, 12-16.

辞書

［1］ 相原茂編集 （2010）『講談社中日辞典』第 3 版, 講談社.
［2］ 梅棹忠夫［ほか］監修(1989)『日本語大辞典』講談社.
［3］ 大野晋・浜西正人著(1981)『角川類語新辞典』角川書店.
［4］ 金田一京助編(1962)『新選国語辞典』改訂版, 小学館, 1962.
［5］ 金田一京助[ほか]編(1974)『新明解国語辞典』第２版, 三省堂.
［6］ 金田一春彦他編(1978)『学研国語大辞典』学習研究社.
［7］ 国立国語研究所 (2004)『分類語彙表』大日本図書.
［8］ 藤堂明保 ［ほか］ 編 （2011）『漢字源』改訂第 5 版, 学研教育出版.
［9］ 西尾実他編(1963)『岩波国語辞典』第 1 版, 岩波書店.
［10］ 日本大辞典刊行会編(1974)『日本国語大辞典』第 1 版, 小学館.
［11］ 林四郎 〔ほか〕 編著(1985)『例解新国語辞典』三省堂.
［12］ 藤原与一(1985)『表現類語辞典』東京堂出版.
［13］ 諸橋轍次著;鎌田正, 米山寅太郎編(1990)『大漢和辞典』大修館書店.
［14］ 山田俊雄〔ほか〕編(1965)『新潮国語辞典』, 新潮社.
［15］ 米川明彦(2003)『日本俗語大辞典』東京堂出版.
［16］ 辞海编辑委员会编纂（2002）《辞海》上海辞书出版社.
［17］ 董大年主编主编(2007)《现代汉语分类大词典》上海辞书出版社.
［18］ 苏新春主编(2013)《现代汉语分类词典》商务印书馆.
［19］ 韩作黎主编(2001)《新华词典》第 3 版, 商务印书馆.
［20］ 吕叔湘・丁声树主编(2012)《现代汉语词典》第 6 版, 商务印书馆.
［21］ 王禾・王秋菊编(2011)《新汉日辞典》第 1 版, 辽宁人民出版社.

付　録

付録１：　抽出された日本語の漢語語彙(273 語)

1　抽象的関係（20）

1.12　存在：空白、復調　（2）

1.13　様相：汚点（1）

1.15　作用：漂流、転落、浮沈、膠着、流入、流出、暴走、向上　（8）

1.16　時間：氷河期、正念場（2）

1.17　空間：頂点、出発点、着地点、震源地（4）

1.18　形：　亀裂、穴、隙（3）

2　人間主体　（3）

1.23　人物：帝王、土俵の鬼　（2）

1.26　社会：世界の工場（1）

3　人間活動-精神および行為　（36）

1.30　心：　病理、戦略、恐慌（3）

1.31　言語：序章、難題、課題、選択肢、終止符、宿題、卒業、疑問符、平行線、延長線、構図、接点（12）

1.32　芸術：青写真（1）

1.33　生活：続投、同居、台頭、蜜月、満喫、第一歩、一歩、投球（8）

1.34　行為：右往左往、体力（2）

2.35　交わり：布陣、決戦、退陣、陣営、陣頭、攻撃、突破口、最前線（8）

1.38　事業：大掃除、収穫（2）

4 生産物および用具（79）

1.40　物品：重荷（1）

1.41　資材：歯車、制度の網、試金石、軸、指針、命綱、回路、火薬庫、起爆剤（9）

1.42　衣料：糸、糸口、大風呂敷、破綻（4）

1.43　食料：糧、献立（2）

1.44　住居：支柱、障壁、柱、壁、万里の長城、司令塔、屋台骨、垣根、構築、崩壊、土俵、土俵際、玄関、客間、礎石、舞台、門戸、礎、扉、土台、金字塔、天井、棟梁　敷居、大黒柱、避難所、架空（27）

1.45　道具：盾、看板（大看板、金看板）、両刃の剣、財布、(時限)爆弾、武器、的、鍵、矢先、矛先、足場、指針、駒、器、圧力鍋（15）

1.46　機械：車の両輪、軌道、焦点、機関車、減速、失速、難航（7）

1.47　土地利用：路線、袋小路、岐路、分岐点、防波堤、温床、溝、経路、道、近道、早道、筋道、出口、十字路、　（14）

5　自然物および現象　(135)

1.50　自然：色彩、風、逆風、汚染、（不）透明、嵐、星、風景、風潮、暗闇、大海（11）

1.51　物質：噴出、上昇気流、盤石、暗雲、波、波紋、大波、余波、風波、水泡、黄金（比、時代、週間）、火種、膨張、爆発、旋風、土壌、凍結、沸騰、落差、一枚岩、熱気、空気、退潮、溶解、蒸発、解凍、昇華、結晶、浮上（29）

1.52　天地：瀬戸際、風土、水面下、渦、水際、底流、浸透、最高峰、分水嶺、山、泥沼、逆流、風穴、奔流、不毛、源泉、源、峠、深淵、谷（20）

1.53　生物：腐敗（1）

1.54　植物：芽、根、根元、根幹、節目、種、開花、スポーツの花、刺、成熟、未熟（11）

1.55　動物：脱皮、卵、単眼、複眼（4）

1.56　身体：足、頭脳、殻、血管、体質、背中、顔、足元、企業の腰、耳目、足腰、骨格、母体、手足、小手先、目玉、足音、傷跡、足跡、手腕、姿、姿勢、頭、腹、耳、面、目、脈、心臓、口、手、大動脈、傷口、首（34）

1.57　生命：誕生、慢性病、急性病、傷、産声、中毒、持病、後遺症、病根、元気、病理、

副作用、短命政権、**合併症**、消化、咀嚼、処方箋、**対症療法**、打診、**麻痺**、特効薬、**良薬**、劇薬、妙薬、秘薬（25）

注：黒字：形式は対応しないが、意味は対応している。

一重下線：形式も意味も対応している。

波線：形式は対応しているが、意味は対応していない。

残り：日本語にしかない。

付録２： 抽出された中国語（299 語）

A 宇宙・地球（40）

A5 太阳（1）

A20 光芒 （1）

A33 灰色;黑暗;绿色;色彩;透明;风景（6）

A71 气象;风暴;暴风雨;回暖;阴霾;气候;降温;滑坡;东风;逆风（10）

A102 海洋;高潮;潮流;涟漪;洪流;激流险滩;热潮;暴涨;浪花;波澜;波涛（11）

A104 浪潮;源泉;源头（3）

A112 深渊;漩涡 （2）

A130 起伏（1）

A141 暗礁;低谷;泥潭;泥沼;绿洲（5）

B 生命・生物（11）

B21 候鸟（1）

B26 龙头（1）

B41 触角;后腿（2）

B42 皮毛;羽翼（2）

B160 萌芽;绽放;开花;发芽（4）

B190 根（文化之根；金融之根）（1）

C 人体 医药卫生（60）

C8 软肋;骨干;血脉;手脚;手腕;（山）头;（山）腰;脊背;耳朵;手心;（路）面;（山）脉;骨架;齿（轮）;心脏;大动脉;眼球;瘫痪;消化;健康;拥抱;原地踏步;咀嚼;瓶颈;血肉;眼睛（26）

C26 血液;细胞（2）

C62 脉络（条理）；时代脉搏（2）

C110 挠头;转身;徘徊;跌跤;脚步;栽跟头;步伐;抬头;掉头;第一步;一步（11）

C162 症结;对症下药;良方;妙药;良药;特效药（6）

C208 近视;通病（2）

C220 预防针;恶性肿瘤;镇定剂;放血;软骨病（5）

C228 夭折;阵痛;孕育;剖析;透视;头疼（6）

D 人类・社会（5）

D1 诸葛亮;花木兰 （2）

D80 断乳（1）

D130 **大家庭;(小)皇帝**（2）

E 饮食・衣服・居住・财产（44）

E2 果实;油水（2）

E53 鸡汤;蛋糕;盛宴;豆腐渣;热炒（5）

E120 饭碗（1）

E196 破绽（1）

E200 帽子;包袱;摇篮（3）

E230 山寨;壁垒;堡垒;篱笆;**钥匙;安全绳**;防波堤;避难所;突破口（9）

E240 **支柱;顶梁柱**;栋梁;**根基;门槛;大门**;前门;旁门;**天花板**;夯实;围墙;窗口;窗户;框架;台阶;（人生之）门;大厦;地基;大房子（19）

E247 平台（1）

E260 精神家园（1）

E294 钟摆（1）

E309 花架子（1）

F 感觉・情感・性格・行为（0）

G 思想・语言・信息（0）

H 农业（24）

H20 收获;**种子**;生根;土壤;培育;沃土;耕耘;播种;青黄不接;田野（10）

H28 温床;蓄水池;渠道;堤坝;缰绳;生态（6）

H31 扎根;渗透;泛滥;分水岭（4）

H61 灌水;汲取;拉锯（3）

H106 钓鱼（1）

I 工业・科技（10）

I80 聚光灯;（搜索）引擎;标杆;屏障;井喷;风向标（6）

I95 镀金;硬件;软件;密码（4）

J 行动・交通运输（18）

J80 地下（1）

J120 途径;近道;捷径;路径;路子;门路（6）

J131 桥梁;堡垒;壁垒;**十字路口**（4）

J153 包装（1）

J180 接轨;轨道;快车道（3）

J190 链条（1）

J198 刹车（1）

J223 搁浅（1）

K 经济・商业・职业（4）

K81 价值（1）

K136 打折扣;摆摊;透支（3）

L 政治・法律・军事（12）

L344 **导火索**;武器;**定时炸弹;双刃剑**;尚方宝剑;撒手锏;攻击（7）

L369 防线;制高点（2）

L370 靶子;俘虏;**挡箭牌**（3）

M 教育・文化・艺术・体育（29）

M48 小学生;答卷;走读干部;最大公约数;考题;答案;坐标;交学费;必修课;教科书;句号；诸葛会;功课（13）

M80 旋律;主旋律;合奏曲（3）

M129 下海（1）

M133 序幕;舞台;前台（3）

M223 曝光;接力棒;杠杆;接力;擦边球;接力赛（6）

M258 深水区（1）

M270 底牌;王牌（2）

N 宗教・民间信仰（3）

N8 菩萨（1）

N29 护身符;紧箍咒（2）

O 事情・情状（一般）（6）

O107 向上;顶点;出发点;漏洞（4）

O138 混淆（1）

O139 撂挑子（1）

P 物质・物体（33）

P40 泡沫（1）

P56 弹性;断层（2）

P57 空洞（1）

P112 腐蚀;腐败;腐朽;污染（4）

P117 流动;膨胀;浮出;注水;淹没;升华;结晶;*知识*爆炸;沸腾;冻结;解冻（11）

P118 过滤;稀释;蒸发;元素;沉淀;催化剂;粘合剂;火种（8）

P122 火花;火焰;火（3）

P196 试金石;腐蚀剂（2）

P281 充电（1）

付録 3：『分類語彙表』―中項目一覧

	1 体の類	2　用の類	3 相の類
抽象的関係	1.10　事柄……35	2.10　真偽……236	3.10　真偽……322
	1.11　類……36	2.11　類……236	3.11　類……322
	1.12　存在……39	2.12　存在……237	3.12　存在……324
	1.13　様相……41	2.13　様相……240	3.13　様相……324
	1.14　力……45	2.14　力……242	3.14　力……328
	1.15　作用……46	2.15　作用……242	3.15　作用……328
	1.16　時間……58	2.16　時間……262	3.16　時間……330
	1.17　空間……65	2.17　空間……263	3.17　空間……333
	1.18　形……71		3.18　形……333
	1.19　量……73	2.19　量……263	3.19　量……334
人間活動の主体	1.20　人間……82		
	1.21　家族……84		
	1.22　仲間……86		
	1.23　人物……87		
	1.24　成員……93		
	1.25　公私……99		
	1.26　社会……102		
	1.27　機関……105		
人間活動―精神及び行為	1.30　心……108	2.30　心……265	3.30　心……338
	1.31　言語……125	2.31　言語……279	3.31　言語……344
	1.32　芸術……138	2.32　芸術……285	
	1.33　生活……141	2.33　生活……286	3.33　生活……345
	1.34　行為……152	2.34　行為……294	3.34　行為……347
	1.35　交わり…155	2.35　交わり…296	3.35　交わり…350
	1.36　待遇……160	2.36　待遇……300	3.36　待遇……350
	1.37　経済……165	2.37　経済……306	3.37　経済……351

	1.38　事業……171	2.38　事業……309	
生産物及び用具	1.40　物品……178 1.41　資材……179 1.42　衣料……182 1.43　食料……186 1.44　住居……192 1.45　道具……195 1.46　機械……202 1.47　土地利用…206		
自然物及び自然現象	1.50　自然……208 1.51　物質……210 1.52　天地……216 1.53　生物……219 1.54　植物……220 1.55　動物……223 1.56　身体……227 1.57　生命……231	2.50　自然……315 2.51　物質……316 2.52　天地……318 2.56　身体……318 2.57　生命……318	3.50　自然……353 3.51　物質……355 3.52　天地……356 3.53　生物……356 3.56　身体……356 3.57　生命……357
その他の類	4.11　接続……358 4.30　感動……359 4.31　判断……359 4.32　呼び掛け…360 4.33　挨拶……361 4.50　動物の鳴き声……361		

付録４：《现代汉语分类词典》分類項目

A 宇宙・地球

A1 宇宙

A20 光・色

A50 声

A60 气象

A90 地球

A100 海洋・河流

A130 陆地

A160 时间

A200 计时

A230 方位

B 生命・生物

B1 生命・生物

B20 动物（一般）

B40 动物形体，活动

B70 哺乳动物

B90 鸟类

B110 爬行动物・两栖动物

B120 鱼类・其他水生物

B140 昆虫

B150 其他低等动物

B160 植物（一般）

B180 各类植物

B200 微生物

C 人体 医药卫生

C1 人体（一般）

C20 头部・面部

C40 躯干和四肢

C60 各系统器官

C80 分泌・排泄

C90 体态・容貌

C110 人体动作（一般）

C130 一般身体状况

C160 生病・伤残

C190 疾病

C210 医疗・药物

C250 卫生

D 人类・社会

D1 人

D40 家族

D80 出生・养育・丧葬

D130 性爱・婚姻・家庭

D170 人群・社会

D200 地位・品类

D250 社会关系

D300 社交

D350 生活・境遇

D400 社会状况

E 饮食・衣服・居住・财产

E1 饮食（一般）

E30 食物

E70 饮料

E90 食物制作・质量

E120 饮食处所・用具

E150 烟・毒品

E170 衣服

E200 穿戴用品

E210 衣服制作・衣料

E230 建筑物・建筑

E260 住宅・庭院・园林

E290 家用器物

F 感觉・情感・性格・行为

F1 心理・感觉

F40 欲望・意愿

F70 情感

F150 性格

F200 行为・态度

F310 表情

G 思想・语言・信息

G1 思想・思维

H 农业

H1 农业（一般）

I 工业・科技

I1 劳作・制造

G50 认识・知识・能力

G90 言语（一般）

G160 言语（各种方式）

G220 语言・语法

G260 常用虚词

G290 阅读・写作

G350 书籍・出版

G390 信息・通信・新闻

H20 种植区

H60 水利

H70 林业

H80 畜牧业

H100 林业

H110 养蚕・养蜂・打猎

I40 工业

I80 机器・设备・工具

I120 科学・技术

J 行动・交通运输

J1 行动

J50 旅行

J80 地方・场所

J120 道路

J140 移动

J170 运输

J180 陆运

J210 航运

J240 航运・航天

K 经济・商业・职业

K1 经济（一般）

K30 财政

K50 金融

K80 财务・会计

K120 统计

K130 商业

K180 对外贸易

K190 职业

L 政治・法律・军事

L1 国家・政府

L40 行政

L90 外交

L100 政治

L140 法律(一般)

L160 诉讼・审判・检察

L190 罪行・刑罚

L240 公安

L250 军事

L290 战争

L360 武器・装备

M 教育・文化・艺术・体育

M1 教育

M10 学校・教学

M70 文化

M90 文学

M120 戏剧・电影

M170 音乐・舞蹈

M200 美术・摄影

M230 曲艺・杂技

N 宗教・民间信仰

N1 宗教

N40 民间信仰

M240 体育

M270 娱乐・游戏

O 事情・情状（一般）

O1 事情（一般）

O40 做事

O90 成功・失败

O120 限制・破坏

O150 情形・状况

O230 因果・过程

O270 发展・变化

O310 程度・范围・可能

O370 关联・异同

Q 数量

Q1 数目・数量

Q40 数学

Q80 计量

Q100 常用量词

P 物质・物体

P30 形状

P80 性质

P110 变化

P140 运动

P190 各种物质、物资

P240 物品（一般）

P270 电・电器

付録 5:　第 8 章に用いた主なデータ

感情の種類		モト領域	日本語の用例(使用頻度)	中国語の用例(使用頻度)
中性的感情	感情一般	水	裁判に支持を与える人たちとそれを拒む人たちとの抗争は、単なる感情の波のまにまに推移させるほかないのであろうか(7)；感情の渦に巻き込まれると、冷静さを欠き、もてる力も発揮できない(5)；心のどこかで官能的な感情の流れに身をまかせたい(3)；少し感情の奔流が納まった美和子が涙ながらに言葉を紡ぐ(1)；いまはそういう感情のさざ波すら立たない(1)	李克农这饱含深情的轻语，激起了周围人的感情的波澜(17); 《人啊，人!》更有贯穿全书的感情的波涛和涟漪(9);不知那炽热的感情的洪流如今究竟到哪里去了(8);天一阁融入了历史的沧桑感，渗透着情感的涟漪(5); 这种人物内心世界的掀动和审视，充满了感情的起伏(4);他心里似乎也奔涌翻滚着感情的浪花(3); 他盼望有股感情的激流向他猛然袭来(3); 这句话似乎在他内心激起了感情的波浪(2); 更能引动我情感的潮头(1); 情感的源头总有一些纯真而神秘(1)；感情的大潮奔涌而出(1)；似感情的潮水(1)；掀起了一股情感暖流(1)情感的闸门打开了(1)……
		火	巫炎の眼の中に、あらたな感情の火が点った(4)	经过四十载隔绝之后，晚岁重遇，感情的火花重又迸发美丽的光辉(3); 《京九情》在『陵园风波』一场戏中，燃起了人物情感的火焰(3); 然而他这种理智的想法终抑制不住本能的情感之火(3); 音乐厅中如同情感的火山喷发(1)；偶然流露出一感情的火星(1)；立时引爆了他灵魂深处感情的火药(1)
		地	突然、感情の起伏が激しくなり、意味もなく泣いたり笑ったりを続けた(44)；ふいに思考にすべりこんだり、しまってあった感情の裂け目から入ってきたりする(1)	避免有情感的起伏(4); 事实上她每天都觉得自己已经陷入感情的泥沼(3); 刘德康，已经成为她生命的一部分，成为她感情的绿洲(1); 如何应付丧失宠物后出现的感情的低谷(1); 她在情感的泥潭里挣扎了好久(1);万一掉以轻心，就会触上感情的暗礁(1)
		光		坦尼斯惊讶的发现精灵的眼中闪动着情感

				的光芒（2）
		風	心の底から沸々と湧き上っている感情の嵐は、彼を一分もじっとさせていなかった(8)	
	欲望	水	アメリカの投資家たちを欲望の渦に巻き込んできたあのほろにがい香りが……（5）	一个走进大都市的懵懂少年，在不知不觉中，卷进了一场欲望的漩涡（2）
		火	デビッドは欲望の炎のきざしと不満がせめぎあうのを感じた（5）	她的眼中燃烧着在战斗时会将她吞食的欲望之火（4）
		地	この欲望という引力に引っぱられて、欲望の泥沼に引きずり込まれてしまう（1）	一旦丧失了抵御能力，那么就会落入诱惑的陷阱、欲望的泥潭（1）
肯定的感情	喜悦	水	華麗なステージ・アクションで観客を興奮の渦に巻き込んだ(7)；不安や恐れを忘れ、日本中が歓喜の渦に酔い痴れていた。(5)；巨大な艦の全域に安堵と喜びの波がひろがるのを、サムズはレンズを通じてはっきり感じとり(4)；喜びの泉があふれ、創造の声が飛び、顔が揺れる(2)；シマーンはこの喜びの洪水から離れて(1)	人们载歌载舞,将市中心广场变成了欢乐的海洋（61）；得到老板送来的奖金时，沉痛的心里又激起一层喜悦的浪花（3）；浓绿的青山映衬着小镇的妩媚，欢快的小溪诉说着小镇的灵气（2）；一阵喜悦的波涛从内心深处（1）；怀想那光彩夺目的美玉的闪光，心中便一阵阵涌动喜悦的涟漪（1）；河湾里顿时卷起欢乐的波涛（1）；但是她的内心却在狂喜的波浪之上颠簸摇荡（1）；一时把我抛到快乐的浪尖（1）
		光	彼は、苦悩の雲を破って、歓喜の太陽が胸中に昇りゆくのを感じた（1）	向导的眼里闪动着喜悦的光芒 (29)；整整一下午，你的脸就没放晴(2)；谈到这些，樊的眼睛里闪烁着兴奋、喜悦之光(1)
	希	火	島民が港から脱出できる。秋田さんの心に、わずかな希望の火がともった（3）；希望に燃えるアメリカをシンボライズした“究極のテ	正是父母慈爱的心，点燃了盲女的希望之火（81）

	望		ィーンエイジャー”に乾杯（1）	
		光	Ｊ１残留を決めた救世主は、磐田新時代の**希望の光**でもあった（29）；開明的で明敏な青年旗本の麟太郎は、彼らにとって一種の**希望の星**であったであろう（16）；松本潤くんは、この年の９月に嵐としてデビューする、ジャニーズの**期待の星**（18）	十名优秀少年成为**希望之星**（126）；现在虽然还未找到最后答案，但毕竟已经看到了**希望之光**（135）；他听了我的话，眼里闪着**希望的光芒**（22）
		地	巳年の子供をよく理解して、**希望の道**に進むことを許した（2）	展望未来，这里是充满**希望的田野**（98）；扩大开放、发展旅游、开发山区是一条**希望之路**（85）
否定的感情	失望/绝望	水	その大切な体を支配されて**失望の渦**の中にいる人へ体は、心と連動して（1）；要するに、滅びの福音は**絶望の深淵**ではなく（2）；弱い心に負けてまた**絶望の淵**に堕ちていく人物が多い（20）	她太不幸了！好像是命运把她推到**绝望的深渊**（28）；这可怕的对照骤然将他送进**失望的深渊**（10）
		地		1992 年，我坠入了**绝望的低谷**（3）；也许因为我们这一代人也在**失望的泥沼**中跋涉过（1）；恢复健康，从**失望的低谷**中爬上来（1）；接受“再教育”的现实几乎将他推向**绝望的泥潭**（2）
		光		在他的世界里，永远是没有光亮、没有色彩，只有一片黑暗，**绝望的黑暗**（5）
		水	そのままにしていると**恐怖の淵**に陥るのという最悪の事態は避けられる(3)；濤のような**恐怖のうねり**が動いたあと全軍ことごとく色を	将当时的罗德斯岛打落至**恐怖的深渊**(2)；看了恐吓信的白井不由得感到惶恐不安，仿佛越来越深地陷入了**恐怖的漩涡**之中(1)

	恐怖		失ったかのようであった(1)	
		地	この事故は再び村民を**恐怖のどん底**におとし入れたのであった(16)；一刻も早くこの**恐怖の谷**をのりきろうとする一念でのぼりつづけた(3)	
		光		托尔斯泰的小说帮助她度过了那些**恐怖的黑夜**(2) 岛上一位小学校长说："昨晚对我们来说是**恐怖之夜**"(1)

謝　　辞

本研究を遂行し学位論文をまとめるに当たり、多くの方々に御世話になりました。ここに深く感謝の意を表します。

研究活動全般にわたり、格別なる御指導と御高配を賜りました指導教員の広島大学大学院文学研究科佐藤利行教授に甚大なる謝意を表します。私が曲がりなりにも 4 年間で博士論文をまとめることができたのは、先生が研究者としてのやりがいと面白さを常に私に示してくださり、私のゆっくりとした成長に辛抱強く付きあってくださったからに他なりません。広島大学文学研究科での経験を心の糧に、今後も教育現場で役に立っていく所存です。

本研究の各章は、部分的に既発表論文に基づいています。論文として発表される前に、広島大学大学院国際協力研究科佐藤暢治教授にも論文のチェックをして頂きました。細かい所まで丁寧に読んで下さったことを、大変感謝しております。ご指導頂いた内容は、論文全体の構成や文章表現、誤字脱字、引用文献の書き方などでした。チェックしてある部分を見直すと、自分では当たり前であると思っていた表現が、他の人から見るとわかりにくい表現であることが多く、論述することの難しさを感じました。

貴重な御教示を賜りました広島大学大学院文学研究科高永茂教授、河西英通教授に心より感謝申し上げます。先生方の御助言により、論文データの抽出方法や分析方法などが改善され、本論文の完成度が高まりました。また、博士課程に進学する機会を薦めてくださり、ありとあらゆる場面で私を温かく見守り続けてくれた中国首都師範大学李均洋教授に深く感謝いたします。本当にありがとうございました。

最後になりましたが、私の研究生活を様々な面で支えてくれた数多くの先輩、友人、知人、そして私の家族に心より感謝致します。

本研究の成果が皆々様のご期待に沿うものかどうか甚だ疑問ではありますが、ここに重ねて厚く謝意を表し、謝辞といたします。